

方舟

方
舟

六十二号
二〇二一年十二月
登戸学寮

62号
-2021年12月-

登戸学寮

もし誰かがキリストのうちにあるなら、それは新しい被造物である。古いものは過ぎ去った、見よ、あらゆるものは新しくなった。

第二コリント書五章一七節

目次

学寮設立趣意書	7	黒崎 幸吉
定款(第三、四条)、寮則	8	
『方舟』六十二号刊行の辞	10	千葉 惠
黒崎幸吉先生語録 (『閃光録』『永遠の生命』誌から)	12	
第一回黒崎幸吉賞授賞式、講演会 (プログラム)	13	
挨拶	13	小島 拓人
選考について	15	鷺見 八重子
石原 昌武(一九六三年入寮)		
「神に導かれた旅路」	16	
挨拶、代読	21	石原 和義
木原 共(二〇一二年入寮)		
「ヨーロッパでの活動を振り返って」	22	
推薦の言葉 橋内武、浪川優希	26	
第一回黒崎幸吉賞授賞式に参加して	29	黒崎 稔
二〇二二年登戸学寮ホームカミングデー(プログラム)	31	

「これから先のものづくり」ホームスパンから見えてきたこと」……………山田 聖 義
「表現すること」……………青 野 道

Heart of Your World……………大 城 あ い 41
上を向いて歩こう、ユニコーン……………柴 田 真之介

聞け、天使の声 寮生有志 (出演九人当該頁参照)……………
朗読劇「枳形山にて天を仰ぐ」登戸学寮誕生物語」(出演十二人当該頁参照)……………42

寮生エッセイ

誰だって愛されたい……………青 野 道 65

伝えることの大切さ……………石 井 友 菜 67

サツチャー……………五十川 大地 70

数学と音楽のルーティン……………伊 藤 直 道 72

人生無敵モード突入……………岩 田 光 法 75

置かれたところで咲きなさい……………大 城 あ い 76

平和とリアリズム……………樫 淵 陸 人 79

私の危機管理学的考え……………川 口 陽 久 82

後記……………金 道 殷 86

一年振りの再会……………佐々木 さ ら 91

頑張らない生き方	塩見 楽	93
キリスト教の道義的責任と浦上キリシタンの弾圧と原爆	柴田 真之介	95
TORCH 症候群について	杉谷 魁	105
近況報告とこれから	善方 枝美華	108
日本における民主政治	高田 祐里	111
蚕飼育体験談	高橋 純佳	114
お笑い	田中 音葉	118
大学院生活	趙 顕建	119
祝二十歳	土橋 奈央	122
芸術鑑賞のすすめ	中村 真子	123
「ロボット」は道徳的?	西尾 穂高	128
あの日を忘れない	西巻 未祐	131
発達障害について	橋本 広哉	134
もうすぐ大学生の折り返し地点ですね	橋本 結衣	136
飢餓をゼロに	松井 花音	138

大学院に入って・・・・・・・・・・・・・・・・	松井	共生	140
コロナ禍の夏休み・・・・・・・・・・・・・・・・	三浦	千尋	143
夜空に想えば・・・・・・・・・・・・・・・・	水越	創斗	144
神とはなにか・・・・・・・・・・・・・・・・	溝口	修平	146
チビちゃんと僕・・・・・・・・・・・・・・・・	山田	聖義	148
いつか建つ本屋について・・・・・・・・	結城	史音	150
私のやりたいこと・・・・・・・・	米村	那穂	158
Kingdom Authority and Servant Leadership	Seth	Quant	161
Vacaciones de verano de la catástrofe de Corona	Chihiro	Miura	164
枳形山から			
離れがたい二つの手ゝ二人の福音伝道者に分かちあわれた六十余年の歴史	千葉	惠	166
イギリスとエネルギーの節約と	千葉	美佐子	169
仰望往来			
書き下ろしの著書の刊行について	岸本	尚毅	173
ペトロの救済力(マラナ・タ八五号より)	香西	信	179
ヨハネ福音書を読む(ヨハネ1:9-18)			
ヨハネ福音書に見る無教会性、超教会性	小島	拓人	180

大島智夫先生とクリスマスチャン医学者・教育者と1983年1983年の思い出を中心に南雲清美

186

枅形山聖書講義

山上の説教―八福を生き抜いたナザレのイエス……………千葉 恵

190

二〇二一年年間活動報告……………

203

二〇二一年日曜聖書講義一覧……………

205

「寮生日誌」より（朝拝日より）……………

207

朝拝 神が取り結ぶ縁について……………結城 史音

208

寮友会から……………岸本 尚毅

212

ご支援へのお礼とご報告……………

216

資料

今井館ニュース 第四九号、五〇号、五一号……………

221

貸借対照表……………

224

正味財産増減計算書……………小西 孝蔵

225

二〇二〇年度収支計算書……………

226

編集後記……………

227

学寮設立趣意書

終戦後の日本では、急激に大学教育の大膨張が行われました。之はまことに喜ぶべき事ではありますが、大学教育が殆んど凡て學術教育に集注され、就職の為の教育と化した為、人としての教育については充分に力を用い兼ね、事実殆んど無視されて居る実情であります。之は日本の将来に憂うべき影響を与える大欠陥であり、そのまゝに放置し得ない焦眉の急問題であります。

正義に立つて動かず、人類愛に燃え、真理の為に生き、又死ぬる人間を出来るだけ多く世に送り出すより外に途はありません。唯問題は如何にしてかかる人を社会に送り出す事が出来るかであります。

聖書に「汝ら若き日にその創造主を憶えよ」と云う事があります。内村鑑三先生は日本人が神を無視するならば、神は日本を無視するであろうことを預言されました。軍部の高慢と無知とに日本が危険の道を突進しつゝある時、之に対して敢然と戦つて迫害された少数の日本人があり、それが主として内村先生の信仰の流れを汲む者でありました。戦後日本が自ら立ち上る勇気を失つて意気銷沈して居る時、日本の為、

殊にその教育の為に、自然に表面に立たされ責任を取らされた人々の中に、同様内村先生の信仰によつて養われた人が多くありました。

併し相変らず、神に従う事を欲しない此の日本の将来は決して樂觀する事は出来ません、再び危機が到来しつゝある事を感じます。此の際日本の為に我らが為し得る最善は、有望で真面目な学生を、現在の教育制度に委せてしまわずに、その才能を正しく用いさせる精神的指針を与え、真の意味に於て日本の為、人類の為に生死する人間を育て上げる事であると信じます。

その方法として私が到達した結論は、東都に遊学する大々々生で、良い宿舍と正しい環境の少いのに苦しみ、又肉の誘惑の中にその身を晒して居る人々に対し、信仰的清純の環境を与え、正義と愛の理想に導く団体生活を送らせ、内村先生が残されたキリスト信仰の基礎の上に、健全なる判断力と確固たる責任感とを持たせる方向に教育指導を与える施設を造る事であり、それが此の学寮の設立案となつたのであります。

此の案に対し矢内原東大総長始め、多くの友人は、皆賛意を表され、支援を約束された事を深く感謝して居ります。私も及ばず乍ら此の企ての為に微力を尽すつもりであります。日本を愛し、人類を思う熱情を持たれる方々は、何卒その力

に應じて、此の企てを応援して下さい。神は必ず必要な指導者たちと必要な資金とをお与え下さる事と信じます。

昭和三十一年十月

学寮設立発起人 黒崎 幸吉

定 款

二〇二二年八月一日施行

第二章 目的及び事業

(目的)

第三条 この法人は、一八歳以上の学生生徒を寄宿せしめ、キリスト教の信仰に基づいてその精神的、思想的、信仰指導を与え、文化的教養を涵養し、有為の人材を育成することを目的とする。

(事業)

第四条 この法人は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

(一) 学寮を建設してこれを経営する。

(二) 寮生に無教会的キリスト教の精神に立脚して聖書の研究をなさしめ、その真理の実践に努めしめる。

(三) 講師を招聘して精神的、科学的講演を行う。

(四) 本学寮の目的に適う寮生の寮外活動の旅費等の補助を行う。

(五) その他前条の目的を達成するために必要な事業。

寮設立の趣旨

キリスト教信仰の基礎に立ち、健全な判断力と確固たる責任感を持つ人格を育成して、これを世に送り出す。

寮則

- (一) 日曜日の聖書集会には必ず出席すること。なお、他集会への参加あるいはやむを得ぬ理由で欠席する場合はそのことを寮長に断ること。
- (二) 朝拝に出席すること(開寮期間中 平日 7:00)。

- (三) 門限を守ること(23:30)。やむを得ない理由で門限よりも遅くなる場合は、23:30までに必ず寮長に連絡すること。
- (四) 寮の各行事には積極的に参加すること。寮内禁酒・禁煙。
- (五) 寮設立の趣旨を達成し、寮内の規律維持のため寮生委員を置く。
- (六) 「生活のしおり」記載事項を遵守すること。



学寮建築現場視察の黒崎先生、
廣福寺本堂坂降る

『方舟』六十二号刊行の辞

朝露が地面に潤いを与え、天高く澄み渡る秋の朝、然るべき時間に、寮生さんが足早に玄関から、次々に庭仕事のかたわらを通り過ぎ、坂を降っていきます。「いってきます」「いってらっしゃい」。これが学寮の日常の姿なのであります。コロナ禍の日々、当然見られるべきこの光景を二年近く見ることができませんでした。学寮はこうして六三年余の歳月を刻み、職員たちは七百人以上の後ろ姿を見送ってきたのであります。

第五波が沈静化した二〇二一年十一月二〇日に第一回黒崎幸吉賞授賞式、講演会が対面・オンラインにより開かれました。これは黒崎先生ご召天後、半世紀続いた記念講演会の後継として創設されました。学寮ゆかりの方々で地の塩、世の光として働いておられる方々に光をあて、賞の名を借りて老いも若きも一つとなるべく、それぞれの働きを紹介しあい導き支えあい、学寮が One Body in Christ (キリストにある一つの身体) となることをめざします。「まさにわれらはひとつの身

体に多くの肢体を持つが、肢体すべてが同じ働きを持つことはいないように、そのようにわれら多くの者もキリストにあつて一つの身体であり、一人に即して互いに肢体である」(Rom. 12:4-5)。

授賞式、講演会の記録を冒頭に掲載いたします。講演くださった受賞者のお二人石原昌武氏、木原共氏さらに代読と挨拶の石原和義氏また推薦者のお二人に感謝します。

石原氏のこれまでの歩みは神の約束の言葉を信じて出立したアブラハムを彷彿させます。その信仰の系譜のなかでモーセの流浪の民が天来のマナにより支えられたように、時満ちて生じた福音の故に、石原氏の旅路は、疲れ、重荷を負う人々とのマナの分かち合いの喜びの証となりました。アロンの髭にしたたるように、氏の頭に注がれた恩恵の油は衣にしたたり、祝福は沖繩の地からどこまでひろがっていくのでしょうか。

現代のフランシスを彷彿させる木原氏は、ロンドンの聴衆に腰縄のかわりにヘッドセットのマイクを口許に巻き、ジェントルに新しいアイディアとその実践を語り掛けます。若き

ストリート・テイバーターは路上の困窮者の尊厳を回復していきます。氏が歩くところ、そこには最新のテクノロジーと決して古くならない儚みの秀逸なブレンドが醸し出すキリストの馥郁たる馨により、野鳥がツイートで招きあうように、人々は集まり、喜びの分かち合いが見られることでしょう。若きフランスの果敢な挑戦に祝福あれ。

今年から、黒崎賞授賞式・講演会と同日に現役寮生と卒業生の交流会ホームカミングデーがもたれることになりました。寮生活動支援の報告があり、音楽会そして朗読劇と続きました。その報告に続いて、寮生エッセイを掲載しております。寮生諸氏の多彩な賜物、タレントの一端が披歴されております。彼らの現在地点を伝える文章は力強く、輝いております。彼らを頼もしく感じつつ、彼らの異なる多様な能力が生命の泉により秩序づけられ十全に発現されますよう願う日々です。この秋、「学寮ニュース」刊行のさい等で学寮ゆかりの方々に誌面上の相互の交流を呼びかけました。聖書講義、若者へのメッセージや旧交を温める交流の場として「仰望往来」欄を設けました。本号では四人の方々にご寄稿いただきました。

本誌の名前のとおり、わたしどもは方舟に乗り合わせ、北極星のような一つの輝きを仰ぎ見、はるかなる目的地を目指しております。この旅路において、本誌が希望のうちに相互に支えあい励ましあう、そのような働きを生み出す冊子となりますよう願っております。

最後に、活動報告等コロナ禍にあった二〇二一年を振り返ります。この間、学寮へのご寄附ありがとうございました。あらためて心から御礼申し上げます。おかげ様にて学寮は支えられ、感染を免れ、一同元気に過ごしてまいりました。ここに、読者の皆様のご健勝とご発展を祈念しつつ、新たな一年の幸いなることを願いつつ、「方舟」六十二号をお届けいたします。

二〇二二年アドヴェント

登戸学寮寮長 千葉 恵

黒崎幸吉先生語録（『閃光録』、『永遠の生命』から）

◎信仰はむずかしいようでやさしい。神の愛のふところに、自分のすべてを投げ込めばそれでよい。思索は頭の仕事である。事業は手足の仕事である。しかして信仰は霊の仕事である。（昭和二年八月）六六頁

◎自分は罪深いものであると言つていつもクヨクヨ繰り言を言つておつてはいけない。かかる罪深きものを赦さんとて十字架にかかり給える主イエスの恩恵を思い、すべての罪が赦されしことの確信をもつて、歓喜の声を天地に轟かすべきである。（七五頁）

◎すべての勝負について同様であることと思うが、敵に勝つということとは戦う前に既に勝っているようではなければならない。戦つて後に初めて勝つたのでは、それは偶然の勝利であつて真の勝利ではない。キリスト者と世の戦いも同様であ

る。イエスを神の子と信ずる者は既に世に勝ちしものである。既に勝ちしがゆえにまた常に勝ちうるのである。

世に勝ちし勝利はわれらの信仰なり。世に勝つ者は誰ぞ。

イエスが神の御子にいますことを信ずる者にあらずや（第一ヨハネ五・四、五）（三一頁）。

◎「聖書に明示せられざる事柄で、人間の論理的帰結に過ぎざるものを恰も神意なるがごとくに強調する事も決して正しい事ではない」。「聖き秘密」一九二七、十月『永生』二〇号（二九五頁）

登戸学寮 第一回「黒崎幸吉賞」

授賞式・講演会

日時：二〇二二年一月二〇日（土）午後三時～四時

プログラム

開会の祈り
司会：千葉 恵
寮長 千葉 恵

挨拶
理事長 小島拓人

選考について
選考委員 鷺見八重子

賞状授与（理事長）
石原昌武氏（一九六三入寮）

木原 共氏（二〇二二入寮）

石原昌武氏 推薦の言葉 橋内 武氏

講演：石原昌武氏 「神に導かれた旅路」

（挨拶 on line）

長男石原和義氏（一九八四入寮）代読、挨拶

木原 共氏 推薦の言葉 浪川優希氏

講演：木原 共氏 「ヨーロッパでの活動を振り返る」(on line)

閉会の祈り
選考委員 福嶋美佐子

黒崎幸吉賞授賞式挨拶

小島 拓人

理事長の小島拓人です。

本日は第一回の「黒崎幸吉賞」授賞式兼講演会であります。

毎年六月に「黒崎幸吉記念キリスト教講演会」なるものが開催されてきました。これは登戸学寮の創立者黒崎幸吉先生のご召天の一九七〇年六月六日の一年後の一九七一年に第一回の記念講演会を開催し、その後毎年六月に開催して参りました。そして昨年は黒崎先生ご召天五十周年を記念する第五十回の記念講演会となる予定でしたが、新型コロナウイルス

禍への対応により、公開講演会は中止し、「方舟」誌面での開催といたしました。そこでこの記念講演会の今後の対応であります。これまでの一般公開形式の黒崎幸吉記念講演会は、黒崎先生ご昇天五十周年を契機に一つの区切りを付けて新しい展開を図ることと致しました。

記念講演会に代わる行事について、今般、登戸学寮は、「黒崎幸吉賞」を創設しました。本賞は登戸学寮の創立者である黒崎幸吉先生のキリスト教主義に基づく全人格教育の精神を継承し世の光としての社会活動を推進されて来られた方に、その地の塩となるご献身に対して賞として感謝と支援の意を表すべく創設したものであります。これはいわゆる「人が人を評価する」という通常の賞ではありません。「黒崎幸吉賞」は受賞者ご本人への賞であるとともに授賞されるご活動への感謝と支援の輪を世の中に拡げて行く寮事業なのです。そして、受賞者にはそのご活動の内容の発表をお願いするのであります。創立六十周年を迎えた今日、従来の黒崎幸吉記念講演会の根底にある学寮への期待を表明する会から、そろそ

ろ学寮の創立精神が卒寮後の実社会においてどのように継承されてきたかを表明し次の世代につなげる会とするところに講演会の再出発の意義があると思つた次第であります。これは登戸学寮関係者への授賞制度であると同時に、登戸学寮そのものの歩みと存在意義を再確認する試みでもあります。

本日はその第一回の試みとして「黒崎幸吉賞」に大変相応しいシニアとヤングの代表二名の卒寮生の受賞を発表させていただきます。そして、お二方のご活動のご報告をお願いすることと致しました。この「黒崎幸吉賞」が今後ともこの世的名誉とは別の永遠の相にあつて、登戸学寮の存在意義を証しするものとして継続することを祈念して私の挨拶とさせていただきます。

石原昌武さん ・ 五十数年前に寮生活を共にした寮友であり五十周年記念会でお目に掛かっていますが、本日はシニア代表として授賞されおめでとうございます。

木原 共さん ・ 卒寮後もアムステルダムで二回、その他国
際会議でお目に掛かっていますが、本日は
ヤング代表として授賞されおめでとうございます
います。

「黒崎幸吉賞」選考経緯について

鷺見 八重子

黒崎幸吉賞の選考経緯について、選考委員の鷺見からご報
告いたします。

理事長のご挨拶にありましたように、黒崎幸吉賞は、ほぼ
一年かけて検討を重ね、七月の常任委員会において了承され
ました。ついで八月二日（土）に臨時理事会が開催され、
様々なご意見、ご提案を頂き、それらをふまえて鋭意、調整
をはかり、承認にいたしました。

さつそく八月末に、千葉寮長から推薦依頼状をメール添付
と書面により配信しました。今回は時間的制約から、依頼先

は現理事・評議員ならびに元寮長・理事・評議員経験者に絞
り、約六十名の方々に依頼いたしました。

九月三〇日の締め切り日までに五件の推薦をいただき、さ
つそく選考委員七名各位による審査結果に基づき、十月一二
日開催の選考委員会において審議を行いました。推薦された
方々は、年配のシニアが三名、二十代・三十代の若手ジュニ
アが二名でしたが、票が大きく割れることはなく、結果とし
て全員一致により、シニアから一名、ヤングから一名が選出
されました。

その結果は、十月二〇日の常任委員会にかけて承認となり、
さつそく千葉寮長から二名の推薦者ならびに受賞者、一九六
三年入寮の石原昌武さん、および二〇一二年入寮の木原共さ
んに連絡して頂きました。授賞対象のお二人にとっては青天
の霹靂ということであり、何回か趣旨説明などやり取りがあ
りましたが、お二人とも黒崎幸吉賞の趣旨に賛同され、ご快
諾くださった次第でございます。

関係者の皆様には今日の授賞式を迎えるにあたり、多くの
ご協力、励ましをいただき心から御礼を申し上げます。初回

ということでは行き届きがありましたことをお詫びいたしませんとともに、ここに喜ばしい結果を皆さまと共に祝えますことを感謝し、選考経緯報告とさせて頂きます。ありがとうございます。(了)

講演会

神に導かれた旅路

石原昌武・艶子

この度は黒崎幸吉賞という寝耳に水のお話を頂いて非常に戸惑いました。この世の賞というものに対する拒否反応もあってお断りするつもりでしたが、千葉恵先生のお手紙に書かれていた言葉が心にとどまりました。「この試みは賞の名をかりての、老いも若きも学寮に集う者として互に啓発しあい、教えあい、支えあう地の塩、世の光としてキリストにあつて

一つの身体を形成する試みであると理解しております。」とお言葉を受け止め、キリストの肢体としてお役に立てるならばと思ってお受けすることに致しました。私ごとき名もなき貧しき者に目を止めて下さった理事の方々はじめ関係者の方々に心より感謝申し上げ、栄光を神に帰したいと思えます。

私は十年前よりパーキンソン病と脊柱管狭窄症を患い、二年前からは農作業も全く出来ない身となり、週三回のデイケアに通っています。思考力も鈍り、文章をまとめる力もなくなりしました。妻に文章をまとめてもらい、長男和義に代読してもらおうという形での参加となりましたことをお許し頂きたく思います。然し、弱さの中にこそ神の恵は豊かにあり、支え合い助け合うことの祝福を実感しています。

私共は五八年前この学寮での高橋三郎先生の聖書集会で出会い信仰結婚へと導かれました。結婚式で高橋三郎先生を通して頂いたお言葉は、主がアブラハムに言われたように「私の示す地に行きなさい」と「祝福の基となるように」でした。そして神様が「私の示す地」とは都会を離れて農村に行くこ

とでした。愛農学園農業高校で二四年間働かせて頂きました。教科は英語でしたが、それより以上に専攻科生の担任として、学校と農家をつなぐ大切な働きに励みました。後半には大変な寮監の責任を担いました。また月刊誌「聖霊」の発行などの聖霊社の仕事と年二回の愛農聖書研究会の世話人としても励みました。

愛農での七人の子育てはとても恵まれました。六人は独立学園に、末の子は愛真高校で学び、独立学園同級生カップルでの三つの家庭も生まれました。子供達はみんな神の愛に導かれて、人を愛する信仰の歩みへと導かれております。

一九九〇年、不思議な出会いと神の導きによって沖縄の先島諸島、台湾に近い西表島に末の子（小五年生）と共に働きたいという次男と四人で移住しました。ここ西表島こそは、まさに神が示す地でありました。土地も家も備えられて、西表友和村の活動を始めることが出来ました。愛農の「神と人と土を愛する」三愛精神は私達の依って立つべき土台であり、西表での活動は愛農と地続きの延長線上にありました。愛農共同体で鍛えられた忍耐の力と愛の知恵、祈りの力こそは友

和村活動の推進力となりました。

西表島は九十%が亜熱帯の原生林、四十数本の川が流れ河口には広大なマングローブ林が広がり、豊かな珊瑚礁の海に囲まれ自然の癒しのエネルギーに満ちていました。

移住翌年から最もやりたかった山村留學生の受け入れを始めました。中学一年生で躓いて不登校となった中学二年生が口づてに与えられ、家族の一員として受け入れての生活を始めました。留學生は一人の時も数人重なる時もありましたが中学生七人、小学生一人を受け入れました。そして中学生は二年間島の中学で学んで卒業していきましたが途中で挫折したり、問題行動を起こしたり悩みは絶えませんでした。ある非行歴のある子は、夜中に集落の家からバイクを盗み無免許運転をした時には、集落の住人から「集落に迷惑をかけるなら島から出て行ってくれ」と言われたこともありました。また問題が多くて友和村での生活が出来なくなった子を島の友人が引き取って卒業までお世話して頂いたということもありました。

然し何があるうと集落の人々と親しく交わり、仕える気持

ちで何事にも取り組み、役職も誠実に担うことによつて信頼を得て西表の住人として定着していきました。我が家の子供達も人生の岐路には友和村で暮しました。長期、短期と滞在して下さる方々も山村留学生を見守り共に支えて頂きました。そして留学生のなかから独立、愛農、愛真へと三人の子は進学していきました。他の子供達も西表で過ごした時は人生の支えになったと思います。然し、思い返せば難しい思春期の子供達一人一人と向き合つてあげる愛が足りなかつた事を申し訳なく思うばかりです。

一九九九年、一緒に移住した次男が諸事情により友和村を去ることになった時、入れ替りに長男夫婦が共働者として永住の決断をして来てくれたことで大きな前進となりました。

友和村で取り組んだことをお話致します。

◎マナの店の経営

・国産小麦粉を使った手作りパン工場の経営。車で巡回販売をしました。島の人々に喜ばれ完売日も多くありました。

・自然食品の販売。

・さをり織り体験——心を自由に織る自己表現のさをり織りは大人気、観光客も次々と体験に訪れマナの店は大繁盛、経済の助けとなりました。

◎山羊と鶏の飼育。山羊の乳でヨーグルトを作つて留学生と共に食し、楽しみました。

◎養蜂——西表の花の蜜は格別の味でした。

◎畑での野菜作り、冬はさとうきび刈りに忙しく働きました。

◎無農薬稲作に挑戦、五年目頃から雑草取りに失敗して全滅。

田んぼで野ネズミの尿から感染する風土病のレストスピラに感染し、重症化して入院、命の危機から守られました。ハブに噛まれて入院したこともありました。

◎天然のもずく取りは最高の楽しみ。塩漬けにして年間味わい楽しみました。

◎高校で躰き不登校となつた子の受け入れをしました。

この子供達は期限を決めず、納得いく時まで共に暮しました。ゲーム依存症で東京から来た子はゲームから完全に離れて友和村で半年暮しました。鶏小屋に入つて半日じつと過すこと

もありました。彼は東京に帰ってからゲーム依存から脱して通信制高校を卒業し、理学療法士として働いています。またヘビや虫が大好きな子も一緒に暮しました。彼も東京に帰って通信制で学び、大好きな物作りの仕事に就きました。他にも長期、短期で高校中退の子なども滞在しました。

◎修学旅行生の受け入れ

毎年六月末、愛農と愛真の受け入れは最も嬉しい年中行事でした。満天の星空に響きわたる生徒達のコーラスは心に染み入り、私達を励ましてくれました。大きなシンナー鍋で大量の天ぷらを作りました。絶品のもずく天ぷら、友和村のもずく天ぷら以上に美味しいものは求めても未だに見い出せません。

◎愛農学園の専攻科生女子二人を受け入れることが出来たこととは感謝でした。

◎社会人の受け入れ

友和村を私達は人間再生の場と呼んでいました。都会生活、競争社会で疲れ心を病む人達が友和村に滞在し、大自然に癒されて、人間性を回復していきました。異なる視点で客観的

に自分を見つめ直す場として友和村は最適な場所だったと思います。その時出会った人達は今もつながり見守り続けている人もいます。

◎友和村で共に歩んだ友人たち

不思議な出会いの中で友和村のヘルパーとして暮してくれた人達が何人もいます。ある女性は六年間も居てマナの店でパンを焼き、さをり織りを手伝って下さいました。友和村は私達だけでやったのではなく、このように出会って共に暮した一人一人によって支えられ成り立っていました。人は一人では何も出来ません。人と人がつながり共に生きる時、自然と友和村は生れ、私達は共に生活した人達によって生かされ支えられていたのです。友和村はまさに人が人として共に生きる生活の場でありました。

◎日曜の聖日には有志の者で家庭集会を持ち、共に御言葉を聴き祈りを合せました。

西表友和村通信を発行しました。

移住した翌月一九九〇年五月～二〇〇八年二月までに4

8号まで発行しました。友和村の生活、活動を公に証して、多くの支援者と共に祈りつつ歩んだ友和村でした。

通信の発行は、その後、ゆいの風邪だより17号、月桃通信現在進行中27号へとつながっています。

二〇年が過ぎた二〇一〇年

友和村は後継者の長男に全て委ね、私達は故郷沖繩本島へと帰りました。本島では平和の戦いへと導かれて新しい出会いにも恵まれて、皆様と共に辺野古新基地反対のために行動してきました。辺野古のテント村の裏に畑を作って楽しんですることが良き思い出です。病となりあちこちに故障が生じ、今は何も出来ない身となりましたが、結婚の初めに頂いた「わたしの示す地に行きなさい」「祝福の基となるように」との言葉の通り、神に従って旅路を歩んできました。私共二人から始った祝福は、愛農に、西表の友和村にそして故郷沖繩本島に、そして子供達孫達、集会、教会、多くの友人達とのお交わりの中へと豊かに豊かに流れていきました。ハレルヤ!!と

主を讃え、栄光を主に帰し、私達は一粒の麦となって地に落ちて死にたいと願っています。

今日のこの今こそが千葉先生の言葉の如くキリストの肢体としてキリストが働き給うた事実の証として皆様と分ち合えましたことを心より感謝致します。

ありがとうございました。



挨拶、代読

石原 和義

皆さん、こんにちは、この旅は父昌武登戸学寮創立六十周年を記念し、黒崎幸吉賞に推薦いただいたこと、まことに感謝申し上げます。私は昌武、艶子（つやこ）の長男の和義と申します。私自身も三十五年前十九歳の時にこの登戸学寮でお世話になりました。いろいろな大学の皆さんとの交流はとても楽しくお互いに考えをぶつけあいながら議論したことは、今の私の大きな土台となっております。寮の食事がとてもおいしく毎食がとても楽しみだったこともなつかしく思い出されます。本日は父のかわりに父の思いを代読させていただきます。

「神に導かれた旅路」代読



私は、父と母のもとに産まれて本当によかったと思っています。二人の信仰を基とした姿を見て、人間として本当に大切なものを学んだと思います。七名の子供たちの家族も互いを支えあい尊敬しあい、素晴らしい家庭をつくっています。その基はまさに父と母の姿であったと思います。

私は父と母のあとを継いで沖縄県の西表島で農業と民宿を営んでいます。民宿の名前を農家民宿マナ、農場もマナ農場、お店もマナの店と、「マナ」という聖書から頂いた名前を使わ

せて頂いています。父と母のつくつてくれたいやしの場所はまさに今も受け継がれています。多くの心と体を休ませたい方がたくさんいらっしやいます。友和村の場所は、父と母が蒔いてくれた種がまさに地の塩、世の光となつて息づいてることを感じます。

登戸学寮なければ父と母も出会っていませんでした。そして私たちも産まれていませんでした。その原点の場所にこうして立つて話をしていくということに、不思議な導きを感じます。

主がアブラハムに言われたように、「わたしが示す地に行きなさい」と「祝福の基となるように」。この言葉を父と母は実践し、多様な価値観をこえて信頼と愛を多くの人に与えてくれました。

この大切な場所で父の代読をさせて頂いたことに感謝申し上げます。登戸学寮で育つ若者が地の塩、世の光となつて世界にはばたき、持続可能な開発目標を実践されますことを心よりお祈り申し上げます。

昌武・艶子長男 石原和義

ヨーロッパでの活動を振り返つて

木原 共

はじめまして。二〇一二年から二〇一六年まで学寮に在籍していた木原です。今回は黒崎先生の名前を冠した初回のこのような賞に選んでいただいてあらためて感謝申し上げます。また選んでいただいた浪川君はじめ理事の皆様感謝させていただきます。なるべくリモートではなくて、現地の参加をしたといろいろと調整していたのですが、仕事の関係でどうしてもオンラインでの参加となつてしまい申し訳ありませんでした。

簡単に自己紹介しますと、僕は二〇一二年から二〇一六年に学寮にいて、その時は慶應義塾大学の湘南キャンパスでデザインと情報工学を学んでいました。学寮にいたときはいろいろなことをやらせていただき、浪川君とかといかだを作つて多摩川に流してレースにでたりだとか、深夜に友達と近くの山に行つて語ったりだとか、いろんな人と経験に恵まれます。

した。ここで過ごした四年間は本当に僕の人生の宝物です。

僕は学寮卒業後にそのままオランダにあるデルフト工科大学院 (Delft University of Technology) に行き、卒業後に新卒でオランダの研究機関で働き、今年から独立してオランダと日本を拠点に個人事業主としてデザインとソフトウェアの開発の仕事をさせていただいています。

講演のタイトルは「ヨーロッパでの活動を振り返って」とのことなのですが、振り返ってみれば僕がヨーロッパに行くきっかけになったというのも登戸学寮があつてのことです。というのも学寮にいた段階では学部四年までいてそのまま卒業して日本の会社で働こうと思つていたので、前前の寮長さんが企画された寮生の支援制度、今どういった名前になつているのか分からないのですが、寮生の学びとか海外での学びに対しての支援を行うという制度で十万円を支援していただき、実際にヨーロッパの大学院に視察に行くことができて、これが本当に人生を変えたと思つています。そのお金で航空券を買つて、ヨーロッパの大学院とかイギリスの大学院を見に行き、その先生にお会いしました。僕が行

ったデルフト工科大学院というところはデザインと工学を組み合わせる人の役に立てようということをやっている大学院で、例えば認知症を防ぐ家具の開発とか、「ドローン」って言う小さい、飛ぶヘリコプターみたいなものにAEDを取り付けてなるべく人を早く助けるようなデバイスとかテクノロジを開発するとかというのをやっていて、そこでの学びというのにすごい衝撃を受け、ぜひともこの研究室で学ばせてくださいと視察の期間で大学の先生にアポを取りに行き、受験、無事奨学金ももらい二年間学ぶことができました。

本当にデルフト工科大学院での学びというのは二年間いろいろな研究、いろいろな研究機関、それこそ世界中の国々の人が来て、いろいろな人にもまれるわけですが、やはり学寮でいろいろな人と話して、日々生活するということがあったからこそ、やつてこられたのかなとあらためて振り返つて思います。それこそ僕は、登戸学寮に入る前は人見知りが激しかったので、今思えば、本当に助かったなと思つています。

今日、簡単にそのヨーロッパを振り返るといふことで紹介

させていたいただきたいのが、僕が大学院時代に始めたプロジェクトでストリートデベーター（Street Debater）という路上生活をしている人の社会復帰を支援するというプロジェクトです。これは大学院の研究のプロジェクトの一環として始めてーヨーロッパでは路上生活をされている方というのが日本よりも多くて、物乞いをするという行為を都市でよく見かけるのですけれどーそうした行為をしている人たちと社会とのかかわりをどのように変えるのか、そのような人たちをゆくゆくいかに社会復帰させるのかというプロジェクトをやっていました。せっかくなので軽くビデオを紹介させていただきます。今から画面共有の形でさせていただきます。

（ビデオならびに日本語字幕省略）

<https://www.youtube.com/watch?v=14cJnckf8Nc>

ならびに tomo kihara 参照〔編者〕



このようなプロジェクトを実際に修士研究で始めたのですけれど、この天秤型のデバイス（右の写真下方に見える天秤）を大量生産するにあたり、欧州委員会（EU）からのファンディングをもらいました。それで複数のデバイスを実際に路上生活をしている方々に使っていたら、何人か社会復帰された方もいて。ただ座って物乞いをしている状態からそのデバイスを使って実際に他の人と会話をして、社会復帰とかそ

の政治とかについての会話をして、それで収入を稼ぐと同時に自分たちの自尊心のようなものを復活させていくということを通して社会復帰につながるという、そういったプロジェクトをしていました

このプロジェクトをやるにあたり、特に僕がこのプロジェクトを始めるきっかけになったのは路上で出会った、五百円とかですごい安いCDを売っている人がいて、彼と仲良くなっていくうちに、本当は物乞いをしているほうが儲かるんだけど、これはやっぱりCDを売って尊厳を保ちたいというようなことを言っていて、その出会いをきっかけとしてこのプロジェクトを始めました。

そのプロジェクトをやっているときに常に頭の中に浮かんでいたのが、江戸学寮時代に学んでいたサマリア人の聖書の箇所です。強盗に追われて死にかけていた旅人を誰が助けたかというのをキリストが説く箇所ですが、その血を流して死にかけている旅人と、本当は同じ国の同胞であるはずのレビ人、祭司の方は見捨てていったのに対して、完全な外国人であるサマリア人が助けたというところです。この箇所を江戸

学寮で学んでいたときは今一つそのピンと来ないというか、なぜサマリア人が、外国人が助けたのだらうというのを感じていたのですけれど、このプロジェクトをやって思ったのは、人間で同じような環境で育った人とか、同じような、この場合、同じような国民に対しては、すごく残酷に無関心であるなどというの思っていて。特にストリートデイベーターをやっていたイギリスのような貧富の差が激しい国だと、何かと同胞の国民の苦しみに無関心な人がすごく多いというのを感じていました。

僕の場合も今年から日本とオランダを拠点にやっているのですけれど、日本でも困っているような方に対して、自分が学んできたその情報技術、テクノロジーやデザインの在り方、デザインでいかにどのようにして助けていきたいのかというのをあらためて考えたいなと思っています。

聖書が教える隣人愛のような実践を自分の仕事と絡めて実践するというのは本当に難しく、黒崎先生だとか、寮のOBの方々がされているようなことにはまだまだ僕の実践は及ばないのですけれど、そういった本当に世の光となれるよう

な実践に近づけるような努力を今後もさせていただきたいと思っております。短かいですけれどスピーチはここまでとさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。



「石原昌武さん」推薦の言葉

橋内武

一九六三年四月から二年間在寮した、石原昌武さんは沖縄県出身で、一九三八年生れの八十三歳、ご家族と共にうるま市に在住です（注一）。

私（橋内）が登戸学寮で生活したのは、独立伝道者・高橋三郎先生が寮長であった一九六四年の半年間にすぎません。当時の寮友・石原さんがいた広い個室には、内村鑑三とその弟子たちによる著作が溢れていて、正に「無教会文庫」でありました。石原兄は、読書家で堅い信仰の持ち主であることが明らかでした（注二）。

明治学院大学文学部で英米文学を修めた石原さんは、一九六四年十月に卒業。翌年五月に高橋先生司式のもと、塩原艶子さんと信仰結婚をされました。東京都町田市にある玉川学園高等部で一年間教鞭を執ったあと、一九六六年四月、奈良県にある全寮制の愛農学園農業高等学校（創設者・小谷純一）

に赴任。英語を担当し、そこで二十四年間の教員生活を送ったのです。

その間に、石原夫妻は七人の子宝に恵まれ、六人までが山形県小国町の基督教独立学園高等学校（創設者・鈴木彌美）に進学、一人は島根県江津市のキリスト教愛真高校（創設者・高橋三郎）で学びました。両校とも、無教会系の全寮制高等学校です。

一九九〇年、石原夫妻は沖縄県八重山の西表島（竹富町）に入植し、西表友和村で農業と農家民宿を営み、山村留学に来た登校拒否の児童生徒と生活を共にしました（注三）。それは代替教育、「フリースクール」の実践でした（注四）。つまり、国連が設定した「質の高い教育をみんなのために」というSDGsの目標四の達成に向けて、献身的な働きをされたこととなります（注五）。二〇一〇年に、友和村での活動は長男家族の和義・孝子夫妻に委ね、昌武・艶子夫妻は沖縄本島に移住しました。

お二人は、非戦平和運動にも力を注いでいます。例えば、「竹富町無防備平和条例をめざす会」を立ち上げ、辺野古ゲ

ート前での座り込みなどに加わってきました。その「剣を取る者は皆、剣で滅びる」（マタイによる福音書 二十六章五十二節）の聖句を掲げた運動は、人々の共感を呼びました。現在、昌武さんは泡瀬バプテスト教会会員で、艶子さんは那覇聖書研究会会員ですが、「一つの教会に固執することなく、超教派で命の幹に連なっていきたい」との由。

総じて、石原昌武さんは、一貫して「地の塩、世の光」を実践してきたキリスト者であり、登戸学寮創設者が望んだ理想を追求してきた卒業生の一人であると拝察し、ここに第一回黒崎幸吉賞の有力候補者として、特に推薦するものです。

以上が、第一回黒崎幸吉賞授与式で述べた「石原昌武さん」推薦の言葉に、若干補筆修正を加えたものです。

この授与式・講演会において、ズーム(ZOOM)を通してではありませんが、石原夫妻の姿に接することができました。それは一九六六年五月の参議院議員会館における結婚式以来のことであり、感慨深いものがあります。特に、

①沖縄出身の石原昌武さんと信州出身の塩原艶子さん（当

時、学寮職員）が高橋聖書集会で出会って、結ばれたこと、

②その後、奈良県青山町の愛農学園農業高等学校と沖縄県西表島（竹富町）の西表友和村において、農業と教育に勤しんだこと、

③西表友和村の農家民宿マナを引継いだ長男和義さん（ルートル学院大学社会福祉学科卒）も、かつて登戸学寮に在寮したこと（注六）、などに、主の導きを覚えます。

石原和義さんは、「地の塩・世の光」を体現する昌武さんの自伝的講演を堂々と代読されました（注七）。読後の話も、親の意思を継いだ息子として、信仰と敬愛に満ちたものであり、臨席した参会者を感動させました。黒崎幸吉先生・高橋三郎先生などから寮生へ、登戸学寮に蒔かれた「一粒の麦」は、石原昌武・艶子夫妻へ、そして和義・孝子夫妻へと、着実に次世代へと引継がれたこと、そして、その実りの大いなる広がりを実感した次第です（注八）。登戸学寮創設以来、六十有余年。寮友かつ理事の一人として、改めて登戸学寮の豊かな可能性を確信しつつ、今後のさらなる発展に期待するものです。

注

（注一）うるま市は、沖縄本島東岸にある沖縄県第三の都市である。「うるま」とは、沖縄語で珊瑚島の意である。なお、石原昌武さんは、1955年に琉球政府立コザ高等学校を卒業し、本土の大学への進学を目指した。

（注二）拙稿「緑陰の登戸学寮への思い」、『方舟』五十五号（二〇一四年十一月）、九頁を参照

（注三）「友和村」という名称は、非戦平和運動を展開する、日本友和会の「友和」に由来すると思われる。日本友和会長には、基督教独立学園高等学校校長の鈴木彌美が就任したこともある。他方、山村留学とは、山村・農村・漁村・離島などに留まって、代替教育を受ける仕組みのことをいう。その具体的事例については、石原昌武さんによる黒崎幸吉賞受賞記念講演を参照。

（注四）フリースクールとは、不登校などの、通常の学校教育を受けていない児童生徒を受け入れ、教育を行う施設のこと（『広辞苑』第七版を参照）。

（注五）SDGs *アザ* Sustainable Development Goals（持続

可能な開発目標」の略。全一七の目標がある。

(注六) 「農家民宿マナ」の名称は、出エジプト記一六章に登場する食物に由来する。神がモーゼの祈りに応じて天から降らせたという。

(注七) 「地の塩・世の光」は、マタイによる福音書 五章

一三節・一六節にある「山上の垂訓」から引かれている。

(注八) 「一粒の麦」の喩えは、ヨハネによる福音書一二章

二四節・二五節を参照。

木原共氏推薦の言葉

(登戸学寮理事)

浪川 優希

評議員の浪川と申します。よろしくお願いします。

私が木原共さんを推薦させていただいた理由は寮在籍時から寮生委員長としても活発に働いておられたというのもあるのですが、一番の理由は学びというものをいかに実社会に生かしているかという部分が僕はすごく感動的というか、今

の日本人に足りない部分と思っているということです。

この度は木原共さんを選んでいただき本当にありがとうございます。

第一回黒崎幸吉賞授賞式に参加して

黒崎 稔

一九七〇年(昭和四十五年)登戸学寮の創設者である父黒崎幸吉が天国に召され、その翌年から毎年六月第一土曜日に今井館で黒崎幸吉記念講演会が開催され、昨年(二〇二〇年)は五〇回を迎えることになっておりました。

残念乍ら二〇二〇年の昇天五〇周年記念式典は新型コロナウイルスの感染拡大予防の為に開催は見送らざるを得ず、講演を予定されていた大友先生が方舟六一号に「福音による人間形成」と題して寄稿されました。

講演会が五〇回目と言う節目を迎えた事、またこれまでの会場であった今井館が移転する事から記念講演会に代わり登

戸学寮六〇年の伝統を継承発展させる行事として理事会で検討の結果、黒崎幸吉賞が創設されました。この賞の創設に際して一部の卒業生からは「人が人を表彰する」、「副賞として金品を与える」、「卒業生に金品を提供し関係者内部で金品が循環する」のは学寮の設立理念や創設者の考えに反するとの厳しいご意見もありました。

今回授賞式に参加させて戴き、冒頭の千葉寮長の祈祷の際に述べられた言葉（この賞は学寮に集う者が老いも若きもお互いに啓蒙しあい、教えあい、支えあい地の塩・世の光としてキリストにあつて一つの身体を形成する試み）や小島理事長が挨拶の中で述べられた言葉（人が人を評価するものではない）から一部の卒業生の懸念は杞憂に過ぎないと思つていたのですが、受賞された石原昌武さん・木原共さんのお二人の講演をお聞きして正にこの様な活動こそが学寮の設立の趣旨であるキリスト信仰の基礎の上に、健全なる判断力と確固たる責任感を持ち日本の為、人類の為に生死を共にする活動であると感動しました。当日ご参加戴けなかつた方々にも本誌に掲載されているお二人の講演を読んで戴ければと願う次

第です。

従来の記念講演会では参加者は殆どが高齢者と会のお手伝いをされる寮生でしたので、学寮で学ばれた方がどのような社会貢献をされているか全く知る事が出来ませんでした。今回受賞されたお二方が卒業生であり学寮で学ばれた事がその後の社会での活動の礎となつておられる事を知る事が出来ました。天国に召された父もきつと喜んでる事と思えます。幾多の困難を乗り越えて黒崎幸吉賞を創設された理事会の方々のご努力に対して敬意を表すると共に、今回受賞された方々の様な素晴らしい活動をされておられる方々が今後も継続して受賞される事を願っております。

二〇二二年登戸学寮ホームカミングデー

枳形山にて天を仰ぐ―登戸学寮誕生物語―

(写真スライドあり)

二〇二二年一月二〇日(土)午後四時十分

司会：土橋 奈央

寮生活動支援報告会：

山田 聖義

「これから先のものづくり〜ホームスパンから見えてき

たこと〜」

青野 道

「表現すること」

音楽会：

大城あい Heart of Your World

柴田真之介 上を向いて歩こう、ユニコーン、

有志コーラス 聞け、天使の声 青野道、伊藤直道、

大城あい、セス・クアント、高橋純佳、中村真子、松井共生、

山田聖義、米村那穂

朗読劇：

松井共生(黒崎幸吉) 西巻未祐(小町勝美)、柴田真之介(語り)、五十川大地、伊藤直道、川口陽久、佐々木さら、善方枝美華、中村真子、三浦千尋、水越創斗、溝口修平
展示：

内村鑑三から黒崎幸吉宛書簡

蔵書検索システム

閉会の祈り 森孝先輩

(講演会としてED)は録画でご視聴いただけます。学寮まで連絡いただければ、URLとPWお送りします。連絡先：

noborito@akuryo.or.jp。

寮生活動支援報告会

これから先のものづくり〜ホームスパンから
見えてきたこと〜

山田 聖義

寮生活動支援の活動報告をさせていただきました。現在文化服装学院でニットデザインのことを学んでいる私はものを作る上で拘っていることがあります。それは人のために作るということですが、私は届ける対象がいてこそものづくりは生かされていくと考えています。数年後の私は、ものづくりに携わる人間として生きていたいと思いますが、そこには理想のカタチがあつて、やりたいことがあります。それは人との繋がりを大切に、現代のアパレル業界が抱えている大量生産・大量消費・大量破棄から離れたものづくりです。この思いは SINGs が叫ばれる前、私が文化服装学院に入ろうと考えていた時から変わっていません。またものを作るだけでなく、

どのようにしてもものが作られているのか消費者はちゃんと把握できないのが現状です。そこを見て体験できる場所を作りたいと考えています。

これらのことを実現させるために自分に足りていない技術や、経験を積むための場所を探していました。私の考えていたアプロ山はこの二つです。一つは羊の飼育について学ぶことです。原料となる羊毛を自分の場所で育てて生産すること、糸が出来るまでが一から体系的に見せることができます。二つ目が染め・紡ぎの技術です。私がつけている技術は現在編むという糸を使うもの作りです。どんな糸を使って作るのかポイントです。私は環境に負荷をかけないためにも時間と手間がかかるけれど草木で染めた、手紡ぎの糸を取り入れたと考えています。

この二つのアプローチで考えていたときに出会ったのがホームスパンという織物です。編み物とは全く違います。ですが草木で染めたり、日本に残る歴史のあるものづくりだからこそここに私のものづくりのヒントがあると考え、実際にホームスパンの工房を訪問してきました。そこで知ったことや、

話を聞いて考えてきたことを一部ではありますがお伝えできたらと思います。

ホームスパンとはイギリス発祥の織物で、家で紡ぐという意味をもっています。紡ぐと言ってもわかりづらいかと思います。羊を例にあげて説明すると羊から毛を刈り、その毛をねじりつて引つ張つても切れないようにすること（撚る）で糸作することを専門用語で紡ぐと言います。日本にホームスパンが入ってきたのは大正時代から今では岩手県を中心に根付いている織物となっています。私が三月に訪問した工房は三箇所あり盛岡市にある中村工房、植田（うえた）紀子織物工房、そして岩泉町にあるスピクラフト岩泉です。植田さんの工房ではお写真を撮ることができなかったので話だけになります。また、九月にも岩手に行きその時には花巻市にある株式会社日本ホームスパンというところに行きました。簡単ではありますが、一つずつ工房の紹介をさせていただきます。

まず中村工房です。お話は代表をされている和正さんと彼

のお父さんにお話を聞きました。中村工房ではホームスパンの本来の姿である手紡ぎの糸を使うだけでなく、工業糸と呼ばれる機械を使って紡いだ糸も使っていると話されています。製品のデザインを考えるとときにはまず糸を作るところから始めるそうです。雑誌などの切れ端などからイメージする色を探して、その色になるように染料を調整して糸を染めていくそうです。このやり方でこれまでに300色以上の色のレシビを作つて来られていました。

中村工房さんは家族代々続いてきたホームスパンの工房で、従業員さんも抱えてやっていたところです。最盛期では日本の一流ブランドから注文を受けてコレクションのアイテムを制作していたそうです。けれど時代の流れは大手アパレルの安価な量産品に押されて注文の数は減り、今では家族と二人のパートさんに手伝ってもらいながらストールやマフラーなどの小物に限定して生産を続けられています。

中村工房を訪問した際には皆さん温かく受け入れてくださり、初めての機織り体験をさせていただきました。シャトルという道具に、糸を巻いた筒を入れて左右に動かすの思っ

たよりも難しかったです。それ以上に難しかったのは、箒（おさ）と呼ばれる機織りの代名詞ともいえるボタンボタンという手で持つて手前に引くあの工程は手加減が少し変わるだけで糸と糸の間に隙間ができてしまいます。一般的な織物とは違いホームスパンでは勢いよく箒を手前に引き、密な生地はあまり作りません。なのでボタンボタンと音はせず、優しく手前に引いて糸を揃えています。機を織る人は加減が変わらないように丁寧に織られていたのが印象的です。積み上げられて来た経験があつてこそ、できることなのだと感じました。

次は植田紀子織物工房です。植田（うえた）さんは盛岡で歴史ある工房として有名な蟻川工房のお弟子さんとして五年間学ばれた後、デンマークの工芸学校に留学され、帰国後自分の工房を構えられた方です。一人前の機織りになるのに長い時間がかかることが分かります。

植田さんは服地か、マフラー・ストールといった小物、インテリアファブリックなど幅広く手がけられている方でした。

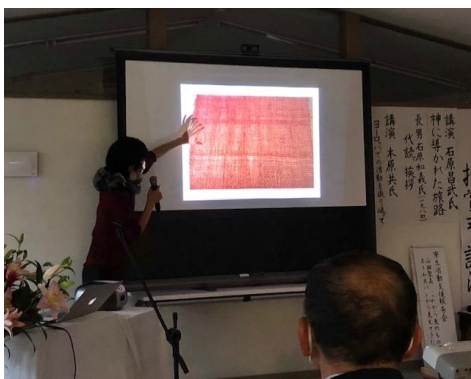
植田さんの特徴の一つにデンマークで学ばれたデザインが挙げられます。糸を通す順番や、あえて織るときに糸と糸の間を空けて隙間を作ること、織ることに多くのバリエーションが生まれていました。また、糸を染めるときには草木を使って染めていました。植田さんは訪問したどの工房よりも作家として食べていくためのバランス感覚をお持ちの方でした。

ものづくりをする上では目指すべき人物像だと思いました。植田さんはご自分の工房でもお弟子さんをとつていて、少なくとも三年は学ばなければ一人前にはなれないという話に驚き、とても長い道のりだと感じました。基本的には今学校で学んでいる編みを軸にもものづくりをしていきたいと考えていますが、ゆくゆくは織りにも挑戦してみたいと考えています。少しずつものづくりの幅を広げて行けたら幸せだと思います。

続いてスピנקラフト岩泉です。こちらの工房は今年九十一歳を迎えた工藤厚子さんが代表をされている小さな工房で、盛岡のホームスパンとは少し違い岩泉町ではスピנקラフト

という手紡ぎ糸を作ってきた歴史ある工房です。この工房では手紡ぎと草木染めに拘って作り続けていて、主に手編み用の糸を作っています。なので織物用の糸とは違った風合いの糸になります。工藤さんは草木染めの知識をご自分の人生をかけて積み上げて来られた方です。小学生の頃に授業でやった糸紡ぎの経験が、原点となり戦後のものが無く貧しい時代の中で羊を飼い、糸を作り続けてきたそうです。旦那さんからは常に糸作りへの理解が得られずほとんど応援をしてもらえなかったそうですが、それでも工藤さんはやめず「ここで辞めたら負けたことになる。認められるまで続けるぞ。」という強い反発の思いがあってこれまで工房が残ってきたそうです。けれど、どの時代であってもこの糸作りだけで生活はできていませんでした。むしろ、ほとんどは旦那さんの収入やお家での畑仕事があって食べて来れたわけで糸作りはお金にならなかったと工藤さんは話されていました。そしてそれは今でも変わらず、一緒に糸を作っている方ほとんどが家族の安定した収入があり、自分でもパートタイムで働いて空いた時間に家で少し紡げるだけ。糸作りで食べていくのは難し

いのが現状でした。このような状態をどのようにして打開して、ものづくりを軸にして食べていけるようにするにはどのようにすればいいのでしょうか。これに関してはとても難しいと感じました。



最後に株式会社日本ホームスパンです。こちらは会社としてやっているホームスパンの工場で海外の一流ブランドを相手に年間千個以上の服地のサンプルを作り提案し取引をして

います。これだけの数サンプルを作っても採用されるのはせいぜい三十個ほど。厳しい世界だと感じました。それでもちゃんと利益を出していく姿勢はプロだと感じました。工場では工業用の機械り機が動いていました。工業機を量産するのはとても効率が良い、安定した品質でものづくりができます。けれど私が目指したいものとは大きくかけ離れているように感じました。ただその中でも、お話を伺った代表の菊池さんが話されていた毎日デザインを出すクセをつける。2個3個アイデアを出すというのを続ければそれが当たり前になるんだよ。やればいいだけ。というアドバイスには説得力もあり、自分にも生かせる部分を取り入れていきたいと思いました。

このように様々な工房やものづくりの現場を見て、ただものを作るだけではこの先明るくはない、続いていかないという感じでした。それは例えばどこにこだわりを持ってものを作るのか。それをどのように消費者に届けるのか。これから先もの作りをする人は食べて行けるのか私は不安を感じます。SNSが叫ばれる世の中になってきたことでものづくりの現場は変わってくると思います。そしてこれはものを作

る側の私だけでなく皆さんにもこのことは生活に密接に関わってくると思います。そうは感じないでしょうか？

皆さんはものを買うときに何を考えて消費行動をとっているでしょうか。デザインはもちろんのこと、値段でしょうか？長く使えそうかを考えたりしますか？あるいはブランドやメーカーに拘って買っていますか？あるいは何も考えずに目止まったものを買っていますか？これは皆さんが買うもの全てに言えると思います。ざっくり分けるならそれは衣食住のカテゴリーに分けられると思います。今回のホームズパンひとつとっても、皆さんの知らないところで消えていく文化やものづくりの現場が日本では年々増えています。皆さんは次の世代に何を残したいですか？目の前のことばかりではなく、未来に目を向けて行動を選び取って欲しいです。作りの側から考えれば工場で働く職人さんの高齢化が進んでいますし、小規模な工房も技術の伝承が大きな課題になっています。

ものを買うというのはその製品やサービスを買うというだけでなく、その商品を作っている会社を評価しているという

ことを意味しています。お金は道具です。何に使うかはその人のセンスが現れると思います。センスの良いお金を使い方は是非してください。そうすることで日本の未来は明るくなると思います。

私はこれからも、ものを作る人として次の世代に繋ぐために技術や文化を学び、ものづくりをし、発信することを続けたいと思います。作り手としての責任を果たしながらこれからも編んでいきたいと思います。スピנקラフト岩泉の工藤厚子さんが「今が一番若い日なんだからね。」という言葉が私は印象に残っています。日々の学びを大切にし、歩んでいきたいと思いますので、温かく見守っていただければ幸いです。今回、寮生活動支援金を通して学びを深めることができたこととても嬉しく思います。ありがとうございます。

表現すること

青野 道

はじめに

私は現在、昭和音楽大学短期大学の声楽コースで声楽を学んでいます。二〇二一年三月、私は「寮生活動支援」を受けさせていただきました。座間歌曲祭第五回日本歌曲コンクールに出場しました。日頃学んでいる声楽ですがどのくらい自分の納得できる歌を歌えるか。そして今「私らしい音楽」を探して日々頑張っています。コンクールに挑戦する中で私らしい音楽をさらに追求することを目的として出場しました。また、コロナ禍で本番、ステージに立つ機会が減ってしまっているため、場を踏むということを目的とし挑戦することを決めました。また私はこれまで本番に極度に緊張してしまう経験を何度もしてきました。そのため、少しでも多くのステージを経験し緊張になれることを目指しました。

活動の概要

① 第5回日本歌曲コンクール出場

②久保田智子先生によるレッスン

レッスンの内容

- ・ 声楽の発声
- ・ 技術
- ・ 体のこと（筋肉、ストレッチ、からだの伸ばし方、力の抜き方など）

活動報告

私は今回のコンクール出場について自分自身の中で多くの葛藤がありました。私は高校から音楽高校に通い本格的に声楽を始めました。高校時代、大学受験、大学生活、コンクールなどついてまわるのは評価され、順位をつけられるということ。音楽は奥が深く、掘っても掘っても終わりが見えません。そして、夢中に掘り続けていたら、今まで歌えなかった歌が歌えるようになったり、誰かの心に届く瞬間があったりと自分の成長を感じさせてくれるのも音楽です。私はただ音楽が好き。歌うことが好き。ここから声楽を学び始めました。するとやればやるほど音楽は新しい世界を見せてくれ

ました。学ぶことの面白さ。達成感。そして誰かに届ける喜びなどです。

声楽は体が楽器なだけにすごく繊細なものです。いつもより肩が凝っているか。少し足に力が入っているか。声を当てる場所がその日の体のコンディションによって変わるなど、その時々々の体調や体の調子で発声が変わってきてしまいます。そして声楽の世界では声が成熟して発声が安定してくるのは三十歳過ぎてからくらいだとよく言われます。高校入学前から本格的に声楽を学んでも私はまだまだこれからだということ。うことです。

いくら練習しても、練習でいくら上手く歌えていても本番で少しでも体に力が入ってしまうといつもこの歌は歌えません。だからこそ本番は緊張しやすい私にとって難しいものでした。ひどい時には緊張しすぎて本番で声が出なくなりました。ほどです。音楽が好きなのは必ずなのに。歌うことが好きなのは必ずなのに、評価され、順位をつけられることに、囚われ歌うのが怖くなりました。しかしそんな時、ただただ音楽が好きで仕方ない！楽しくて仕方ない！そんな演奏をする人たちに出

逢いました。その人達の演奏を聴いている時間は本当に自由で楽しい時間でした。そこにいる人たちは人の目を気にすることなく、ただただ自分の音楽を表現していました。そして私に「ああ。私はやっぱり音楽が大好きなんだなあ。」と改めて感じさせてくれました。

私は音楽大学に進学するにあたって目標を持って入学しました。その一つとして「私らしい音楽を見つけろ」ということです。今までの私はただ無我夢中で先生の示す線路から外れないように音楽の基礎を学んできました。今まで学んできた基礎の部分は私の大きな土台になっています。そして今度は学んできたものを土台に自分はどうな音楽がやりたいのか、何を表現したいのか、といった「私らしい音楽」を追求する。そして堂々と自分の愛する音楽を伝えていける表現者でありたいと思っています。

今回のコンクールも、コンクールですので審査員に評価されて可否を決められて次のステージに進んでいくという流れがあります。しかし、コンクールに出場する目的は次のステージに進めるようにというよりは私らしい音楽を追求するこ

とを一番の目的にし出場しました。曲は日本歌曲九曲を準備していきます。準備としては高校の頃からお世話になっていた久保田智子先生のレッスンを受講し、声楽の発声や技術、体のことについて学びました。また、久保田先生は指導者として演奏家として、そして人としてすごく尊敬のできる方です。久保田先生から学ぶことは多くありますが、何よりも久保田先生は時にお母さんのように暖かく、時には凛とした一人の演奏家としてのかっこいい姿で励ましてくれるようなそんな歌を歌います。私はそんな人柄が溢れ出る先生の歌が大好きです。

表現は自分をさらけ出すことだと思います。自分をさらけ出すには自分のことを知らなくてはできません。自分をさらけ出す音楽がどういう音楽かまだわかりません。しかし、自分のことを知る。ということは「私らしい音楽」を見つける上で大切なことだと思います。昨年の方舟にも書きましたが、生きることも一つの表現活動だとおもいます。どう生きるか、生きている中でどんな心の叫びがあるか。どんな苦しみがあるか。そしてどんな優しさがあるか。愛があるか。それはど

んな歌が歌いたいに繋がって来ると思っています。

「小さな空」歌唱、ピアノカ演奏



コンクールも日々のレッスンも、そして日々の暮らしにも「私らしさ」のヒントは転がっています。今回の寮生活動支援を受けさせていただくことで、評価される舞台とどう向き合いたいか。また「私らしい音楽」や表現することについて考え、思いを深めることができました。本気でやっているからこそ辛くなることや苦しくなることはあります。しかしそれをも私の一部として、これからも表現者であり続けたいと思います。

最後にこの度は寮生活動支援として私の音楽活動の応援をしていただき本当にありがとうございます。大好きな音楽をこれからもどんどん追求し、いつか誰かの心に届く歌が歌えるよう日々邁進してまいります。これからもどうぞ応援よろしくお願ひします。



榊形山にて天を仰ぐ

（登戸学寮誕生ものがたり）



（な）この物語には以下の人々が登場する。他にも多くの方々が学寮創設に尽力されたが、榊形山中腹の土地を寄贈された小町勝美氏をキーパーソンに据え、学寮誕生に至る歴史を辿る（数十枚の写真が朗読の進行にあわせて上映される）。



登場人物ならびに演者

黒崎幸吉(1886-1970)、学寮創設者 ・ 松井共生

黒崎寿美子(1887-1921) 幸吉妻 ・ 中村真子

内村鑑三(1863-1930) 幸吉、寿美子恩師 ・ 水越創斗

小町(古田)勝美(1915-89) 枅形山中腹の土地寄贈者、学

寮理事 ・ 西巻未祐

小町定(さだむ) (1920-2012)、勝美夫 真珠湾攻撃出撃、

「零戦操縦士の至宝」と呼ばれた。材木業、建設業経営。

・ 溝口修平

勝美母 登戸出身、看護師 ・ 佐々木さら

和木(浅野)とら恵、勝美の女学校時代の教師、黒崎の大

阪時代以来の弟子 ・ 善方枝美華

椿程子、黒崎の友人の娘 黒崎の弟子 ・ 善方枝美華

宮沢賢治 詩人 ・ 伊藤直道

パトモスのヨハネ、福音書記者ヨハネ、詩人、イエス

・ 三浦千尋

植字職工 寄付者 ・ 五十川大地

山口龍蔵一級建築士 学寮設計 ・ 川口陽久

坂田祐 関東学院院長 ・ 川口陽久

江原祝 幸吉妹、学寮事務、二三年支える。・ 佐々木さら

ナレーション(な) ・ 柴田真之介

スク립ト ・ 千葉恵

第一幕 枅形山(ますかたやま) 頂上

(な) 今から九十年前のこと。昭和八年(1933年) 或る春の午後、勝美と母は枅形山に登る。

(母) 勝美、卒業のお祝いに、枅形山に一緒にこれてよ

かった。鉄道省就職よかったね、忙しくなるね。東京での勤務ははなやかだろうね。愛知での生活も長くなつたけど、登戸はやはり私の故郷だわ。何か落ち着く。ここはお母さんの子供のころからの思い出の場所なの。いつ来てもいい眺めだね。多摩川がゆうゆうと流れているでしょう。私は子供のころよく多摩川で川遊びをしたのよ。登戸の渡し舟も見えるでしょう。その向こうに、日本の首都の広大な関東大地が広がっているよ。丹沢の向こうに富士山が見えるよ、雄大だねえ。この故郷の枅形山にまた住めたらいいなあ。

(勝美) そうだね、お母さん、いつかこの自然豊かな枡形山に囲まれて生活したいね。私がかせいで家建ててあげるは、女手一つでわたしたちを育ててくれて、親孝行したいし。ただ、近頃満州事変が起きて物騒になってきたは、今後どうなるんだらうね。

(母) 心配だね。ところで、卒業式にいけずにごめん。

和木(浅野) とら恵先生に挨拶したかったな。本当にお前に親切に教えてくださった。

(勝美) 仰げば尊しを歌っていたとき、和木先生と目があつたの。そしたら微笑んでくれて、でもわたしは涙が溢れてしまったわ。和木先生は、若いとき大阪に住んでいて、六甲山の麓にあるご家庭で聖書の勉強会がありそこでキリスト教徒になったんですって。その集まりには牧師はいなくて、大阪の住友に勤務していたお二人、黒崎さんと江原さんが日曜日ごとに聖書の話をしていたんですって。その勉強会が楽しくって、日曜日には心が清められ元気になって、一週間分の力をいただくのだそうよ。和木先生はそこでご紹介された浅野猶三郎さんなわさきさぶろうという方と最近婚約したの。先生ももう不惑

の年を超えてご結婚するとは思っていなかったみたい。浅野家は徳川將軍家の御殿医(こてんい)、医者いしやの御家系だけれども、浅野さんはやはり聖書の教えを伝える伝道者なんですって。和木先生は紹介くださった黒崎先生を信頼してお受けしたみたい。

(母) そうなの。和木先生よかったわね。

(勝美) 黒崎さんはその後大正十年に奥様をなくし、住友をやめてヨーロッパに留学して聖書の研究者、伝道者になったんだって。和木先生は黒崎先生が出す月刊誌「永遠の生命」を購読していて、このあいだその雑誌を見せてくださったの。

(母) そうだったの。信仰はひとに力を与えるものなのね。

(勝美) ゴホゴホ、ゴホゴホ。

(母) 勝美の咳はどうしたのかね。

(勝美) もしかすると結核かもしれないって。

(母) 東京の病院で診てもらってね。

(勝美) そうするわ、そろそろ山を降りようか。

第二幕 寿美子の死と幸吉の召命

(な) 勝美の枅形山散策から一二年ほど前、今からちやうど百年遡る大正十年(1921年)正月のことであつた。第一次世界大戦のさなかにアウトブ레이크したスペイン風邪は日本でも猛威をふるつた。当時、幸吉は大阪の住友製鋼所副支配人兼経理部長であつた。幸吉は別子銅山のある新居浜時代とは異なり出張が多く、風邪気味のまま神戸東灘区本山に戻つた。妻寿美子は年末に自宅で第四子^{やすこ}康子を出産したが、スペイン風邪に罹患した。一度もお乳をあげることができなかった。幸吉は無我夢中で妻の回復を祈つた。そのとき、幸吉は神の声を聴いた。「お前は職を辞して伝道せよ」と。心の中で

(幸吉)「はい、致します」

(な)とこたえた。

(幸吉)「もしわたしが職をなげうつて伝道するならば妻を癒してくださるのですか」

(な)と問うたところが、答がなかった。幸吉は祈り続けたが、最後にひとり呟いた。

(幸吉)「これ以上神に妻の癒しの約束を求めることはできない。」

い。あとすべてを神に任せて辞職し伝道の道を歩もう」(「恩恵の回顧」著作集第五巻288頁)。

(な) 幸吉は妻の枕元にいき、神から召命を受けたその聖旨^{みむね}と決意とを話した。寿美子は苦しい息遣いのなかで非常にそれを喜んだ。寿美子は蓄音機でヘンドルのハレルヤを聴きたいと言ひ、幸吉は天国への凱旋だと響かせた。その後ほどなく息をひきとつた。その時の臨終の様子を幸吉は葬儀に参加した内村鑑三の長男^{ゆっし}祐之に託して報告している。寿美子も内村の弟子であつた。寿美子は内村の長女ルツの死の記念に作られた婦人会モアブ会に所属し日曜ごとに柏木に通つていた。内村は『聖書の研究』日誌(1921.1.8)にこう記している

(内村)「家の青年(祐之)西より帰り、黒崎寿美子葬儀の实况ならびに彼女の臨終の状況(ありさま)について報ず。彼の持ち帰りし幸吉君の書面の内に曰く、」

(幸吉)「・・・寿美子は(二月)一日の午後五時頃に私一人おるときに次のごとくに遺言しました。(黒崎の)両親に対し
ては」

(すみこ)「御先に逝つて済みませんがお許しください。な

にとぞ同じ所にて御目にかかる事ができるようになつてくだ
さい」

(幸吉)「と言ひ、私に對しては」

(すみこ)「これまでの幸福な生活大へんありがとうござい
ました。なにとぞ世話する人のできるまで、子供はご両親に
きていただいて世話していただいて下さい」

(幸吉)「と申しました。・東京、新居浜、芦屋の教友に
は」

(すみこ)「先にご免こうむつていきます。またその日には
お目にかかります」

(幸吉)「と言ふことばを残し・・そして子供を枕頭ちんどうに集め
て」

(すみこ)「母様ははさまはこれからエス様の側に行くのよ、ここよ
りかもっと美しい広い所よ、場所を取つて待つておるから皆
あとからおいで」

(幸吉)「と、そして」また逢う日まで」の讚美歌を歌わせ、
終つて頭脳に変化をきたし、やや前後の連絡無きことを口
走りました。その後」

(すみこ)「コリント前書一五章を読んでください」

(幸吉)「と言つて読ませ、「きよき岸辺に」歌わせ候(そ
うろう)」。

(すみこ)「自分の死が神の御栄光をあらわすならばこの上
の幸福はなし」

(幸吉)「と言ひ遺して眠りました」。

(な)内村は愛弟子まなでし、寿美子をこう天に送っている。

(内村)「これは死ではない、永眠でもない、入覚おっと(にゅう
かく)である。三十四歳の近代婦人が、良人と四人の子供と
を遺して逝くにこの平安ある場合は他にいづくにあるか、

もしキリストの福音が人の工夫になる小説であるとすると、

死に臨んでこの大なる平安をあたえ与うるならば、これ最大の工夫

または発見であるのではないか、社会改良、世界改造、文化
運動と言ひてその名は大なれどもその実はこの旧ふるキリスト
の福音に遠く及ばないのである」(『聖書之研究』二四七号一
九二一)。

第三幕 とある病院

(な) 勝美は結核に感染していることが分かった。病状は厳しく仕事を辞めざるを得なかった。彼女は入院し薬にも縋る思いで、病の癒えることを願う日々であった。このまま青春の真昼間に暗い戦争の時代に死んでしまうのかと思うとやりきれなかった。和木先生が見舞いに来た。先生は励ましに詩人宮沢賢治の「疾中(しつちゆう)」を読みあげ、死んだ後真空に帰するのではない、天国があると話した。宮沢賢治はやはり肺結核に苦しんでおり、死に面してこううたっている。

(賢治)「われやがて死なん、今日または明日、あたらしくまたわれとは何かを考える、われとは畢竟、法則のほかではない、からだは骨や血や肉や、それらは結局さまざまの分子で幾十種かの原子の結合、原子は結局真空の一体、外界もまたしかり、われわが身と外界とをしかく感じ、これらの物質諸種に働く、その法則をわれと云ふ、われ死して真空に帰するや、それともわれと感ずるや」(1929、2)。

(勝美) このままわたしは死んで真空に戻っていくのだろうか、この短い人生はなんだったのだろうか。

(な) 勝美は和木先生がおいていった黒崎幸吉の「永遠の生命」誌を読んでみた。

(幸吉)「病を治めること(治病)は人生の目的にあらず」。

(勝美) そうなのか、わたしは病が治ることだけを願って生きているけど、他にどんな目的があるのだろうか。

(な) そのような入院の日々幸吉はとら恵に頼まれて見舞いに来た。

(幸吉) どうですか。

(勝美) 息苦しいです。このまま死にたくないです。先生、死んだらどうなるのですか？

(幸吉) ひとは死後については誰も見たことがないのです。生きているからです。でも面白い冗談があります。「あの世とこの世は楽しいところらしい。誰もこの地上に戻ってこないのだから」と。

(勝美) ふふふ。そうですね。楽しいからこの争いばかりの世界には戻ってきたくないのでしょうか。そういうあの世なら行きたいです。

(幸吉) ダンテというイタリアの中世の詩人は、死んだら

最初に「レーテの川」を渡ると言います。所謂日本では三途の川と呼ばれるものです。「レーテ」は「忘却」「忘れる」という意味で、一回人生の一切の記憶をなくすのだそうです。

そして次に渉る川があります。それを「エウノエの川」と呼びます。これは一回失われた人生の一切の記憶から「良き思いで」のみが回復されて思い出されるということです。楽しかったこと、新しい発見があったこと、愛情を感じ合ったこと、ひとの親切に触れたこと、そのような良き思い出のみが湧き上がります。都合がよいようですが、天国というところが善き場所であるなら、そこに悲しさや怒りや憎しみなど負の感情や思い出は相応しくないものです。ボードゲームで黒石がすべて白石に変わるように、清められて入る天国の住人はそのような負の記憶からまったく自由なはずです。

聖書の一最後の文書は「黙示録」と呼ばれて、この宇宙の終わりがくること、そして新しい天と新しい地が作られる、壮大な預言があります。ここでは著者のパトモス島のヨハネは夢見るひとのように幻をみました。

(パトモスのヨハネ)「わたしはまた、新しい天と新しい地

を見た。・見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとく拭い取ってください。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のものは過ぎ去ったからである」(Rev. 21:1-4)。

(勝美) そうなるといいですね。戦争がなくなり、また死もない世界がくればどんなによいことでしょうね。先生は「病を治めること(治病)は人生の目的にあらず」と書いていますが、人生は何のためにあるのでしょうか。死に打ち勝つ永遠の生命というものがあれば、それを頂きたいと思いましたが。先生、どうしたらその悲しみも苦しきも嘆きもない、平安で喜びの溢れる永遠の生命を頂けるのでしょうか。

(幸吉) 一言で言えば、その永遠の生命を信じるだけで頂けるのです。神はこの宇宙とこの世界をお創りになり黙示録にあるように主の日に完成させます。神は宇宙の創造のさいに時間と空間も造っており、ご自身は時空の外即ち永遠の現在のうちにおいて、過去も未来も現在のこととして了解しています。神ですから一切を知り、一切を為すことができる全

知全能の宇宙の栄光なのです。その神がこの地上にご自身に似せてご自身の愛の顕われとして然るべきときに永遠の交わりを持つべく人間を創りました。詩人は言います。

(詩人)「あなたの天を、あなたの指の業をわたしは仰ぎます。月も、星も、あなたが配置なさったもの。そのあなたが御心に留めてくださるとは人間は何者なのでしょう。人の子は何者なのでしょう、あなたが顧みてくださるとは。神にわずかに劣る者として人を造り、なお、栄光と威光を冠としていただくせ、御手によって造られたものをすべて治めるようにその足もとに置かれました。・あなたの御名はいかに力強く、全地に満ちていることでしょう」(Ps. 8:3-9)。

(幸吉)人間も知性的また道徳的な存在者として宇宙の栄光なのです。神ご自身は「聖なる、聖なる、聖なるかな」(Isaiah. 6:3)とほめたたえられるべき穢れなき、まったく清らかな方です。神ご自身は比喩的には宇宙の始まりのあの光と熱よりもはるかに輝いています。ご自身の憐みと正しさを人間が理解できるように、人間の言葉であたかも人間であるかのように「忍耐し」また「後悔する」そのような時間

的な経過のもとに描かれ、記録されることを許容、許しておられるのです。あげくのはてには、ご自身の独り子(ひとりご)をまつたき人間としてこの世界に派遣しました。神がひととなることを「受肉」と言います。

(ヨハネ)「神はご自身の独り子を賜うほどに世界を愛した。それはご自身を信じる者がすべて滅びず、永遠の生命(いのち)を持つためである。というのは、神が世界に御子を派遣したのは世界を審判するためではなく、世界が御子ご自身を介して救われるためだからである」(John. 3:16-18)。

(幸吉)最初の人間アダムとエヴァが背いてしまったために、眠りとしての生物的死は神への背きの罪に対する罰としての死となりました。もし神にその罪が赦されるなら死は再び覚醒前の眠りとなります。すべての人間がアダムを模倣し神に一度は背きました。誘惑に負けると、擬人化される罪から「よく神に背いた、褒美をやる」と言われ、ひとは「給金・サラリー」(Rom. 6:23)として死を受け取ります。罪はその生物的死を介して永遠の滅びを招き入れ、もつと神を悲しませようと唆(そそのか)します。

神はアブラハムとその子孫ユダヤ人を選び、信仰によって罪に打ち勝ち、神と正しい関係を築けるということを教えました。「信なくば立たず」と言われるように、信・信仰とは、どんなひと、正しい信のもとにある限り、世界のものごとの真理をよく知ることができるようになり、道徳的に正しく、勇気あり愛あるひととなる力です。正しい信を心の根源に位置付け生きるとき偽りなき者となり、ひとは知性と道徳性を前進させ賢者と聖者になります。その限りにおいて、ひとは神に対し正しい信仰をもっていると言いうことができます。

受肉したナザレのイエスはわれらと同じまったくひととして、自分が神の独り子であるという信を抱きました。その信のもとに、神の御心を遂行すべく十字架の死に至るまで信の従順を貫きました。彼はユダヤ民族の指導者モーセを介して知らされた殺すな、盗むな、貪るななどの道徳的規程を内面化、純化して、人類がもちうる最高道徳を山上の説教において知らしめました。山上の説教では「一心ひとこころをもつことを偽りとして、ただ空の鳥や野の百合が父なる神に養われているように、天の父の養いを信じて生きることにより、神と正しい関

係にはいり神の国に入ると教えられています。彼だけがその言葉による教えとその行いのあいだに偽りがなかったひとなのです。彼はその教えを自ら生き抜き、清いままに人類の罪を身代わりに背負い死を遂げました。神は罪なきままに身代わりの罪を担ったイエスの信の従順を喜び、甦らしめ、人類に永遠の生命の在り処を教えたのです。

このイエスの甦り、復活は神に背く罪とその罰である生物的死、さらには永遠の滅びとしての死に対する勝利をこの人類に伝えるものでした(John16:32-33)。イエスに従い既に死に打ち勝った者として永遠の生命をいただいたことの証は喜びと平安と愛です。パウロはこれを「キリスト・イエスにある生命の霊」(Rom8:10)と呼びます。どうかイエス様を信じてこの溢れる生命の真清水を飲んでください。

(勝美) 先生その生ける真清水を飲み永遠の生命を頂きました。信じたいたです。わたしが生き延びれたら、ぜひ先生の弟子にして下さい。

(幸吉) 分かりました。信じることは疑わずに幼子のようにに憐み深い神様に人生を委ねることです。心の最も深い所に

二心がないとき、喜びが湧きます。あなたの全体が分裂なく秩序づけられていることが喜びなのです。信はそれほど自らの一切を秩序づけて歩む方向を定める力です。またお見舞いに伺います。さようなら。

(勝美) さようなら。

第四幕 山下公園

(な) 勝美の病状は回復に向かった。晴れの退院の日、勝美は新しい人生の始まりに、天を仰ぎ胸いっぱい新しい空気を吸い込んだ。

(勝美) 「人もしキリストのうちにあらば、新たに造られたる者なり、古きは既に過ぎ去り、見よ、新しくなりたり」
(2Cor. 5:17)。

(な) 母も大喜びだった。勝美は戦争の苦難のただなかでイエスを主キリストとして仰ぎ、キリストの甦りを信じ、毎日心を刷新して生きる生活を始めた。勝美は塾を開いて子供達の勉強を見ていた。

戦況はいよいよ厳しさを増し、昭和二〇年五月末白昼、B29

の大軍が勝美の住む横浜を襲った。飛来したB29は五百七七機を数え、一時間余りに2570トンの焼夷弾を市街地に無差別に落とし、横浜は焼け野原となった。約一万人が生命を落とした。

数日後小町定(さだむ)と勝美は焼け残った山下公園から呆然と港を見下ろしていた。定(さだむ)は真珠湾攻撃に参加したゼロ戦パイロットであった。その後インド洋作戦、ソロモン海戦などに攻撃した。マリアナ沖海戦でトラック基地から出撃しグアム島の戦艦で着陸寸前にグラマンにより被弾、撃墜された。小町は燃料タンクから噴き出す火により顔面など大やけどを負いつつ墜落寸前に操縦かんを引き上げた。海面に不時着し九死に一生をえた。救出され氷川丸で内地に帰還療養し、横須賀海軍航空隊で教官となった。(川崎淡『ある零戦パイロットの軌跡』(トランスビュー 2003) 参照)。

(さだむ) このいくさは負けだな。しかし、アメリカのやつらめ、市民と戦闘員を分けることもなく焼きやがって、これは人殺しそのものだ。ただただ無慈悲なやり方だ。勝美さん、今回の空襲では、仲間が厚木海軍飛行場から零戦、雷

電で飛び立ち応戦しB29を七機撃墜しました。また仲間を多く失いました。悔しいです。勝美さん僕は再び志願し、南にいきます。

(勝美) 南？まさか知覧ではないでしょうね？

(さ) 「沈黙」

(勝美) 特攻ですか？

(さ) 「静かに頷く」

(勝美) さだむさん、わたし待っています。いつまでも待っています。

(さ) ありがとう。その言葉だけで十分です。僕は生還することはないでしょう。敵艦につっこみ、この借りを返してやります。日本は負け、戦争は終わるでしょう。どなたかよいひとを見つけて幸せに暮らしてください。

(勝美) いえ、待っています。いつまでも。

第五幕 勝美の捧げもの

(な) 戦争は終わった。「零戦操縦士の至宝」と呼ばれた小町定(さだむ)は生還した。一九四五年八月一五日、玉音放

送後、上空に飛来したB32を彼は紫電改で迎え撃ち、損傷を与えたが、それが日本軍の最後の空中戦となった。定は真珠湾から玉音放送後まで日本で最も長く空中戦を戦った男として生き抜いたのであった。

戦後郷里の石川に戻ったが、職業軍人は故郷に受け入れられず、彼は横浜で勝美とともに無一文から小町建設をたちあげ、材木業、建築業を始めた。住宅難の横浜にあつて住宅を供給し続けた。彼にとつてこの一心不乱の仕事は言ってみれば拾った人生の余生であり、戦場に散った戦友の供養であった。彼は「零戦搭乗員会」が解散するまで会の代表世話人を務めた。小町の事業は勝美の援けもあつて成功した。田園調布三丁目に居を構えるに至った(註、末尾「後日談」参照)。

幸吉宛の勝美による昭和三十年七月の日付の手紙が学寮創設時のファイルに保管されている。それによると小町建設提供の材木で山中湖の焼失した無有庵(むゆうあん)が再建され黒崎に寄贈されていることが分かる。

(勝美) 「先日の会は浅野先生の御奥様の御はからいで、皆さまがとても御たのしげに御すごしてございました。愉快に

過ごすことができまして嬉しうございました。私のように、

二、三の主にある友人の外は別(ほか)に何もない者として一年に一回でも先生を囲む会に出られますのは嬉しいことでございます……。

毎日子供の相手と家業の手助けとにおいまわされて居りますが、とても恵まれた平和な家庭で愉快に働けますことを心から有がたく感謝いたして居ります。

・・山中(やまなか)の・・家の方は古材(こせい)など用いますので、お気に召すようなものがないと心苦しいのですが、何とか先生のお仕事のしよい様に心がけようと願っております。あり余るお金はございませんが私どもの現在の手持ちの予算で許すものと、心から嬉しく、先生にささげられますことの出来るよろこびで一杯でございます。どんなお家(うち)ができますか、私も楽しみでございます。ようやく一人前になりました。子供がお父様にプレゼントしたものとお願いくださってご笑納(しょうな)くださいませ。無理しない様にしてお金ができましたら、又たてまし「建て増し」いたしませう。私たちの気持はこんなでございますから、どうか先生も御心安く(おんこころ)お願いくださいます様

に」。

(な)昭和三十一年六月、幸吉の東京における講演会のあと、参加した浅野、勝美そして椿の三姉妹と新宿で懇談のときをもった。

(幸吉)僕は東京に全国から首都圏の大学に集まってくる青年たちのために学生寮を建てたいと思っております。種蒔きの譬えにあるように、善き地に蒔かれたならもともと与えられた才能、賜物を三十倍、五十倍にも増やすことができます。良き寛容で思慮ある指導者のもとに、学生たちが聖書の学びを中心にして聖書から力を与えられ啓発しあい、励ましあうそのような共同生活の場を提供したいと思っております。誘惑の大きい東京で生活を律し、守ってあげることも大切だと思っております。

(浅野とら恵)それは素晴らしい考えですね。大学の学生寮は数人の相部屋でたむろして酒を飲み騒ぎ、何か静かに勉強できないと聞いています。ぜひ個室にしてください。

(幸吉)そうですね。ヨーロッパでは修道院の伝統があるけれども、イギリスでセリオーク・カレッジに寝泊まりした

とき、彼らは独立を保ちながら、共に学び共に祈るそのような生活をいきいきと送っていたのです。キリスト信仰の基礎の上に、健全なる判断力と確固たる責任感を持つ若者を造りたいと思っています。

この学舎には聖書の学びに付随する教室を二、三設備して、その学問のエキスを人間生活の栄養となるように通俗的に講義してもらい、学生の専門以外の方面に関して広い教養をもたせる。そのために最も必要なはその主監となる人物であつて、青年を愛し青年の心を理解し青年と共に生活して之を指導することに使命感と熱意をもっている人が献身的に之に従事してもらわなければなりません。このような人が神から遣わされる迄はこの仕事は始まりません（「永遠の生命」一九五五年十二月号）。

（椿）先生、それは無から有を生み出すような働きですね。
（幸吉）確かに、そう言えるかもしれない。でも、椿さん、

僕の書の雅号は「無有生」というのだよ。自分自身無きに等しい者だったけど、集会もゼロからの始まりだったけれど、恩恵によりこんなに集会に人々が集まってくれるようになった

た。僕は神様の無から有を生み出す力を信じているんだ。志のあるところ、道ができると思っている。その志も神様に頂いた恩恵に対するひとつの応答なのだよ。無教会の方々の愛の支援をいただけるのではないかと思っている。

（勝美）先生、先生が首都に学生の心身の健康を守り、信仰に基づく学生寮や無教会大学を創りたいという構想は私も聞こえており、わたしの小さな心にあたためておりました。夫とそして母とも相談したのですが、登戸枳形にある400坪の土地を先生のこの志のために捧げたいと思います。もし神様の栄光のためにお用いいただければなら、どんなに幸いなことでしょう。永遠の生命をいただいたお礼と思つて、都内ではなく登戸でよければお受けください。

（幸吉）ほおー。小町さん、まさにエホバエレ「神備えたまう」です。感謝します。ところで、定さんは何と言つておられるのですか。

（勝美）（定）「それはよい考えだ」と言つてくれました。
（定）人間の争いの悲惨さは俺の骨の髄までしみ込んでいく。世界に平和をもたらすのは教育しかないのではないか。

俺たちが汗水たらして働いてえた土地により若者の教育に貢献できるなら、何もおしくはない。世界の平和に貢献する若者たちが育ったら、俺が撃墜した何十機ものグラマン操縦士の供養になると思う。

(幸吉) 感謝です。さつそく皆さんと明日にでも登戸に行ってみましょう。

(とら恵) そうしましょう。勝美さん、あなたの勇気が歴史を動かすのね。これからどんな神様のドラマが展開されることでしょうか。楽しみです。土地はどんなところですか。

(勝美) 枳形山きかたやまという百メートルたらずの山の中腹にあります。多摩川西岸の最初の河岸段丘で東京を見渡せる眺望のよいところです。畑が広がっていますが、平安時代に建てられた廣福寺というお寺がその丘の麓にあります。

(幸吉) 登戸の丘の上にある土地ですか。新しい学寮は天に登る戸トになることでしょうか。

二列目.. 左から、椿程子氏、小町勝美氏、浅野とら恵氏、三列目.. 左から、三矢栄氏、道正安治郎氏、関根正雄氏



第六幕 神戸本山自宅、東京

(な) 幸吉は彼が「神の使い」と称する三姉妹と枳形きかたの地

を訪問した。幸吉は胸を張ってそこから天を見あげた。三人で神に感謝の祈りを捧げた。幸吉はこの勝美の捧げを神からのゴーサインを受け止め、直ちに行動にでた。

(幸吉)「ヒが神の声でなくて何でしょう。私は即座に寄付金の募集をし始め私一人の責任で寄付を求めました所、非常に多くの方面からご賛同を得まして会計報告にある様な金額が集まりました」。

(な) 寄付金は住友グループ等法人を含めて七十七人の方々から、多くの場合数年の分割寄附により寄せられ合計約一三五〇万円となった。幸吉も私財を二百万円投じている(「登戸学寮五十年誌」建物・募金・財政 副島正人、編集委員三四、三九頁)。

中山博ひかす一氏が「貧者の一灯」をまっさきに捧げたとき、幸吉はお礼に揮毫しこう書いている。

(幸吉)「天地は過ぎ往かん、されど我がことばはすぎゆくことなし」「一九五四年仲秋、為中山君 無有生」(横ヨシセンチ、縦「ヨシメートル)『回想 黒崎幸吉、光子』一八六頁)。

(な) 日本住宅公団からの建設費の借り入れは総額一四七

三万円であり、昭和五四年まで八十回の還付金償還の形式であった。当初、学生寮では支払い不能になる怖れがあるため、許可が得られなかった。そのとき、日本住宅公団の総裁であった加納久朗氏ひなふらは幸吉の学生時代の友人であった。加納氏の「鶴の一声」による総裁決済で貸付が認可された(5,500)。ちなみに創設期の入寮費は1000円、毎月の室料は1250円、光熱費は500円、賄費(二食)は3000円であった。現在は当時のおおよそ十数倍の物価ということであろうか。

寄付の送付には多くの場合手紙が添えられており、植字識工(しよくじしきこう)のS氏はこう書いている。

(S氏)「私も僅かながら神の御栄みさかのために、お役に立ちたく申込書を同封します。私は顧みるに軍国調はなやかなりしころに義務教育を終え、国策という名のもとに、個人の人格も自由もまったく無視され、放り込まれたのが海軍工作学校でした。今にして思えば、あまりにも悲しい出来事でした。それにしても若人の指導教育が如何に重要であり、一つ誤れば、計り知れない結果をもたらすことを経験した一人として、先生のこのご決心が心の底から分かります。」。

(な) 国民は戦争という一切の価値を揺るがす経験をした。そのなかで、確かなものを求める時代精神が育まれ心ある人々を動かし、学寮建設への情熱に火をつけたのであった。

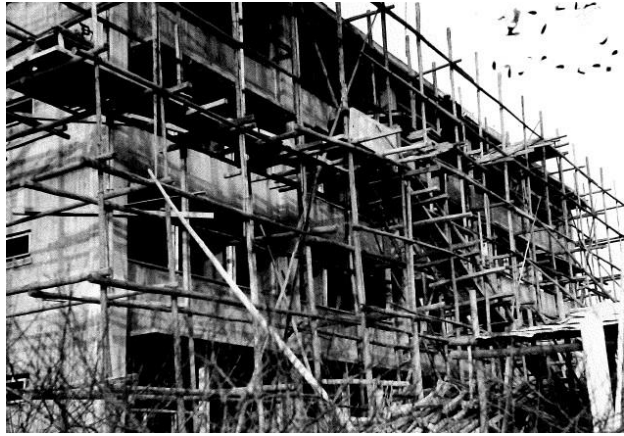
幸吉は小町夫人による一九五六年六月の土地提供の申し出以来文部省の認可を得る一九五七年五月まで寄付金の募集と並行し神奈川県や文部省との交渉を数十回上京し辛抱強く続けた。一九五八年春の学寮完成までに、幸吉はカバン二つをたすき掛けにしゴム靴をはいて夜行列車銀河号に乗り五六〇キロ離れた東京との往復を繰り返すこととなった(黒崎幸吉『登戸学寮創立記』「銀河号」大島智夫三頁(編集 高木謙次 二〇一二)。或る時山口龍蔵設計士と社員寮の見学にいった。(山口)「黒崎先生、こんなにたびたび上京されるのは大変でしょう。せめて寝台列車でゆっくり寝て往復されてはいかがですか」。

(幸吉)「わたしはいびきをかくので、まわりの人に迷惑をかけるので、列車の寝台には乗らないことにしています。幸い銀河号には最後尾一台が普通のボックスカーなのです。わたしにはそこで十分です。座りながら良く眠れます。おまけ

に高い寝台料金を払わなくて済む。何しろ、登戸学寮建設のために皆さまからの尊い寄付金を使っているのだから、安い普通料金のボックス席でいいのです」。

(な) 五月十日づけで、登戸学寮を財団法人にするという通知が届いた。建設業者の入札を経て横浜建設が工事を請け負い一月に工事に着手し、基礎コンクリートそして鉄筋を組み上げていった。

一月一七日に第一回理事会が開かれている。初代理事の多くは内村鑑三門下であり、学生時代からの友情がこの幸吉の夢の実現を助けた。これまでも幸吉は世話役として無教会陣営の一八人の執筆者をまとめ上げ合計五千頁からなる聖書略註を編集刊行している(『旧約聖書略註』上巻 1100 頁 1938^c 中巻 1469 頁 1943^c 下巻 1094 頁 1952^c 『全新約聖書略註』(1016 頁 1934))。さらに、彼はギリシヤ語と日本語双方からの『新約聖書語句索引(コンコードانس)』二冊を二五人の助手をまとめあげながら刊行している。このような努力が信頼と友情を得て学寮の建設において実を結んでいる。



第七幕 登戸学寮竣工そして三十周年

(な) 多くの方々の愛と献身の果実としての登戸学寮はついに完成した。

(幸吉)「竣工した登戸学寮は素晴らしかった。ちょうど周囲の桜の花は満開で錦上花を添えておった。四階から南を眺めると榊形山は目の前にあり、旧城址であるとのこと、北を眺めると遠く多摩川の流れを隔てて東京都の西北部一帯を遙かに望んでおり、まことに好い眺望であった。役員十数名は期せずして驚嘆の声を放ったのであった。学生の寄宿舎としては恐らく東京一であろう。これも全て本学寮のために多くの犠牲をはらってくださった方々のおかげであると今更ながら感謝で一杯であった」。

(な) 管轄諸官庁との交渉に尽力した坂田祐閑東学院学長は日本の情勢を旧約のノアの洪水時代に比べ、榊形山を仰ぎつつ祈っている。

(坂田)「希くは、アララテ山上の方舟から新世界が展開した如く、登戸丘上の方舟、学寮から、日本を滅亡から救い出す福音の戦士が続出するように」(『登戸学寮十年』七頁)。

(な) 幸吉妹江原祝(いわい)は幸吉に請われ、通算、事務を二三年にわたって支えた。彼女は言う、

(えはら)「古い書類を調べて驚いた。昭和三一年頃から諸

先輩友人のご協力はあったとはいえ、どれほど多くの心身を
労したかを知った」。

(な) その仕事の数々を挙げて、また言う。

(えはら) 「この見えない面倒を只学生寮という夢に向か
つてのみ為しえたのだ。学生を愛すればこそ出来たのだ」『登
戸学寮十年』一五頁。

(な) 小町勝美は創立三十周年記念式に参加し、その時の
印象を学寮誌に寄稿している。

(勝美) 「久しぶりに、あの丘に立ちまして、三十年前の
日のことを思い出しました。・草生い茂るあの地に立たれた
黒崎先生の希望にあふれた御顔、胸をはって天を見上げられ
た御姿、その時先生の御心には世の光となるであろう若い青
年の群像がうつしだされていたことと思います。そして、こ
こに三十年。神様に召されて、この学寮に学ぶことのできた
方々が大小の差こそあれ、灯ともしびとなつて、世の光となつてい
ることを思いますと、私は感謝で一杯になります。・相協力
して寮を背負う姿をみてうれしく、安心しました」(『登戸学
寮三十年の歩み』小町勝美理事前夜式辞三九頁、『六十年誌』

一八頁手紙)。完



後日談 (千葉恵)

この朗読劇は十一月二〇日に美しい秋晴れのもと、学寮の
六十年の果実を分かち合う第一回黒崎賞授賞式に続いて行わ
れました。授賞式、講演会はとても祝福されたものとなりま

した。その雰囲気の中かでホームカミングデーがもたれられた。

この時点でわたしは小町定氏との長いインタビューをまとめた川崎淡（とおる）『ある零戦パイロットの軌跡』（トランスビュー 2003）を読んではいませんでした。この書物は技術的な視点から戦闘機操縦士の現場をできるだけ正確に克明に記したものであり、一読後大きな衝撃を受けました。航空機操縦の困難さと壮絶さを追体験させられるようでした。なによりも、小町定の出撃時間二五〇〇時間を生き抜いたその重さに圧倒されました。高度五千米メートルから千米メートルまで急降下し攻撃しつつさらに急旋回により上昇します。負と正の重力がかかり一時的に眼が見えなくなります。戦いの現場は「壮絶」の一語です（数千メートルの降下と上昇を繰り返した彼は後に脊髄狭窄症となり、歩行困難となります）。

小町勝美さんの黒崎先生へのとても朗らかな寄贈の手紙を紹介しましたが、小町建設の経営の現実は厳しいものであることを知りました。お二人の寄贈にいたる決断までのやりとりは劇では事業の成功の果実として安易な描きとなつてし

まいしました。上野駅などで寝泊まりするホームレス状態から二人は一歩一歩苦闘のうちに戦後を歩んでおられたのでした。ここではお二人の出会いの場の描写と学寮への土地寄贈のやりとりの描写を引用します。

「小町定のポートクルーはある日、神奈川県金沢八景の浜辺にポートを引き上げて、小休止をとった。艇長は、一緒に航空受験の勉強をしようと云ってくれた海兵出身の蓮尾隆市である。総員起床でたたき起こされる海上の艦内生活、猛訓練の合間に直接足でふれる砂浜は、なつかしく、打ち寄せる海藻にも娑婆（しゃば）のおいがした。

そのとき海辺の近くにある塾から、若い女の先生と子供たちが遊びにきていたので、子供たちが「水兵さんだ、海軍さんだ」とはしゃぎながら駆け寄ってきた。子供たちとふざけあっているうちに、塾の先生が水兵たちを招いて茶菓子でもてなした。塾長は古田勝美というまだ若い利発な女性で、妹や弟といっしょに、当時としては珍しい塾を開き、小中学生を教えていた。水兵たちは、きれいなお嬢さんや無邪気な子供たちのなごやかな雰囲気、訓練の厳しさも忘れて楽しい

時間をすごした」(一七頁)。

「こうして勝美さんの内助の功もおおきかった。その勝美さんが、夫婦で登戸に所有していた四〇〇坪の土地を、無教会派キリスト教の学生寮建築のために寄付したいと申し出た。たえず資金繰りに悩んでいた小町さんは、これには頭をかかえこんだが、このときは勝美さんもとに退かなかった。彼女は「私と別れるか土地を寄進するか選んでください」と追った。彼女は独り言のように娘さんの前で笑いながら言ったことがある、「私が初代キリスト教の時代に生まれていたら、ただただ使徒パウロのあとについて行って、伝道のお手伝いをしていただいでしょう」。それほど熱心なクリスチャンだったので、小町さんもうとうとう同意せざるをえなかった。とはいえ、七〇年代初め、小町さんは一億三千万円の借金をかかえ、たえず資金繰りに悩んでいた。

だが小町さんも腹を決めた。戦争では二度も三度も死んでおかしくなかつた身だ。それが皮一枚のところへ帰還できたのは、「神のお導き」としか言いようがない。しかも自分は国のためとはいえ、戦争で「人殺し」の罪を犯してきた。それ

に妻の内助の功も大きい。この際、妻の望を入れて、経済的には身を切られる思いだが、持てるものを神に捧げようと決めた。こうして小田急線登戸の丘に、キリスト教の登戸学寮が建てられた。現在の管理人や寮生は、そんな過去には思いをめぐらすこともないようだが、これは妻勝美さんの信仰と小町さんの「真心」の結実である」(三〇六頁)。

小町定氏 (ウイキペディアより)



アーメンです。感謝です。小町定氏は二千五百時間の空中戦において一度は撃墜されて大やけどを負いながらグアム島の浅瀬に不時着しました。「私は顔も手も全身包帯で動けず横になつていましたが、三日目の晩に、「七日から十日までのトラック島からの攻撃で生き残っている者はおるか」と声がかかってきました。トラック島から一式陸攻が迎えにきたのです。私がグアム島を去つてもまもなく、グアム島の日本軍が玉砕したのです」(二六八頁)。

もう一度は千キロの夕闇との戦いのなかで、それも簡単な方位計ひとつでの単独飛行ののちに、不時着し一夜波にもまれました。「そのうち、黒々とつづく水平線と、かすかに見分けのつく空との境に、点々と黒いものが見えるではないか。「アッ艦だ、味方だ、自分は帰つたのだ」。思わず歓声をあげて、その方向へむけてまっしぐらに飛ぶ。味方艦隊の姿は、だんだん大きく見えてきた。ここで射たれてはたいへんだ。味方機であることを合図しながら、まもなくその直上まできたが、下にはいくら目をこらしてみても、私の帰るべき母艦の姿はなかった。巡洋艦一隻、駆逐艦四隻のみである。今日

の戦闘で、味方はたったこれだけしか残っていないのかと思ひ、愕然とした。といつて、いつまでも飛び続けてはられない。燃料も、余すところあとわずかである。ついに私は意を決し、単縦陣になつて進む艦隊の先頭を走る巡洋艦の真横に向けて、洋上不時着をこころみた」(一九七頁)。

そのようなときも、勝美さんは必死に夫の無事を祈つていたことでありましょう。

歴史は或る事件のなかで各自の行為とその帰結や出来事の蓄積の網の目から形成されます。行為(Doing)には祈りも含まれますが、これらの集積が一つの現実世界を形成しています。今・ここで歴史の最前線にいるわたしどももその過去の集積としての現在において、一つの行為を遂行しており、喜ばしいあるいは残念な歴史を形成しています。こうではなかったかもしれないあらゆる可能世界が想定されるなかで、現実世界はただこの一つの世界なのです。

行為の手前で各自の心魂(こころ)の在り方(Being)が問われています。各人はかけ替えのない個性において在ります。ひとは神の前に「在る」さらには「神は愛である(Being)」という信の

もとにある者には、その果実として行為 (doing) が生み出されていきます。Doing は Being の反映なのです。それをここでは「働きにおいてあること (being at work)」と表現します。歴史の最前線で神に出会うことも一つの出来事として、今・ここで「働きにおいてあること (エルゴン)」なのです。その恩恵の輝きのなかに在ることが歴史のなかに刻まれているのです。確かに、唯一存在しているこの現実世界において、人類はその構成員の全体数を基本的に計測可能であり、人間の生理的な組成も説明可能なものとして、理性による人間解明の探求は続いていきます。この歴史は、突き詰めれば盲目の必然のメカニズムの運動の展開であるのか、神に導かれているのか、そのいずれかの解釈をひとは迫られます。ただし、解釈は歴史の外に身を一旦置いて、一般的、普遍的な次元に成り立つ何らかの神学的理解、理論 (ロゴス) のもとでの認知行為です。他方、神の恩恵の内側でそれを今・ここにおいて生きたること・働きにおいてあること (エルゴン) によって発見的に知ることがあります。信仰のもとに、人類が形成されている同じ一つの歴史のなかに見えざる御手の導きを見出す

ことが起こるのです。

解釈と発見は異なる心魂こころの働きです。カルヴァンはこのエルゴン即ち神の働きを捉えるべく、命じます。「神の前とひとの前を分けるな、それはキリストを引き裂くことだ」。誰であれ、ひとは自らの髪の毛の本数さえ数えられている being at work ののです。歴史上、神はご自身をイエス・キリストにおいて最も明白な仕方で二千年前に知らしめているのです。そして「わたしは汝らを遺して孤児とはせず」(John. 14:18) と言われるように、御子の昇天後は聖霊が派遣され、心の内奥において呻きをもって執り成していたまいます。

神の恩恵に浴している人々つまりイエス・キリストや聖霊を介しての神の働きかけに応答している人々には、それは単に導かれているという一般的な解釈を遂行するということではなく、その感謝そして賛美さらにはただ栄光を帰することの一つ一つの働きが、神の前とひとの前を分けることのない仕方です。この歴史を人間は神の前まへに在るといふ信のもとに、神のエルゴンとひとのエルゴンの交流において造るのです。

神の前とひとの前をロゴス（理論）上分ける一般的な言葉と今・このエルゴン双方からの神の前とひとの前の相補的な展開が求められています。そのとき、信仰は理性（ロゴス）の逸脱である狂信からも、またパトス（感情などの今・この身体的受動）の働き（エルゴン）が過剰（例えば恐怖）となることにより生じる迷信からも自由にされ、正しい信のもとに良き果実が生みだされていきます。

小町夫妻の一つ一つの今・この働きなしに、黒崎先生の構想は少なくとも登戸において実現されませんでした。定氏の戦記を読むとき、驚嘆すべきほどの細い道が学寮建設にまつながっておりました。登戸学寮の歴史もこれまで同様、一つ一つの働きがこの神の愛への信そして神の子であることの信のもとに遂行されている限りにおいて、先行者たちの献身は何らか生きて働いているのです。その一つの歴史に連なっているのです。そしてこの歴史は繋がっていきます。黒崎先生が「身を粉にして」（寮生による朗読劇感想）学寮建設に向かったその道に、多くの方々の細いしかし確かな道が合流したのでした。そしてこれからも。

クリスマス近きアドヴェントの日々、闇は濃くあり、「引き渡し」（パウロ）のもとに勝手にせよと放任された悪の数々の出現のなかで歴史が進んでおりますが、「残りの者たち」（イヤヤ）が地の塩、世の光として狭い確かな道を歩む歴史も続いています。その光の道を歩んでまいりましょう。

「わたしは葡萄の木、汝らは枝である。わたしのうちに留まる者は、わたしもまたその者のうちに留まる、そうしてこの者は多くの実を結ぶ。というのも、わたしを離れては、汝らは何も為しえないからである」（John. 15:5）。

「恐るるなかれ、われ汝と共にあり、驚くなかれ、われ汝の神なり、われ汝を強くせん。・汝はわが僕なり、われ汝を造れり。イスラエルよわれは汝を忘れじ。われ汝の咎とがを雲の如く消し、汝の罪を霧の如くに散らせり、汝われに帰れ、われ汝を贖いたればなり」（Is. 41:10, 44:21-23）。

寮生エッセイ

誰だつて愛されたい

青野 道

私はこの春から子どものショートステイ、トワイライトステイのアルバイトをしている。子どものショートステイというのは子育て短期利用事業というもので、保護者の病気や出産、育児疲れ、冠婚葬祭や出張、事故などにより家庭で一時的に子どもの育児が困難な場合に宿泊でお預かりするサービスで、トワイライトステイは夜十時までお預かりするサービスだ。私の仕事内容としては、夕方から入り、子どもの保育、食事介助、入浴介助、絵本の読み聞かせをして寝かしつけ、その日の子ども一人一人の様子を記録し、夜も子どもの様子を見つつ過ごし、朝になれば朝食作り、子どもを起こして幼稚園や保育園、小学校へ行く準備をし、ご飯を食べさせて送

り出し、平行して掃除に洗濯などをする、等が主なものとなる。

様々な理由から預けられるショートステイだが、保護者のレスパイトケアの役割は大変重要なものとなっているように感じる。レスパイトとは「休息」の意味を持ち、保護者が一時的に子どもと離れ休息をとることを意味する。保護者は常に家庭で子どもの様子を観察し、処置をして世話をしている。就寝時刻が夜中に及ぶこともしばしばあり、また就寝時刻が遅くなるだけではなく、夜中に目を覚まし子どもに必要な対応をすることもある。このような理由で万年寝不足状態であることを想像するのは難しくない。また現在の核家族化した日本の社会では母親一人で子育てをするような状況も少なくなく、さらにその状況で保育園に子どもの入所を受け入れてもらえない待機児童となった場合、朝から晩まで一日中子どもを一人で見なくてはいけないケースも出てくる。どんなに子どもが好きな親だったとしてもこのような状況は心身に大きな負担がかかることも少なくない。最悪の場合、子育ての

ストレスから虐待をしてしまう状況に繋がってきてしまうこともある。そんな状況を防ぐため、また保護するためにもショートステイのような施設が役割を担っているのだ。

私はずっと子どもの福祉に関心を持って生きてきた。シンブルに子どもが好きだということと、自分が行っていた保育園に大好きな保育士さんがいたことから、将来は子どもと関わりたい！と考えていた。ニュースで流れてくる子どもの悲しい事件を見るたびに、私に何ができるのだろうかと考え模索し続けてきた。目に見えない世間の常識の枠に子どもたちを押し込めない、ありのままの一人一人が受け入れられ認め合える。人を愛し、人のために生き、そして愛される。そんな子どもの居場所となるような空間を創りたいと考えてきた。そんなことを考えてきた私にこの施設で働くことでひとつの発見があった。それは子どもが幸せになるためには子どものお母さん、お父さんが幸せでなくてはならないということだ。子どもの居場所を創りたいと考えてきた私だが、そのお母さん、お父さんに焦点を向けたことがなかった。なぜ虐待

の様な悲しい事件が起きてしまうのかというと、先ほど述べたようにお母さん、お父さんが一人で子育てをしているからだという理由があげられる。そんなお母さんお父さんにこそ居場所が必要なのではないだろうか。昔の日本は大家族で、おばあちゃん、おじいちゃんも一緒に住んでいることが多かった。またご近所付き合いもあり、みんなで子育てをしていたと聞く。今よりもっと人と人の距離が近く、もっと助けを求めやすく、もっと支え合って生きていたのではないだろうか。

経済が発展するにつれ、核家族が進行して人と人の距離ができてしまった現代だが、一人一人がありのままを認め合えるそんな温かい居場所になる空間が、子どもに限らず親、大人にも必要だと考えるようになった。様々な人があふれるこの世界で一人一人が自分らしく生きるといふ表現活動をし、人と支え合って、認め合って生きていけるようなそんな愛のあふれる場所を創れるよう目指していきたい。

また、施設で出会う子どもたちは初めて会う子、久しぶりの子、定期的に来るおなじみさんがいる。ショートステイということもあって、その子ども一人一人と過ごす時間は短い子どもだと一晩だけだ。今与えられた子どもたちとのショートステイでの関りに感謝し、関われる限られた時間の中でその子自身にどう寄り添えるか考え過ぎていこうと思う。

私は「誰かを愛するため」そして「誰かに愛されるため」に人は生まれてくるのではないかと思う。子どもに限らず、人は一人では生きていくことはできないように造られた。誰もが愛を求めて生きていくと思う。好かれること。認められること。大事に思われること。ありのままの自分を受け入れられること。誰かを愛することはその人の人生を豊かにする。また、愛することだけではなく、愛されるために生まれてきたと言うのは、人は愛される存在だからだ。それを一番に教えてくれるのがキリスト教の神様、そしてイエス様だ。神様は私たち一人一人のことを愛してくださっていて、私たちは愛することを教えてもらう。生きていく中で悲しいこと苦し

いこともあるが、たくさんの人、そして神様に助けられて生きてきた。私も愛されていることに感謝し、また人を愛し、神様を愛して生きていきたい。

わたしの目にはあなたは価値高く、貴くわたしはあなたを愛しあなたの身代わりとして人を与え国々をあなたの魂の代わりとする。恐れるな、わたしはあなたと共にいる。(イザヤ書四十三章四節、五節)

伝えることの大切さ

石井 友菜

「動物実験は行うべきであるか。」これは今取り組んでいる英語の課題である。その課題では、thinkを使うのはあまりよくないと言われた。私は日本語で文章を書くとき、「思った」、「考えた」、のオンパレードになってしまう。悲しいことに、どちらもthinkで表せるのだ。語彙力の無さが顕著に表れて

しまう。(国語は苦手だったのです。というか数学も物理もダメでした。理系の恥ですね。)

そんなことはさておき、thinkを使わない理由について私を感じたことを書いていこうと思う。先生によると、主張ではthinkは弱いらしい。確かにテーマにはsoundが使われていた。主張ははっきりと言いきるのは私も重要なことだと思う。しかし、私たちは「くすべきだと考える」というように「考える」をつけがちではないか。すべきで終わっていた方がはっきりとするのに。

ここで、「考える」をつけがちなのが私だけだったらどうしようと思ったが、もう書いてしまったから続けよう。もし私が少数派だったときは、この人こんなことを考えているのだ。くらいに思って軽く流してほしい。

日本語では、はっきりとした言い方をしない。くした方がいいとか、くこっちの方がいいとか、断定することを避けるように思える。それには国民性が影響しているのかもしれない。日本人は「察する」ことを大事にしている一方で、英語圏の人は伝えることを大事にしていると私は感じる。中でも

京都の人は直接的な言い方なるべく避ける傾向がある。一つ例をあげよう。割烹料理屋で、香水やコロンの匂いをぶんぶんさせている野暮な客がいたとする。そんな時に店の人が、「ええ匂いさせてはりますなあ。どこの香水どす?」と言われることがある。これは「食べ物屋に来るときには、味だけではなくて香りを楽しんでいただきたいのだから、そんなキツイ香水をつけて来るのはやめてください」という意味である。これは、些細なことでもその場を共有するすべてのお客さんに心地よく過ごしてほしいという心遣いだ。日本では、心遣いから直接的に言わないということが多い。しかし、本当にそれは心遣いか。私は、心遣い自体は素晴らしいし、それが日本の良さあると思う。一方で、それが日本人の悪いところでもあるのではないか。私は言いたいことがあるなら言わないと解決しないのではと思う。

私は本当にうんざりするもの一つに陰口がある。自分の悪口を聞くのも嫌だが、誰かに聞かされるのもいい気分ではない。人に言うくらいなら本人に言えばいいのに。今まで何回「直接言いなよ」と思ったことか。実際に言ったこともあ

る。しかし、ただ伝えればいいというものでもない。その時の気持ちで衝動的に伝えるのはいかがなものかと私は考える。言い方には気を付ける必要がある。いい関係を築くためには、お互いに気持ちよく良く生活することを頭に片隅において気持ちを伝えることが重要だと私は思う。

字数が余ってしまった。どうしよう。近況でも書くことにしよう。

私の大学は年四回試験がある。落ちると再試験になり、それでも落ちると学年末試験になる。ちなみに、再試代は一科目三千円だ。この前は六科目あったので、もし全落ちしたら一万八千円も掛かったことになる。

これを書いている今は、試験一週間前である。試験勉強に集中したいところだが、そうはいかない。課題があるのだ。ここで問題、一番課題の多い教科はなんだろうか。正解は英語だ。私の専攻は英語ではないのだが。大学に入ってますます英語が嫌いになった。高校の時にもっと勉強していればと後悔している。最近課題が増え、英語に頭を悩ませている。

(英語が得意な方、助けてください。)

英語で臓器や骨の名前を答える試験がある。英語以前に、日本語名も知らないものを覚えなくてはならない。存在を知らなかったものもある。しかし、これらは覚えればいいのでましな方だ。一番大変なのは生理学、生化学の分野だ。まず、なにを言っているのかさっぱりわからない。理解が難しいのだ、これは。丸暗記でいくと痛い目にあう。

毎週木曜日は実習があるのだが、体力の無さを痛感する。本当は帰って勉強しなければいけないのに寝てしまう。なんとかしたい。高校の時は文化部だったし、高三の時はコロナもあって高校以外にはどこも行かず引きこもっていたので、体力はなくなる一方だった。ちなみに直近の実習の日の日程は、一時就寝、六時起床、スーツを着て七時出発、十九時帰宅。これも慣れないといけない。

実はこれでも高校の時よりは楽である。大学生になって少し余裕が生まれたとは思う。思っていたほど忙しくはないと友人に言ったら、高校のせいで感覚が麻痺していると言われた。そうかもしれない。しかし、暇なわけじゃない。一年生

です。でこんな感じなので、今後が本当に心配である。対面授業で部活もあつて大変な中、進級してバイトもこなし難しい内容の勉強・実習をされている先輩方を本当に尊敬する。

前半は伝えることの大切さについて、後半は近況について書いた。今読み返して、愚痴みたいになつていふことに気がついていた。一応大学生活に関することなのでお許しを。(大学生が書いたとは思えない、拙い文章になつてしまいました。ごめんなさい。)

サッチャー

五十川 大地

まず、サッチャーが政権を握る以前、イギリスにおいては国有化が大規模に始められ、それは多くの国の国有化に影響を与えてきた。このイギリスの国有化は第二次大戦後すぐに成立した法律によつてその枠組みが作られた。そして労働党

が国有化を推し進めようとし、保守党がそれに反対してきたのは事実であるけれども、戦後の国有化の実施にいたる過程を見ると名目上ほど対立していたわけではなかった。

すなわち、石炭・ガスに見られるように、当時これらの産業は困難な状況にあつたので、民営のままでは無理と言われていた。そのため、保守党は国有化にほとんど反対しなかつた。インベリアル・エアウェイズの場合も国家利害の観点からほとんど反対されなかつた。つまり、これらの国有化は、もちろん公共的利益の追求ということも目的とされていたのはあるが、困難に陥つた私企業の救済的な要素が強かつたのである。

例外は鉄鋼業であつた。これは当時利益の上がつている企業であり、産業全体に影響を与える戦略産業であつたから、その国有化は激しい抗争を巻き起こし、国有化、民営化、再国有化という変遷を遂げた。いずれにせよ、国有化に関しては政党間の相違は綱領で当然のこととされているより小さかつた。こうして、公共部門は次第に肥大化していき、国有企

業のみで1979年にはGDPの約10%を占め、150万人を雇用するようになっていた。これは西側世界の国では最大の比率の公共部門を保持していたことになる。

しかし、こうした多くの国有企業が効率性に欠け、従業員の福祉をも達成することに失敗しているという認識が一般の人々にあつた。また、これらの原因の多くが国有企業の活動に対する、絶えざる政治的干渉に帰せられるという一般認識も広くあつた。サッチャーが首相になる前のイギリスは、重要産業国有化と社会保障制度を中心とした福祉国家政策によつて、さらにオイルショックにより財政難が続いていて、不況だつた。

そこで、重要な人物は首相となつたサッチャーである。サッチャーは小さな政府という政策を実施する。小さな政府は、公共事業の削減と民営化により財政難から脱出する政策だつた。第二次世界大戦後から、国营化されていた石炭産業の民営化があり、炭鉱二十箇所を閉鎖する案が出た。それに反発し、ストライキを起こす。世間的には弱い立場である同性愛

者の人たちと炭鉱夫の人たちが協力しあつて、自分らの立場を明確にしよつとしていて、この運動こそが社会的に生まれつき弱い立場にある弱い者の状況を自己の責任だと決めつけような自由主義に対する反発を表している。同性愛者ではない人たちの結婚は十六歳で可能であるにもかかわらず、同性愛者である人たちは二一歳にならないと結婚することができない。ここから考えられることは、その国の社会全体が同性愛者に対して差別的な考え方をしていることがわかる。裕福な家庭で育てられたブロムリーは同性愛者の一人である。

彼はデモに参加し、サッチャーの考えに反対し、炭鉱夫の支援をしている。しかし、彼の性格上、周りの人の目を気にして同性愛者であることを周りに知られるのが恥ずかしくて堂々と自分が同性愛者であることをさらけ出すことができない。サッチャーへの対抗心、新自由主義への対抗心は、同性愛者と炭鉱夫が仲良くなるにつれて次第に大きくなつていった。そして、このようにブロムリーは炭鉱夫たちとの関わりを通して自分が同性愛者であることを堂々と言えるまでに成長していった。また、同性愛者と炭鉱夫の支援団体の人は世

界の同性愛者の代表とし街の人たちは同性愛者である人を受け入れる人もいれば受け入れられない人もいる。また、受け

入れることで周りからどう思われるかが心配という人もいる。これが同性愛者に対する世間全体の捉え方を表している。今の時代は同性愛者である人はたくさんいて、同性愛者の人たちとも良好な人間関係を築くためにもどのように接すれば良いのかを正しく考えることができた。

この時代は同性愛者である人はたくさんいて、同性愛者の人たちとも良好な人間関係を築くためにもどのように接すれば良いのかを正しく考えることができた。

参考文献

浜矩子『最新』E『経済入門』日本評論社、1995年。

Ritsumei.ac.jp・内田勝敏、清水貞俊『EC経済論』ミネルヴ

ア書房、1993年。相沢幸悦『EC通貨統合の展望』同文館、

1992年。岸上慎太郎、藤原豊司『1992年・EC読本』東洋

経済新報社、1992年。

数学と音楽のルーティン

伊藤 直道

大学で数学を学んでいるが、数学専攻の人との関わりが始まったのは今年からだ。出身の高校も今の大学も全体的に文系の人が多い。もちろん、それは悪いことではない。私も仲の良い友人はほとんど文系の人である。私の大学では、一年生は基本的に教養科目しか学ぶことができない。二年目は微分積分学や線形代数と呼ばれる比較的容易な大学数学（と先生は言うが、この時点で結構難しいと思った）や数学科の教職科目などがあった。しかしそれらは全面的にオンライン授業であり、私は大学どころか寮にさえいなかった。だから、大学三年生と結構遅いタイミンクになったわけである。

大学数学は想像していたよりずっと難しいものだった。ただそれは私に限らず、多くの学生がそう思っていたようだ。別に当ててほしいわけではないが、特に、オンラインで学生に当てない授業では、自分が全く理解できなくとも他の学生は理解できているのか、自分だけわかっていないのではないか

と不安になる。確かに、誰かと比べてしまうのはあまり良いことではない。いくら数学を学んでいるからと言って数字だけにこだわるべきではない。そもそも数学で学ぶのは数字ではなく数である。しかし、現実的に成績をあげなければならぬ状況ではある。

学生であれば数学に限らず、文系の学者も含め、理解できないことを語る人がいることは規則正しい生活をしていればある程度納得できるだろう。あるチューバーが「大学の先生は研究のプロであって、教育のプロではない。自分たちが教育のプロになる」と語っていた。

ところで、数学専攻の学生との関わりでふと考えることがある。数学は答えが一つで客観的であるため、評価基準は極めて容易であり、簡単に優劣がつく。私はそれほど優秀ではない。そのため、自分は何なのかとふと思ったりもする。特に理系分野では自分らしくやることができなため日常生活でそれを補う必要がある。

数学は論理的なところが魅力である。論理的というのは、公式を丸暗記していて数学に興味を持つ人はなかなかいない

のではないだろうか。魔法のようにどっからともなく数式が出てくるような教育は数学的ではないと思う。実際、文系の人からも証明は面白かったという話を聞いている。

数学の話はこの辺にしておいて、他に学校生活でやっていることと言えば、オーケストラに属していることである。私はコントラバスという楽器を担当している。コントラバスという楽器をご存じだろうか？もし、バイオリンをご存じなら、普通の人より大きい楽器でバイオリンみたいな形のもがあればそれがコントラバスである。私はこの楽器に関してほぼ初心者である。オーケストラは以前、音楽を専門とする学生とそうでない学生の比率が半々であったが、昨年からキャンパス移転があり、音楽を専門とする学生の比率が多くなった。前述のように私は音楽を専門とする学生ではないため、もともと参加が難しい状況にあった。それに加え、今年をご存じのように大学のある東京都は十月に入るまで緊急事態宣言下であり、部活動自体がなかった。解除されて一か月になるが、未だ再開のめどが立っていない。これまで解除されてから数週間で活動は再開され、重点措置の下でも普通に行われてい

だが、緊急事態に入れば中止という形で、四月と六、七月にそれぞれ数週間した程度だった。そう考えると再開が遅れている原因にコロナ以外のことも何らか含まれているのだろうが幹部でないため詳しくは分からない。とはいえ、去年は一回も参加できなかったためそれに比べればまだいい方だった。エレキベースは持っているため当分はそれで代用していきたい。コントラバスを買わないかと聞かれることもあるがそれは経済面の問題に加え、場所をとる問題もある。そもそも、エレキベースで十分満足している。オーケストラは基本クラシックだから、オーケストラの練習には合わないかもしれない。しかし、オーケストラの練習だけでなく、「J-Pop」はじめ自分の好きな曲を弾くこともあるためエレキベースでもいいと思う。エレキベースは五線譜だけでなくタブ譜でもできるが、コントラバスも行うため、五線譜の楽譜でやりたい。また、ト音記号は読めないため、へ音記号の楽譜でないと困る。音楽をする人はだいたいト音記号が読め、低音楽器や鍵盤楽器をする人はへ音記号も読めるといのが一般的で私のようにへ音記号しか読めない人はあまりいないらしい。これをお

読みになっていてる方でへ音記号しか読めない方はいらっしやるだろうか？

弦楽器は基本、調弦をするが、ペグを時計回りに回すと音が低くなり、反時計回りに回すと音が高くなる。ペグを回すことにより音程が変わる。これはペグを回すことで波長を長くしたり短くしたりして波長を合わせている。音波は三角関数によって成り立っているわけだから、数学と音楽には関係がある。シルベスターという十九世紀イギリスの数学者が、「音楽は感覚の数学であり、数学は理性の音楽である。」と言っている。世の中には音楽は好きだが、数学は好きでないという人もいるし、その逆の人もいる。私は数学に疲れたら楽器を弾いたり音楽を聴いたりしている。音楽に飽きたら、数学の学びに戻る。もちろん、数学以外の教職科目の課題もするし、音楽以外の趣味として、散歩やゲームもするが、数学と音楽のローテーションがうまくいっている感じがする。

人生無敵モード突入

岩田 光法

私は数年前から催事の設営をアルバイトとして行ってきた。数年も続けていけば人員の確保や初めて現場に来た者の指示を任せられる事もしばしばである。そんな中にも、二度と呼びたくないと思えるような者も存在していた。そいつはその日が初めての現場であった。私もそれを理解した上でそいつに指示をしていた。まず始めに会場に散りばめられた机を一箇所にまとめる為私はそいつと他のバイトに「この辺にこの机を集めて欲しい」と指示をした。各々会場に散らばり机を集めてくる。私も一緒に机を集めて回っていた。二つ目の机を収集箇所に運んだ時、私はそいつに目が止まった。おそらく自身が運んできたであろう机の上に腰掛けていた。その時は一瞬であったが特に気になる事は無かった。しかしながら、三つ目の机を運んだところで確信に変わった。そいつは、先程と同じ場所に腰掛けていた。そうサボっていたのだ。だがそいつは今日が初めての現場、何か困った事でもあったのだ

ろうかと思ひ私は声をかけた。するとそいつは「机運びました。」と答えた。周りのバイトは次から次へと机を集めてくる。どうやらそいつは机を一つ運んで次の指示を待っていたようだ。私にはそいつの思考が理解できない。私の指示の仕方が悪かったのだろうか？確かに机の台数の指定していなかったが他のバイトは私の指示を理解し机を二台、三台と集めてくる。どうやらそいつは一を言ってもその半分もこなせない、終いには仕事を終わらせた気になり周りの目も気にせず休憩をするといった奴であった。現場は決められた時間までに決められた仕事をこなす必要があり、一つ一つ手取り足取り奴に教えていられるほど余裕はない。かと言って放置していても周りからサボっている様にはか見えず現場全体の雰囲気が悪くなっていく。正直今すぐにバイト代を払って帰ってもらった方が現場にとってメリットになるとさえ感じた。私にその権利があれば間違いなくそうしていただろう。ここまでは奴と私とのとんでもエピソードである。

なぜ私がこのような話をしているかというと何となしに察する人も多いかと思うが奴ほどに重症な者はそうそういないが

それに近い者は多くいるという事だ。そういった人間が増えてきているのかはたまた元から沢山いて私が気付いていなかっただけなのか。少なくとも私の周りにはこの一、二年で増えたと感じる。

私が今回、問題とするのは仕事のできない者ではなく、周りの雰囲気を読めない者が増えてきたという事についてだ。まさに現在、周りの雰囲気を感じ取り行動する力がない若者が多い、今と昔では育ってきた環境や教育が異なっている。それ故の事象であるのだろう。我が学寮の設立趣旨にはこう記載がなされている。「キリスト教信仰の基礎に立ち、健全な判断力と確固たる責任感を持つ人材を育成して、これを世に送り出す。」この設立趣旨にある健全な判断力という物があればこうした雰囲気を読めない者は出てこないであろう。ここで再び問題に立ち返るが果たしてこの学寮は、健全な判断力を育成できているのだろうか。もし出来ているのであれば、掃除の時間中まだ掃除をしている人の目の前で何食わぬ顔で自身の掃除箇所が終わったからと飯を食い始めるといった行動は見られない事だろう。この寮にただ住むだけで健全な判

断力が育成されるのであればとても素晴らしいことだと感じる。

私にとつて周りの雰囲気を読み取り行動する事は仕事の出来る出来ないよりずっと大事な事と考えている。想像してみたい。仕事は出来るが雰囲気が読めない者と仕事の出来があまりよくないが雰囲気の読める者、どちらが上司から気に入られるのか、はたまた出世がし易いのか。これから雰囲気を読めない者が増えていき、読める者が減っていく。私にとつてはライバルが減り、自身の株が上がる良き未来が待っている事だろう。

置かれた場所で咲きなさい

大城 あい

この四月から私は、生まれ故郷を離れてこの地での生活を始めた。十八年間過ごした沖繩を離れ、東京の大学に進学することへの不安や恐怖は思ったより大きなものだった。

多くの出会いの中でも、私は一人の寮生との出会いが印象に残っている。その子は私と同じ一年生で、私が入寮した二日後に入寮した。初めて会ったのは確か朝拝の時だった。すぐに意気投合し、仲良くなった。お互いの地元の話、学校の話、部活の話、家族の話。一つ一つが新鮮で、その子とは初めて会ったのに初めましての感覚がなく、素のまま話すことができた。入寮してその子とお互いに一番言っていたのが、「この寮を選んで良かった!」ということだ。個性豊かでない人があるこの寮は本当に楽しい。

この寮の先輩方は皆、すごく優しく私たちを迎え入れてくれた。毎日、誰かと一緒に夕食を食べることができ、みんな卓球をしたりゲームをしたり。大学生活よりも断然寮生活が楽しいと思うこともある。寮生は皆それぞれ個性があり、変わった人というかおもしろい人というか、素敵な人たちである。私は特に先輩方と話すのが好きだ。たとえ生まれたのが数か月、一年早いだけだとしても、私からすると先輩方の

これまでの経験はすごく大きいものに感じる。だから私は、いろんな先輩方からいろんな話を聞くことが好きだ。自分がこれまで感じたことのない感覚や、経験談を聞くことはとても面白い。十人十色な考えに触れることができる環境は自身への刺激にもなる。聖書について何時間も教えてくださったり、好きなものや考え方がおそろしく合う人に出会えたり、自分だったら絶対考ええないようなことを考える人がいたり。そんな人たちとの出会いは、今の私がこの地で生きていく上で欠かせない存在となっている。

遅くなってしまったが、ここで今回の私の方舟のタイトルについて触れたい。この言葉は、渡辺和子さんというカトリックの修道女の方の著書のタイトルである。私は高校二年生の時にこの本に出会った。私は高校時代、部活一筋だった。高校三年間部長を務めていたのだが、この時期が一番辛く、人間不信になってしまっただけでその時の辛さや苦しみを誰にも話すことができなかった。今考えると何であんなに苦しんでいたか思い出せないくらい些細なことでも悩んでいたなど感じる

が、私の性格やプライド的に、多少不格好で周りに嫌われる覚悟を持ってでも自分がやりたいことをしたい!と考えていたため、思い悩んでいたのだと思う。部長という役割に課される責任やプレッシャーに対して嫌気がさすことが多かったが、やりがいを感じていたし、部長になったからには自分には自分しかできないことを全うしようと最初の頃から決めていた。

そんな苦しい時期に私を支えたのが、読書だった。私自身本を読むことは正直好きでも嫌いでもない。この時に読んでいたのは、自己啓発本や名言集、あらゆる業界で活躍している人のリーダー論などでそれらを読んで気になった箇所や印象的な箇所をノートにまとめ見返すことが好きだった。その中でも一番好きだったのがこの本だった。

Bloom where God has planted you. (神が植えたところ咲きなさい)

ここでの「咲く」は仕方がないと諦めることではなく、笑顔で生き、周囲の人々をも幸せにすることである。置かれたところこそが、今のあなたの居場所である。どんなところ

置かれても、そこで環境の主人となり自分の花を咲かせることが大切であるという言葉に私は感銘を受けた。この言葉と出会ってから、私は一生この言葉と一緒に生きたいと思うようになった。結果、高校三年間全力で過ごした部活動生活のおかげで今の大学に入って、大好きな音楽を続けられているため、この本と出会えたことに感謝している。

最近もこの言葉に助けられたことがあった。私は今年の夏に父を亡くした。四月に上京して以来会うことはなく、初めての帰省が父とお別れの帰省となった。今でも実感はないし、いつまでたっても実感したくない。母から父が亡くなったという連絡を聞いてすぐに帰省し、二週間ほど沖縄にいた。体感はいきなりで、家族と過ごしたあの時間はすごく特別だった。いきなりの事だったので本当に実感がなく、東京に帰る日まで目の前の事実にはちゃんと向き合えなかった。というか向き合いたくなかった。でも寮に帰ってくるとあまりの悲しさで寂しさを泣いていた。寂しさや孤独感だけでなく、家族が大変な思いをしているのに自分はここにいいのか、実

家で家族と一緒にいないでいいのか、一人だけこんなにお金がかかる暮らしをしていていいのかといった色んな事を考えた。ずっと沖繩にいたかった。一人で我慢できなくなつて泣きながら祖母に電話を掛けた。話そうとしても涙が止まらなくて上手く話せなかったが、祖母はゆっくり優しく私に言葉をかけてくれた。その中でも、「責任を感じずこれまで通りで充分。置かれた場所で咲けばいいのよ。」という言葉はすごく心強かった。悲しさで誰とも何もしたくない虚無感と喪失感でいっぱいだった私だったが、ゆっくり自分のペースで今自分が置かれたこの場所で頑張ればいいんだと知り、家族とは離れているが、今自分がこの場所で自分のやりたいことや頑張りたいことに一生懸命になることが今自分ができる一番だと知ることができた。

上京し大学生になり寮生活を始めて半年。新しい環境で新しい出会いがある中で、大好きな人との別れもあった。まだまだこれからの人生には苦しいことや辛いこと、もちろん楽しいことや嬉しいことも沢山ある。どんな時でも、どこに行

つても私は置かれた場所で一生咲き続けていたい。

お父さん、その花で作ったでっかい花束いつかプレゼントできるように頑張るね。

平和とリアリズム

檀 潤 陸 人

皆さんは、国際政治について何か一度でも考えたことはあるだろうか。私は国際政治に関して大いに興味を有している。

私は国際政治を動かしている原理を紐解くことで、日本国内外における平和の維持を希求している。それを成し得るためには、理想主義 (Idealism) に基づいた行動ではなく、現実主義 (Realism) に基づいた行動をとらなくてはならない。則ち現実主義に基づいて国際政治の原理を紐解くために国際関係の歴史を紐解いていこうと思う。

国際政治には、「国家を一つの生命体と考え、その生き残り

をかけた縄張り争いである。」という考え方があつた。そして、国家とは地球の一定の場所に領土を持つてゐるが故に、その縄張り争いに地理を活用しようという考え方を地政学という。

国家も民族も宗教も人間という生物の集合体である。その基本的原理は生存競争であり、生命を維持するためにも食べ物確保し、その邪魔になり得る他者を敵視し、排除することとは言うまでもない。則ち利益のためなら味方にしたたり敵対したり、関係を作つたり絶縁したりとためらうことはないのである。これを端的に言い表した言葉を紹介したい。「永遠の友も永遠の敵もない。あるのは永遠の利益のみ。」である。ウイクトリア時代に英国首相を務めたパーマストン子爵三世のヘンリー・ジョン・テンブルによる言葉で、英国の外交を主導した人物による発言であるだけに説得力が伴つてゐるのではないだろうか。

前述の国際政治に関する基本を踏まえて日本の外交に本格的に応用していききたい。日本は、大陸国家か海洋国家どちらの側にあるべきか、と問われたら後者の側にあるべきであると私は断言する。

日本は南北に連なる島国である。大陸を対岸に見据えた島国である。イギリスとヨーロッパ諸国の関係性から分かる通り、対岸にある国々は対立する運命にあるのである。加えて、近い国同士もまた対立する運命にある。則ちこれらを一言で遠交近攻という。

日本を今尚占拠し続けている、即ち日本の宗主国となつてゐるがアメリカである。アメリカにとつて日本列島は太平洋覇権、ひいては世界覇権における重要拠点である。北海道から沖縄や尖閣を領有し、中国を東シナ海へ封じ込め、アメリカが直ぐ側まで迫つてゐるといふ脅威を中国に与えてゐるため、中国の仮想敵国として満点である。

日本のためにもアメリカのためにもかなり重要な拠点、それは台湾である。東シナ海、南シナ海更にインド洋へとつながるための出入り口であるバシー海峡を抑えられるからである。日本にとつては、その航路 (sea lane) を通じて石油を輸入しているが故に、台湾の平和に苦勞してゐるのである。

しかし、ここ二十年程で脅威が増大した。それは中国である。中国にとつて日本を味方に (ひれ伏させ) したければ、

かなり容易で、台湾を統一するだけでかなり目標に近づくのである。

台湾を中国が統一（獲得）するだけで、中国共産党にとつて様々な利益をもたらすのである。

先ず一つ目に、中国共産党政権が長年公約に掲げていた中華の統一を実現できるためである。これを実現すれば、「毛沢東にも成し得なかつた中華統一を実現した」として支持率も爆上がりし、代替わりした後も教科書に載ることを期待しているからである。

二つ目に内政や政権に対する不満を外に逃がすためである。飢饉、洪水、貧富の格差、少子化などの問題が山積みになっている中国にとって、共産党に対する不満を外へ逸らすまたとない絶好の機会なのである。

三つ目に、日本のシーレーンを押さえて日本を味方にする（ひれ伏させる）ことができるためである。日本国内で一日に消費される石油の量はどれくらいあるかというと、石油タンカー二隻分である。毎日少なくとも二隻はパシー海峡を通過しているということになる。パシー海峡の北側に台湾があ

り、台湾を押さえることで、パシー海峡へ影響力を与えることが出来、占拠した台湾からミサイルを撃つたり、軍艦を差し向けて撃沈させたりと通商破壊をすることが出来る。通商破壊を行うまでもなく、通商破壊することを表明するだけでも有効な対日制裁になるのである。石油が輸入することが出来なくなつた日本は何とか調達しようと中国にひれ伏し、その結果、よくて中国の経済植民地、下手したら、チベットやウイグルの様な中国の自治区に成り下がる以外に道が断たれてしまうのではないだろうか。

まとめると、理想主義ではなく、現実主義に基づいた視点を共有したいということである。「日本国憲法九条によって平和がもたらされた。」という護憲主義とか「中国含めアジア人は皆同じである。だから結束しなければならぬ。」という大アジア主義はいずれも理想主義という点において同レベルなのである。

その様な理想主義によって、日本の運命は振り回されるのみで何ら利益をもたらしていないのである。

中国企業から献金を受けている者、中国で稼いでいる日本

企業からの献金を受け取っている者、戦前の大アジア主義者の流れを汲む者にとって、中国は魅力的に映るだろう。そのような人々は既に国政に進出している。親米英派の者たちとせめぎ合いを起している。米英側と大陸側のどちらが日本にとって国益となるのかを日々考え続けなければならぬのではないだろうか。

皆の日本の国益に関する活発な議論が繰り広げられることを期待して、今回の私の紹介を締めようと思う。

私の危機管理学的考え

川口 陽久

(1) メディアリテラシーに関する小論文

現在世界中では SNS が頻繁に使用されており、もはや利用してない人はいないといっても過言ではないほど普及している。世界中に情報を気軽に発信できるようになり、表現の多様性が広がってきた。しかしその表現の自由度が急激に高まりすぎたあまりに、SNS 内での発言を巡ってのトラブルがあ

らゆるジャンルで見受けられているのが現状である。

私はこのような近年多くみられる SNS 上でのトラブルは、現代の人々が SNS 上での影響力を把握せず、リスクリテラシーを意識しないで乱用していることに問題があると推測する。以下で私は、ネット上での炎上と誹謗中傷の二点を踏まえて、ネット社会でのリスクマネジメントについて分析していきたい。

まず、ネット上での不適切発言により炎上してしまった例について注目してみよう。先月、ゲーム会社『SEGA』の取締役である名越稔洋氏が、自社のゲームに関する動画配信内で、『ぶよぶよ』の公式大会に出場した学生に対して、「チーズ牛丼食ってそう」と発言し、ゲームファンからを中心として炎上した。自社のゲームを熱心に遊んでくれているファンに対して侮辱的な発言をしたとして、twitter でトレンド入りするほどの大問題となった。後日この発言に関して SEGA 側は謝罪文を発表し、問題となった動画の発言箇所は削除された。

一見「チーズ牛丼」（通称：チーズ）という言葉には何も問題がないように思えるかもしれない。しかし最近では、ある

自粛ムードへのストレスに関係するのではないかと推定した。コロナ離婚や自粛警察といった言葉が騒がれている現状と同様に、昨今では、コロナ禍によるやり場のないストレスを、

他人へとぶつける傾向があるのではないだろうか。さらに言えば以前から存在していた他人へとストレスをぶつけるという現代人の習性がコロナによってより顕著になったといえる。

このようなネット上での誹謗中傷による事件は、互いの表情等が見えないために、相手がどのような心理状態なのかわかりづらく、歯止めが利かないまま攻撃され続けることが原因である。そのため発信者は、自分の発言がどれほど攻撃性のあるものなのか理解することができないのである。

以上から、現在人々は、ネット上での発言がどれほど影響力を持つのか理解できていないことが伺える。表現の自由は一部奪われてしまうかもしれないが、SNSを使う上である程度の法的なルールを作らないと、ネット上でも現実世界でもセーフティが保たれない時代となってしまう。学校やメディアなどを通して、一人ひとりの発言によって、だれにどのような影響を及ぼしてしまうのリスクコミュニケーション

を図る場を作るべきである。そして、自分の発言に責任を取る態度を当たり前にしなくてはならない。

(2) 福田充 編二〇一三『大震災とメディア』東日本大

震災の教訓』の評論

私は「大震災とメディア」東日本大震災の教訓」を読んだ中で、震災時における放送メディアの見方について注目した。テレビなど普段から目にするメディアももちろん災害時にも情報手段として用いられる。二〇一一年に福田満研究室で行った震災後のメディア接触に関する調査では、テレビが圧倒的に長く見られていることがわかる。しかし、その災害時だからこそ起こるメディアによる弊害も存在することを、著書を通じて発見した。以下で私は、震災時における放送メディアがもたらすメリットとデメリットの二点を挙げて論じていきたい。

まず、災害時におけるメディアがもたらすメリットから考えていきたい。上記の調査にでているように、震災時に多くの人々がテレビやラジオなどの放送メディアに依存している。

だからこそ大震災時においてその放送メディアが果たす役割は大きいものである。福田充研究室の調査によると、56.0%もの人々がテレビを通じて災害時の情報を得ていた。

しかし私は、東日本大震災発生当時、スマートフォンやSNSといったものがすでに普及しており、そうしたネットメディアによって情報を手に入れた人々は少数なのかと疑問に思った。だが、著書によると、輻輳回避のための当時通信規制により電話やメールが通じにくくなったため、インターネットの利用が低くなったためと考えられる。このような非常時の通信面では、放送メディアのほうが優れていると考えられる。

次は逆に、このような放送メディアの特徴がもたらすデメリットについて考察していきたい。確かに放送メディアは全国に情報を迅速に伝えられる重要な役割を果たすことができるが、その情報によって視聴者に必要以上に不安を煽ってしまいう危険性もある。

福田充研究室の調査によると、震災後のテレビ報道に対する評価について、テレビを見たくなったと答えた人が88.9%発生していることが分かった。ニュースを制作している側は

災害の様子を実態以上に大きく誇張しようとするセンサー・ヨナリズムに陥ってしまい、それにより視聴者に不安や恐怖をいたずらに高める悪影響を引き起こした。

また報道記者が災害を報道することに一方的になってしまい、現場の災害対策の邪魔になってしまうことがある。被災者の助けを求める声が記者のヘリコプターの音でかき消されてしまったせいで救出に支障が出たというケースもある。さらに、心身共に疲労している被災者に対して一方的に取材を行おうとし、亡くなった方への無許可での実名報道をしようとしたりなどをして、近年ネットでは「マスゴミ」と揶揄されることもある。

以上の放送メディアの特徴を踏まえて、私はテレビ等の手段を用いて情報を得ることも重要だが、あまり依存しすぎはいけないと考える。私は小学生の頃、ネットの情報はデマが多いが、テレビの報道は正確であると教わった記憶がある。だが私は最近、この知識は本当に正しいのか疑問に感じる。確かに今でもネット上ではデマやフェイクニュースが多く存在する。しかしテレビの情報をすべて鵜呑みにしていいとも

思わない。報道記者側も人間なので、数字をとるために多少話が盛られていることもあるだろう。たとえ事実を報道祖していたとしても、報道記者側の思想に偏ってしまい、自分の問題に対する考えを捻じ曲げられる可能性がある。このようにテレビの意見をすべて信じこんでしまっていれば、まるでメディアは宗教のようなものではないだろうか。私たちはニュースを見るときは、事実と意見を切り分けてから飲み込む必要があると考える。

参考文献 福田充 編(二〇一一)『大震災とメディア―東日本大震災の教訓』

後記

金 道殷

はじめに

文を書いたり、話をしたりするたびに感じることであるが、あまりにも難しいということだ。しかも苦しい。自分の馬鹿

らしさに事新しく気づくようになるからであろうか。そもそも頭に入っているものもないし、典型的な意思伝達というものあまりしたことがないので、できないのが当然なことだと言われるかもしれない。できるようになりたいという必要はそれほど感じていないが、馬鹿であることがばれないようにはしたいので、なるべく口をつぐんで生きている。

自分の馬鹿らしさに気づき、それを自分だけが知っていたられるものであればまだマシなことであっただろう。しかしこの様に、方舟を通して馬鹿であることが強制的に公表される状況が与えられると何倍も苦しくなるので辛いわけだ。どうせこれを読む人も別にいないはずだろうし、上手に書かれてあろうが下手に書かれてあろうがそれを気にする人もいないはずなのになぜにそんなもの気にするのかと問われたら言えるものはない。

自分がいまだに子供のような思考から脱却できていないという反証の一つであろう。しかし、自分も他の人が何をした

って全くと言えるほど気にすることはなく、反対も良く成立することをあまりにもよくわかっていながら、それでも気になることがあるということ、あなたも知っているはずだと思う。そのように理解してもらいたい。

一方、馬鹿が馬鹿にみえるのがいったいどうだと言うのか、あたりまえのことだ、馬鹿でありながら、馬鹿ではないふりをするところこそが馬鹿なことだ。という思いもした。そう考えると心が安らぐかのようだったが、馬鹿が馬鹿なことを自分が見えるのも知らずに騒ぐ姿がいかに醜いものであったかに考えが届くと、やはりやっつてはいけないことだと考えるようになった。それはそれが、なぜなのかそれを見ている側の方が恥ずかしくなるもので、見るだけで気持ちが悪くなるものであることをわかっていいるからだ。

そういう練習のための方舟でもあるという論理が出てくるかもしれない。だったら練習したい希望者を募集して編纂するべきだ。希望者に限ると出品が少なくなることを想定した

仕打ちでもあるとは思いますが、とにかくにも、相当暴力的な処置であるとしたか考えられない。そして、自分の考えすら伝えられないのか、大学の4年間何を学んだというのか、お金と心配を降り注いだお前の親が哀れだ、という叱責を受けるようになるかもしれない。そう、まさにその通り、私は情けなく、私の親は哀れだ。

これが何番目の原稿なのかわからないほど打ち返した。まともな文を書くにはどうにも私の能力も資格も足りないようだ。まともな文の基準とは何なのかはともかく、気に入るものがなかった。整理されておらず、粗末なものでいっぱいになっている倉庫をほじくり返すような感じがした。その中からもつもらしいものをいくつかを取り出して、それを練って出そうかともしてみたが、それも気に入らなかった。いやそうしたくはなかった。そうするなら書かない方が良いと思った。

あることを考えているとすぐ他の考えが浮かんでくる。そ

れらがまた混ざり合って潰れたり、飛んで消えたりする。そのような過程を繰り返していたら、頭がはちきれそうで、なんらかの拷問を受けている感じがした。それでただ気楽に、思いつくままに書いてみることにした。すると、食傷すると思っ書かないことにしようとしていた寮を去る人の後記になっちゃった。

寮について

寮に対しては、空世辞言うのではなく、本当に、心から感謝を伝えておきたい。一生忘れられないと思う。最初、ビザすら持っていなかった私を快く受け入れて下さったことを始めとして、留学生に対しての破格的な支援、嘘みたいな幻想的な立地条件、自分の好みにびったりな周辺の風景、寮長と管理の方々の大変な苦勞・献身、またそれからならなかった快適な施設、その施設の重なる改善と維持、立派な献立、何より驚いたのは、キリスト教の墓・福音の不毛の地の中の不毛の地と考えていた日本の中の聖殿・単語通りの方舟であること、朝拝、主日礼拝、とんでもない水準の聖書講解などなど。他

の人にはどう考えられているかはわからないが、少なくとも私にとっては存在そのものが奇跡と捉えられているわけだ。これを奇跡と呼べないものなら、どのようなことを奇跡と呼べるべきであろうか。考えるほど神様が私のために準備してくださったものだとか考えられないようになる。無論、私だけのためではなく、みんなのために建てられているものであることは承知しているのだが。とにかく、このように書くことしたら果てがなさそうになるという気がしたのでここでもう切ろうと思う。登戸学寮がなかったら再起することは100%不可能なはずだったと思っっている。言葉で表現できないのが悔しいほど神様にも寮にも常に感謝の気持ちを感じてきた。

実は感謝よりは謝罪の方を伝えたい。よく振る舞ったとしても足りなかったところだったはずだが、卒寮が近くなってきた今まで迷惑ばかりかけてきた。礼拝や各種の活動の不参加などをはじめとして、食器搬出、長時間シャワー、当番活動の遂行延期、寮の方々に対して無礼に振る舞っている

こと、他に自分が気づかずに行った迷惑な行為などなどについてこの場を持って謝りたい。稚氣からなった未熟さのことだと理解を得て、許していただいたら幸いだ。決して本意ではなかったと言いたい。話にならない私的な言い訳だとは思うのだが、一応言い訳をしようとするの色々と疲れていたというのを挙げたいのだが。実は言えることなどない。申し訳ない。おそらく寮生のみなさんはこれから日本で、キリスト教の信者をあまり見ることがないだろうということを考えてると悪い見本をお見せしたことになっていると思うのでそれに責任を感じ、神様にも面目ない。

学校について

次は学校についてだ。率直のところを言うと面白くなかった。学部 の過程から学問的に得たものは事実上皆無である。でもゼミや卒業研究はけっこう勉強になった。今までやってきた勉強は、知っておくべきもの、何となく必要なものなどが向こうから提示されてきて、それらに対する答え合わせをするものであったとすれば、卒業研究は知りたいものを自ら

定めて、それをより深く知るために知る必要がある様々なものを自ら調べて熟知し、自ら考えてみるというある意味では真の意味での勉強であったと思う。

今までは受動的な勉強をやってきたのだが、研究室に入ってから能動的な勉強をする経験ができたとも言えるのである。前者は後者のための基本材料の稼ぎだったとも言えるだろう。今やコウモリを卒論のテーマとしているのだが、コウモリ自体には興味を持っていない。対象が何であったって構わなかったはずだ。何かについて考えていく過程自体、それを習っていくということに価値を置いて臨んでいる。

勉強とはこういう風にするものだということを正規課程からわかっていていたらという思いがある。今にでもわかって良かったと思うのだが。それでも、もう少し早く知れたらという思いがどうもぬぐえない。わかっていたって変わることはなかったかもしれない。研究の過程は、学問にだけではない、これから直面するはずのあらゆることに対して使える姿

勢ともなると思う。

それ以外には、ある程度は自ら起きてやるべきことをするようになったこと、自己管理が少しはできるようになったこと、知ってみれば大したものなどなんてないということがわかったことなどが得たものとして挙げられる。大学で得たものの中では、ほんの少しではあるが自ら何かするようになったというのを一番大きいものとして考えている。

信仰について

最後には自分の信仰の話をして終わらせようと思う。留学生活を振り返ってみると、数多い訓練の連続だったと考えている。これから生きていく上に必要となる基本的な生活習慣や姿勢などの獲得に対する訓練。上記した寮と大学生活の内容がこれに関する説明となると思う。両方とも人らしく生きる方法を身につけさせるように準備してくださいったものだと考えている。

次には、驕慢に対する訓練。留学生活の間、教え切れないほど、いや全ての事件に対してとも言えるほど、様々な方面で挫折を経験した。自分が偉くてもしくは自分の力だけで何かやれたと、自分の力だけで何かやれると、自分が何かを分かっている、自分は清いと、自分は他のものとは違うとなどで、みずから驕るその都度、即時悪い状況が迫ってきた。どんな環境であれ、どんな人であれ、どんな結果であれ、物事は神様から送られてくるものであることを、見当違いのところではなく、相談や感謝、恐れの対象を人間にするのではなく、まず天の父を恐れ、天の父に尋ねたり、感謝を捧げたりすべきであることを教えるための訓練であったと思う。

苦難と言うにも恥ずかしいほど些少な事らばかりだったと思うのだが、でもそれなりの苦難を経験するうちに、神様の手とそのなだめを感じる事ができたり、イエスの苦難の意味、痛みや孤独などを少しではあるが感じたり理解したりすることができたと思う。他には、外であろうが内であろうが自分の全てがみられていること、私の意図をあまりにも残忍

に貫けるその視線、私のことを理解することのできる・私の話を聞くことができる唯一の存在であること、摂理など。全部書けることができないほど、実に様々なことを直接感じる事ができたと思う。

訓練を受けたと言うには言ったが、まだまだ足りなさすぎているということをよくわかっている。自分の正体は自分が知るものだから。でも、昔よりはずっと良くなったことも事実ではある。それを希望として、少しずつでも変わっていかると、そういう希望を持って生きていくつもりだ。訓練からの教訓を基盤とし、畏れをいただき、祈りながら生きていこうと思う。

おわりに

部屋の窓越しに見える栴形山の風景がとても好きだった。閑寂でこまやかな情趣のあるまちがとても好きだった。散歩していると本当に幸せだった。ずっとここで生きたいという思いも度度していた。でももう帰るしかない。私も登戸学寮

のような、存在自体で神様を証拠するものになっていこうと思う。登戸学寮の安寧を祈る。

一年振りの再会

佐々木 さら

私の家族構成は、父・母・私・弟・妹・妹・弟の七人だ。この通り人数が多い。しかしこの騒がしさは苦痛ではなく、とても居心地がいい騒がしさである。常に騒がしいのが好ましいわけではないが、私はこの家族の騒がしさが好きである。登戸学寮に入寮し、この騒がしく愛おしい家族から離れて早一年が経った。この一年、一回も帰省をしなかった。私は元々家族のことが大好きだが、地元を出たい体質な為、東京の大学を選び、神奈川の登戸学寮に引越した。親元を離れることが初めてではなかった上に、母方の祖父母と従兄弟家族が関東に住んでいる為、不安は特になかった。寮に住んでいるから人と関わらないことがないので寂しい思いも無かった。

しかし、会いたいと思うことが全くない訳ではなく、会いたいと思うことも度々ある。それなりに友人とも充実した時間を過ごすことができ、友人や周囲の人、環境にとっても恵まれた。簡単には会いに行けない距離で、簡単に助けてもらえない環境の中で一年を過ごし、大変な一面、楽しく過ごすことができている。しかし一年以上帰らないのは流石に寂しくなり、会いたくなっていた。夏休みこそ帰ろうと決心し、地元新潟でワクチンの予約が取れた為、帰れることになった。

一年ぶりに帰省した新潟は特別変わったわけでもなく、いつもの新潟そのままでも安心した。そして久しぶりに会った家族も変わらなかった。私にとつての家族は一緒に過ごすことが当たり前で、佐々木家は家族との時間を大事にすることが神様に喜ばれることだと父からずっと教えられてきていた為、家族との時間をとても大切に過ごしてきた。そして何より私の家族はとも変わっている面白い人ばかりなので過ごしていて飽きることがない。一人一人が個性豊かである。久しぶりの再会で、一週間の滞在だったが、とても長く濃い時間を過ごせた。弟たちはまだ夏休み中だった為、一緒に過

ごす時間が長くとても幸せだった。今まで実家を出る前は、日常茶飯事で喧嘩や揉め事が多かったのだが、弟達も一年ものの会えない期間があり、寂しかったようで、そして彼らも少し成長していたので喧嘩もすることなく充実した帰省であった。そして、母親の作る料理がいつも以上に美味しかった。

やはり母の味が一番だとしみじみ感じた。私はバイトをしなければならぬ為、一旦登戸学寮に戻り、その一ヶ月後にワクチン二回目を摂取するために再び新潟に帰省した。この夏休みで二回も実家に帰れると思っていなかった為、喜びで満ち溢れていた。ワクチン二回目を摂取するまで別部屋に隔離されていたが、会えた喜びはとても大きかった。

私は約一年ぶりに家族との再会を果たすことができた。一年ぶりの帰省で愛しい家族との再会では、家族からのたくさんのお愛も感じる事ができた。家族以外の友人や知人にも再会でき、また離れて暮らすのが寂しくなったが今後の生活の励みにもなった。大学を卒業し、無事働き始めることができれば、もっと会うことが困難にはなるが、会えた時の喜びと幸せを噛み締め、大切にしていきたいと思った。会えること

が当たり前だった毎日が今になって恋しく感じつつも自分の成長を期待して今後の寮生活も充実した生活にしていきたい。

頑張らない生き方

塩見 楽

「頑張れ！努力はきつと報われる！」 わたしたちは、学校でそう教えられますよね。小さい頃から私たちはそういう言葉を受けて育ってきたと思います。その言葉を信じて頑張り続けた結果、身も体もボロボロになってしまい、後悔を繰り返す人はそう珍しくないかもしれません。小さい頃に受けた「頑張つて！」という言葉が成長していくうちにいつの間にか「頑張らない人はダメ」という言葉として受け止められていくのかもしれませんが。当時ブルックスウッズセカンダリー高校のバスケット部に所属していた私はそうでした。

バスケットを始めたのは十三歳のころ、丁度ハイスクールに入学する時期。特に理由も憧れもなく、ただスポーツが好きで、得意だっただけ。休み時間にはみんなでバスケットをして、放課後は当時親しかった友人と一緒に日が暮れるまで練習していました。この時期は私にとつて一番楽しかったのかもしれませんが。練習した分だけ上手くなり、コーチや親に褒めてもらうこともとても気持ちいと感じました。先のことなど考えず、ただ精一杯楽しんでいました。

しかし、成長していくと同時に昔にあった「楽しさ」というものが薄まっていきました。自分の調子が悪かった試合、調子が良かった試合もどちらもその「楽しさ」というものは欠けていました。それは、「結果」ばかりこだわりの続けたからだだと思います。次の試合はもっと点数入れなきゃ、と常に思っていて、期待に応えられなかった時は自分を責めるようになりました。周りの目を気にするようになり、他人と比べ、やがて

そのすべてがプレッシャーへと変わり始めました。みんなから「頑張れ！」という言葉で励まされてきたこと自体は問題では無かったかもしれませんが、当時はその言葉が「呪い」のようにいつまでも自分の首を絞めていたのかもしれない。

そんな私でもカレッジからのオファーをもらうことができ、その時は素直に嬉しかったです。プロを目指していた私にとっては大きな一歩でした。そんな中なぜか「音楽をしたい！」という欲求が私の中にあり、なぜそう思ったのかも今になってもよくわかりません。趣味で始めたピアノをやっていくうちに夢中になり、素人なりに勉強し始めるとドハマリし、人生初の徹夜をした記憶があります。

でも、高校を卒業するとともに自分で選択しなければいけなくなりました。バスケを続けるのか、音楽を勉強するのか、自分にとって何が大切かを考えました。最終的にはバスケを

辞めることにしましたが、決して後悔はしていません。この決断は私の人生を大きく変えたのかもしれない。でも、今思えばこの経験から得たものはそれ以上だと感じます。

バスケでプロを目指すために色々努力していましたが、努力している時点で私には向いていなかったのかもしれない。世の中には「夢中でしかたない」と感じる人たちがいて、努力という概念はなく、私はそういう人たちに憧れていました。「天才は努力するものに勝てない、努力するものは楽しむものに勝てない」という言葉があり、おそらくその通り。だけど、一つ疑問が湧きます。「一体誰に勝つ必要があるのか？」と。自分を最も早く、簡単に不幸にする方法があるなら、それは「他人と比較する」ことだと思えます。誰にも勝つ必要がないのだから比べる必要もなく、そもそも夢中である人はそういうことも考えてないでしょう。

「がんばれ！努力はきつと報われる！」と私たちは、学校でそう教えられます。けれど、ある程度経験を重ね、気づく

はず。努力は必ずしも報われるわけではない。逆に一生懸命努力しなくても報われる人もいる。つまり必死に努力したからといって必ずしも見返りがあるとは限らないし、必死にやらなかったからといって見返りがないわけではない。そう感じた私は、とりあえず「努力するべきこと」ではなく、楽しいこと、やりたいと感じたものは全部やろうと決めました。時間は有限であり、何年かたって「あれをやっていたらどうなっていたのかな」と思い出して、胸の奥が苦しくなる、なんてことにならないように今を存分に楽しみます。

「人生は速度ではなく方向」であると、どこかの本に書いてありました（てきとう）。「なぜ苦しい思いをして頑張っているのだろう？」当時の私はそんなことで悩んでいたのです。進む方向を見失っていたのかもしれない。その答えを知るためにも、「立ち止まる」ことが大切なのかもしれません。そうゆう時こそ自分の欲望に忠実な時間を過ごしてみても良いのではないのでしょうか？遊びたいなら遊ばばいいし、何もしたくないなら、何もなくていい。そうしている

うちに気づくこともあり、やりたい事が見つかるかもしれない。

「頑張らない」ことは別に悪いことじゃない。人生をコントロールするため、常に正しい選択しなきゃと自分を追い詰める必要もなく、誰かに期待されなくてもいい。ただ自分がやりがいを感じたことを精一杯やるだけ。「人生なんてそんなものだ」と思い続けていると気が楽になりました。

キリスト教の道義的責任　　浦上キリシタン
の弾圧と原爆　　

慶應義塾大学商学部　柴田真之介

これは「学寮ニュース」一一号に掲載された原稿の続きにあたるものです。文字数の都合でカットされた内容にさらに加筆したものとなります。また、私としては、キリスト教のさらなる発展を願い、全てのキリスト教関係者に読んで欲し

いところではございますが、二・二以降の内容において一部ショッキングな事柄、表現が含まれていますので注意して読み進めるようお願い致します。

目次

第一章 キリスト教の道義的責任

一・一 キリスト教世界の道義的責任問題

一・二 キリスト教世界の犯してきた罪と道義的正当性

一・三 原理主義の克服

第二章 正義、浦上キリシタンと原爆

二・一 神とキリスト教の正義

二・二 浦上キリシタンと原子爆弾

二・三 悔い改め

おわりに・人の愚かさ

第一章 キリスト教の道義的責任

一・一 キリスト教世界の道義的責任問題

二〇二二年の登戸学寮 OR 武田武長氏の講演では、私が日

ごろ関心を寄せているトピックがクリティカルに触れられていました。内容を要約すれば、「道徳的模範であるべきキリスト教世界自身が、宗派対立や宗教戦争、人間至上主義、キリスト教原理主義など、道義的過ちを繰り返してきたことに対する問題意識の提案」といったものになります。これらの問題は一步間違えればキリスト教の根幹を揺るがすようなトピックであり、キリスト者はこうした話題を避けるものだと、お茶を濁したがるものだと私は思っておった訳ですが、武田氏の講演において、これらのトピックが主題となっていたことに、驚きを覚えました。さらに言えば、十字軍やホロコースト、自然科学信奉による環境破壊などについて、キリスト教に責任の一端があることを認め、深い反省に至っていたことは、私にとっては衝撃的なことでした。この講演では、最終的に原子力技術に対して警鐘を鳴らす形で論が終着しましたが、これに対して私は、今後どのようにして、キリスト教世界のこれまでの罪を清算し、道義的過ちを犯すことを防ぐべきかについて、論を展開していきます。

一・二 キリスト教世界の犯してきた罪と道義的正当性

まずはキリスト教世界の犯してきた罪の本質について明らかにする必要があります。キリスト教世界は十字軍や魔女狩りに始まり、帝国主義的侵略、植民地支配、民族浄化に至るまで、挙げればきりが無いほどに、争い、人を殺してきました。しかも単に人を殺してきたわけではなく、それを正当化し、正義の御旗の下でこれらを執行してきました。これはキリスト教の道義的正当性を著しく毀損する可能性のある問題であり、早急に解決するべきであると考えています。なぜなら上記の負の歴史を清算しないことには、キリスト教は最早、人々を正しく導くための宗教として、正義を語るべきでないからです。この問題に、より具体性を持たせるため、以下の事例を紹介いたします。インディアンやアポリジニなどの迫害、民族浄化はキリスト教的世界観によって正当化されてきた負の歴史です。キリスト教的世界観に存在しない彼らは人ではない存在とされ、矯正施設では「インディアンを殺し、人間を救う」という合言葉の下、彼らの言葉や宗教を奪い、キリスト教が強制されました。黒人奴隷問題や植民地支配も同一線上にあり、どれだけ殺しても、奴隷にしても、「キリスト教

世界の人間でない者は人ではない」という正当化が行われてきたことは否定できない事実です。このような歴史の上で発展、布教されてきたキリスト教に道義的正当性を認めることは難しく、この負の歴史は、正しい方向に人々を教え導く存在としてのキリスト教そのものの存在を脅かす大問題であります。よって、キリスト教世界は、一刻も早く、何らかの形で、この負の歴史を清算あるいは説明し、失ってしまった道義的正当性を取り戻す必要があるのです。

一・三 原理主義の克服と悔い改め

前節からキリスト教世界の犯してきた罪と失われてしまった道義的正当性について、共通認識を得られたと思います。そして、道義的正当性を保った上でキリスト教が前進するためには、上記の負の歴史を悔い改め、清算する必要があるわけです。この節では、問題解決のために、この負の歴史を生み出してきた原因について、まず考えます。武田さんも指摘の通り、最大にして根本的な原因は、やはり原理主義であります。原理主義については全世界共通の問題として、もは

や自明なものとなっておりますが、より論を強固なものとするために原理主義がもたらす悪影響について再確認を行います。まず原理主義については、「①神、教義、聖典の無謬性を信じること」、「②単一の価値観だけを信奉し、他者の価値観を排撃すること」、大まかに、この二つの意味合いで理解して頂ければ、ここでは問題ないでしょう。前節のインディアン例しかり、十字軍や魔女狩り、植民地支配、ホロコーストなどについても、②の観念から説明できます。そして①がそれらの蛮行を正当化した、という図式です。以上の簡単な説明でも、十分に原理主義が重大かつ根本的問題であると理解できるでしょう。

では「今日からキリスト教原理主義は絶対にやめよう！」となつて、解決できれば良いのですが、これはそれほど簡単な問題ではありません。なぜなら原理主義の定義である「①神、教義、聖典の無謬性を信じること」とは、敬虔で神を一切疑わず、信仰する純粋なキリスト者の行いと、ほぼ同一の行為であるからです。神や教義、聖書を疑い、その誤謬を認めることは、多くのキリスト者にとって非常に難しいことで

す。それはガリレオの地動説が許されるのに¹⁶⁸⁶年もの年月を要したことや、ダーウインの進化論が侮辱されつづけたことを考えれば、直感的に理解できるでしょう。神、教義及び聖書に疑いの目を向け、再解釈し、間違いを認めるといふことは、宗教の「信じる、信仰する」という本質に真つ向から対立する行いです。つまり「①の意味での原理主義を回避すること」誤謬を認め得ること、「神、教義及び聖書を疑うことのない純粋な信仰」を両立させることは容易でなく、これが、道義正当性を回復していく上で、これからのキリスト教世界に与えられた本質的な課題であると言えます。

では②の意味合いでの原理主義はどうでしょうか。②は要するに排他主義というものですけれども、ヨハネによる福音書11:6「イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」使徒の働き12:12「この方以外には、だれによつても救いはありません。」世界中でこの御名のほかには、私たちが救われるべき名としては、どのような名も、人間に与えられていないからです。」

というように、聖書内で排他主義が唱えられています。そのため①が存在する限り、②の主張を控えさせることはできないのです。聖書が正しいとすれば、排他主義が部分的に認められてしまうのです。そこで、やはり、まず①について解決しなければならぬといえます。ここまでで、最低限、問題の所在は明らかにする事が出来ました。

繰り返すと、人々を正しく導く宗教として、キリスト教世界は失ってしまった道義的正当性を取り戻さねばならない、それには問題の根底に存在する原理主義を克服する必要がある原理主義を克服しつつ、正義の宗教としてキリスト教が進ずるためには、「①の意味での原理主義を回避すること＝誤謬を認め得ること」と「神、教義及び聖書を疑うことのない純度の高い信仰」を両立させる必要がある、といった内容となります。ただ、本当に疑いを知らぬ純度の高い信仰心を持つたまま①の意味での原理主義を克服することは可能なのでしょうか。私は完全な両立は極めて難しく、この純度を何等かの形で引き下げることなく、この問題を解決することは、現時点では不可能だと考えています。

上で原理主義の克服の必要性と難しさを述べましたが、大半のキリスト者は、自分は原理主義とは無縁な存在であり、克服は容易であると感じているのではないのでしょうか。そこで、この論により説得力を持たせるための補足をを行います。まず完全な原理主義とまではいなくとも、多くのキリスト者は潜在的かつ部分的に原理主義に片足を突っ込んでいるように、私は感じています。今から、事実関係は正確でなくとも、大まかに歴史を踏まえている、「敢えて」挑発的なセンテンスを示します。「インディアンを殺しまくって、彼らから言葉も文化も民族性も奪い、キリスト教を押し付け、それを正當化してきた！キリスト教はとんでもない悪の宗教である！そしてそれを大事に信仰する奴の気が知れない！」敢えて挑発的な、良くない文を書いたわけですが、これを読んでどんな感情を抱きますか？私は、大半のキリスト者が不快感や苛立ち、怒りを覚えている様子を想像しています。そして、このセンテンスへの反論を試みているのではないのでしょうか。確かに挑発的で、悪意のある文章ですが、この文を読んだら、まずインディアンの悲しみ、苦しみ、痛みに思いをはせ、罪を

悔い改めることが、正しいキリスト者にとるべき行動であると、私は思います。ここで間違っても、苛立ちや怒りから、反論、自己弁護に走ってはならない、なぜなら、そうした行為は自らの正当性を信じ込む原理主義に裏付けられた行為であるからです。自らの正当性を信じ込んでいるからこそ、負の歴史を目の前にしても、反論や自己弁護に走るというわけでありません。もし、あなたが上記のセンテンスを読んで、不快感や怒り、苛立ちを覚えたなら、あなたの中にも、少なからず原理主義があると自覚した方が良いでしょう。

第一章のまとめとして、一つだけキリスト教世界に提案するならば、キリスト教の基本に立ち返り「悔い改め」を実践するしか道はないです。人類及びキリスト教世界は、争いを繰り返して、気の遠くなる程の命を奪ってきました。その歴史を見つめなおし、悔い改めることは原理主義の克服に寄与するかもしれませんし、正しく人々を導く宗教として、失った道義の正当性を回復し、道義の責任を果たす一歩目であると
言えます。

第二章 〈正義〉 浦上キリシタンと原爆

これから始まる第二章では、何故キリスト教は道義的正当性の回復に取り組む必要があるのか、この問いに答える内容が続きます。第一章においても、その必要性については取り上げましたが、全キリスト者にこの問題に真摯に向き合ってもらうためには不十分であると考え、第二章にて、問題の深刻さを訴えることとしました。

二・一 神とキリスト教の正義

第一章においても記述した通り、過去の歴史を通じて、キリスト教の道義的正当性、つまり正義は失われた状態にあります。これは、人々を正しく導く存在としてのキリスト教及び神の存在を脅かしかねない程の大問題です。単刀直入に言えば、第一章の事例や以下で紹介する事例をきちんと説明する事が出来なければ、「人々を正しく導く存在としての」神を肯定することも、キリスト教の名において正義を語ることも不適切であるということ、さらに言えば、負の歴史から目を背

け続けた状態で、善悪や正義を語ることは極めて不誠実な行為であるということでもあります。

二・二一 浦上キリシタンと原子爆弾

ではキリスト教世界の道徳的正当性および正義を損ね得る事例の紹介に移ります。それは十字軍でも、魔女狩りでも、ホロコーストでもありません。私の故郷、長崎の浦上キリシタンと原子爆弾に関する問題です。まず、原子爆弾投下は地獄を生み出す兵器であります。そして、それは現実に取りました事実であり、これから記す内容は全て過去に起きた現実であります。長崎の原爆は、一九四五年の八月九日十一時二分に、浦上という地区の上空で爆発しました。そしてこの浦上という地区が、この話の中心となる街であります。長崎には江戸時代よりキリシタンが多く、世界遺産に指定された教会群も存在します。特に浦上地区には多くのキリシタンが、江戸時代より数百年間、四回もの大規模弾圧を耐えながら住み続けてきた土地でした。その弾圧はいくつもの小説や映画になる程、凄惨なものでした。一切の誇張なしに、現代

人にはおおそ想像もつかぬほどの残虐な行為が、そこにはあったのです。おぞましい拷問を受けながら、隠れキリシタン達は信仰を捨てよう迫られました。十字架で処刑されたイエスの何倍も惨い拷問を、何百時間にも渡って受けながら、多くのキリシタンが神を信じ、信仰を捨てず、殉教したと記録されています。彼らはどういった心境で死んでいったのでしょうか、信仰を捨てなかつた者たちは、希望を未来や死後の世界に求めていたのではないかと、私は思います。江戸時代の間、弾圧は続き、明治政府にも引き継がれました。

その後、明治政府は弾圧を外交上の問題で中止し、浦上に正式な教会である浦上天主堂が建てられたのが一九一四年のことです。しかし、僅か三十年後、アメリカにより原子爆弾が投下され、浦上天主堂は跡形もなく崩壊、二人の神父と数十人の信徒が全員死亡しました。爆心地周辺で生き残ったのはたった一人、そこに暮らしていた人々は一瞬で焼け死にました。それも現代では表現に規制がかかる程、残酷な死に方をしました。子供も老人も見境なく死にました。これらは全て、浦上のキリシタンの身に起きた実際の出来事です。

余談ですが、長崎に落とされた原爆は元々、福岡の小倉に投下される予定でした。当日、福岡の天候が悪かったため、第二候補の長崎に変更されたのです。また長崎の中でも、工業地帯を狙って投下された爆弾が、風に流され三キロメートルも離れた浦上・松山地区で炸裂しました。何もわざわざ敬虔なキリシタンの頭上で爆発しなくてもいいものを…

こんなにも惨く、醜く、救いのない話があつてよいものでしょうか。アメリカは1950年以前に生まれた人の約七割が教会に属しており（米ギャラップ社調査）、現在でも法廷証言の際には聖書に手を当てる宣誓をおこなうキリスト教の国です。一体、何がどうなれば、どれだけ人間が愚かなら、キリスト教の国が、敵国とはいえ、民間人しかいない市街地に、広島に続いて二発目の核兵器を打ち込み、弾圧に耐え、神を信じ続けたキリスト教徒を皆殺しにするのか、この到底理解できない疑問に、私は未だ答えを見つけられません。私はアメリカ人ではなく、天の神様、そしてキリスト教世界に一刻も早く弁解をして頂きたいのです。なぜ神を信じ、神のために生き続けた浦上のキリシタンは、何百年間も弾圧を受け続

け、時にイエスの何倍も肉体的な苦痛をうけながら殺されたのでしょうか、そして、それでも信仰を捨てず殉教した敬虔なキリシタンの土地が原爆によつて地獄と化し、皆殺しにされたのでしょうか、彼らはいったい何の罪を犯したのでしょうか。神とキリスト教の偉大さや正義についての話を聞かたび、「神も救いもありはしない」この言葉以外で、この浦上キリシタンの歴史を説明できるならば、誰かそうして欲しい、どうにかしてキリスト教世界に正義を取り戻してほしい、そういう思いが、長崎市出身の私の胸にはこびりついて取れないのです。「神や聖書がキリスト者を正しく導き、救う。」我が学寮でも、よくこの種のセンチンスを耳にしますが、本当にそうでしょうか、私の眼には正反対の物事が長い歴史の中で繰り返されてきたように思えます。

そういうわけで第一章、第二章で紹介してきた、救いのない負の歴史を、どうにかして説明しなければ、人々を正しく導く存在としてのキリスト教と神を肯定することはできません。なぜなら、客観的に見て、全くもって、正しく導いていないからです。正しく導いた結果が、この悲惨な歴史ならば、

正しさ、或いは生きることを諦めるしかないでしょう。そして、最も懸念される事態は、こうした凄惨な負の歴史やキリスト教世界の罪から目を背けながら、キリスト教の正義を語るという行為です。これほど不誠実な行いはありません。とはいえず、

キリスト教の枠組み、価値観において、上記の悲惨な歴史を説明するには、「死ぬことで神の国に行けたので正しい」や「これは人類に対する神の正当なさばきであり、甘受する他ない」など、それこそ原理主義に基づいた極論を用いるしかないように思えます。ただ、そうやって正当化しなければ、この負の歴史を認め、人々を正しく導く存在としてのキリスト教と神の存在を否定することになるので、「神と聖書、教義の道義的正当性を否定する」か「原理主義によって説明を押し通す」という議論になります。しかし、この論争に決着をつけようとする、また宗教戦争や異端審問などの争いが生まれ、命が失われそうであります。そこで、第一章で述べた通り、ラディカルな道義的正当性の回復は諦めて、悔い改めに帰着すべきです。それしか歴史に目を背けながら道義的正当性や正義を語るという不誠実な行為から逃れる術はないといえます。

二一・三 悔い改め

さて前節の末尾では、悔い改めの必要性を述べました。恐らく、キリスト教の基本原理である悔い改めに抵抗のある方はおられないでしょう。しかし、登戸学寮で過ごしてきた約二年半のなかで、ただの一度も、第一章、第二章で取り上げたようなキリスト教の負の歴史に関する悔い改めを、私は耳にしたことがありません。原子爆弾の話も、隠れクリスタンの話も一度も聞いたことがありません。もちろん日本に関係のない、十字軍やホロコースト、魔女狩りの話も聞いたことがありません。というか登戸学寮にのみならず、私が生きてきた期間で、一度も、キリスト者による、そうした悔い改めを聞いたことがありません。ただ、これは良いことなのかもしれません。私が卒業した長崎市立城山小学校では、行き過ぎた平和教育が行われており、未来ある子供たちに精神的負担を与えていると考えるからです。次の世代に禍根を残さないことも、また重要であります。しかし、聖職者やキリスト教を教え広める立場にある人間には、負の歴史を、少なくとも、隠さない義務があるのではないかと、悔い改める義務が

あるのではないかと、私はそう思います。なぜなら人は愚かで、同じ過ちをもう何度も繰り返して、多くの命が失われてきたからであります。

おわりに・人の愚かさ

戦後、浦上天主堂は全て撤去され、建て直されました。現存していれば確実に世界遺産とも言われています。もちろん当時の長崎市民は遺構の解体に反対し、市議会では撤去中止の要請が全会一致で可決されました。しかし、教会側は解体工事を決行、きれいな浦上天主堂が建て直され、今も祈りがささげられています。決定的な証拠は残っていませんが、これには米国の圧力があつたと言われています。キリスト教国には、この遺構はあまりにもショッキング且つ不都合であることは言うまでもないことです。また戦後、被爆者に対し、一切治療することなく、健康状態の推移を調査する活動が年間にあつたって、日米共同で行われました。戦争という特殊環境でなくとも、人はこんなにも愚かなのですね。浦上キリシタンの祈りも空しく、この世界は不正義で満ち溢れています。

す。繰り返しますが、私は国としての米国には一切不満をもつていません。なぜなら戦争だったから。人間の道理では、敗者には何の権利もないです。ただ、その人間の道理を超越し、正しい方向へ教え導くとするキリスト教世界にはきちんと、この歴史を認識し、説明して欲しいのです。人の世では、右の頬を打たれるどころか、十字架にかけられるどころか、原子爆弾も投下されますし、言葉を失うほどの拷問もあります。これらは全て、神を信じ続けた最も高貴なキリシタンの身に起こったことです。そして彼らは死にました。少なくとも私の眼からは、彼らに救いはなく、世界も人間も醜いままです。ここまで読み進めてくださった方の中には、絶対におられないとは思いますが、「死ねば神の国に行けるから救われたのだ。」と思う方は、一刻も早く、自殺して神の国に行き、救われてください。神の国に行けるなら、地球環境に負荷を与え、動物の命を奪い、途上国を搾取することで成り立っている豊かな社会のなかで、無理して生にすぎる必要は一切ありません。きっと浦上の彼らも神の国で待っていることでしょう。生き地獄のなかで苦しんだ彼らにとつては、確

かに死は救済であつたかもしれませんが、それは本当に不幸で、悲しいことだと、私は思います。原爆以外にも酷い歴史はありますが、日本にいるキリスト者の皆さんは、浦上地区のキリシタンのことを気にかけてあげてください。彼らは最も偉大なキリシタンです。そして、この文を通して、キリスト教世界の負の歴史から目を背けながら神の偉大さや正義を語るといふ不誠実な行為がなくなり、悔い改めが行われるようになれば、幸いです。最後に浦上天主堂の慰霊祭でさげられたとされる言葉を紹介して、この論の締めとします。

司教様は追悼説教の中で、「私たちの親、兄弟、夫、妻、子供、友人、みんな良い人たちが一発の原爆によって神に召されていきました。そして浦上はこのような焼野原になりました。明治六年に『旅』から帰って来た時は、『あばら家』でしたが、浦上に家が残っていましたが、今は一軒の家もありません。」

この文章を書くにあたって、千葉恵登戸学寮長に大変お世話になったことを、ここに記します。

TORCH 症候群について

杉谷 魁

TORCH 症候群とは、妊婦が感染することで胎児に奇形や重篤な障害などを引き起こす感染症の総称である。TORCHとはその感染症の頭文字をとったものであり、Tは Toxoplasmosis (トキソプラズマ)、Oは Other agents (梅毒やB型肝炎、水痘など、その他病原体)、Rは Rubella (風疹)、Cは Cytomegalovirus (CMV: サイトメガロウイルス)、Hは Herpes simplex (単純ヘルペス)をそれぞれ表している。

まずトキソプラズマとは、幅3μm、長さ5~7μmの半円、三日月形をした原虫である。細胞内寄生性であり、環境中で単独では増殖しない。ネコ科動物が感染した中間宿主を捕食すると、体内の腸管上皮に侵入する。原虫は数回の無性生殖の後、有性生殖により雌性、雄性配偶子を形成する。腸管内部で融合し、ネコの糞便などとともに体外に放出される。トキソプラズマのヒトに対する感染は、加熱の不十分な食肉に

含まれる場合、あるいはネコ糞便に含まれる原虫の経口的な摂取により生じる。眼瞼結膜からも感染するが、空気感染、経皮感染はしない。次亜塩素酸やエタノールを含む多くの消毒剤が無効であり、ガーデニングや砂場など土壌との接触、感染したネコとの接触、井戸水、わき水等の無処理の生水の摂取は感染の確率を上昇させる。妊娠中の女性がトキソプラズマに初感染した場合、先天性トキソプラズマ症を起こす可能性がある。先天性トキソプラズマ症は水頭症、脈絡膜炎による視力障害、脳内石灰化、精神運動機能障害が知られている。その他、リンパ節腫脹、肝障害、黄疸、貧血、血小板減少が見られることもある。

次に風疹とは風疹ウイルス (Rubella virus) による感染症で、飛沫感染によって伝染する病気である。感染した人の鼻汁やのどの粘液から、発疹出現の一週間前から二週間後までの間分離され、大量のウイルスが体外に放出されるのは、発疹出現後、四日までである。尿・血液・脳脊髄液などから検出されることもある。妊婦が妊娠前半期に風しんウイルスに感染すると、胎芽、胎児も感染し、そのことにより出生児に起き

る障害を先天性風しん症候群という。白内障または緑内障、心疾患、感音性難聴、精神運動性発達遅滞などが見られる。先天性風しん症候群の発生頻度は、妊婦が風しんに感染した時期により異なり、妊娠四週までは50%以上、五〜八週は55%、九〜一二週は15%、一三〜一六週は8%とされている。妊娠八週までの罹患では、白内障、心疾患、難聴の二つ以上の疾病が出現し、それ以降二十週までの罹患では難聴のみのものが多く、妊娠後半の罹患では、胎児に感染は起こっても、先天異常は出現しない。

サイトメガロウイルス (CMV) とは、二本鎖DNAウイルスでヘルペスウイルス科の中では最大である。種特異性が強く、ヒト以外の動物には感染しない。感染経路は母乳感染、尿や唾液による水平感染が主経路であり、産道感染、輸血による感染、性行為による感染なども認められている。妊婦がCMVの初感染・再感染を受けた場合、または再活性化を認めた場合、ウイルスが胎盤を経由して胎児に移行し先天性CMV感染症を発症する。症状は重篤なものから軽症、無症状まで幅広いが、

一般的に初感染の場合に重篤になることが知られている。症状は、低出生体重、黄疸、出血斑、肝脾腫、小頭症、脳内(脳室周囲)石灰化、肝機能異常、血小板減少、難聴、脈絡網膜炎、DICなど多彩かつ重篤で、典型例は巨細胞封入体症と呼ばれている。ただし、出生時には上記症状の一部のみの場合や、全く無症状で後に難聴や神経学的後遺症を発症する場合があります、早期発見が望まれる。

○の中でもよく知られている水痘とは、いわゆる「みずぼうそう」のことで水痘帯状疱疹ウイルス(サイトメガロウイルスと同じヒトヘルペスウイルス科である)というウイルスによって引き起こされる発疹性の病気である。空気感染、飛沫感染、接触感染により広がり、その潜伏期間は感染から二週間程度と言われている。発疹の発現する前から発熱が認められ、典型的な症例では紅斑(皮膚の表面が赤くなること)から始まり、水疱、膿疱を経て痂皮(かさぶた)化して治癒するとされている。治癒したあとでも水痘帯状疱疹ウイルス(VZV)は終生その発症者の知覚神経節に潜伏感染し続ける。

このVZVが潜伏感染している人が数年〜数十年を経て精神的ストレスや体力の低下、糖尿病等の他の疾患の合併等で免疫力が低下した状態となった時に体内で「再活性化」を起こし、潜伏感染している神経節から、神経束を伴いながら下行し、片側性の皮膚分節知覚帯に帯状疱疹を生じることがある。前駆痛から始まって、皮疹の回復後も長期に続くことが多い。先天性水痘症候群は二十週以降の妊娠後期に母体が感染した場合は胎児の奇形など先天異常を伴うことはほとんどないとされているが、症状として子宮内発育遅延、低体重出生、四肢形成不全、帯状疱疹に伴う皮膚瘢痕(はんこん)、小頭症、小眼球症や白内障および網脈絡膜炎ほか眼球的異常や発達障害などが見られる。また妊娠後期の感染で、出生時には無症状でも、まれに乳幼児期になって帯状疱疹が生ずる例もある。

妊娠する前に配偶者、本人が自分の抗体価を調べ、足りないワクチンを接種することで胎児への影響を減らすことができる感染症はいくつかある。自分の子供が先天的な疾患を予防できる可能性を高めることを考えるとワクチンを接種して

おいたほうがいいと思うが、選択権は患者さんのほうにあるのでよく考えておいたほうがいいと思う。

参考文献

[水痘—厚生労働省—mhlw.go.jp](http://www.mhlw.go.jp)

トキソプラズマとは—国立感染症研究所

近況報告とこれから

善方 枝美華

もう秋学期も折り返し地点に達しようとしている。なぜか秋学期はものすごく時間が過ぎるのが早い。秋学期は大学での講義内容が難しくなっていると感じるし、課題も大変になった。

秋からは総合文化ゼミナールという授業が始まった（半分の方は春学期、もう半分は秋学期にこの授業をとっている）。

数々のゼミから1つ選ぶことになるが、その中から「ワールド映画ゼミ」を取ることにした。このゼミはイスラエル、南アメリカ、フランスなど、普段あまり接する機会が少ない国や地域の映画を鑑賞したり、その地域について書かれた本などを読んだりする。そしてそれぞれの作品に描かれた世界の「今」を読み取り考えていく授業だ。こうなると、その地域の状況や、民族、宗教、国際問題などについてたくさん調べないと正確な「今」は見えてこない。したがって、これを事前に調べておきなさいと言うことで、予習レポートが課される。そして、その予習の内容も含め、映画内でポイントになってくる台詞や行動なども含めて分析レポートも書く。そして、課題図書を読んでそれについてもブックレポートとしてそれなりのレポートを書かなければならない。正直すごく大変だ。

このゼミを選んだ理由は…楽そうだったから……あれ、おかしいなあ??この授業のレポートは多いものの、授業中の発言などが点数に加味されず（映画を鑑賞しているか、先生の話の聞くかでそもそも話し合わない）最終発表などもの

い。周囲の人々と打ち解けるのに時間がかかるし、発言が苦手な私にとつて、この授業はもつてこいのはずだった。レポートは思っていたよりもずっと大変だった。教授自身も大変な授業だと言っている笑。「このゼミはずつとやっていて、周りのゼミはどのくらいだかは大体把握しているよ。でも……」とのことだ。大変だと分かっているのなら、せめて予習レポートの分を予習動画として配信してくれればいいのにと心底思う。

愚痴がこぼれてしまったが、このゼミで学ぶことは本当にたくさんある。高校2年生から理系クラスにいたため歴史や国際問題等に触れる機会はほとんどなかった。社会も地理選択だったし。1年生の時には現代社会、2年生の時は世界史Aをやったくらいだ。この科目たちは入試で使わないことがもう明確だったので、定期テストの前日にどれだけ詰め込めるか、みたいな勉強しかやってこなかった（先生方ごめんなさい……）。内容なんて忘れてるし、もはややってないのとはほぼ同じという状況である。これだからこそこのゼミをやる意味がある。歴史などの教養が大分かけているけれど、このゼ

ミにちゃんと取り組んでいれば少しは補うことができると思ふし、今まで世間に疎かった自分を変えることができるかもしれない。そして少しでも広い視野で物事を見られるようになったら万歳なのではないか。見えてくる世界が多少なりとも変わってくるはずだし、自分の知らないいろいろな世界が見えてくるはずだ。自分が知っていることだけですべて決めてしまふのはもつたいたないし、それではお馬鹿さんになってしまう。

大学での内容だけが時の流れを速く感じさせている要因ではない。周囲の人とのつながりが増えたことも理由の一つであると思う。

10月18日には寮長・寮長のお子さんたち・一部の寮生と共に、辻井伸行さんのコンサートに行かせてもらった。とても素敵な演奏だった。自分の心が浄化されたような気がする。素人ながら違いが分かるもので、音1つ1つが際立っていて、音色が明るいような気がした。「目が見えない中、印象派の絵画を音楽で表現する」というぶつ飛んだ企画であったが、素晴らしかった。もつと細かく感想を書くこともできる

が、ネタバレになりそうなので感想はこの辺で終わりにしておこう。また機会があれば（あと3年はここにいると思うのできつとある）是非、辻井さんの演奏を聴きに行きたい。

これを機にピアノに限らずいろいろな公演を見に行きたいと思うようになった。今考えているのはクラシックバレエの公演だ。私自身5歳から中学1年生の夏まで結構な期間バレエを習っていた。年齢を重ねるにつれレッスンの頻度が上がっていき、週6回から毎日の週もあった。しかし恥ずかしいことに、自分が公演のようなものに出たことはあるが、全員がバレリーナで構成されたバレエの公演は見たことがない。「白鳥の湖でしょ！」と言われても詳しい内容は分からない（笑）。せっかくバレエに触れて、上手な人、評価される人の違いや、世界観、振り付け、裏にある大変さを学んだのだからその経験を元に、本物の舞台を見てストーリーに浸るのも悪くはないはずだ。

もう一つは高校の同級生たちとの ZOOM の会が始まったことである。これは夏休みの最後の方からスタートした。常駐メンバーは私を含め6人で、たまにホストと呼ばれた誰かが

やってくる。内容は他愛のない話をしたり、ワードワルフなどのゲームを楽しんだり、時にはディベートなどで議論をしたりと様々なことを行っている（最近はホストが忙しいためあまりやってない）。

その話の輪の中にいてもいつも思うのだ。私は教養が欠けていて、無知で馬鹿であると。みんな映画や音楽、マイナーなアニメなどいろいろな話になってもついて行けるし、頭の回転も速い。私もこんな風に話ができたら楽しいのと思う。先ほどの映画のゼミでこんなことを習った。「フランスの社会学者、ピエール・ブルデューによると資本は3つに分けられる。一つ目は経済資本である。普通のお金を意味する。二つ目は社会関係資本だ。人間関係を資本として考えたものだ。三つ目は文化資本、ざっくり言うところと教養である。文化資本は楽器などの客体化されたもの、学歴などの制度化されたもの、言葉などの身体化されたものの三つにさらに分けられる。」私がか今一番どうにかするべきものは三つ目にあげた文化資本の客体化されたものあたりである。幸いなことに、現在、この文化教養を身につけるのにはもってこいの環境にいる。この

映画のゼミを取ったことや、私の周りには学問だけではなく様々なことに詳しい人や、楽器などに精通している人、映画を見たり、ジャンルを問わずいろいろな音楽を聴いたりする人、パソコンに詳しい人、ゲーム廃人、アニメヲタクなどいろいろな人がいる。その人たちと時間を共にし、話をしたり一緒に何かを体験できたりする機会があれば、学べることは本当にたくさんあると思うし、徐々にではあるけれども視野が広がっていくのではないか。

ZOOMのホストは映画が大好きである。映画監督になりたいとかそうでないとか。彼は友人が多く、友達を集めて映画の撮影をしている。今は動画編集の子と話し合いをしながら撮影した動画の編集を行っているらしい(本当に忙しそう)。実は彼の映画制作に音響の係として、私も参戦することになった。声をかけてくれたことに本当に感謝している。ZOOMに招待してくれたり、受験時には情報交換をしてくれたりとお世話になりっぱなしだ。今回の映画の件で私力が力になれるかもしれないということ、自分ができる最高の仕事をしたと思うっている。ゼミでもたまたま映画について取り組んでいる

こともあり、私にとってもプラスになる経験だし、少しでも夢(?)のお手伝いができればこれ以上に喜ばしいことはない。

日本における民主政治

高田 佑里

私は現在の日本における民主政治について考えた。民主主義とは、市民が直接、もしくは自由選挙で選ばれた代表を通じて、権限を行使し、市民としての義務を遂行する統治形態である。民主主義とは、人間の自由を守る一連の原則と慣行である。つまり、自由を制度化したものと言ってもいい。多数決原理の諸原則と、個人および少数派の権利を組み合わせたものを基盤としている。民主主義国はすべて、多数派の意思を尊重する一方で、個人および少数派集団の基本的な権利を熱心に擁護する。

民主主義国は、全権が集中する中央政府を警戒し、政府機

能を地方や地域に分散させる。それは、地域レベルの政府・自治体が、市民にとって可能な限り身近で、対応が迅速でなければならぬことを理解しているからである。民主主義国は、言論や信教の自由、法の下で平等な保護を受ける権利、そして政治的・経済的・文化的な生活を組織し、これらに全面的に参加する機会などの基本的人権を擁護することが、国の最も重要な機能のひとつであることを理解している。

民主主義国は、すべての市民に対して開かれた、自由で公正な選挙を定期的の実施する。民主主義国における選挙は、独裁者や単一政党の隠れみよとなる見せかけの選挙ではなく、国民の支持を競うための真の競争でなければならない。民主主義は、政府を法の支配下に置き、すべての市民が法の下で平等な保護を受けること、そして市民の権利が法制度によって守られることを保障する。民主主義諸国のあり方は多様であり、それぞれの国の独自の政治・社会・文化生活を反映している。

民主主義諸国の基盤は、画一的な慣行ではなく、基本的な諸原則の上に置かれている。民主主義国の市民は、権利を持

つだけでなく、政治制度に参加する責任を持つ。その代わり、その政治制度は市民の権利と自由を保護する。民主主義社会は、寛容と協力と譲歩といった価値を何よりも重視する。民主主義国は、全体的な合意に達するには譲歩が必要であること、また合意達成が常に可能だとは限らないことを認識している。

マハトマ・ガンジーはこう述べている。「不寛容は、それ自体が暴力の一形態であり、真の民主主義精神の成長にとって障害となる。」つまりまとめると、民主政治はみんなで決めようという考え方に基づいた政治体制である。国民みんなで決めるので平等であると言える。また制限なく自由に言論を交わすことができる。例えば、現在の日本においては選挙によって政治の代表者を決めることがされている。この選挙は国民の全員が投票する権利をもっており参加することができる。よって国民の意見を政治に反映させることができるという利点を民主政治は持っている。

独裁者及び一人の権力者が全てを決めるということがない。国民が生きているという実感を得られる。そして自国の政治

に参加しているという自国愛も多少ばかり増えるであろう。身近な例で挙げると、学校で文化祭の出し物を決める際にいう多数決と同じようなものである。何より私は民主政治の価値として最も大きなものが自由であると考える。自由は強大な力を持ち重要なものである。また自由によって人々はより成長しようと奮闘でき、その先に希望が見出せるのではないかと感じる。仮に一人の独裁者により全ての物事が決められてなされるのなら、そのまま流れに任せて人々は従い続けるだろう。それでは何もそれ以上の価値や功績を見出すことができないだろう。よって自由は現状以上のもの、価値や考え方までも作り出す可能性を持っているものなのである。民主政治は民主主義に基づいた政治体制である。

民主主義はこの自由を行使して国全体をよりよいくい意味で活性化させるだろう。生産活動や経済をより豊かに多種多様な面を築きながら発展させると考える。例えば、キッチンで夕ご飯を作るとする。この時、同居人にカレーを作ってほしいと言われる。その通りにカレーを作ったときこれは自分の意思ではなく同居人及び極端にいうと独裁者の意思の方を

尊重して行動したことになる。次に同居人がいなくて何もいわれなかったとき、今食べたいものでも好きなものでも自由に作る事ができる。この時、制限がなく自由をもって自分で行動したことになる。この場合、好きなものを作る分より頑張ろうと奮闘するし、やる気が増し、作る速度もはやくなるだろう。これと似たような原理で自由は社会をも活性化させるのではないかと私は考えた。制限に縛られることなく社会は自由にまわりうごめいて伸び伸びと生活することができるとなるのだ。さらに挙げると一人の独裁者が国を治めていた場合、一歩間違えればそのまま他の誰も口出しできずに物事が間違った方向にいつてしまふ。これが民主政治では国民の意見を反映することができるので正しい道にいくことができる可能性があるという利点があるのだ。

変わっていく時代の流れの中でその場その時の状況に合わせて変容していく政治体制をとっていくことが大切なのだ。私は考える。

蚕飼育体験談

高橋 純佳

蚕かいことは、チョウ目(鱗翅目)カイコガ科に属する昆虫の一種である。桑の葉を餌とし、絹の元となる生糸を出してまなき蛹の繭を作る。有史以来から人間と共に生きてきた虫である。完全に家畜化され、野生にはおらず、そもそも野生に帰る気のない虫だ。この野生回帰能力のなさは面白いものだ。どこからでも逃げられるような籠の中でも逃げようとせず、例え餌え死にしようなときに餌がその場になくても探しに行かず、じっとその場にいるのだ。さらに体色が白色であるため鳥にすぐに見つかってしまう。なんなら見つからなくても、餌の桑の葉にさえまともにくつつくことができず、風に吹かれるだけですぐに地面に落ちてしまい死んでしまう。成虫も体が大きいこと、羽の筋肉があまり無いため羽ばたくことはできても飛べない。餌も他の蝶や蛾のように他に食べる餌がなく、桑の葉しか食べない。こんなやる気のないような面白い虫は他にいろいろあるだろうか。私はこいつだけだと思う。

そもそもこのような虫になってしまったのは人為選択の結果である。養蚕の歴史は少なくとも五千〜六千年前からあり、それよりも前にはじめの一步があったと考えられている。元はクワコという虫であったが、すでに多くの形質的に別の虫となってしまった。長い歴史の中で人為選択されてきた蚕は、大量に絹糸を生産できるように進化・適応していったためである。まず、この大量生産という点だが、絹の主要成分であるフィブロインとセリシントタンパク質で、これらは四つの主要アミノ酸から成り立っている。蚕にはこの主要アミノ酸合成に必要な HNA (タンパク質を生産する司令塔に情報を伝達する役目を持つ) の遺伝子セットを準備している。この HNA 遺伝子が進化の過程で遺伝子重複によりコピー数を増やし、短期間に大量の絹の主要成分のタンパク質の合成を可能にする特異的な能力を持ったため、これを可能にしている。

蚕が餌を探し回らずじっとしているのにも訳がある。蚕には嗅覚、味覚受容体等の化学感覚受容体の数がほかの昆虫よりも少なく、味覚受容体と嗅覚受容体はまばらに散在している。このことから桑を食べることに特化しているということ

ではなく、自らで桑を探し求めて動くこともなく人によって完全に飼育されるということ、産卵場所を選ばず一か所にすべて産卵するという野生にはない完全な家畜化の結果である。よって元の野生のクワコの知覚受容体遺伝子の進化に人間の完全飼育が多大な影響を及ぼしていることがわかる。

そんな人間に飼いならされすぎた蚕だが、私も今年の春に飼ってみたのだ。最近では、個人で買えるところがあるようだ。そもそも飼い始めるきっかけとなったのは去年の大学の生物実験だった。一年生のときに基礎生物学実験という名の科目の必修講義であった。去年の講義はというと、全てがオンラインでの授業であったため、実際に実験を行うということはとても残念がらなかった。この講義の実験だけは本当にやりたかくなってまらなくて悔しかった。とにかく、この講義の中に蚕の解剖実験があったのだ。そのときに蚕の話を聞き興味を持った。さらに幼虫と成虫の写真を見せられた。とにかくかわいらしいのだ。そんなことで興味とかわいさからいつかは飼ってみたいと思ったのだった。そうしてこの話を思い出した早春。暖かくなるのを待って、飼うことになっ

た。

届いたのは三齢、だがあと三、四日で脱皮して四齢になるらしい。飼育容器として底がそこまで深くない適度な大きさの段ボール。次に餌は人口飼料を使った。この人工飼料は、桑葉の粉末、脱脂大豆、デンプンをメインにその他栄養素で作られている。桑の葉の供給方法や保存を考えるとこちらの方が大分手軽で良い。この日の蚕は餌に群がり食べていた。

飼い始めて二、三日、ずっと餌ばかりを食べている。我々人間にこんな生活できやしないし、耐えられないだろうと考えながら見ていた。段ボールの上は開けっ放しにしているのだが、本当に逃げようとしないう。餌のそばや上で生活しているだけだった。四日目になり餌を食べずに体を反り上げてじっとし始める。この状態の蚕は「眠」というらしい。これが見える。今まで餌を食べる姿をずっと見せてきたのと同じに見える。今までは若干心配してしまおう。だが、その心配もなくなるものだから若干心配してしまおう。だが、その心配もすぐに晴れる。次の日になって段々と動く個体が増えてくる。体も来た日から少しだけ大きくなっているように見え、食欲

は目に見えるように増えてきている。餌を上げる頻度も一日おきとなってくる。

飼い始めて十、十一日目くらいからまた眠状態になり始める。五齢が終齢のため、これが最後の脱皮である。体の大きさは飼い始めてから一・五倍くらいだろうか、とにかく食欲と比例して大きくなっている。体が一週間半でここまで大きくなったのは人差し指の第二関節くらいの大きさを見ているからこそ親の気分になってなんだか感慨深い。

脱皮が終わり、眠りから覚めた蚕たち。餌を与えるとき、餌の量の目安が書かれた資料があり、それを参考に量を与えるているのだが、五齢の二日目に前の日の四倍もの量を与える必要があるのだ。本当にこんな量を食べるのか？と疑問に思ったが、この量を与えた翌朝、全部平らげられていた。しかもその日になってから体の大きさが二回り以上大きくなっていった。いくらなんでも大きくなるのが早くないか？食べる量は、アゲハチョウの幼虫を観察していてもわかる。四齢から終齢にかけて食欲が旺盛になるのだ。これが本当に目に見えるようなものだからこそ私は驚いたのではないかと思う。そ

の次の日はその一・五倍の量を一日で平らげた。この終齢の間で本当に体がとても大きくなった。最初と比べて三倍以上の体の大きさとなった。

終齢になって五日目、この日一匹段ボールの外から脱走しかける。ついに繭を作る準備をし始める。この日を境に動き始める蚕が増え始めてきたため蕨（まぶし）に移動させた。三日くらいで全員移す。その間はほっておいてもどうにかなるだろうと高をくくっていたのだが油断した。一頭につき一個の個室に繭を作ってもらうのだが、一頭が繭をその場所に作っていると同時に同じ場所ですばに作ろうとしているのだ。空き部屋はあるのにも関わらず。不法侵入だぞ。翌朝覗いてみれば手遅れの状態のものもある。繭とほかの繭が合体した状態になっていた。孵化する時が怖い。蚕が繭を作っている時、音がするのだ。カリカリ、チリチリ、カシカシ、キリキリ。そんな音だ。糸を口から吐き出して壁に貼り付けて補強している音が聞こえるのだ。この音はとても心地よかった。そんなこんなですべての蚕が繭を作り終わり、立派な成虫になるのを夢見て眠っていった。

一か月後、ついに繭から成虫が出てくる。蚕は繭から出てくるときに口から繭を溶かす液体を出して外に出る。だから出てくるときはわかりやすい。さらにカサカサ動いている音がする。頭が出てきて楡形の触覚とフワフワの毛、つぶらな瞳が見えてくる。すごく可愛らしい。体が全て出てきて羽が広がるまでじっとする。体は幼虫の時と比べて本当に小さい。あの体の一部はいいどこにいつてしまったのか。この体の小ささも相まって本当に愛しい。この日から一頭、また一頭と次々に出てくる。同じ個室に作り、繭が一つになつてしまった蚕も無事で、心配で繭を開けて見てみた。すると驚いたことに壁をしっかりと作っており、一個の繭に二部屋できていた。その繭を作った蚕二頭も無事に羽化をした。初めの一頭が出てきてから数日はオスしか出てこなかった。これは全部オスなのかと思ひ始めたとき異変が起きる。ある一頭に蚕が羽化したときに、かえったオスたちが飛ぶことができない羽を一齐に羽ばたかせ落ち着かない状態で飼育ケースの中を歩き回る。そう。雌が羽化したのだ。今までじっとしていた蚕のオスたちが騒がしくしていた。羽化してすぐにフェロ

モン分泌腺を出し、フェロモンを出していた。命をつなこうと必死なのだ。ケースの蓋を開けたところ脱走しそうになる。とにかくメスの方に行こうとしていた。大人しかった蚕が急に騒がしくなるのがとても面白かった。

全ての個体が羽化した後交尾する様子も観察しなかったのオスとメスで別のケースに入れた。すると二〇分くらいですぐに交尾に入った。ただ継続時間が長く、六時間以上もずっとくっつきっぱなしだった。調べてみると自らで体を離すことができなくなる場合もあるようで、人間の手を借りないとダメな時もある。交尾まで人間に頼る気か。

蚕の飼育を終えて、感じたことはとにかく人間がいないと生存できないような虫だということを本当に痛感した。交尾でさえも体を離すことができず死んでいく個体もあるのだから。さらに幼虫も本当に弱く、人間が直接手で触れると菌が付着して病気になる可能性があるのだ。ただ、人工飼料もあるため飼いやすい虫ではあると思う。幼虫も成体もどちらもかわいい。そしてとても面白い虫であることは確かである。また来年、今度は繁殖させることを前提に飼育してみたいと

思う。

参考文献：三田和英、カイコゲノムの全貌、日本公益社団

法人日本生化学会 <http://www.wwp-content/uploads/2013>

/11/31-05-02.pdf

お笑い

田中 音葉

この一年、アルバイトを通してお笑いを約二百公演以上見
てきました。一言にお笑いライブと言っても、漫才やコント
を披露するものだけでなく、いろいろな企画で芸人さんが笑
いを届けてくれます。アルバイトを始めるまでは、全くと言

つていいほどお笑いに無知で誰も知らない状態でしたが、今
ではネタ番組を見ても知らない人はいません。それどこ
ろが名前やコンビ名もスツと出てきます。自分でも恐ろしい
ほどに。

芸人さんたちはモーニングランブリやキングオブコントなど、賞

レースで結果を残すことが、売れっ子になるための程度
のルートになっているようです。そのために日々舞台でネタ
を叩いているのですが、生でお笑いを見る個人的なおすす
めポイントを紹介します。

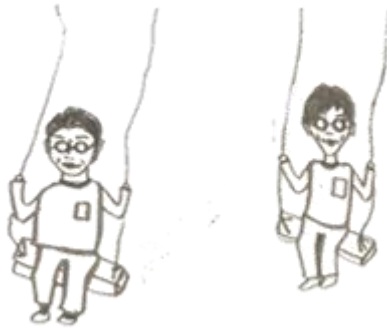
やはり生で見るのとテレビとでは面白さが格段に違います。
映像でしかみたことない人が目の前にいる感動ももちろんあ
りますが、観客の空気も相まって本当に面白いのです。テレ
ビだとカットされたり、出来上がったものを見てたりしてい
る感覚ですが、作られる途中経過やその場にあった面白さを
楽しむことができます。実際推しが出る舞台に毎回というほ
ど見にきている方もいるのですが、そのくらいその時しか味
わえないものを堪能できます。

こうして毎日のように見ていると、裏の部分や素の部分を
見ることができるようになります。まだ一年しか働いてい
ませんが、結果を出していく芸人さんは真面目で良い方ばか
りだと感じます。もちろん、私生活から破天荒な方もいま
すが、それがおもしろかったりもします。

働き始めてから特にときめいた事があります。コントのはじ

め、ある芸人さんが暗転時にお辞儀をしていました。照明は真つ暗なので観客にはあまり見えません。大体はネタが終わった後には皆さんお辞儀をしています、表では見えてないところでの誠実で感謝の気持ちが見えてくつときます。推せます。

こういった些細な経験をたくさんできる職場なので、どんな好きな人が増えて大変です。面白いと感じるものも増えてきます、皆さん本当に多彩です。私も舞台の勉強をしているので、ジャンルは違えども、とても勉強になります。もともと才能がある方はもちろん、努力で技術を身につけて勝ち上がっていく方も沢山います。お笑いも演劇や舞踊と同じ、芸術だなと感じます。十年、はたまた二十年も日が当たるまでやり続ける、そのくらい強い精神を持って努力していかなければなりません。そうして確実に積み上げていく人達を身近で見れる環境で、刺激と笑いをたくさん吸収しています。皆さんにも劇場で思いつきり笑える楽しさを一度は味わって欲しいです。自分で思っているより、笑いは人間に必要なものかもしれませんね。



大学院生活

明治大学大学院 理学研究科 機械工学専攻

趙顕建

今年の三月に明治大学の理工学部を卒業して、四月から大学院に入学しました。他の国で、母国語ではなく、違う言語、違う文化で勉強するのは中々簡単なことではなかったと思

ます。特に、大学の授業を受けても、一発で理解が出来なく、課題に取り組む時間も現地の人と比べて、三倍以上かかりました。スピードが遅いのは仕方ない問題なので、普段は遊ぶ時間や寝る時間を減らして、授業が終わったら、筆記した授業ノートを持ち、図書館で復習をしながら授業内容を理解しました。学部3年の時は、週2回以上徹夜して、朝、鳥の鳴き声を聞いて朝になったのを気づいたのはおそらく一生忘れない思い出として残ると思います。しかし、苦勞した分、それなりに得た物は多く、結果、卒業まで一回も再履修なしで百五十単位を取りました。4年間頑張った経験は今後、どんな厳しい環境が来ても、生き残るノウハウを習得し、自分の道を行ける自信の原動力になると思います。

私が考えている留学の一番のメリット、同時に一番のデメリットでもあるのは、自分一人の時間が非常に多いことです。家族と離れて、今まで住んでいた環境から全く違う環境で人間関係の幅も新たに構築され、新しい生活をするので、自動的に一人の時間が増えていきます。一人の時間が多いため、

一人でいるのが慣れない人の中には、この時間を無駄に使ってしまう人もいるし、留学を途中で辞めて、帰国する人もいます。しかし、人の人生の中で、こんなに時間が多い時期は今後、中々来ないと思います。自分が本当にやりたかったこと、例えばそれが勉強や研究やバイトであっても、本気で夢中のできるのが可能である時期だと思います。私の場合は、大学1年から、この時期を自分が本当に何が好きか、自分が何について向いているかについて探求することに決めました。学業は基本的に充実に取り組み、コロナ以前の時期には日本全国旅行、世界旅行、日本企業での長期インターンなど数えきれないほど色々体験しましたが、結局、私は今後、三十代、四十代、七十歳になっても、新しい知識を学び続け、グローバル的にも活動し、どんな時代がきても代替不可能な存在、年を取りながら成長する人になりたいという結論になりました。そのような人になるためには、まずはジェネラリストではなくスペシャリストになるのが良いと判断して、大学院に進学することを決めました。

院生になったのは約半年ですが、大学院生活は学部生活と

は色々な観点で違いました。学部生の時は、理系文系を問わず、メインが授業を受けて、授業単位を取ることでした。理工学部の場合は、学期中には実習や実験が多く、四年生になったら、卒業論文で中々忙しい学校生活を過ごした記憶があります。一方、大学院生は、メインが研究で、授業は自分の研究に役立つ授業を履修するか研究室の同期生が履修している授業と一緒に履修するかなど、自由に選ぶことができ、成績算出方法としては、学部時代の授業の中間テストや期末テストの代わりに、授業中に実習した課題のレポートを提出したり、授業に関連がある参考論文を調査して、発表する課題が多くありました。メインの研究に関しては、自分が所属している研究室で行われている研究テーマの中で一つのテーマを選び、選んだ研究テーマに関して修士の場合は二年間研究を行います。その研究が何に役に立つか、研究の最終目的は研究テーマによって異なりますが、最初から新しい理論を考えて、その理論が正しいことを証明する人もいるし、先行研究より良い方法を自分で探して、その方法で効率の良く、求めたいパラメータから研究の最終目標まで達成できたら、自

分のアプローチは正しかったと言えるでしょう。どんなアプローチをするかによって、研究の方向性が変わりますが、一般的には、アプローチが良いか悪いかについては自分の指導先生が評価してくれます。

研究が進まない週もあり、実験を失敗する時もあった、大学院生に必要なのは「根性」であると思います。しかし、根性を持って自分の研究に再挑戦をやりながら自分自身が成長したと感じられるいくつかの点は、どんな条件で、パラメータは何に設定して実験を行うかなどを繰り返し返して頭の中で考えると、思考力が以前より深くなることです。また、研究をしなから気づいた点や発見した点を自分が完全に理解しても、それははじめて聞く相手に簡単に理解させるためにはどのように伝えれば良いか、その説明が論理的であるかをもう一度検討するので、論理性が高まることもあります。

祝二十歳

土橋 奈央

私は今年の四月に誕生日を迎え、二十歳となった。大人への仲間入りだ。「早く大人になりたい」とずっと感じていて、自分はどうのよう大人になるのだろうかとう想像したこともある。それくらい「大人になること」に対して、憧れを抱いていた。

だが、二十歳になって、正直私が感じたことは「何も変わらない」ということだった。これは大人になった自覚が無いという訳ではない。大人になってできるようになることもいくつかある。例えば、飲酒や喫煙、国民年金への加入。取得可能な免許や資格も増えた。でも私は、お酒はあまり飲まないし、煙草は吸わないと決めている。国民年金の支払いは免除しているし、新たに取得可能になった免許や資格を取る予定もない。

色々考えた結果、大人になって変わったこと、私に求められることは「責任をとる」ということと「社会に貢献する」

ということだと思った。

未成年の子が何かを起こしてしまっても、代わりに両親や周りの大人が責任をとってくれる。だが、これからは全て自分で決め、行動していかなくてはならないからだ。

そして、私は今、大学で授業や実習を通してたくさん学び、バイトに行き、友達との時間を過ごし、趣味活動もしている。毎日が楽しく、とても充実しているが、正直この生活をすることで精一杯だと感じている。私が尊敬する人たちのように、誰かの支えになったり、全て自己責任の上で生活したりすることには、まだまだ遠い。

そんな私に今できることは、二十年間支えてくれた両親、進路先で悩んだ際に心を砕いてくださった先生方、部活動の先輩や後輩、そして友人に支えられて、今日まで生きてこれたことを理解し、感謝をすることだと思った。

この感謝の気持ちをお忘れずに、残りの約二年間、自分の夢に向かって挑戦し続けたい。そして、必ず夢を叶える。その後、支えてくれた方々に恩返しをして、社会に貢献できるような人になりたいと感じている。これまでもこの先も、多

くの苦勞や失敗、理不尽な場面を経験すると思う。困難に負けず、自分の力を信じてどんなときも前進していきたい。

芸術鑑賞のすすめ

中村 真子

本稿では大学で芸術を学んでいる筆者が、芸術鑑賞のすすめについて書くことに挑戦しようと思う。その前に、まずは筆者自身今まで芸術とどのように関わってきたかということを示し上げたい。そのことによって、これから述べることは現実味に欠ける理想ではなく、芸術は我々の人格形成と実生活においてすでに大きな影響を及ぼしており、日常生活においても欠かせないものであると気が付いてもらえることと思う。

筆者は一般的な日本人と比べると、どちらかというところとマイナーといわれるような芸術に親しむ機会が多かったかもしれない。

ない。幼少期に始める習い事といったら普通はピアノやバレエだろう。筆者の場合、それはヴァイオリンであり、フラメンコだった。

ヴァイオリンを習い始めたのは、保育園児のときに、ニ教育テレビで放送されていた『クインテット』を見ていた影響が大きい。そのキャラクターである、ヴァイオリニストのマリアさんが好きで自分も弾きたいと思った。しかし、ヴァイオリンは想像していたよりもずっと難しく、練習は苦痛だった。小学校高学年のころ一度やめたが、中学生になってクラシック音楽やヴァイオリンの音色の魅力によりやく目覚め、もう一度演奏したいと思った。それ以来今に至るまで細々ただが続けている。

フラメンコを習い始めたのは、親の影響で小さい頃から見聞きしていたせいもあるが、習うとはつきり決めたのは、あるダンサーのパフォーマンスに魅了され、自分もあんな風に踊りたいと思ったときだった。筆者は振り付けを覚えること

が苦手で、心からダンサーになりきれいでいなかったために全く上達せず、受験生になってやめた。しかし今でも、いつかまた歌ったり踊ったりしたいと心の中では思っている。そして、現在はフラメンコに限らずスペイン舞踊に興味があり、中でもホタ (Jota) という舞踊のとりこになっている。スペイン舞踊について少し触れるが、スペインは舞踊が盛んであり、地域ごとに様々な舞踊が、至る所で事あるごとに踊られている。これらの舞踊はクラシック音楽や他の国の舞踊などにも影響を与えている。このスペイン舞踊に関心を持ったことが、筆者が大学で芸術を学びたいと思った動機の一つである。

芸術に関する技術の習得も学問としての学びも、一朝一夕にできるものでは決していない。一生をかけても足りないくらいである。しかし、それでも人は芸術を通して表現し、世の人の心に訴えかけようとする。終わりが全く見えないのに、究めきれないのに探求し続ける。また、すばらしい芸術に心が動かされたときには、鑑賞者自身の創作意欲が駆り立てら

れることがある。自分の表現力に完全に満足できることがないとしても、芸術を通して自由に表現できることはどれほど幸せなことであるだろうか。他人の権利を侵害しない範囲で表現の自由が認められている社会で、個々の芸術家の創作活動 (有限) がその後の芸術家たちによって引き継がれることによってできた大きな潮流が途切れずに続いてきたことで、芸術は発展してきたのである。その意味でも、現在残っている芸術は人類の遺産であるのではないだろうか。

さて、これまで書いてきたような芸術との関わり方は全員にあてはまるものではないかもしれないが、民主主義国家に生まれた者なら今まで一切芸術に触れてこなかったという人はめったにいないのではないだろうか。どっぷり浸かってこなかった人でも、美術館や演奏会に行ったり、映画を見たり、地元の祭りや神社の行事などで雅楽や舞などの伝統芸能を見たり、テレビやインターネットで芸術文化に関するコンテンツを見たり、有名な建築を見たり、工芸品を買ったりしたことはあると思う。意識していないだけで、実は芸術は身近に

ある。

ただ、「芸術」という言葉の響きには恐縮してしまおうという人は少なくない。芸術は生きる上で不要と言われることもあるくらいだから、自分とは無関係だと思っている人もいるということだろう。芸術は高尚でぜいたくなものだから生活に余裕がある限られた人々だけがするものだと思っっている人もいる。たしかに芸術にはそのような側面がある。縁がない世界だと思ふときもある。パトロンがいなければ成り立っていなかっただけの芸術もさらにある。現代になるにしたがってそのような作品が一般人にも公開されるようになり、民衆が楽しむために作られたものも増えた。ここで勘違いしてはならないことは、芸術は楽しむために生まれたものではないということである。元をたどれば、芸術は洋の東西を問わず、宗教的儀式が起源である。酒神ディオニュソスにささげる祭典として始まったとされる古代ギリシャの演劇や、日本の芸能の始まりとされる、天岩戸にたてこもった天照大神を誘い出すために舞った女神天鈿女命（あめのうずめのみこと）の神話は

有名である。字の読めない民衆に教義を伝え信仰心を抱かせるために作られた宗教美術や宗教音楽は、時を越えてもなお多くの人々を癒しているし、伝統芸能には土着の信仰や宗教的価値観が色濃く残っている。芸術と宗教は昔から切っても切れない関係にある。宗教と日常的に関わっていない人や、宗教に関する知識がない人にとっては、このような面がある芸術作品は到底理解できないし近づきがたく感じるだろう。

だが、こういう経験はないだろうか。全く背景を知らない初めて見た（聴いた）作品なのに妙に印象に残ったり、感動したりする。芸術は特定の時代や地域、民族などだけに通じるといった制限がある一方で、感じたり思ったりすることににおいては自由である。感情はコントロールできないから、感動するときは感動するし、しないときはしない。他の人が良かったと言っても、自分にとってはそうでもないときもあるし、逆もまた然り。状況によって、時間の経過によっても感じ方は変わる。意味がわからないものだったとしても、次に鑑賞したときからなぜか親近感を感じるようになるものもある。

る。作品の背景を学ぶことでその傾向はさらに強くなるのである。

そもそも芸術作品というのは、鑑賞者は何を思うのも自由だが、簡単には理解できないものである。だから、多くの場合、技術面で感動してもその作品の内容に心動かされることはあまりないというふうにも考えられる。(もちろんただ楽しむ分には自分の好きなように鑑賞すればよい。)芸術作品を理解しようとするときには、自分に元から備わる感覚や価値観だけを頼りにすると危険である。これは異文化理解にも言うことであるが、異文化間コミュニケーションにおいてはそもそも常識が異なるため、自分の中の当たり前は通じないことが多い。違和感や時に嫌悪感を覚えたりすることは避けられない。芸術作品に対してつまらないと感じたり、好きではないと感じたりするのも同様のことが言える。つまり、そのような感じる作品は、自分の美的価値観から遠く離れているものである。

では、個人の感性や美意識はどのようにして培われるのだ

ろうか。言うまでもなく生まれ育った環境によるものが大きい。同じ文化圏や文化的に近い民族の芸術や、身近な文化には共感しやすい。芸術家のバックグラウンドに通じるところが多いからである。家族や友人など周りの人の美意識にも影響されやすい。(実体験を述べると、筆者は母とずいぶん好み が似ており、筆者が好きになったアーティストについて母に話したら母もファンだったことが分かり驚いたことがある。しかも一度ではない。)一方で、なじみがない文化には当然ながら親しみにくい。また、普段から芸術に関心のない人は、様々な芸術作品を多量に鑑賞することが少ないため、「ストライクゾーン」が狭くなる傾向にある。芸術鑑賞に求められる個人の感性は、自分の理解の範疇にない作品に接することで徐々に培われていくものでもある。

感性を磨くことや自分の美的価値観を確立していくことで一体何が起ころのだろうか。芸術鑑賞においてより多くのことを感じ取れるようになる。作品が内包する葛藤などの複雑な感情の起伏など様々な物事に向き合うことによって、鑑賞

者の人間理解が深まっていく。一般的に芸術家というのは人よりも感性が強いと言われる。その芸術家もつ世界観には、人々を惹きつけるほどの強いエネルギーが存在する。このエネルギーは人の心を動かし、時に社会を変えるほどの力になる。また、芸術鑑賞を通して養われた感性は、社会の変化に對しても敏感である。社会に對して、また他人に對して鈍感であればあるほど、世の中は厳しく冷たくなるのではないだろうかと筆者は恐れている。

話を戻すが、芸術作品に感動するという場合、それは作品や芸術家に對する共感によるものが大きいと筆者は考える。前述のとおり、芸術作品に對する好き嫌いは、個人の文化的背景によるところが大きい。つまり、作品の歴史的、社会的、または地理的背景や宗教との関わりなどを理解していれば、共感しやすく、反對にそれらを理解していなければ作品に對しても表層的な理解にとどまるのである。表層的な理解は作品に對する心からの共感にはつながらないのではないだろうか。

ここで、一筋縄ではいかない点がある。芸術作品の背景がよく分かっていないときでも、これはすばらしい作品だ、と琴線に触れることがあるということだ。筆者の場合、ヨーロッパに行つたこともなければどのような歴史があるのかもよく知らないというのに、ヨーロッパの音楽に魅了され、懐かしいとさえ感じてしまうこともある。また、初めて見た印象派の絵画を觀て、描かれた風景や人物がすでに知っているかのように親しみを感じることもある。それはなぜだろうか。筆者が懐かしさを感じる理由としては、音楽に関していえば、幼いころから親しんできたため、聴くと當時を思い出すからということが大きいかもしれない。そうではなく、時代も場所も価値観も何もかも違う作品を初めて鑑賞したときになぜ共感するのか。

筆者は、そこに人類の普遍的な感情があると思う。知らなはずなのに愛情や懐かしさを感じることも、自分とは全く異なる価値観を持つているのに共感することも、人間はみな同じ感情のはたらきがあるからではなからうか。

芸術作品には、文化的背景を異にする人々をつなぐという面が確かにある。芸術を学んでいる筆者としては、それがこちらの勝手な思い過ごしかもしれないと思うときもある。作品の背景にある出来事や思想を理解したいと思うのである。芸術に興味がない人からすれば、そこまで深く探求したいとは思わないだろうが、そのような人々にも芸術鑑賞は是非ともおすすぬめしたい。芸術鑑賞は楽しいものとは限らない。人間の弱さや醜さが前面に出ているものもあり、目を背けたくなるような作品もある。そのような意味で娯楽とは異なるが、人間の核心に迫ることで人生に対する姿勢が変わっていく、おもしろい体験であるはずだ。特に、人との関わりが希薄になつていゝ現代人にとつて、芸術鑑賞は、鑑賞者と芸術家との精神的な交流を通じて人間への理解、ひいては人類に対する愛情、憐憫の情を生じさせる心の拠り所になりうると筆者は考ゑる。

「ロボット」は道徳的？

西尾 穂臣

こんにちは。今回の方舟の執筆にあたり、私の大学生活についてつらつらと述べようと思つたが、たいしたことはしてゐなかつた。そのため、私が授業で関心を持つたロボットと道徳について調べ、ロボットは道徳的といゑるのか、自分の意見とともに述べることにした。二十歳になり、そろそろ関心を持つたことについて調べ、まとめ、伝えるという経験をするこゝも大切であると感じたため、今回このようなテーマで執筆していく。

まず、「道徳的」とはどのようなことか明確にしていく。「道徳的」には異なる意味が二つ存在している。一つ目は「道徳的な観点で評価することが適切」という意味である。二つ目は「道徳的という次元で考ゑて肯定的に評価できる」という意味である。この二つはお互いにお互いを含意せず、全く別のものである。前者は、道徳的な評価の対象であるかどうか重要である。つまり、ほとんどの場合、基準が人間である。

しかし、後者は、道徳的に善い、あるいは、悪いと区別するものである。必ずしも道徳的にふるまう主体が人間でなければならぬわけではなく、人間が適切な基準とはならない可能性もある。

つまり、「倫理的振る舞いが可能なロボットを作ることが可能だと想定し、その時、ロボットは『道徳的行為者』としてとらえられるのか」という題における「道徳的」は、後者の「道徳的」という次元で考えて肯定的に評価できる」という意味であると考えられる。ただし、倫理的立場によつてはこの二つはかわりを持つことはあるということは注意しておく。

正しさの基準として、まず、帰結主義があげられる。行為の正しさを動機ではなく帰結、すなわち結果で判断するという考え方である。さらに、帰結主義における特徴のひとつに功利主義という考え方がある。功利主義では快樂や幸福を善とし、不快や不幸を悪とする幸福主義であり、ベンサムが主張したように「最大多数の最大幸福」に重きを置いている。

その行為を行うことで、全体の幸福をどれだけもたらすかが重要とされるのである。さらに、ひとりとはひとりとして恩恵

を受けるといふ公平性が存在する。例えば、自分の家族だからといって待遇が変わることはなく、ただ一人として数えるほかないのだ。つまり、功利主義に言わせれば、道徳理論は意見の正当化に過ぎず、明確な尺度を持たないものでしかないのだ。だからこそ、帰結という明確なものから正しさを図ろうとするのだろう。これが、帰結主義的な正しさの基準であり、幸福の増大こそが正しさとしているのである。

一方、帰結以外にも重要なものがあるという立場もある。その例として、カントの義務論がある。義務論における正しさとは、道徳的義務に従うことである。例えば、人を殴つてはいけない、や、うそをついてはいけないなどがある。では、果たして功利主義とは何が違うのか。功利主義的に考えれば、結果がすべてであるため、周囲に結果として現れ感知されなければ仮にうそをついてもよいのである。しかし、義務論においてそれは許されない。どんな帰結になろうとも、その帰結によつて行動の正しさが決まるわけではないという。

つまり、功利主義と義務論の違いは、正しさを行動の結果に基づいて判断するのか、それとも、道徳的義務に基づいて

判断するのか、という点にあるといえるだろう。したがって、義務論においては功利主義のように同じ行動であるのに帰結によって正しさが左右されることはないのだ。

「道徳的」の意味を明確にし、正しさの基準について二種類の考え方を提示したところで、「倫理的振る舞いが可能なロボットを作ることが可能だと想定し、その時、ロボットは『道徳的行為者』としてとらえられるのか』という問題についての意見を述べていく。

先に主張を述べると、私は倫理的に振る舞うことが出来るロボットは「道徳的行為者」として捉えることはできないと考える。

まず、今回定義した「道徳的」の意味は、「道徳的」という次元で考えて肯定的に評価できる」であった。そこに基づいて考えると、帰結というものは道徳的という次元で考えることはできないと私は思う。「道徳的」という次元」とは、そもそも人間の内側にしか存在しないものではないだろうか。帰結とは人間の心の内にあるものではなく、ただの事実でしかない。つまり、私の考えでは道徳的という次元を帰結主義的に判断

することはできないのである。したがって、私はカントの主張した義務論的な考え方に基づいて正しさを判断する。

次に、義務論的に考えるところとして、倫理的に振る舞うことが出来るロボットを「道徳的行為者」として捉えることがなぜ出来ないかという話になる。今回の仮定として、ロボットが倫理的に振る舞うことが出来る、となっている。仮にそのロボットが倫理的に振る舞うことが出来たとしても、それはロボットがそのようにプログラミングされているからではないだろうか。例えば、そのロボットが道で老人が倒れているのを発見したとする。そこで、ロボットには二択の選択肢が与えられる。一つ目は老人に対して何もしない。もう一方は、老人を救う。大まかにこのふたつに行動を分けることが出来るだろう。この時、ロボットはこのふたつの選択肢を天秤にかけ、どちらが倫理的であるかを判断した結果、老人を救うという行動をとると予想される。もちろん、帰結主義的に考えればこの判断をしたロボットは道徳的行為者であるといえるだろう。しかし、私は正しさの基準を義務論的に考えるため、そうは考えない。このロボットはたしかに倫理的行動を

とったとはいえるが、それはいくつかの選択肢を天秤にかけ、どちらが倫理的かを判断した結果、取るべき行動を選択しているのではないだろうか。倫理的判断が可能であっても、そのロボットに感情があり、思考しているわけではない。道徳的行為とは、あくまでも素直な自分の本能に基づいた行為のことであると思う。行為を天秤にかけた結果の行為は果たして道徳的行為と言えるのだろうか。私はそうではないと主張する。つまり、私の主張としてはロボットが倫理的判断を可能としても、それは選択肢を比較した結果倫理的な行為を選ぶに過ぎないため、倫理的に振る舞うことが出来るロボットを「道徳的行為者」として捉えることが出来ないのである。

先に述べたように、私は倫理的に振る舞うことが出来るロボットは「道徳的行為者」として捉えることはできないと考える。私は道徳的の意味を「道徳的」という次元で考えて肯定的に評価できる」と明確に定め、正しさの基準を帰結主義的ではなく、義務論的に考えた。そのため、ロボットに倫理的な行動が可能だとしても、それは行為を天秤にかけている

に過ぎないため、それを道徳的行為とは言わないのだと私は考える。

こんな感じで私なりの意見はまとまったが、みなさんはどう考えただろうか。皆さんにとって、道徳について考える有意義な時間であったことを願う。

あの日を忘れない

西巻 未祐

防災の日に東日本大震災の津波の映像を見る授業があるのだが（こういう授業が他県でもあることなのか気になる）、決まってどこかで嘔り泣く声が聞こえる。先輩、同級生、私を担当してくれた先生の中には震災によって大切な家族や教子、友人を亡くした人が一定数いる。先生の中には、当時気仙沼で教師をしていたために語り部として、震災の話をしに行く人もいる。

こういう人たちに比べてしまえば、私が経験したことなん

でとてもとても小さいことだと思ふ。私は小学校の木造校舎は使えなくなつてしまつたものの家がなくなつたわけでも、家族や友人を亡くしたわけでもないから。でも、一千年に一度の地震を経験した一人として、なにか伝えられることがあるのではないかと感じている。

当時私は小学校二年生だつた。あの日、先生たちが卒業式準備に追われていたために通常より早く授業が終つた。そのため私は即帰宅し、四時半から始まるピアノ教室に向けて練習をしていた。二時四六分、母が私に大好きなロールケーキを用意してくれた。「食べる〜!」と言つて私がピアノの椅子から立ち上がった瞬間、緊急事態速報が鳴つた。揺れが大きすぎて、立つことができなかつた。それでもなんとか這いつくばつて、机の下に隠れた。家の中では沢山ものが割れたり、倒れたりしている。家にヒビが入る音もする。一週間ほど前に起きた震度五強の地震よりも明らかに大きかつた。(生まれ、生まれ)心の中でずっとそう願つても、なかなか地震が止まることはなかつた。母と一緒になんとか裸足で外に出た。電線や木が異常なほどに揺れている。小二の私でも

これが異常事態だと悟つた。長かつた揺れがようやく収まつて、家に入るとキッチンには食器が散乱し、父の部屋の大きな筆箱は倒れ、母の全身鏡は粉々に砕け散つていた。沢山の人が安否の電話を入れたのに、電話は全く繋がらない。情報があつても停電で、テレビがあつた。本当にパニックだつた。その間も震度五程度の大きな余震が続き、不安を一層掻き立てた。地震が多過ぎて揺れているのか揺れていないのかわからなくなり、車酔いの感覚に晒された。あんなに食べたかつたロールケーキは恐怖で喉に通らなかつた。三月一日のことはそれ以上覚えていない。

次の日から私は両親と食料を買いにスーパーやコンビニに何時間も並んだ。コンビニは停電していても寒く、沢山の人が何日もお風呂に入れてないため、密集した店内は具合が悪くなるほどひどい匂いがした。我が家のガスや水は一日、二日で復旧したが、停電は一週間も続いた。父の友人が届けしてくれた蠟燭と懐中電灯を使って家族で協力しながら料理を作り、宮城の厳しい冬の寒さに耐えるため毛布にくるまって生活した。

私は最近ある本を読んで、「逆視」という言葉を知った。悪いことには必ずいいこともついてくるという意味だ。東日本大震災は多くの人が亡くなり、私が生まれて死ぬまでの間では最大規模の災害だと思う。その災害の逆視を考えることで不快に思う方もいるかもしれない。でもあえて震災に逆視を使うとしたら、私は当たり前が当たり前であることの偉大さと人と人との繋がりの大切さを知れたことをあげたい。

電気やガス、水道が使えること、毎日温かいご飯を食べられること、牛乳や卵などを滞りなく買えること……。当たり前すぎて気づくことができなかったが、震災を経験してそのありがたさに気づくことができた。

近所の方が自分の家も大変であるのにも関わらず、大丈夫ですか？と地域に呼びかけをしていたり、蠟燭や食べ物を届けにきてくれたり、先が見えない不安を抱えている人たちが互いに協力することで安心した気持ちになれた。県や国を越えて沢山のところから小学校に多くのメッセージやぬいぐるみが届き、顔も知らない人たちに沢山励ましてもらった。私たちは一人じゃないのだと強く感じることができ、人と人と

の繋がりは生きていく上で本当に必要なのだと再確認した。

私は塾の講師をしている。ある日担当している小学校四年生の子が、自分の親戚に東日本大震災を経験した人がいることをさもすごいことのように話して、思わず苦笑してしまった。なるほど、その当時この子はまだ産まれてなかったのか。そう考えるとすごく過去のような気がする。しかしながら宮城県の沿岸部では今も現在進行形で復興を進めている。震災が残した爪痕は本当に大きい。だからこそ決して風化させてはいけない出来事だと強く感じる。

私は今、大学の栄養学や化学の勉強と大学院へ進学するためのアルバイトに勤しんでいる。資格を取るだけではなく、農学の知識も磨き、沢山の引き出しを持っている食のスペシャリストになりたいからだ。そしていつか食物アレルギーを持っている子の災害非常食の開発など、なんらかの形で震災の教訓を活かした仕事をしたい。東日本大震災を経験したものとして、もう二度と同じ大災害を起こさないために。

発達障害について

橋本 広哉

私は、現在大学で発達障害について学習している。そこで関心のある発達障害の分野について一体どのようなものかを説明しようと思う。

まず初めに、発達障害とは何か。発達障害は生まれつき脳の発達が通常と違っているために、幼児のうちから症状が現れ、通常の育児ではうまくいかないことがある。成長するにつれ、自分自身のもつ不得意な部分に気づき、生きにくさを感じることがあるかもしれない。しかし、その人にあつたやり方で日常的な暮らしや学校や職場での過ごし方を工夫することが出来れば、持っている本来の力がしっかりと活かされるようになる。

そんな発達障害には、いくつかのタイプに分類されており、自閉症、アスペルガー症候群、注意欠如、多動性障害(ADHD)、学習障害、チック障害、吃音(症)などが含まれる。これらは、生まれつき脳の一部の機能に障害があるという点が共通

している。同じ人にくつつかのタイプの発達障害があることも珍しくなく、そのため、同じ障害がある人同士でも全く似てないように見えることがある。個人差がとても大きい点が、発達障害の特徴ともいえるかもしれない。

発達障害の種類に含まれる自閉症(自閉症スペクトラム障害)、注意欠如・多動性障害(ADHD)、学習障害(LD)の三つの発達障害について説明する。初めに自閉症スペクトラム障害について説明する。

自閉症スペクトラム障害とは：症状の強さに従って、いくつかの診断名に分類されるが、本質的には同じ一つの障害単位だと考えられている。典型的には、相互的な対人関係の障害、コミュニケーションの障害、興味や行動の偏り(こだわり)の三つの特徴が現れる。自閉症スペクトラム障害の人は、最近では約百人に一人〜二人存在すると報告されている。男性は女性より数倍多く、一族に何人か存在することもある。自閉症スペクトラム障害のサイン・症状：典型的にサインが現れるのは一歳台で、人の目を見ることが少ない、指さしをしない、ほかの子どもに関心がない、などの様子がみられ

る。保育園や幼稚園に入ると、一人遊びが多く集団行動が苦手など、人との関わり方が独特なことで気づかれることがある。

言葉を話し始めた時期は遅くなくても、自分の話したいことしか口にせず会話がつながりにくいことがしばしばある。また、電車やアニメのキャラクターなど、自分の好きなことや興味のあることには、毎日何時間でも熱中することがある。初めてのことや決まっていたことの変更は苦手で、なじむのにかかり時間がかかることがある。

思春期や青年期になると、自分と他の人との違いに気づいたり、対人関係がうまくいかないことに悩んだりし、不安症状やうつ症状を合併する場合がある。

注意欠如・多動性障害 (ADHD) とは：発達年齢に見合わない多動―衝動性、あるいは不注意、またはその両方の症状が、七歳までに現れる。学童期の子どもには「じじ」存在し、男性は女性より数倍多いと報告されている。男性の有病率は青年期には低くなりますが、女性の有病率は年齢を重ねても変化しないと報告されている。

注意欠如・多動性障害 (ADHD) のサイン・症状：七歳までに、多動―衝動性、あるいは不注意、またはその両方の症状が現れ、そのタイプ別の症状の程度によって、多動―衝動性優勢型、不注意優勢型、混合型に分類される。

小学生を例にとると、多動―衝動性の症状には、座っていても手足をもじもじする、席を離れる、大人しく遊ぶことが難しい、じっとしていられずいつも活動する、しゃべりすぎる、順番を待つのが難しい、他人の会話やゲームに割り込む、などがある。

不注意の症状には、学校の勉強でうっかりミスが多い、課題や遊びなどの活動に集中し続けることができない、話しかけられていても聞いていないように見える。やるべきことを最後までやりとげない、課題や作業の段取りが下手、整理整頓が苦手、宿題のように集中力が必要なことを避ける、忘れ物や紛失が多い、気が散りやすいなどがある。

多動症状は、一般的には成長とともに軽くなる場合が多いが、不注意が衝動性による症状は半数が青年期まで、さらにその半数は成人期まで続くと報告されている。また、思春期

以降になつてうつ症状や不安症状を合併する人もいる。

学習障害(III)とは…全般的な知的発達には問題がないのに、読む、書く、計算するなど特定の事柄のみがとりわけ難しい状態をいう。有病率は、確認の方法にもよるが「10」と見積もられており、読みの困難については、男性が女性より数倍多いと報告されている。

学習障害(III)のサイン・症状…全般的な知能発達には問題がないのに、読む、書く、計算するなど特定の事柄のみが難しい状態を指し、それぞれ学業成績や日常生活に困難が生じます。こうした能力を要求される小学校二〜四年生頃に成績不振などから明らかになる。その結果として、学業に意欲を失い、自信をなくしてしまうことがある。

発達障害は病気というよりも、持つて生まれた特有の性質(特性)と考えるのが最適だと感じた。また、発達障害は薬で治したりすることが出来ないことを知った。そのため、治療の基本は一人一人に特性に合わせた教育的支援(療育)で生活の支障を少なくする。発達障害のある人は、特性や障害が見た目では判断できない場合があり、周囲からの理解を得

にくいことがある。他の人が当たり前のようにできることができないことで叱責や否定的な評価をされてしまったり、できないことがあると自分の努力不足などと誤解してしまったりすることがある。このような体験が自尊心の低下やストレス、集団からの孤立などの二次障害を招く恐れがある。このことから治療のほか両親や兄弟、学校の先生など周囲の人々の協力、支え合い、理解、自分自身の工夫の四点が発達障害を持つ人々の生きづらさや二次障害の軽減に大きくつながるのではないかと思う。

もうすぐ大学生の折り返し地点ですね

橋本 結衣

私は日本史をAまで(ペリーが日本に来てから)しか学んでいないほど過去を振り返らない人間である。しかし方舟のネタを見つけることができなかつたため、これを機に自分の大学生活を振り返ってみようと考えた。そして残りの大学生

活をどう生きるかについて考えてみようかなああああ。

入学式でピラ配りに囲まれて、大学のかわいいお友達と空
きコマでウーバーイーツを利用して、インカレサークルに入
って、チャホヤされる女の子の特権を使いまくって、十一月
頃には彼氏もできて……！と思いついていた大学生活は一つも
できなかった。しかしコロナ禍であっても友達や先輩方のお
かげで素敵な出会いがあつて、憧れている人から直接刺激を
受けたり、自分の好きなように生きることの「楽」を教えて
もらつたり、無知やバカは危険だと知らず、まあちよつと怖
い思いもしたり、そんな時に人生そんな甘くないと叱りなが
ら助けてくれる友達がいたり、思い返せば大学生生活かなり充
実していて私の人生の中で経験から学んだことは大学生にな
ってからが一番多い。いろんな世界やいろんな種類の大人を
見ることができて、私はどんな人を追いかけて、どんな大人
になりたいか考えられるようになったと思う。

経験をした中で一番印象に残っているものは友達を羨まし
く思い、自分には何もないと感じて自分が嫌いになつてしま
つたことだ。しかしその友達の努力に気がつけて、人が持つ

ているスキルなんぞ努力して身につけた「自信」なだけで、
生まれ持ったスキルはないことを学んだ。また、ないものね
だりをするのではなく自分に合ったスキルを探して磨くこと
が大切だ、努力もせずに誰かのスキルを羨ましく思うことは
失礼だ、と学んだ。(顔が良い人はいいよなあつてよく聞け
どね、みんな頑張ってるんよ。素材をどう活かすかだよ。)(あ
とね、スキルを身につけるために無理する必要はないよ！甘
い話を持つて近寄ってくる大人の見分け方は大切！！さつき
書いたけど無知とバカは危険だよ！！私とんでもないバカだ
から説得力ないけど！とりあえず不安になったら周りをみ
な！)。

約二年間濃い経験ができて疲れることもあつたけれどすべ
ての縁が大切だと感じた。自分が歩んだ道に名前は残さなく
ても、いつか結婚して(彼氏いたこともないクセに。系のツ
ッコミは受け付けておりません。)おばあちゃんになった時に
孫に歩んできた道で得たものについて教えたいと思う。しか
し誰かに何かを伝えたい時は成功したことか失敗したことか
の二択しかないと聞いたことがある。どちらが良い悪いはな

いけれど、いまの私の場合は失敗したことしか教えてあげられない。だからゴ○ゲームだと感じている大学生生活の残りを第二章に突入していると考えて、もう一度頑張つて、攻略して、成功したことも教えられるようになりたい。そして大学生活も超えて*人生*を神ゲームだと言えるようになりたい。そのため「しんどい」の先に感動するほど眺めのいい景色があることを信じて、いま笑つてごまかしている失敗や挫折から抜け出し、スキルを磨き、自信をつけて、まずは自分の好きなように生きてみようと思う。

「本当に全部書いたら方舟におさまらないくらい、いろんなことがあつて。でもあと何も経験してないことは「恋愛」くらいだから来年こそ何かあるといいな。アーメン

飢餓をゼロに

松井 花音

私は農学部 of 生命科学科という学科に現在通っている。農学部という「将来農業をするの?」と聞かれることが多いが

そういうわけではない。特に私が所属している学科から農業に進む人は限りなくゼロに近いと思う。農学部なので建前上農場実習というものがあつたが、全学科の中で一番農場実習の日数が少ないのが私の学科である。ちなみに農場実習は夏休みの中盤に行われた。他の学科の多くは私たちが実験で苦しんでいる間に農場実習が行われている。この事実を知った時、農学部内でも忙しさに結構差があるという事に驚き悲しくなつた。せめて夏休み中に農場実習はやめてほしいと思つた。炎天下の中マスクをし、休日に駆り出されるのは結構つらい物であつた。農場実習さえなければもっと実家に帰省できたのにと恨めしく思つてしまう。

しかし、ここまで農場実習への悪態をついていたが私は生命科学科を選ばなければよかつたとは思っていない。授業自体は結構面白いと感じている。とくに植物の講義が好きである。また大学一年生では研究室紹介のような講義があり、私はSNSについて興味を持った。私は学校生活のとりとめのな話や感じたことを書くことは苦手であり、二千字も書けるとは到底思えない。そこでこの方舟にてSNSのうちのひとつで

ある「飢餓をゼロに」について考えようと思う。

まず、「飢餓をゼロに」を達成するには生産性を向上させ強靱な農業を展開することと、すべての人々が安全かつ栄養ある食糧を得られるようにする必要がある。そのためには「やせた土地で育てやすく雑草等にも強い作物を育てること」、「食物に含まれる栄養素を高めること」、「食物の病害耐性を高めること」が必要だと考えられる。ここでは日本の戦時中の飢餓を救ったサツマイモに焦点を当てて考えようと思う。

初めに、一つ目の項目である「やせた土地で育てやすく雑草等にも強い作物を育てること」についてだが、サツマイモはもともと栄養価の少ない土地でも育つためこの項目はクリアしている。

次に、二つ目の項目である「食物に含まれる栄養素を高めること」についてである。これは、ゲノム編集技術を用いたGMA 高蓄積トマトの開発と同様の方法でサツマイモに多く含まれる食物繊維やカリウムをさらに増加させることが出来るのではないこと考えた。またビタミンDであるアスコルビン酸の合成は光合成産物であるが出発点となっている経路があ

ることから、光合成が促進されればアスコルビン酸を多く含む作物の育成が可能になるのではないかと考えた。これによりこの項目はクリアされた。

最後に三つ目の項目である「食物の病害耐性を高めること」についてである。サツマイモに対する主な害虫はネグサレセンチュウやネオブセンチュウである。これらの線虫はニターチエニルという物質に弱いことが明らかにされている。そこで品種改良によりサツマイモの根からニターチエニルを分泌するようにすればよいのではないかと考えた。

また、植物の生育には土壌も深く関係している。サツマイモはやせた土地でも育つが多くの作物は、豊富な栄養を含む土壌でないと十分に生育しない。そのため効率的に作物を育てるために、作物収穫後の状態が良くない土壌や痩せた土地を補填できるような肥料の作成が必要だと考えた。通常、肥料に含まれている窒素は無機態窒素だが有機態窒素の利用によりアミノ酸が多く合成されたり作物の生育がより一層促進されたりする場合がある。なぜそのような違いがあるのかを研究することで効率的に作物を生産することが出来るように

なるのではないかと考えた

まとめると、サツマイモにおいて光合成促進によるアスコルビン酸の生産量増加やゲノム編集によるミネラルや食物繊維を多く含む栄養価の高い品種の作成とミターチエニル分泌のメカニズムを解明し、ゲノム編集や遺伝子組み換え技術を利用したミターチエニル分泌に関与する遺伝子の導入による病害に強い作物の作成や有機態窒素を活用した肥料の効果と作物の関係性の調査が「飢餓をゼロに」を達成する足掛かりとなるのではないかと考察した。

ここまで書いたが字数が足りない。大学の講義で学習したSDGsを大学で学習したのだからと無理やり大学生活という枠に押し込んだというのに字数が余ってしまった。正直、オンライン授業が多くサークル活動も禁止されていたのでまともな大学生活を送ることが出来ていないと思う。大学生活を送るうえで起こった出来事の数が圧倒的に不足している。私に書けることはせいぜいよく見るYouTubeとかおすすめの音楽とかその程度である。コロナ禍で家にいる時間が多くなっただけで音楽とかYouTubeとかスマホと仲良くする時間が増え

てしまったのだから仕方ない。おすすめの音楽とYouTubeがあればぜひ教えてほしい。思い描いていた大学生活と違うと常々思う。高校生になった時も「高校生ってもっと大人っぽいな」と思ってたんだけどな」などと思っていたので案外大学生活もコロナのせいになっているだけで実際は「こんなもん」なのかもしれない。

大学院に入って

玉川大学院 農学研究科 松井 共生

私が玉川大学大学院の修士課程に入学して、半年が経過した。今回はその所感を記したいと思う。

そもそも、大多数の人は大学院がどのような場所なのか知らないのではないと思う。私も、実際に研究室に配属される先輩や教授に話を聞くまでは、大学院について調べたことすらなかった。大学院で学生が行っていることを簡単に説明す

ると、大学院は各々が設定したテーマについて実験計画を立て、実験を行い、データを集め、そのデータを受けてさらに新しい実験計画を立てる、この繰り返しである。その過程でもし何か新しい発見があれば、学会で発表したり論文として公開したりする。大学院には修士課程と博士課程があり、修士課程の二年間だけでなくさらに突き詰めて研究をしたい人が博士課程に進学する。

さて、私が大学院への進学を決めた理由は、大学4年生になって初めて勉強の楽しさに気づいたからである。昨年は、新型コロナウイルスの影響で、長い時間実際に実験を行うことが出来なかったが、その分既往研究を調べたり、実験計画を立てたりする時間をたくさん得ることができ、それを楽しいと感じることが出来るようになった。その楽しい勉強をもっとしたいと思い、大学院の進学を決意した。

大学院にも、大学と比べたら少ないが授業があり、単位を取る必要がある。大学院の授業の特徴はそもそも学生の数が

少ないので、教員と学生の距離が近いディスカッション形式のものが多いところだと思う。さて、大学時代までの私は、指名されない限り授業中に発言することはほとんど無かった。しかし、大学院に入ってから教授たちとの距離が縮まったこともあり、積極的に発言することが出来るようになったと思う。そういう意味でも、大学院に進学できてよかったと思う。

大学院生活で授業以外の大半を占めるのが、研究である。

その中で感じた印象は、大学院が自由な場所であるということだ。自分で実験計画を組み立て、自分の好きなタイミングで実験をすることが出来る。もちろん、何でも好き勝手にやって良いという訳ではなく、定期的に教授と打ち合わせをして、その実験の意義や自分の状況を説明する義務がある。私は実験材料にホウレンソウを選んでいる。ホウレンソウは播種してから収穫まで一か月半かかり、実験も材料が揃うまではできないため、私の実験は二か月弱で一サイクルである。

この二か月弱で何か新しい成果が出れば良いが、最悪、失敗したり何の成果も得られなかったりしてこの期間が無駄にな

つてしまうこともある。その危険性を最小限に抑えるためにも、緻密な計画が必要になる。大学院は自由であると感じたが、それ故に自分の行動次第で数か月が無駄になってしまうことがあると学んだ。

実際に私が半年間どのように過ごしてきたかという点、残念ながら上手く行かないことの方が多かった。春に実際に実験を始める前に、植物を栽培するための装置の組み立てを行ったのだが、それに想像より時間をとられてしまい、実験の開始が遅れてしまった。また、実際に実験が始まっても、既往研究では報告されていないトラブルや機材の不調などにより思うように実験が進まないこともザラであった。それでも何回か実験を重ねていくうちに、世紀の大発見とは行かないまでも、ある程度のデータを得ることが出来た。今は、その結果を受けて新しい実験計画を構築しているところである。自分の実験内容をここで具体的に記すことはできないが、今までの実験の中で得られた傾向を、何故そうなったのかと調べることに、つまりメカニズムを調べるのが今の目標である。

しかし、今からやろうとしていることは、論文での報告がほとんどされていないことであり、実験が上手く行く確率は、今まで半年間やってきたものより低いと思う。だからこそ、これまで以上に勉強と計画の組み立てを頑張りたいと思う。

これまで、私が一生懸命に大学院の研究生生活に取り組んできたかのように書いたが、少し前にどうしてもやる気が出ない時期があり、そのことは周りの人にもなんとなく伝わったようであった。そんな時、教授から一枚の紙を渡された。それはいわゆるスケジュール表であり、一週間の初めにその週のいつに何をやるかの計画を立て、その横の欄に週終わりに実際に行ったことを書くという単純なものである。これは、教授が会社員時代に使用していたものであり、週の始めに予定を書くことでモチベーションを上げつつ、計画的な生活を送れるようになった。私は今まで日記の類を書いたことが無く、これを提案された時はめんどくさいようにも思ったが、実際にやってみると、想像以上に気が引き締まるのを感じた。

大学院に進学したことが正解だったか、今はよくわからない。しかし、大学時代と比べ、自分は確実に成長したと言いうことが出来る。残り一年半しかない大学院生活を、より有意義なものにしたい。

コロナ禍の夏休み

三浦 千尋

今年の夏のコロナの感染拡大は凄まじく、閉寮期間中、実家の会津に帰省した。

人口比から見れば会津も神奈川も感染率は大差は無いようだが、リスクは低いだろし、親から見れば自分の素行を信用していないのだろう。何だか拉致された感が拭えない。

ワクチン接種券が届いたものの、幾ら頑張っても予約が取れない状況の中、地元で居住地外接種が受けられるのを知った。渡りに船！手続きをすると大学の講義が始まった後になる…。悩んだ末、地元で受けることを選んだ。幸い講義は全てオン

ラインだ、なんとかなる！

来る日も来る日も蝉の合唱を聴きながら、巣籠もり生活を送った。愛猫プリンが自分を覚えていたのが何よりも嬉しかった。プリンとの昼寝は格別だ。たまに夕食を作ったり風呂掃除をしたりして貢献した。気が付くと季節が移り変わり、秋の虫が合唱している。秋かあ。

何だか随分長く地元に住ってしまった。

コロナ感染率がどんどん下がって行き、県内で0の日が出てきた。運動不足解消にサイクリングに出掛けてみた。時々散歩はしたが、高校の通学で慣れた道から少し足を延ばしてみた。段々辺りは薄暗くなり細い路地に入った。あつ！と思つた時は遅かった。道路脇の側溝に自転車ごと落ちた。弾みで自転車がかつ飛び、後から背中に自転車降ってきた。…。痛い！！暗くなり慣れない道の側溝に全く気が付かなかった。幸い自転車は使えそうだ。怪我也大したことがない。ラッキ

♪と思つたら…。
「あ？？？眼鏡がない！！！」

「俺のお気に入り眼鏡が……！」

……眼鏡は無惨な姿に変わり果てていた。使い物にならなかつた。シヨック過ぎる!! あつゝ

超お気に入り眼鏡だったのに……取り敢えず帰るか。気を取り直し走った。走れど何だか見たことが無い景色のような気がしてきた。その時、親から連絡がきた。

親「どこ」

俺「わからん」

親「は？」

俺「迷った」

気が付いたら隣の外れまで来ていた。眼鏡が無くて良く見えなかったのも敗因だ。

結局親に車で迎えに来て貰い何とか無事に帰った。

何だか良い事も思い出も何も無い夏だった。何も無いが思い出かも知れない。

思い描いたキャンパスライフは、感染率が減ったこれから戻って来るだろうか。

学寮が恋しく早く帰りたいと日々呟やきながら過ごした夏だった。

(編集註 本稿は寮生エッセイ巻末のスペイン語本文の本人による翻訳です)。

夜空に想えば

水越 創斗

「十年後、四十年後、棺桶に足を突っ込んだ時にこの寮のことを思い出してほしい。そんな寮にしたい。」

寮長が私によく言ってくれる言葉だ。この言葉を聞いたたびに、四十年後の私はどうなっているかを考える。私が方舟を執筆するのは二回目だが、実は一つのテーマをもって書いている。それは未来の自分に向けて書いているということだ。去年は自分の進むべき道をしつかり歩いて行けるように、そういう文章を書いた。さて、今回は何を書こうと考えた時、人生という道に困難が訪れた時、どうしようもなく立ち止ま

ってしまった時のメンタルリセット、即ち休憩の仕方について話そうと思う。とても簡単なことで、誰でもできる、それ故に忙しいとそれが無駄に思えてやらなくなってしまうようなのでここに記しておく。もしこの休憩法を続けていたとすれば、過去を忘れず心に余裕を持ったまま生きてこれたということだ。それならば我ながら誇らしい。だがもし、つらく厳しい場面に出くわしたときはこの休憩法を思い出してほしい。

さて、私がこれを執筆している時は一〇月下旬、夏が終わり秋を待っていると、順番を待てなかったのか秋を押しつけ冬がやってきた。瞬きの間に空気が冬になるのだから、いつも車道を歩いている猫を見るたび寒くないのかと心配になってしまう。四季折々良いところがあるが、私は冬の夜が一番好きだ。外気はきりりと肌を刺し、一度止まれば周りの空気がそこから私を放さない。ひとたびその空気を吸いこめば、体内にまで冬の空気は入り込み、体がその場所になじんでいく。とどのつまり、これが私の今の休憩法であり、せわしなく過ぎる人生での一休みというものは、人生を裕福にす

るためには大切だという、そういう話だ。

私の周りにはせわしなく動いている。バイト、勉強、スポーツ、四年という時は長いようで短く、大学生はやりたいことで満ち満ちている。私の大学生活もすでに一年と半年が過ぎた。こうして何とか生きてこれたことに幸せを感じつつ、過去に残してきた後悔を帳消しにするため、毎日無意識にスケジュールが埋めているような気がする。こうしたせわしない日々の中で、私は夜、外でボーっとすることを日課にしている。

なぜそんなことをしないといけないのか、冒頭でも軽く伝えたが、具体的にメリットでも挙げてみるとしよう。パッと思いついたのは普遍的に楽しむことができるところだろうか。外部に楽しさを委託していないので、必然的に自分の心の内と対話することになる。もちろん意識しているわけではない。何も考えずにボーっとしてはいるのだが意識の傍らでやはり考えてしまう。過去のこと、これからのこと、そして今について、人間誰しも悩みはあるものだ。ただ私は、本当はわかっているのだ。結局解決するには自ら歩み進めるしか道はない

ということ。わかってるのだ。それでも人というのはま
まならないもので、大きな壁を目の当たりにすると、途端に
足がすくんでしまう。そういう時にもし部屋に籠っているの
なら一度外に出てみてほしい。やはり夜がいい。人がいない
ところがいい。ボーっとすることで気付かされるのだ。自分
の行く道は決まっっていて、人生が続く限り歩き続けるしか
ないということ。だがこういう時間がないと時間は有限であ
ることを忘れてしまう。

考えようとする必要はない。ただ誰もいない場所で空を見
上げる。今この時だけは私は独りで何者からの干渉もない。
そこに言葉は必要ない。そうすればその場所、今この時だけ
は私のものになる。そうすると、今まで考えていた嫌な事や
悩んでいることがストーンと整理される。

これが単なる杞憂である。未来の自分が幸あらんことを願
うとしてよう。

神とはなにか

溝口 修平

僕は生まれてこの方神の存在を信じたことはありませんで
した。というのも、小さいころによく聞かされていた、ご飯
粒には七人の神様がいてという逸話もご飯を残させないため
の作り話だと考えるほどでした。そして神の存在を信じるだ
けの経験をしたこともないため、神がいると言われても到底
信じることはできませんでした。

そこで僕は神という存在を知るために寮長にお話を伺うこ
とにしました。僕は根っからの理系なので経験的証明ではな
く、存在論的つまり論理的証明についてお話を伺うことにし
ました。そこで寮長はアンセルムスという人のプロスロギオン
ンについて紹介してくださいました。このプロスロギオンと
いうのはアンセルムスの著書で、神についての証明を、超自
然的経験などを省いて理性のみで行うというものでした。ア
ンセルムスは驚くことに神をたった五つの前提と一つの結論

のみで証明しました。証明方法は至って簡単で、数学でたびたび使った背理法という手法を使って証明していました。まずアンセルムスは神を『それよりも大きいものが考えることのできない何者か』と定義しました。アンセルムスは比較級否定表現を用いて神を証明しようとしたのです。僕はアンセルムスの論理展開には一応納得できたのですが、神定義にはとても疑問が残りました。まずここでいう『大きさ』という物の単位がとても不明確だと感じました。基本、数学などで大きさ比較する時には単位を合わせてないと話にもなりません。体積と面積どちらが大きいかなど議論の余地がないからです。神がとても偉大な物だということから『大きい』と表現することには納得できるのですが、単純な高さや空間としての大きさという違う気がします。ここでいう『大きさ』とは人々の中での精神的な『大きさ』だと考えました。寮長はこの証明にあたって形而上学的負荷がこの証明を可能にすると言っていました。形而上学とは感覚ないし経験を超越して世界を真実在とし、その世界の普遍的な原理について理性的な思惟によって認識しようとする学問乃至哲学の一種

らしいです。そしてここでいう形而上学的負荷とはよく理解できていないのですが、神は大きさをめぐる思考のみで考えることのできる何かであるとまでしかわかりませんでした。

僕は寮長の一連の講義を聞いて比較級否定表現というところがこの証明の重要な点だと理解したのですが、この比較級否定というのもまた厄介で、これより大きいものがないと言ってしまうとまた意味が異なってくるらしいのです。数学三でやった無限の感覚に近いものを感じました。一ではないけど一に限りなく近づけて考えられるというのは比較級否定表現と近いものを感じました。まだこの寮に入ってから間もなく、神についてはいまだ懐疑的ですが、神というものについて興味が湧いてきたので次は経験的な所謂存在者的証明についても寮長に伺ってみたいと思います。

チビちゃんと僕

山田 聖義

今年の四月で僕は二三歳になった。昔聞いた「二十歳を過ぎたら下り坂」みたいな縁起でも無い話を今日に至るまで覚えていて。そんなどうでも良いようなことを思い出させるのだから一体、いつまで覚えているのか。とはいってどうでも良いことばかりに記憶の容量が使われてしまうのはもったいない。覚えていたことはしっかり覚えていてもらいたいのだ。けれど、なんと自由なことか。覚えておいて欲しいことを記憶は覚えてくれないことが多い。友人の誕生日や、親の年齢、少し前にはクレジットカードの番号をお会計の時に思い出せず、後一回間違えたらカードにロックがかかるところだった。危ない危ない。どこか紙にでも書いておきたいと思っただけだ。(今ではちゃんと覚えているのでご安心を。)

記憶は一人一人持っているが、同じ記憶があるとは限らな

い。昨日の晩ごはんを思い出せる人もいれば、そうでない人もいる。昔に遡れば遡るほど、自分の幼少期の記憶がそれぞれにある。これからも記憶は増えていくだろう。となると少しずつ忘れる記憶もあるはずで、また読み返した時にも忘れていたら振り返れば良いなと思い、今回の方舟では僕個人の記憶を遡って、書き残しておきたい記憶について書いてみる。

記憶を遡ってみると僕の一番古い記憶は、畑で犬に追いかけられたことかもしれない。当時保育園に通っていた頃の記憶だと思う。僕の実家は農家でキャベツやレタス、大根などを作っていた。他にも家で食べる米も育てていた。この出来事があったのは確か春の終わり、田植えの時期だったと思う。稲刈りを家族がやっている間に僕は農道をてくてこ散歩していた。振り返っても家族はもう見えないところまで来ていた。すぐ近くでは近所のチビちゃんという犬を飼っている家族が田植えの準備をしていた。いつものように「こんにちほ。」と挨拶をした直後、白い毛の塊がトタン越しにひよっこり顔

を出すではないか（トタンを田んぼの周りに柵として立てておくことで動物の侵入を防いでいたのだと思う）。ちなみにとても大事なことなので補足しておくがチビちゃんは決してチビではない。むしろ大型寄りの中型犬だ。名前を覚えた頃から「なんでチビちゃんなんだろう」と疑問に思っていた。当時の僕は犬が苦手だった。理由はもうすでに忘れてしまっているが、チビちゃんと田んぼで再会した時の僕は顔が引き攣っていた。今振り返ってみれば遊びたくて仕方がなかったか、子どもに興味を持っていただけだと思う。トタン一枚を挟んで近づきたくてこちらの様子を伺ってくるチビちゃんと、その場から離れたいけど犬にビビって動けなくなった保育園児のまーくん。譲れない戦いが始まってしまった。

僕から見て左側のトタンは作業の都合で一枚ズラしてあり空いていた。先攻はチビちゃん。元気に左右にステップを踏んでジャンプをしてこちらを見てくる。こちらに来られないように守りに入った僕は右に動こうとした。しかし、怖くて元いた位置に戻ってしまった。これがチビちゃんのテンション

に火をつけた。最悪である。さっきよりも左右に動く距離が増えてしまい、気がつけばトタン越しにもぐら叩きを始めた。ルールは簡単。チビちゃんもぐら、僕は見つける人。隠れて左右どちらかに動いたらチビちゃんがトタンの上から顔を出す。目が合えばまた顔を引っ込めての繰り返し。あろうことか、見ていたら楽しくなってしまう僕はこっちもステップを始めていた。振り返るとジョイマン高木晋哉さんの動きに似ていた。苦手だった犬とこんなに楽しくなれているなんて夢のようだった。苦手を克服したとさえ思った。敵対心に近い気持ちを持っていただけ、戦うことはやめて仲良くしたいもののだと思った。けれど、楽しい時間も束の間。あまりにも左右に動き過ぎた僕は左側に寄り過ぎていた。気づいた時にはもうすでに時遅し。チビちゃんが出口に気付いてしまった。まずい！保育園で一番足の早かった僕は逃げ切れなかった。が、保育園生の俊足なんてたかが知れている。一瞬で追いつかれて背中を一押し。眼下にあった泥水の中にダイブした。

すぐに飼い主のおじさんに助けてもらった。噛まれたりはしなかったが僕は軽トラックの荷台でキャン泣き、車の周りでチビちゃんは尻尾を振ってルンルンである。これ以来チビちゃんとは犬猿の仲となった。けれど、時間が経てば記憶だけでなくその存在自体も寿命が来ていなくなってしまう。あれだけ元気一杯のチビちゃんも、もういなくなってしまうているはずだ。今となつては少し寂しい気もする。自分にとって良い記憶、嫌な記憶関係なしに覚えているということは自分で記憶はコントロールできるものではないのかもしれない。何歳になつても振り返れたら良いなと思えば、きつと印象の強い記憶が残るのかもしれない。もしそうだとするなら、今自分が心動かされることや、興味を持つていること、案外自分分は興味ないと思つていたけどやつてみたら自分に合つていた。なんてことを意識してみたいと思つた。

最近進路のことで学校の卒業生に相談していた。(その人のことはまた寮生活動支援の中で詳しく話そうと思つている) 彼が経験してきたことについて、なぜその道を選んだのか質

問をしてみた。そうしたら彼は「誰かにそのことを伝える時、記憶という映像を見ながら話せる。そうすると言葉に熱が入り、相手にもその熱は伝わるんだよ」と答えてくれた。経験したこと、すること、それをしっかりと自分のものにしておきたい。そのために日々、充実した生活を送りたい。

いつか建つ本屋について

結城 史音

ふと思うと、散々口に出して人に語つてきてはいても、なにがしかの形に残る方法で自分の夢というものを表現してこなかったことに気づきました。そこで今回の方舟では私の夢、目標、青写真を皆さんと共有できればなと思ひます。

私は本が好きです。大学に入り、新しい刺激に揉まれる中でめつきり読書量は減つてしまいましたが、高校時代は年間百二十冊程読んでいました。ざっくり三日に一冊です。根は

深く、小学校に入る頃にはもう本が好きで、図書室にこもつてばかりいたので三年生になるまで一人の友達もいませんでした。比喻ではなく一人も。

私をそこまでどっぷりと本の世界に深く沈めたのは母でした。母は、幼い私に数年かけてナルニア国物語を全て読み聞かせてくれたのです。外套を押し分けてあの世界に入っており、偉大なアスランと出会い、リーピチーブが旅立つ場面まで、ナルニアの国に手を引いて案内してくれたのは母でした。「最後の戦い」を読み終わる頃にはすっかりファンタジーの虜となり、一人の登場人物としてその世界に浸る喜びを知ってしまいました。そのまま夢中で様々な本を読み漁るようになり、指輪物語、ストーンハート、サークルオブマジック、ダレンシャン……と、近所の図書館にあるヤングアダルトの本棚は端から読み尽くしたように思います。「妖怪アパートの優雅な日常」や「僕とおじいちゃんの魔法の塔」を始めとする香月日輪作品、「都会のトムソーヤ」「ぼくらの」「獣の奏者」「守り人」などのシリーズ物も。読書は私にとって何にも変

え難い、娯楽以上の生きがいといってもいいものになりました。その喜びを与えてくれた母には感謝してもしきれません。

そんな私を純文学の世界に引きずり込んだのは父でした。

小学校四年生の私に遠藤周作の「海と毒薬」を与えたのです。この本は、第二次世界大戦中に日本人医師が米兵に対して行った人体実験を通して「日本人とは如何なる民族か」「神の不在の不気味さとは」「その手術に参加した医師たちは、本当にただの異常者だったのか」などの鋭い問いをいくつも世に投げかけた非常に暗い作品で、ファンタジーの世界にどっぷりだった私にはまさに毒薬のように効き、遠藤周作の著作を読み漁るようになるに十分な衝撃を残しました。「沈黙」「白い人・黄色い人」タマネギもとい「深い川」「青い小さな葡萄」「真昼の悪魔」「侍」「女の一生」「イエスの生涯」など、全てとはとても言えずとも、近所の図書館と中学校の図書室にあった著作を全て読み、純文学への一歩を踏み出しました。そこからは日本文学に夢中です。私がファンタジーから次のステップに進み、思索のための材料、栄養源として読書を捉え

られるようになったのは間違いなく父のおかげです。これも感謝してもしきれません。

しかし「趣味は読書」というのは誰からも褒められるものではありませんでした。小学校の頃は、ガキ大将から生意気で気味が悪いと本を取り上げられ、それでも聞かずに読んで殴られ、それでもめげずに読んで蹴られ、という日々を送り、中学校に上がったからは机の引き出しに本を隠して読むようになりました。

それにつけ勉強が大嫌いで、こんなつまらんことをやるくらいだったら本を読んでいたいと授業中も本が手放せず、親からも先生からももう読むなと怒られて何度も本を取り上げられるので、リュックの中に三冊と、ブレザーの内ポケットに薄いのを一冊、いつも予備を用意していました。また、めざとく分厚い本を読んでいることを見つけたクラスメイトから「ソロモン」というあだ名をつけられたことも(宮部みゆきの「ソロモンの偽証」を読んでいたせい)ありと、本を読ん

でいて対人関係にプラスになったなという思い出はほとんどありません。むしろいつも怒られ(それは自分が悪い)、馬鹿にされ、理解できないと言われ続けた記憶が強い。

つまりが読書は私の欠点でした。タバコ好きが煙たがられ、酒飲みがいい加減にしろと言われるように、他者の視点から見ればただの「悪癖」だった読書が、特技に変じ、生きがいになったのはおそらく高校一年生の夏休み明けごろからでしょうか。ある人が、私の勧めた本を読んできてくれたからです。一冊や二冊ではありません。「遠藤周作が好きなんです」という私の言葉を覚えていてくれ、代表作をいくつも読んできてくれたのです。それが何よりの喜びだった。

それからその人には遠藤周作に限らず、日本文学に限らず、様々な本を勧めるようになり、活発な意見交換を行うようになりました。私にとってはその時間が何よりの至福であり、生きがいでした。読書という、手軽ではなく時間も根気もいるものを「あなたの好きな物に私も興味があるよ」と行動で

示してくれる。それだけで嬉しく、しかも感想戦まで交えてくれるというのだから、それは（どのジャンルにおいても）マニアの本懐というものです。

その経験に活力をもらい、様々な人に本を勧めるようになり、また反対に本を勧められるようになりました。それまでの私は大変天邪鬼で、勧められた本は一応話は聞くけどまじり読まない、それより先に自分の読みたい本があるから……といったスタンスに加え、人に本を勧めてもどうせ読んでくれないだろうと勝手な諦めもあったので、そのような交流は新鮮なものでした。

しかし、高校時代に本を勧めた友人たちは、本当にありがたいことに読んできてくれたのです。そして私が本好きだという事が徐々に周知され、勧めて勧められてという交流は段々と活発になりました。そしてそこで得たものこそが、本屋を開きたいと思った一つ目の理由、自分の好きな物を人と分かち合うことの喜びです。

しかしただ本を売る本屋が、これからの時代生き延びていけるとは思えません。出版業界の不況は今に始まった事ではなく、いくらペーパーフリークスはいなくなると言っても、それはもう既にあてにできない数にまで減っています。現にワープロを使う人はいなくなると言われていた過去があつてこの現状です。古き良きはいつまでも残る、と言いたくなるのは、悲しき人のサガというやつでしょう。

そこでいつまでも残り、どうやら私が本屋を作るにあたっても当てにできそうなのが「居場所」の提供です。突き詰めて考えてみると、飲食店も娯楽施設も、サービスの提供の裏側では、居場所の提供という価値を売っています。居酒屋やビアガーデンに人が集まるのは、そこで楽しく飲んでいる人がいて、その雰囲気の中で飲むお酒が美味しいからであり、ビリヤード場やカードショップに人が集まるのは、そこに行けば共通の趣味を持った人がいて、存分に好きな物について語らい、競い合うことができるからだろうと思います。現に今は時間制で料金を取るボードゲームショップ（早い話が雀

荘のようなもの）が流行しており、都内のあちこちに店舗を見つけてきます。

居場所の価値に気づけたのは、みんなでコーヒーを飲んでるときでした。私の高校（山形県基督教独立学園）には「クレオパトラ」というグループがいて、時々集いを催してコーヒーを入れてくれるのです。ある時は共同の食堂で、ある時は近所の小中学校の体育館で。そしてその催しには飛び入りというシステムがあり、誰でも即興で演奏などのパフォーマンスができるのです。黒いエプロンをばっちり決めたクレオパトラが、自分の頼んだ好きなコーヒーを入れてくれ、お菓子もあり、そのかたわらで飛び入りがギターを弾いたり歌ったり、拍手や軽いやじが飛んだり。そんな素敵な空間にとぎたま浸れた経験が、私の居場所へのあこがれを強くしました。

コーヒーを飲みながら、隣には気の置けぬ友がいます。憎めないところも可愛い所もどうしようもない所も、お互いに好く知っている。コーヒーを淹れてくれるクレオパトラも、

同じ共同体の一員です。良くも悪くも深い知り合い。そんな仲間たちに囲まれながら、好きな音楽を聴いて、好きなコーヒーを飲み、次のコーヒーが入るまで愚にもつかない話をする。その時にこっくりと気づいたのは、ここが戦争から一番遠い場所だ、という事です。

私は、そんな居場所が作りたい。好きな音楽がかかっていて、いろんな人のリクエストがあつて、ピアノやオルガンを弾く人がいて、たまには四部混声の懐かしいコーラスをして、いろんな楽器を弾く人がいていい。そこにはコーヒーもお酒もあつて、少しくらい料理もあつて。夜はそんな雰囲気が好き。ただそれだけでは自己満足です。それはあくまで自分が、自分と近い人が満たされるための時間。それとは別に、学校に行きたくない子供が、疲れているのに行く当てもない大人が、ぶらっと立ち寄って時間をつぶせる本屋が作りたい。銭湯の番台のように、入ってきたお客さんと挨拶が交わせる距離感を作りたい。そのまま世間話をして、うまくいけば悩みを聞いて、そんな時にはこの本を読んだらどうか、とコン

シエルジエのようなことがしたい。もしそれで本当に、その本を読んでくれて、よしんばその本で救われてくれたなら。そんなに嬉しいことはない。

貸して、返す。それは紙の本にしかできないことです。電子書籍は便利ですが、あれはしよせん「読む権利」を買っているに過ぎない。思い入れのあるものとして、やり取りができるのは紙の本の特権です。そして願わくば、同じ本を読んだ人が、そして同じ作家やジャンルを気に入った人同士が交流できる場を作りたい。次はこの本なんかいいんじゃないですか、という会話が聞きたい。参加したい。そして私が高校時代に味わったマニアの本懐を、多くの人に味わってもらいたい。誰かに一つの本棚を担当してもらって、ある人には村上春樹の本棚を、ある人には横溝正史の本棚をといて具合にその作家やジャンルに精通する人たちが、自分の好きな物を存分に他者と共有できるスペースが作れたらいいなと思うのです。そしてもちろんそのフィードバック（意見や感想や様々な言葉）が、ある意味での報酬としてその本棚を作ってくれ

た人に返ってくるシステムを設けたい。本を読んでもらいたい人と、読んでみたい人との中継地点、交流所、斡旋所（？）のような居場所が作れたら、それが理想です。

そしてもう一つの願いは、子どもたちに本を読む喜びを忘れないでほしいということ。とかく受動的な喜びがあふれている現在です。動画サイトを開けば、自動で自分の好みの動画が勝手に流れてくる。それはそれでよしとして、能動的に、一方的に、自分の好きな物だけを選択して摂取できる万能感が、子どもには必要だと思っております。いきなり、それまで本を読んでこなかった中学生に純文学を読めと言っても難しい。まずは幼少期、絵本から物語に興味を持ち、物語の読み聞かせで興味を深め、徐々に自分の好きな物を読む喜びを知っていつてほしい。とにかくまずは、物語を読む喜びを知ってほしい。そのためにも、自分の本屋の中で子供たち（あるいは子どもに限らず）に絵本や物語を読み聞かせできるスペースと時間を設けたいと思っています。

先に書いたように、私の読書の原体験は母の読み聞かせです。そしてそれは物語へ没入する喜びであると同時に、愛を感じる時間でもありました。読み聞かせは、その子どものために時間を割くことです。私が誰かに本を勧めて、感想が帰ってきたときに喜びを感じるように、自分のために時間を割いてくれたという事実には、誰しも愛を感じます。その証拠として、多くの人は自分の小さな頃に好きだった絵本を覚えていきます。何歳になっても、これは面白かった、こんな内容だった、と思い返すことができる。読み聞かせしてもらっていた時の事は、成人した今でもはつきり思い出せます。ベッドの上で毛布をかぶって、世界には母と自分と物語だけ。何よりも幸せで楽しみな時間でした。それを多くの親子に知ってほしい。

また、近所の図書館でボランティアのお母さんが定期的に催してくれていた朗読会も、特別な雰囲気があるにはあって、とても好きな時間でした。その場においては、普段どんなにやんちゃ子どもでも、静かに話を聞くのです。物語を、誰か

の口から聞く、という経験には何か特別な力があるように思えます。それは他者が自分にコミットしてくれるという経験であり、他者に感情移入する、情動の発達の場でもあります。

近所に新しい本屋ができて、どうやら夕方に読み聞かせ会をやっているらしい。買物の間子供を家に置いておくのも心配だし、少し預けてみよう。そうやって子供を預けにお母さんが来てくれたら、何よりです。

学校という限定的な場から離れたところに子どもの居場所ができるというのは、好ましいことだと思えます。激烈な暴力を小学校で日々受けていた私には、そんな場所が欲しかった。純粹に興味に没頭できることが全力で許容される安全基地があればどんなに良かったかと思うのです。家庭からも、学校からも距離のある独立した居場所が、子どもが大人になるのに必要なものなのではないでしょうか。

私が本屋を作ろうと思うにあたって、大切にしている言葉

があります。「本屋は、光の射さない穴蔵であると同時に闇を照らす灯台でもあるという、ほかに類のない場所」というイギリスの作家であり批評家であるヘンリー・ヒッチングスの言葉です。誰もが、自分の権利でもって没頭できる世界が、いくらでも用意されている。それと同時に、その籠りで得た何か、生きていくうえでの指標になる。そしてそれに加え、ここに来れば誰かに会える。好きなことが話せる。そして、それでもやっぱり自分は一人なんだという感覚の両立が得られる本屋を、いつか作りたい。

置くものは様々です。売り物の本だけではなく四畳半ほどのスペースに（寄付なり自分の読み古しなりの）古本を集め、好きに何でも読んでいいスペースを作り、小説だけでなく、絵本や漫画、エッセイや画集など、一人の時間に浸れるなら何でも置き、売り物として雑貨も置いてみたい。知り合いの人や自分が作った編み物などのハンドメイドや食器などの販売、ジャムや八朔のピール、知り合いが曳いた豆やオリジナルのお酒、燻製したベーコンやチーズなど、少し持ち帰って

楽しめるもの、とにかく居場所として統一感さえ出るものであれば、何でも置きたい。とにかくもう一度ここに来たいと思ってもらえるなら何でもしたい。そういうつもりでイメージをしています。もちろん現実的なスペースや予算の都合でいくつかは叶わないかもしれませんが、それでも最低限、人と人が関われる、関わりやすい場所が作れたらなと思います。

そして何よりも先に、絵と絵本が置きたい。私の一番好きな絵を飾って、一番人に薦めたい絵本を置きたい。夏休み明け遠藤周作の代表作をほとんど読んで、私に人に本を勧める喜びを教えてくれ、本屋を開きたいと思わせてくれた人は、そしてクレオパトラとして私にコーヒーを出してくれたその人とは、色々あつて婚約者になりました。その人は絵を描く人で、誰にも負けない色を持っている人です。そして将来の夢が絵本作家。本屋を開けば自費出版した本も店頭に置けます。彼女が出した絵本が、店の一番目立つところに置かれていて、壁には彼女の絵がかかり、自作のしおりもブックカバーも彼女のデザイン。それこそが夢です。それはとても個

人的な夢ですが。

最後に

おそらく、と言うよりは間違いなく、独力でこの本屋を建てることは難しいでしょう。多くの人のお力添えがあつて実現できるものだと思います。ストレスに弱く、忍耐に乏しい私では、理想の居場所とは作れないと考えています。というよりも、完全に独力で作った独りよがりなものが、誰にも共感を呼ぶ居場所になるとは思えません。ですから、何かの作品や作家、ジャンルのマニアであり、本棚を作つてみたいと思われる方、子どもが好きで読み聞かせをしてみたいという方、自分しか作れないものがあつて、それを人に届けたいという方、お声かけをお持ちしております。そしてなによりも、常連になつて居場所を作つてくれる方のお声も。こんな居場所ができたらいいねと一人にでも言つてもらえれば、それは本当に大きな喜びで、原動力です。私の今の勉強は、いつか建つ本屋に集大成となつて結びつきます。その居場所はいつか必ずどこかにできますから、どうかお力添えください。そ

して最後に、この夢と理想から自己中心さが取り除かれ、求められる時、求められる場所にその本屋が建つて用いられるよう、共にお祈りいただければ幸いです。

私のやりたいこと

米村 那穂

正直、何を書けばいいのか分からず悩み、ついに締め切り間近になつてしまった。衆議院選挙も間近だし、選挙について書こうかなど何を書くか色々悩んでみたが、やっぱりここは話を原点に戻し、なぜ私が今大学で法律を学びたいと思つたのか、原点に戻つて自分自身を振り返りながら書きたいと思う。

私は今、法律に関する勉強を中心に大学で学んでいる。将来は司法試験を受けたいと思つているためだ。私は幼い頃からよく怒られる時に屁理屈をいって口を回すタイプだったので、よく両親に弁護士になれば？と呆れて言われていた。

その時は全く法律に興味がなく聞き流していたが、小学生高学年くらい頃から、祖母のみているドラマの影響で弁護士はとても格好いい職業がと思いはじめた。しかし、明確に弁護士になりたいと思ったのは高校の時だ。政治と経済、という科目の授業を受けた際、私は難民について学んだ。そして日本の入国管理局についても学ぶことになった。日本国内において、ビザがないのに自分の国に帰国しない人々は入国管理局に入れられることになる。最近ニュースになっているから知っている人も多いだろうが、その施設は人権侵害をしているとして大きな問題となっている。一番最近では、体調がひどく悪いのにいくら嘆願しても病院にすら行けずになくなってしまったスリランカのウイシユマ・サンダマリさんだ。明らかに亡くなる危険性があるほど体調が悪かったのに、病院に連れて行ってくれと頼んでも馬鹿にされ嘲笑されたという。これ以前にも、収容されている女性の入浴や用を足すときの姿をすべて監視カメラで見ている女性について馬鹿にして笑うという悪質な行為が問題になっていた。明らかに人権を侵害している。国連が何度も注意勧告をしているのに、

日本では未だにこういった行為が行われている。

そもそもなぜ彼らは収容されてしまうのか。それは、国内にビザなしで滞在しているからだ。しかし、そもそも日本ではビザを取得するのがとても難しい。たとえそれが難民申請でも、その申請が通るのはその国内において政府が名指しで指名手配されていて直接の生命被害がある場合など非常に規定が細かいのだ。そのため祖国が危険な状態にあつて帰ることが出来ないのにビザをもらえない人々もいる。また難民ではなくてもビザの取得や所持は難しい。例えば日本で永住権を持つている人は、一年に一度必ず日本国内に戻つてこなければならぬという規定もある。家族の海外転勤で海外に行くことになり、その間に一度も帰国しなかった場合、永住権はなくなってしまうのだ。たとえそれがたった一週間の差だったとしてもだ。そうするとその人は、配偶者が日本人で子どもたちが全員日本国籍を持っていたとしても永住権がなくなってしまう。つくづくおかしいと思う。

また他には、外国人の女性の技能実習生が妊娠してしまつたが病院に行けず部屋で子どもを死産してしまうというこ

とがあつた。その女性は、その子を葬式せずに箱にいれたという死体遺棄の罪で有罪判決を受けた。こんなおかしいことがあるのかとつくづく思う。そもそもその女性が一人で子どもを産まなければいけなくなったのは、妊娠を雇い主に知らされれば実習を一方的に中断され帰国を迫られる可能性に怯えていたからだ。外国籍の人に対する法整備がちゃんとしていないのにその点を無視していると思う。こういった事件はよく耳に入ってくるし、入るたびにとても嫌な気分になる。

私は、こんな事件を聞く度になにか私に出来ることがあつたらいいなと思う。日本で辛い思いをする人にとつて少しでもこの国を住みやすい場所にしたい。そのため司法試験に合格したい。

一通り振り返つたら、何だかやりたい目標が少しずつはつきりしてきたように思う。それに、これからはもつとたくさんの人が日本で暮らそうとやってくるはずだ。そうすると自ずと問題も増えていくと思う。今のアメリカは多国籍で色々な民族が一緒に暮らしているが故に問題も多い。日本もそうなつていくだろうとは思ふ。全く違う言語や文化をもつ人々

が喧嘩もせずと同じ土地に住むのは無理だと思ふからだ。そう言つた時に、出来るだけ私は色々な人の力になりたい。外国籍の方の話をたくさんしたが、彼らだけでなく日本でも理不尽なことに苦しんでいる人がたくさんいる。偏つた視点からではなく、多角的な視点で物事を捉えることができるようになりたい。そのために、今勉強だけではなくたくさんの人に関わっていきたい。私は自ずと喋る人々や行く場所が限られてきてしまっている。だけど大学生のうちに、大学だけでなく色々なところに行ってたくさんの人と喋つたり意見を聞いたりしてみたい。今年はそれがあまり出来なかつた。勿論コロナのせいもあるが、私自身があまり社交的ではないせいもある。人と話すのは苦手だし、出来るだけ新しい場所も人も避ける傾向にある。その部分を反省し、明日からでも少しずつ人の輪を広げていこうと思う。

Kingdom Authority and Servant Leadership

Seth Quant

If everything required to be an effective, Godly leader were written down, I suppose that even the whole world would not have room for the books that would be written. Brave men and women have been vying to capture the "Winning Leadership Formula" for millennia. All of the domineering dictators, over-bearing oligarchs, and worship-me-as-God-monarchies have failed the test of time.

Despite these many offenses, we were very graciously rewarded with 4 definitive volumes on servant-leadership. Wisdom is after all justified by its children: the global church is still expanding. We've heard this leadership teaching distilled into: "Love the Lord your God with all your heart, soul, mind, and strength while loving your neighbor as yourself."

We must pay much closer attention to what we have seen and heard in the gospels, lest we drift away from our leader Jesus. Outside Christ's wisdom leadership only seems to produce death, hatred, and genocide.

Our desire to triumph over others is overwhelmingly evil. We often push our poorest, foreign neighbor down to force them "below our level." Why? So our shadowed, ugly fingers can point downward to declare: "Look, we're better than them therefore, we are valuable." This vein of thinking advances the human timeline towards destruction.

In a race where runners pull each other further from the finish line, everyone only suffers. Worse still, our society seems like a race with disappearing course markers and no finish line. Evil is being denounced in our society, that's true. But certainly not every wrong is addressed at once. Special-privilege wrongs are being forgotten into being "right for the times."

Our society responds without apprehension or disdain but instead with applause to blatant misdeeds! "Look at her individualism and her strength of will," they say at the theater. The audience ignores the tornado wreckage of lies and theft a main character perpetrates the entire movie. Spineless and equally sinful friends on screen simply aid her in accomplishing more evil. They ignore the law of God written on each heart, "thou shall not lie or steal." Whether movies are mere reflection of society or powerful influences, it is a tragic state of affairs when our mere reflection is so muddled.

Scripture asks: A loyal man, who can find?

Our desire for boast-worthy significance is a disease. We may see our cancerous ambition through a lens of "I'm right, and they are wrong," or perhaps "I would do a better job," or even "I don't really owe this leader my loyalty." Scripture is clear when it

teaches that submission to all leaders with an exemplary attitude (except on orders to sin) is the way we honor Christ.

Vanity of vanity, all is vanity says the preacher. The ancient Israelite preacher echoes humanity's heart. Qohelet of Ecclesiastes was wrong, once. His hypothesis was famously" examining everything under the sun" to the exclusion of the supernatural. His experiment didn't reach the idea that heaven could come under the sun. Yet it did, once.

Jesus is the antithesis of vanity. To put it positively, the cornerstone that gives meaning to life. Selfish ambition and pride has been canceled. Among his other triumphant titles, our Savior is humility incarnate.

Competitive self-exaltation is older than the apostles because somehow they picked up that behavior. After all, only

competitive, self-seeking disciples argue amongst themselves to claim the title of "greatest person in heaven."

When Jesus was in the perfect place to point His finger at our evil humanity, he further extended a helping hand to his bickering disciples. He extended a hand to us.

Everyone needs a win certainly, because there is a war that infinitely matters. The ongoing conflict against sin and death must end someday.

Humanity as a whole must seek that significant victory; it's our only hope. It's a refuge is beyond our own boasting because we can never point our finger at ourselves to take credit for it. Jesus wins, for us.

Self-exalting people can begin to follow Jesus (and that's fantastic news for us). Disciples seeing Christ's example turn away

from empty pursuits. We must embrace the mindset of Baptizer John to find lasting meaning in the phrase: "Jesus must increase, and we must decrease."

Authority is delegated. It is a small thing for the Lord to change the order of Presidents and Kings. We can trust God to use even the deadliest Caesar somehow for His good.

"The humble feel no need to justify themselves. "Often we are deceived into thinking that the opinion of men is what matters most. Why else would we try so desperately to defend ourselves before others?"

In the end, men's minds don't matter, for soon they cannot mind us at all.

God's mind, however, perfectly captures every memory, every event, and every perspective. His account is the Truth. His

eternal record matters most. Since his infinite mind will soon reveal every motive, do we rather live in light of His perfect perspective?

As a follower, I must serve under human authority humbly. This is a witness that I am under the authority of God. For if we cannot obey those who we have seen, how can we obey God who we have not seen?

David was human like we are enduring much hardship and awful treatment at the hands of a failed leader. God blessed him for it. David is also the greater testament to God's faithfulness and wisdom because he trusted God in unimaginable circumstances.

Leading or following, let us not forget that our perfect God is worthy of far more praise and honor than we can ever give him. Lives that honor God consistently and at a high cost are the

greatest of all, for God's glory is shown most beautifully through tested faithfulness.

Vacaciones de verano de la catástrofe de Corona

Chihiro Miura

Este verano, la propagación de la corona fue tan grande que volví a casa de mis padres en Aizu durante el periodo de cierre de la residencia.

No estoy seguro de que sea una buena idea, pero creo que es una buena idea. No puedo quitarme la sensación de que me han secuestrado.

Llegó el cupón de vacunación, pero por más que lo intenté, no pude conseguir una cita, y entonces me enteré de que podía vacunarme fuera de mi ciudad. Fue un regalo del cielo. El procedimiento tendría que hacerse después de que empezaran mis clases en la universidad... Tras muchas deliberaciones, opté por llevarlo a cabo

a nivel local. Por suerte, las clases son todas online, ¡así que puedo arreglármelas!

Pasé mi tiempo en el nido, escuchando el coro de cigarras cada día que iba y venía. Me alegré mucho al ver que mi gato Pudding se acordaba de mí. Las siestas con Pudding son muy especiales. A veces contribuía preparando la cena y limpiando el baño. Antes de darme cuenta, la estación estaba cambiando y los insectos otoñales cantaban a coro. Otoño, ¿eh?

Llevo mucho tiempo en mi ciudad natal.

La tasa de infección coronaria ha ido descendiendo y ahora hay cero días en la prefectura. Fui en bicicleta para hacer algo de ejercicio. Salía a pasear de vez en cuando, pero era un poco diferente de los caminos a los que estaba acostumbrado cuando iba al instituto. Cada vez estaba más oscuro y entré en un estrecho callejón. ¡Oh! Pensé, pero era demasiado tarde. Me caí en una zanja al lado de la carretera. La moto salió volando por el rebote, y luego cayó sobre mi espalda... ¡Ay! Estaba oscuro y no me di cuenta de la

zanja en la carretera desconocida. Afortunadamente, la moto sigue siendo utilizable. Por suerte, puedo usar mi bicicleta y no me he hecho mucho daño. Justo cuando pensaba que tenía suerte...

"¿Qué? ¡Mis gafas han desaparecido!

"¡Mis gafas favoritas!

... Las gafas se habían convertido en un miserable desastre. Eran inútiles. ¡Estoy tan sorprendida! Eran mis gafas favoritas... Vamos a casa por ahora. Recuperé la compostura y corrí. No estoy seguro de haber visto algo así antes. En ese momento, recibí una llamada de mis padres.

Mis padres "¿Dónde?

No lo sé.

Mis padres "¿Qué?

Le dije: "Estoy perdido.

Me encontré en las afueras de la siguiente ciudad. No podía ver bien porque no tenía mis gafas.

Al final, mis padres me recogieron en coche y conseguimos llegar a casa sanos y salvos.

Fue un verano sin cosas ni recuerdos buenos. Quizá nada sea un recuerdo. Me pregunto si la vida universitaria que había imaginado volverá ahora que la tasa de infección ha disminuido. Me pasó el verano susurrando que echaba de menos la residencia y que quería volver pronto a casa.

榊形山から

離れがたい二つの手

～二人の福音伝道者に分ちあわれた六十
余年の歴史～

千葉 恵

福音を宣教する者はどこまでも主イエス・キリストに従う者となる。そのこと以外に為すべきことはない。「もはやわれ生きるにあらず、キリストわがうちにありて生くるなり」

(Gal. 2:20)。これが人生の目標となる。いつもキリストの柔和と謙くだりが自らのものであるかの確認が遂行される。伝道者たちはこの狭い真つすぐな道を選び取った、或いは選び取らされた人々である。内村鑑三門下から何人かの独立伝道者が巣立った。寡聞のわたしにも十人ほどすぐにお名前を挙げるができる。彼らは主に自らの聖書研究を発表する伝道雑誌により生計をたてていた。神の導きだけを信じての背水の陣である。生命がけである。内村先生も黒崎先生も餓死の覚悟をしたことがある。

ひとつの麗しいエピソードを紹介したい。学寮を二十年以上にわたって住み込みで支え続けた黒崎先生妹君江原祝氏が黒崎先生のご逝去のさいに綴った文章が「方舟」12号に掲載されている。この12号は先生のひととなりを知ることができる、興味深い特集である。先生ご逝去を機会に親しい方々から貴重な文書が寄稿されている。読んでいて胸があつくなることがしばしば起きる。ここでは一つだけ妹君祝氏の文章「六月六日の出来ごと」を引用する。

「思い起こせば、柏木なる内村先生の許で得た最も仲の良

い友人が四人おった。藤井武、塚本虎二、石川鉄夫、黒崎と。皆いい人だった。若い折、東京でよく集まっては談論風発、この上もなく楽しそうだったが、残念なことに半ばは英語やドイツ語が交じっていてわたしのような者には何も解かりはしなかった。・しかし、四人ともキリストに縋らなければ生きていけない弱い人達でもあった。石川さんまず逝き、藤井さんみまかり、今黒崎が行った。残ったのは塚本さん一人。今年始め頃だったか、神戸から来た兄、姉「光子夫人」と私とで塚本さんを見舞った折り、長年の伝道生活の喜びも悲しみも分かち合った末、二人とも脳の故障で無為をしいられている状態、同病相憐れむが交錯してか、握手の手がなかなか離せなかった。又玄関まで追いかけて来ては、幾度も握手をして、ようやく別れたが、あれが地上最後の別れとなった。塚本さんは兄の死をまだ知らない。天国に行かれたら「何だ、君は先に来ていたのか」とびっくりなさるにちがいない。人は皆死にゆくものか六月のみどりしたたりつつじまさかり

「主わが助主、われはおそれし、ひとわれに何をかなさん」

というごとく物を言わずに逝きし兄はも」(三三三頁)。

二人のこの今生の別れの光景は祝氏に深く印象に残るものだったらしく、『回想 黒崎幸吉・光子』(新教出版社1991)のなかでこう記しておられる。「親友、同労者塚本虎二氏とは兄の死の少し前塚本家での語らいが、二人とも最後の別れと悟り、かたいたたい握手を以て別れたのでした」(四一八頁)。

この桜新町での独立伝道者二人の離すことのできない握手の交錯、目に浮かぶ。玄関まで追いかけてまた握手。祝氏が言うように伝道の喜びと悲しみを骨の髄まで経験しあった二人にのみわかりあえる思いがこの光景を作ったのだと思う。独立伝道者の孤独と慰め、喜びと悲しみ、確かにあのととき六十年以上続いた友情の終わりを分かち合っていたのだ。サミュエルジョンソンは「友情」を exchange of sentiment (心の情の交換) と特徴づけた。ふたりはまさにその心魂の内奥の霊、知性そして感情の一切が六十年以上ものあの記憶とともに心の表層に溢れ出て来て、相互に同じ歴史を共有しあった者同士に与えられる感謝と祝福を分かちあっていたのだと思う。「よくやったな」と互いをねぎらいつつ、そして相互に相

互の思いの理解において、また強度において、寸分の相違もないその友情を喜びつつ。

伝道者たちはただキリストの如くになろうとすることが生きたることであつた。キリストが憐みから福音を宣べ伝えたように、彼らもキリストにより罪贖われたことの喜びと隣人への憐みから福音を宣べ伝える。キリストが迫害を耐え忍んだように、彼らも侮辱や軽蔑を耐え忍んだ。集会員が、時折見せる、心の底に信が生起したときの喜びと美しさを目撃することができたのも彼らであつた。手のひらを返すように裏切りを経験したこともあつたであらう。キリストだけが彼らにとつて確かさ、慰めの源であり、生命の力の源なのであつた。

「四人ともキリストに縫らなければ生きていけない弱い人達でもあつた」。彼らには、肉の強さでも言うべき自らの優れた能力、才能があり、それ故に自らに恃むところ大きく、その強さに基づくこの世への強い執着はキリストの自己卑下による低さに合わせられてのみ、克服でき、平安をいただくことのできるそのようなものとして、彼らの肉の強さはキリストへの眼差しにおいて「肉の弱さ」となる (Rom. 6:19)。キ

リスト以外に救いのないこと、それがおのれの弱さの認識であり、それによつてのみ強められていた。弱い者たち、小さい者たちにご自身を重ねたキリストは、宇宙万物の創造者にして統帥者でありたまう神の右にあることを顧みられず、受肉によりひとびとに仕えられた。ご自身を低くされた極みが侮辱のなかでの十字架の死であつた。彼らは主のその姿に合わせられるときのみ、肉に死に霊に生きることを知っていた人々であつた。「キリスト・イエスにおける生命の霊」(Rom. 8:2)に触れ常に心魂が刷新されていた。

二人はその狭い真つすぐな道を助け合つて生き抜いたのであつた。青年時代師匠を共にし、勉強を共にし、長じて講演会を共にし、著述を共にし、東と西に別れ伝道という仕事を共にし、青年期以来、六十年余の友情を分かち合つた(小田丙午郎「独立伝道者としての黒崎幸吉先生」『方舟』27号7頁)。あの握手に彼らの喜びと悲しみ、感謝と賛美、そして栄光の一切を主に帰する信の分かち合いが生起していたのであつた。

イギリスとエネルギーの節約と

千葉美佐子

何度かイギリスに滞在したことがある。夫の出張や研究休暇について行っただけなのだが、夏の夕暮れの長さやら、冬の日没の早さと暗さやら、車の速度違反に対する警察の容赦ない取り締まりやら、子どもたちが通った学校のシステムと先生たちのおおらかさやら、何ということもない生活上の喜怒哀楽ばかりが印象に残っている。

普段、日本ではほとんど病院に行くことはなかったのだが、私も子どもたちもやたらと病院との縁が深かった。よく知られているように、イギリスではGP (General Practitioner) と呼ばれる近所の診療所でまず診てもらい、必要があれば総合病院や専門病院を紹介してもらう。悪阻で動くのも困難なときに近所のGPに行ったところ、フィルムケースのようなものを渡され、採尿してくるように言われた。書齋のような診

察室の机の上で医師自ら患者の眼前でフィルムケース内の検体を検査し、Positiveと喜ばれ、病気でも何でもないので普通の生活をするように、飛行機に乗ってもバスに乗ってもぜんぜん構いませんと言われたものの普通の生活ができるくらいだったら病院には来ないのですが；と思いつながら帰り、寝ているしかなかったことがある。その後、妊娠していてもバレエの指導を続けている人やクリスマス休暇に、イギリス連邦のひとつとはいえ、かなり遠方のオーストラリアヘダイビングを楽しみに行くような人に出会い、イギリス人の頑健さを知らされた。

また長女Kは腰痛が続ぎ、これまた近所のGPに行っところ、すぐに専門病院を紹介してくれた。特に緊急性があるとも思えなかったのだが、子どもに対するケアは最優先だという。ヘルニアの手術を一年待ったという人がいる一方確かに有難いことであったがMRIまで使ってもらう必要があったのかどうかいまだに分からない。いかなるときも原理原則を貫こうとするイギリス人の生真面目さを再認識した。

さらに次女Mは公園の滑り台から落ちて頭を打ち、このと

きは総合病院の夜間救急に行った。脳震盪と診断されカルボ
ルという小児用の万能薬（発熱でも痛みでも風邪っぽいとき
でも腰痛でも西洋人でも東洋人でも子どもにはこの薬が処方
される、というかこの薬しか処方されならしい。劇薬でも
入っていそうな大きな茶色の瓶に入ったシロップ）を処方さ
れて帰ってきた。次女は軽傷であったが、その日はガイフォ
ークスの日（Guy Fawkes Day）という、イギリス各地で焚火
や花火大会が行われる日（由来や詳細はここでは割愛）で火
傷関係の人が多く来院していた。街中で素人が扱うには危険
すぎるような花火が売られているのを見たときから、たぶん
この国には危険物取扱資格なんてないのかも、危険物関係の
規制は緩いものに違いないと思っていたが、バケツや水差し
のようなものに手や足を入れて冷やしている人やポリスと手
錠でつながったまま来院する人やらでこつた返していた。国
によって危険物の認識や危険度の感じ方には相違があること
を痛感した。

そして長男Yは眼鏡の度数が合わなくなり、作り替えたこ
とがあった。医療費が無料のこの国では、検眼も眼鏡の調製

も医療費のうちということで、タダで眼鏡を新調することが
できた。住民税は納付していたものの、特に何の証明書も書
類も要求されることなく公立の学校に入れてくれたことも思
い合わせて、イギリスという国の寛容さと大雑把さを有難く
思ったものだった。

子どもたちの小学校の掲示板に自転車に乗る際の注意を喚
起するポスターが掲示されていたことがあった。そこには自
転車用ヘルメットを被らないとこのようにひどいケガを負い
ますという「ひどいケガ」をした少年の痛々しくも生々しい
写真が貼付されていた。あるテレビ番組で、遺棄された死体
を捜索し発見するという場面があり、掘り起こす過程はもち
ろん、出てきた遺体そのものも活写されていたことがあった。
人権や死体の尊厳に対する視点と許容度の幅が違うのだと目
を背けつつも目を開かれた。

病院で、学校で、ご近所で、街中で、イギリス滞在中に気
づかされた彼らの清濁併せ呑みつつ、現実から目をそむける
ことなく、太っ腹に生きる姿勢に見習おうと思った点は少な
くない。

二〇〇五年から二〇〇六年にかけては、オックスフォード (Oxford) の中心に近いノーラムロード (Norham Road) という通りの行き止まりのあたりに住んでいた。タクシーに乗り、その行き止まりの住所、ベンソンプレイス (Benson Place) まで行ってほしいと言うと「the bottom of Norham Road だね。」と言われ、自分がずぶずぶと沼の底に帰って行くような気分とさせられた。ノーラムさんという人のお屋敷があつたと思われるその付近はハリー・ポッターの世界を彷彿とさせるかのようなヴィクトリア様式の建物が並び、日が暮れても未だにロウソクの灯りで暮らしているのではないかと思われるほど薄暗く、また趣のある住宅街だつた。イギリスの人たちの目は明るい光に弱いと聞いたが、確かに春夏の昼間などは小学校でもサングラスをかけた子どもたちを多く見かけた。また彼らは暗い中でも本を読むことができるというが、確かめたことはない。夕方、薄暗くなつても、また昼間ならなおさら、必要なければ店内の照明さえも点灯しない個人商店もあつたが、商売つ気がないのでなく必要を感じないのだろうとその合理性を見習いたいと思つた。

オックスフォードの中心部に一六〇〇年代に創立されたボードリアン図書館 (Bodleian Library) という歴史的な図書館がある。この図書館へ入館するためにはいくつかの約束を守ることを宣誓しなければならない。その中に「火気を携えてはならない」という一文がある。ロウソクの灯りなど持つて入り、火事など起こされ、貴重な書物が灰燼に帰すことになれば一大事であつたからだろう。しかしいくらイギリスの人たちが暗さなど意に介さず、闇の中でも本が読めるといつても火がなければ寒いに違いない。この約束は暗くなつたら寒さに耐えることなくさつさと家に早く帰りましょうということだと解釈できなくもない。

夏はただらだと夜十一時近くまで明るいものの、冬はまだ街灯が点灯する中を登校し、正午を過ぎると既に夕方の日差し、午後三時をまわれば夕闇が迫るイギリス。大きな公園の閉園時間は日没時間に設定されていた。季節により日没が早ければ、閉じ込められる人が必ずいるのではないかと思われたが、自然の動きに合わせた閉園時間は合理的である。暗くなつたら家に帰りましょう。単純明快ではないか。一年を通

して平均すれば日照時間に過不足はなく、活動時間も保障される。

学寮の人々、往々にして漆黒の闇が広がる深夜まで活動を継続、あるいは夕刻にわざわざ開始する。そしてこれまた往々にして明るい、暖かい日中にお休みをとる。勤勉なのか体内時計がずれているのかは不明。朝拝、あるいは礼拝の時間に出てこないなあと思えば、寝ていたのでと臆面もなく言う(言い訳する)のは、もはや意味不明、不可解。常夜灯のように廊下、洗面所、トイレの照明が朝まで煌々と輝き続けている。真夜中に暗いお手洗いにはとても怖くて行けないのか。おねしよするより、まあ、いいか。登戸学寮自前の発電施設があるわけでも、油田・ガス田を持っているわけでもないし、環境問題やら異常気象やらSDGsやら、世の流れを追いかけてもいいんじゃないかなあと思う。活動は明るく暖かなときに限るのが最も効率の良いエネルギーの節約、そして健康的な学寮生活：ではないかとイギリスの人々を思い出しながら考える今日この頃。

第一回黒崎賞±(C)記念撮影



仰望往来

書き下ろしの著書の刊行について

岸本尚毅（一九八〇年入寮）

卒寮後は会社勤務の傍ら俳人として活動し、還暦を迎えた二〇二一年『文豪と俳句』（集英社新書）を上梓した。夏目漱石、芥川龍之介、永井荷風、室生犀星、太宰治、川上弘美等々の「文豪」と俳句との関わりについて書いた本である。これらの作家は余技として俳句を嗜んだ。たとえば森鷗外は、軍医部長として日露戦争従軍中に詠んだ詩や短歌や俳句をまとめて『うた日記』として公刊した。同じ作者の小説と俳句を比べて読んだり、俳句と日記を突き合わせたりすると面白い。俳句を通じて作家の頭の中や日々の生活が垣間見えるのであ

る。

出版不況の下、商業出版で本を出すのは難しい。今後、本を書こうという方のご参考に、出版に漕ぎつけるまでの足取りを概略記しておきたい。

本のタイトルに「文豪」とあるとよく売れるらしく、プレバトなどで俳句への関心が高まっていることもあって、文豪の俳句というテーマで集英社新書部からオフアアがあった。当初の構想は小説家と俳人の対談だった。俳人として私がノミネートされたのだが、対談の相手となる小説家がない。さすがは集英社で、有名な作家何人かにアプローチしたが、誰も相手にしてくれない。それもそのはずで、私の名は俳句愛好家には多少知られてはいるが、一般の物書きとしては全く無名。売れっ子の作家が、どの馬の骨とも知れない俳人との対談に応じるはずはないのである。この企画はいったんポツになった。編集者は、対談でなく岸本さんが一人で書きますか、と言ってくれたが、私自身は、俳句はわかるけれども小説がわからないので、いったんお断りした。

その後、横光利一が小説の登場人物に俳句を作らせた（も

ちろん、じっさいは横光自身が作った）ことなど、小説家と俳句の関わりを調べる機会があり、『文豪と俳句』を自分一人で書き上げる計画を立てた。まず小説の基礎を学ぶため通信制大学で勉強した。法科卒の私が還暦にして文学士になったのである。鴨外や漱石などについて課題のレポートを書いていくうちに何となく小説の感じがつかめて来たので、編集者に再度連絡し、毎月一章を書いて送るので、出来が良かったら出版を検討してほしいと相談した。

編集者は応じてくれて、今月は幸田露伴について、翌月は尾崎紅葉について、といった具合に月々一章ずつを編集者に送ることをほぼ一年継続した。幸い編集者の眼鏡に叶い、出版が決まった（もしかすると、集英社新書は『人新世の資本論』というベストセラーを出したので、あまり売れそうもない私の本を出す余裕があったのかもしれない）。

出版決定後の流れは一般的なケースと同じだが、印象に残ったことを記しておこう。校正に骨が折れた。集英社新書の校正は岩波新書以上に緻密だそうで、記述の根拠となる文献の確認が事細かに求められた。作家の日記などを引用したり

したが、どの本の何頁に書いてあるかを小まめに記録しておくことが肝要である。

当初の企画から本の完成まで三年以上を要した。いよいよ市場に出すとなると営業面が重要である。一般文芸書の市場では全く無名の著者の本なので、帯文の書き手には有名人が必要だろうということで、出版社から文学者のロバートキャンベル氏にお願いした。何がしかのツテがあったので、私からは小説家の小川洋子氏と俳人の夏井いつき氏に推薦文をお願いした。編集者は初版八千部と見込んだが、販売部の意向で六千部に削られた。幸い、新聞等で紹介されたこともあり、増刷となった。

献本した何人かの小説家から、面白かったという感想をもらうなど、それなりの手応えがあった。取り上げた文豪を研究する学者にも献本したが、「泉鏡花を紹介してくれてありがとう」「尾崎紅葉を取り上げてくれて感謝」というような反応があり、研究対象に対する学者の愛情がよくわかった。

印税を得たが、通信制大学の授業料や資料の購入費用を差し引くとトントンだった。講演のネタとして本を活用できた

ことが副産物である。来春、早稲田大の公開講座（大学が運営するカルチャーセンター）で、本書をネタにして数回の講演を行う予定である。

もしも本の売れ行きが良かったら続編を書きたいが、その場合は、頑張つて、石牟礼道子や瀬戸内寂聴の俳句作品を取り上げようと目論んでいる。

ペトロの救済力

香西 信（一九八七年入寮）

ペトロは言った。「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」（使徒言行録 9:36）

伝道は心靈的の事業である。私には神恩が足りているので、私の神に対する報恩として、私の同胞に対する同情心から、私は私の心中の無限の慰藉（なぐさめ）を他人に分与したい

と思う。私にもし財貨の分与できるものがあれば、私はもちろん喜んでこれを神にささげて世の孤独者を慰めよう。しかし金銀は今私にはない。私の持っているもの、すなわちなザレのイエスの救済力、私はこれを世に与えて世の貧苦を医さなくてはならない。したがって伝道師であろうと望む者には、まずこの富裕欲喜平和が充滿しておさえきれないほどのものがなければならぬ。彼にまず欲喜が無尽蔵にあるようになって、彼は世の貧者を満たすことができるのである。

（内村鑑三一日一生 9月4日より）

内村鑑三は一日一生9月4日において、使徒言行録 9:36を引用しています。それは使徒ペトロがエルサレム神殿の美わしの門付近で、足の不自由な男を癒す際に彼にかけた言葉でした。伝道とは自分が神から与えられた無限の慰藉（なぐさめ）を他者に分け与えることであると内村は述べます。それは伝道者自身が受けた賜物としてのキリストの救済力に他なりません。ここでキリストの救済力を受けるとは、伝道者自身がキリストによる救いを経験することであると換言できません。

使徒言行録においてパウロと並んで宣教の主人公として活躍するのが使徒ペトロです。キリスト教の礎を据えたのがペトロであるとはよく言われますが、使徒言行録を読んでみるとそのことが実によくわかります。使徒言行録前半では、使徒の中心人物としてペトロの宣教活動が詳しく描かれています。そして物語後半にはエルサレムにおけるヘロデ・アグリッパ王の迫害の脅威が迫ったため、エルサレム教会を主の兄弟ヤコブに託し、彼は物語の表舞台から姿を消します。その後のペトロはエルサレムを去って各地を旅して伝道活動に専念したと言われています。

このようにペトロはエルサレム教会の優れた指導者としてその手腕を発揮したというよりも、自ら説教と癒しの業を各地で精力的に行う福音伝道者でありました。ペトロの精力的な宣教活動を支え続けたものは内村に拠るなら、キリストの救済力を与えられた唯一無二の経験であると言つていいでしょう。

ペトロの美わしの門での癒しの業に重要な役割を果たしたのが、イエスの名を信じる信仰です。癒された男はペトロと

の出会いを通してイエスの名を信じる信仰を与えられました。「奇跡はそれを信じる者に起こる」(アメリカの美術史家バーナード・ベレンソン)という言葉がありますが、この奇跡において重要な働きをしたのが、その男のひたむきな信仰でした。

またイエスの名を信じる信仰とはペトロ自身が持っていたキリストの救済力が分与されたものでもありません。「私には金や銀はないが、それらの及びもつかない素晴らしいもの、それを私は主イエスから与えられて持っている。それをあなたにあげよう、ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい！」このペトロの言葉によって四十年以上も苦しみの中にあつた男は不思議にも癒されたのでした。一方で美わしの門での奇跡を目の当たりにした民衆は、ペトロが持つ魔術的な力がこの男を癒したと思ひ非常に驚き、ペトロを神の力を持つ者として崇めようとします。当惑したペトロは以下のように説明して誤解を解こうと試みます。『あなたがたの見て知っているこの人を、イエスの名が強くしました。それは、その名を信じる信仰によるものです。イエスに

よる信仰が、あなたがた一同の前でこの人を完全にいやしたのです（使徒言行録 3:16）』

ペトロはこの男を癒すことができたのは自分の力ではない。使徒である私のイエスに対する信仰、篤い信頼こそが私を通してこの男を癒す力として働いたのだ。と強調しています。

ペトロ自身が主イエスから与えられて持っている金や銀よりはるかに優るもの。それがイエスの名を信じる信仰でした。

内村は、キリストに救われた者は歡喜が充滿して溢れ出るほどになり、伝道者の情熱となると言っています。それは「富裕歡喜平和」であり、救われた者を神への贊美へと向かわせ、福音を一人でも多くの人に宣教したくて抑えきれなくする力となります。キリストの救済力を与えられた者の歡喜は美しい門で癒された男のその直後の行動によく表われています。癒された男は躍りあがったり飛び跳ねたりして神を贊美した後、神を拜むべく真つ先に神殿に入っていくのでした。ではペトロ自身の「富裕歡喜平和」とは何だったのでしょうか。それはこの癒された男のような素直な歡喜というよりも、むしろ彼が躓き挫折した苦い經驗に裏付けられたものであると

私は思うのです。

最後の晩餐の後、ゲツセマネの園への途上でイエスは自分を待ち受ける受難と弟子たちの裏切りを予言されます。そのようなイエスの言葉を聞きとがめたのが一番弟子であるペトロでした。彼はすでイエスに対する揺るぎない信仰を告白していましたから「たとえ、みんながつまずいても、わたしはつまずきません」このように自信たっぷりイエスに断言します。けれども主は彼に対して「はつきり言っておくが、あなたは、今日、今夜、鶏が二度鳴く前に、三度私のことを知らないと言うだろう。」と静かに論されたのでした。その後はいきさつは果たして予言通りになりました。イエスはゲツセマネの園でユダの裏切りによって逮捕され、大祭司の家へと連行されます。弟子たちはペトロを含めて皆蜘蛛の子を散らすように皆逃げ去っていったのでした。けれども印象的なのは、共観福音書の物語はいずれもその後のペトロの行動に焦点を当て意図的に詳しく描いていることです。

一旦は逃げたペトロでしたが、イエスの成り行きを見守ろうとして遠く離れて一行について行き、大祭司の屋敷の中庭

まで入り込みます。そしてイエスを逮捕した下役たちと一緒に座って焚火にあたりながら、成り行きを見守るといふ実には大胆な行動を取ります。けれども不審な人物が焚き火を囲んでいるのに気づいた大祭司の女中の一人によって「あなたも、あのナザレのイエスと一緒にいた」と告発されてしまいます。女中の言葉に非常に動揺したペトロはしどろもどろに打消し、出口の方（前庭の方）へと逃げ出します。まさにその時に鶏が鳴きます。

さらに物語は続きます。女中の最初の詰問にたじろいで中庭を一旦は去りながら、それでもまだペテロは粘って今度は前庭の人混みに紛れ込みます。するとまたその女中がそこに潜んでいたペトロを見つけ出して「この男はたしかにイエスの仲間だ」と大声で叫ぶのです。ペテロは周囲の者たちにもイエスと同じガリラヤ方言が聞きとがめられ、その場は騒然となります。気が動転したペテロは嫌疑を免れようとやっきになってイエスとの関係を否定し呪いの言葉さえ口にします。そしてちょうどその時、鶏が再び鳴いたのでした。やりきれない思いでその場を立ち去ったペテロでしたが、彼の脳裏に

はイエスの言葉と彼に向けた主イエスのまなざしが繰り返しい思い浮かんで、彼は激しく泣いたのでした。

以上がペトロにとって痛恨のイエスへの裏切りの体験でした。その時の彼の苦い涙が、自分に頼る古い生き方を砕き、自らの弱さ、無力さをいやというほど痛感させました。彼が流した涙が彼の悔い改めをはつきりと表しています。彼が伝道者となる直接のきっかけになったのは復活のイエスとの出会いの経験であるとはいえ、この裏切りと涙の経験は彼の人生の重要な分岐点となったと思われれます。『∴彼が真にイエスの使徒となるためには、まずイエスこそがメシアであるという過大な期待と自信、確信が打ち砕かれねばならなかった。その失敗を通してこそ、彼は十字架を負ってイエスに従う生き方、弱さを通して働く神の力を宣言する伝道者として立つことができたのである（小河陽『ペテロとパウロ』講談社、2005年、72頁）』

このように考えるなら、ペテロとパウロの共通点が浮かび上がってきます。彼らは共に「弱さ（十字架）」を通して働く神の力」への信頼という同じ立場から宣教したのでした。パ

ウロは、人間の知恵の言葉に頼らず、世の人からは一見愚かに見える十字架の言葉、弱さを通して働く神の力を宣教の中心にして異邦人宣教を力強く進めていきました。ペトロも、イエスを裏切り、呪いの言葉さえ吐いて彼を否定するという取り返しのつかない経験から、イエス・キリストこそが十字架のメシアである。キリストの救済力とは救われるはずのない者が「にもかかわらず」救われるということであることが、無限の慰藉の意味が腑に落ちてきたのでした。その経験が救済力となり、命がけでキリストの復活と十字架を宣べ伝えていく決意が与えられました。『主は振り向いてペトロを見つめられた。ペトロは、「今日、鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」と言われた主の言葉を思い出した（ルカ 22:61)』

イエスとの関係の否定を繰り返したペトロを主は振り向いてじつと見つめられます。ペトロは苦い涙と共に主の深い憐れみのまなざしを生涯忘れることができなかつたでしょう。そのために彼の流した涙はとてつもなく苦いものであつたと同時に、罪が赦された喜びを併せ持つ清々しいものとなつた

のです。外典に拠ると、ペトロは本当によく泣く涙の人で彼の目はいつも泣きすぎて腫れていたという逸話があります。その涙の経験によって彼は新しく歩み始めるきっかけを与えられました。そしてその事実はペトロの否認と共に鶏が鳴いたという記述に象徴的に表わされています。

前述した小河の指摘に拠るなら、ギリシア・ローマのことわざには「二番鶏の鳴き声で、初めて日の出を見ることができるといふものがあつたそうです。鶏の鳴き声はペトロの悔い改めによって示された新たな道（人生）の光を象徴しているのかもしれない。夜明け前の最も深い闇に包まれながら、鶏の鳴き声と共に徐々に白んでいく暁の光景を、彼は生涯忘れることができなかつたでしょう。

イエスの予言（ペトロの否認と共に鶏が鳴くこと）は確かに成就しました。イエスの言葉はペトロの裏切りと共に、彼の悔い改めと新しい歩みを言い当てたものであります。主はそのような辛い経験を通してペトロを悔い改めに導かれ、彼に救済力、無限の慰藉をお与えになりました。そのような神恩を思い起こす度に、私は本当に感謝で胸が溢れるのです。

ヨハネ福音書を読む（ヨハネ1：9-18）

ヨハネ福音書に見る無教会性、超教会性

小島拓人（一九六三年入寮）

内村には次のような教会観があります。「ロマ天主教会は
マタイ伝を以て起り（十六章十八節）、ペテロの福音なるマル
コ伝を以て維持せらる、新教会諸派はパウロの福音なるルカ
伝を以て起った、而して今や無教会又は超教会はヨハネ伝を
以て起りつつある。ヨハネ伝は確かに第二十世紀以後の福音
である。」（『聖書之研究』131号、1911年6月）

この内村の教会観の背景となる事情を、ヨハネ福音書から
確認して行きたいと思いますが、「一章9-12節にも既にそれが
表れています（引用は前田護郎訳）。

。世に来て人皆を照らす真の光があった。』彼は世にあり、
世は彼によって成ったが、世は彼を知らなかった。』おのが
ところに来たのに、おのが人々は彼を受けなかった。

黒崎註解によれば、「二節の「受ける」…パララムバノー

paralambano は公けに家に迎え入れることで、あたかも花嫁
が花婿を迎うるがごとき状態を指す、前二節において人類一
般とユダヤ人がキリストを拒むことによりてキリスト降世
の目的が失敗に帰してしまったのではなかった（ロマ二二
以下）、このことがかえって福音がユダヤ人を離れて異邦人
に伝わり世界万民が救われるべき原因となった」とあります。

』彼を受けてみ名を信じた人々には皆神の子となる特権を
お与えになった。

ここで、「受ける」は前節の「受ける」と異なり単にラムバ
ノー *lambano* を用いています。これは黒崎註解によれば、「二
節パララムバノー…公けに歓迎すること、イスラエルが国民
としてイエスを迎うべきことの意」三節ランバノー…個人的に
迎えること、個人々々が信仰に入るべきことの意。」と説明
されます。この箇所はベンゲル『ゲノーモン新約聖書註解』

(坪井正之訳、末尾の文献紹介を参照)によれば次のような解説がされています。

「二節の「受けいれた」は二節のパララムバノー「受けいれる」とは違う。後者(つまり二節)は「差し出されたものを受け取る」の意味であるが、前者(つまり一節)は「自発的に取る」の意である。後者(二節)は元来、真理が彼らに属するユダヤ人について言われるが、前者(一節)は恵みによって与えられる異邦人に対しても言われる。一、二節で、(ユダヤ人と異邦人の)外的な差別がはつきり取り除かれる。ガラテヤ^{3:26}以下参照。

二節は福音の信仰がユダヤ人を離れて異邦人に伝わった消息を象徴し、一節はその福音の信仰が「個人的に」(黒崎註解)、「自発的に」(グノーモン註解)受容れられた消息を象徴した表現になりますが、これは無教会の本質の一端を表すものとも言えると思います。

続く13:18節は以下の記事となります。

「彼らは血にも肉の欲にもおとこの欲にもよらず、神によって生まれたのである。」「ことばは肉となつてわれらのうちに宿り、われらはその栄光を見た。それは父のひとり子らしい栄光で、恵みと真に満ちていた。」「ヨハネは彼について証し、叫んで言う、「これこそ『わがのちに来つつわたしにまさる方、わたし以前からおられたから』とわたしと言つた方である」と。」「彼の完全さからわれらは皆、恵みにまた恵みを受けた。」「律法はモーセによつて与えられ、恵みとまこととはイエス・キリストによつて成つた。」「神を見たものはかつて一人もなかつたが、父のふところにいますひとり子の神だけが彼を示された。」

ここでアンダーラインを引いた箇所はヨハネのキリスト観を示しますが、他方パウロのキリスト観を示す箇所の一例として、コロサイ書一章13節があります。

「彼はわれらを闇の権威から救い出し、彼のいとし子の国へとお移しでした。」「み子によつてわれらはあがないを、すな

わち罪のゆるしを得ています。⁵彼は見えぬ神の像であり、すべての被造物に先立ってお生まれの方です。⁶彼にあって万物が、天と地にあるもの、見えるもの見えぬもの、王座も主権も支配も權威も、万物が彼によって彼のために造られたのです。⁷彼は万物に先んじて存在し、万物は彼にあって立っています。⁸彼は体の、すなわち集会(エクレシヤ)の頭です。彼ははじめであり、死人の中から最初にお生まれの方です。それはすべてにおいて彼が首位をお占めのためです。⁹神がよみしたもうて、彼のうちに全き成就を宿らせ、¹⁰彼によって万物をご自身に和解させるよう、彼の十字架の血によって平和をおつくりでした。万物とは、地にあるものも天にあるものもです。

このようなヨハネのキリスト観とパウロのキリスト観について黒崎註解は以下のように述べています。

このヨハネ伝の序詞を読む者は何人もヨハネのキリスト観とパウロのキリスト観との間に驚くべき一致があるこ

とを発見するであろう。一見異なる用語を用い、異なる表頭法を用いているパウロとヨハネの間においても、そこに聖霊の働きによる完全なる一致あることはむしろ当然であると言うことができよう。パウロにとつてもキリストは神の万物の創造者として万物の先に生れ給い(ヨハネ二:15—17)、彼は見えぬ神のすがたであり、すべての被造物に先立ってお生まれの方です。彼にあって万物が、天と地にあるもの、凡ての徳が満ち足り(同二:9,2:9)、律法はキリストによりて終りとなり(ロマ二:10;ガラ3:24)。(4:7)、キリストは見得べからざる神の像(コロサイ一:15)従つて愛であり(エペ3:18)また真理である(IIコリ一:19)。これらの語の中に描かれしキリストはヨハネの記せるキリストと全く同一のキリストである。

しかし、パウロとヨハネとの違いについて内村は以下のように述べています。

パウロに学びて束縛を絶ち、ヨハネに教えられて自由を樂しむ。われらは信仰の人であると同時にまた愛の人たるべきである。(『聖書之研究』132号「信仰と愛」1911年7月)

「束縛を絶ち」という表現は、たとえばロマ書 8章 19-20節を想起させます。他方、「ヨハネの自由」については、以下のような内村の記述があります。

「父われに在りて働き給わずしてわれ働く能わず。彼働き給いてわれ働かざる能わず。すでに自己に死したるわれは純然たる神の器具なり。われのごとく弱き者あるなし。またわれのごとく強き者あらざるなり、われはわが自由を神に返納して新たに神の自由を得し者なり。(『聖書之研究』104号1908年二月)

「ヨハネの自由」についてはヨハネ福音書 8章 31-36節以下を参照してみたいと思います。そもそもヨハネ福音書 8章 31-36節は同一章 12節と本質的に同じことを述べており、繰

返しともいうべき箇所で、ここに「ヨハネ的フーガ」の繰返しの一例が認められます。

ヨハネ一章 12節

『彼を受けてみ名を信じた人々には皆神の子となる特権をお与えになった。』

ヨハネ 8章 31-36節

『……「わがことばにとどまっていれば、あなた方はまことにわが弟子である。』あなた方は真理を知り、真理はあなた方を自由にしよう」と。』彼らは答えた、「われらはアラハムの末です。いまだかつてだれの奴隷になったこともありません。なぜ『あなた方は自由になろう』といわれまするか」と。『イエスは答えられた、「本当に言う、罪を犯すものは皆罪の奴隷である。』奴隷はいつまでも家にとどまらない。子はいつまでもとどまる。』もし子が自由にすれば、あなた方は本当に自由になろう。』

黒崎先生はこの自由と束縛について別の観点から以下のことを述べておられます。

Liberalist は福音書を重んずる。*Orthodox* はパウロの手紙を重んずる。後者はどうせ人間は罪人だから山上の垂訓などに行えない、戦争も社会悪も仕方がないという考え方である。*Ecce homo* (この人を見よ) である以上、イエスは最大の *humanist* であつた。われわれにとつてもこの *humanism* の理想に邁進せねばならない。自己の罪人たることは決して逃れ場所ではないのである。

この「自由」は無教会の本質を表す大切な言葉であると思ひます。自由＝リベラルとは何にも囚われない、しかしそこに恐れるべきものを恐れる目を与えられるということ、教会の伝統からフリーとなるのです。無教会の英語表現として *Mikoyokui, Non-church, Church-less, Church-free* 等の表現がありますが、無教会は教会を否定するのではなく、教会制度に囚われないといつていいですから、*Church-free Christianity* が良いと思ひます (*Institute-free* という方もいます)。

今日は新型コロナウイルス災禍により人と人の距離を置く必要からソーシャル・ディスタンスということばが身近になつています。そのために聖書を共に学ぶ集会も自由に開催出来ないという制約があります。そしてそれを解決するためにオンライン集会の試みが始まっています。それは同時に建物や場所や距離等の様々な制約を克服するものとして地域に囚われない複数の集会間のつながりも可能とする新しい集会の在り方の方向性を示唆しています。今日の集会への制約はかつて無教会の自由につながる新しい可能性を開くものとして肯定的に捉えることが出来ると思ひます。実際問題として社会制度全体はこれまでの集中型から分散型に大きく変わる方向にあるのです。

ヨハネ福音書一章 9-10 節からは、初代キリスト教会で福音信仰が個人的に自発的に受容られたこと、そこには核となるキリスト観にヨハネとパウロの間で驚くべき一致があること、しかしそこには福音の実践において相違があること、ヨハネに教えられる自由は今日の社会でますますその意義が高

められる方向にあること、などを学ぶことができます。ここに「今や無教会又は超教会はヨハネ伝を以て起こり」、「ヨハネ伝は確かに第二十世紀以降の福音である」という内村の主張の一端が確認されるのではないかと思う次第です。

者の大島守夫氏に個人訳ファイルが送付されて実現したという経緯があります。

(経堂聖書会『若木』2021年8月1日号掲載の同名講義録の一部変更)

文献紹介

ベンゲル『グノーモン新約聖書註解』

原本は J. A. Bengel, *Gnomon Novi Testamenti* であり、黒崎幸吉著『註解新約聖書』の参考として記載されており、黒崎先生の以下の説明があります。「本書は聖書の一語一語に深き理解を有ち、妙なる味を汲み取って居る点に於いて不朽の名著である。近代の批評学が起こる以前の作であつた点を考慮に入れるならば、今日も尚ほ最良の参考書の一たるを失はない。」なお、『グノーモン新約聖書註解』は黒崎幸吉著『註解新約聖書』の Web サイト (kurosaki-commentary.com) に掲載されています。これは訳者の坪井正之氏のこ子息からサイト管理

大島智夫先生　くクリスチャン医学者・教育者
～1983年～1993年の思い出を中心に

医師・南雲 清美

登戸学寮の皆さんに横浜市大医学部で私が講義を受けた
1983年（先生の年齢五七歳）の時から海老名の聖書集会が始
まり同年に信州高原聖書集会が行なわれた1983年（六七歳）
の時の先生の有り様とその後先生から頂いた手紙を紹介しま
す。今後の人生航路において何かしらの参考になったら幸い
です。

I 横浜市立大学医学部 寄生虫病学教授（1983年）

医学部四年の寄生虫病学の講義が、大島教授と私との初め
での出会いでした。先生は始めにその日に取り上げる寄生虫
疾患の資料を配って講義を始めました。資料は自筆で書かれ、
挿絵も手書きで描かれていました。私はその資料に興味を引

かれ、不遜にも誤字、脱字を数カ所見つけ出し、メモにして
翌週の授業の終わりに先生の所に持って行きました。意外に
も先生は笑顔で「ありがとう」と言ってそのメモを受け取っ
てくれました。その後、講義の度毎にメモを作り、時には教
授室まで尋ね、メモを渡して先生に近付いてゆきました。

横浜市立大学医学部での大島教授は、大学の周辺で偶々お
会いするとお洒落なチロリアン・ハットをかぶり、眼光是深く
炯々としていました。

先生が地下の学生食堂で昼食をとる時には必ずきちんと食
前の祈りをした後、それから談笑しながら食事をしていまし
た。学生はそれを横目で見ながら先生の篤実な人柄を感じ取
っていました。

大学医学部の掲示板の一番下には先生が主催する聖書研究
会の案内が一行小さく貼ってありました。大島教授はクリス
チャンである事は大学中に知れ渡っていました。そればかり
でなく、私が医師として駆け出しの頃、他県の保健所に一日

手伝いを頼まりました。初めて訪れた保健所の所長先生に挨拶に行くと、その先生が寄生虫学を専攻していたという話を伺い、私が即座に「大島先生を知っていますか」と尋ねると「あの篤信のクリスチャンの教授ですよ、よく知っていますよ。」と親しみをこめて返事をしてくれて、感動した事を覚えていています。

II 伝道私信―海老名だより―

1986年私は大学を卒業し、専門分野を勉強するため他県の大学病院で研修をし大学院に進むことになりました。臨床医として進むことを決めていたので、通常に病院業務を行ないそれが終わった夜から臨床研究を一人ですすめていました。同時に生活費も稼がなければなりませんでした。そんな生活の唯一の光であったのが1991年発刊の「海老名だより」でした。毎月ポストを覗いては心待ちにしていました。1993年に学位論文をまとめ大学院は卒業しました。けれども身心とも疲れ

はて、行き詰まっていました。母とも相談し健康を取り戻すことと聖書を勉強する事の二つの目的で海老名に近い厚木の病院を希望しました。大島先生の自宅を訪ねると自室に通され、「自分本位で生きてきたからこんなことになるのだ。人生はこれで終わりではなく、これからだ。」と発破をかけられました。しかし自分の人生が修復され、新たに生きてゆけるとは露いささかも思いませんでした。

III 1 海老名聖書集會 (1993年)

海老名にある先生の自宅での聖書集會が一九九三年一月から始まっていました。私は四月から参加しました。聖書集會は最初に奥様の恵美様のピアノ伴奏に合わせて讚美歌を歌い、次に聖書の一節の朗読があり、それから先生が一時間半近く塚本虎二訳ローマ書の講義をされ、最後に讚美歌で終るのが原則でした。先生はローマ書の関する資料を配り多角的に理解を深めるように腐心していました。讚美歌についてはポー

ル・ゲルハルト（ドイツの宗教詩人でルター派の牧師、1607-1676年）の讚美歌を好まれて幾度となく歌いました。聖書の初心者の特長としては、モーセの十戒が神を知ったものほまさかこのようなことはほしきではないであろうという断言的命令であることや、詩編119編のテスにある“わたしは苦しまない前までは迷いました。しかし今は御言葉を守ります。”などの教えが心に響きました。

Ⅲ-2 第二六回信州高原聖書講習会（1993年）

八月七日から八月九日の二泊三日で山中湖畔で行なわれ出席しました。講師は大島先生を含め三人の先生方が旧約、新約聖書の講義をされました。参加者は25名で、大学教授から教員、農家の方々まで職業は多様でありました。出席者の半数は長野県在住の人達でした。それは大島先生が信州大学の教授時代から松本で、同士と伴に聖書集会を続け無教会主義のクリスチャンとして活躍されていた証でした。大島智夫先

生を偲ぶ”天野 皓照編の信州大学医学部関連五名の先生方の文章を参考にしてください。また職業にかかわらず、出席者はノープルで信頼にたる確した人物である事を実感しました。期間中、先生に会場の近くにある黒崎先生の別荘に連れられて「僕はこの夏ここでヨハネ福音書を勉強するのだ。ヨハネ福音書は新約聖書の中で最高峰ですよ。」と嬉しそうに話していました。

Ⅲ-3 その後

大島智夫先生は自分の人生のハイライトは登戸学寮の寮長であったときだとよく話しておられました。大島先生は横浜市立大学の教授として、登戸学寮の寮長として大学生たちとともに生活をしながら聖書の種をまき続けた時期でありました。後年は登戸学寮の理事長としても粉骨砕身尽くしておられました。黒崎幸吉、大島智夫両先生がいただいた無教会主義のキリスト教の精神が登戸学寮の根柢をなしていると思いま

す。

私事についてはその後も海老名集会に出席しローマ書、使徒行伝、イエスの譬え話、ガラテア書、ヘブライ書とまなび、一九九七年十一月のヘブライ書の絶頂（九章一五節から十章）のところで自分の罪からの許しを得て奇跡的に人生の再出発が始まりました。丁度そのころ大島先生からいただいた手紙を紹介します。『御母上様の心臓手術のご経過よろしきをお祈り申し上げます。あなたを一番愛された方は母上様にちがいません。人間に対する神の愛の代理者として母親の愛にしくものはありません。どうぞご孝養をつくされますように。――中略――私たちは人の罪は目に入りますが自分が如何に神の裁きを受くべき人間であるかは、払われた代償の大きさをみて愕然とするのです。そんなに悪い人間ではないと思っていたのに、実はイエスの血によってのみ許される程巨大なものであるのです。その底がたとえどのくらい深いかわからなくてもイエスにすがって潔めて頂く、その血による神の

許しにあずからせて頂く事が肝心なのでしょう。九章二八節にそれはただ一度行なわれ、それで歴史の始めから終わりまで、救いは完成したのだとあります。この有り難い宣言に私たちもあやからせて頂きたいとおもいます。』

まさに記された愛情と罪の許しの宣言により再起不能と思われた人間が新たな人生を歩むことになりました。

最後に、登戸学寮の皆様。イエス・キリストを仰ぎ見て歩む人生はかえって苦難の連続と思えます。希望なきときでも希望を持ちながら病めるもの、弱きもののために働くに必要なイエス・キリストの愛を分けて頂けるといふ事を堅く信じましょう。それは地上においても天上に移つてもキリストにあって神の国の民になる約束が確かなことであるからです。

枅形山聖書講義

山上の説教

く八福を生き抜いたナザレのイエスく

千葉 恵

講義者緒言…登戸学寮への赴任一年目であった昨年二〇二〇年度は日曜の聖書講義において山上の説教を三十回学びました。続いて、奇跡論そして二〇二一年度になり一学期は憐みを中心に学びました。秋学期は聖書が生命と死をどのように捉えているか三か月学びました。ここでは二年になる学びを踏まえて、あらためて昨年講じた山上の説教の八つの祝福を取り上げます。

ナザレのイエスご自身はガリラヤの野辺において、とりたてて宗教言語に訴えることなく、野の百合、空の鳥を見あげつつ、自然的な父子への言及、類比的なかで「天の父」への信仰に招きます。「まず神の国とご自身の義とを求めよ」とい

う神との義しい関係を生の基盤にすることへの招きは、本誌「方舟」六一号「身代りの愛の力能」において展開しましたイエスの受難と復活の神学的理解の自然的、歴史的基礎づけとなります。彼の一挙手一投足は天父への自然的、日常的な幼子の信頼において秩序づけられていました。

テキスト

「祝福されている、その霊によって貧しい者たち。天の国は彼らのものだからである。祝福されている、悲しんでいる者たち。彼らは慰められることになるからである。祝福されている、柔和な者たち。彼らは地を受け継ぐことになるからである。祝福されている、義に飢えそして渴いている者たち。彼らは満たされることになるからである。祝福されている、憐れむ者たち。彼らは憐れまれることになるからである。祝福されている、その心によって清らかな者たち。彼らは神を見ることになるからである。祝福されている、平和を造る者たち。彼らは神の子たちと呼ばれることになるからである。

祝福されている、義のために迫害されている者たち。天の国は彼らのものだからである。汝らは祝福されている、ひとびとがわがために汝らを非難しそして汝らについて偽ってあらゆる悪しきことを語るとき。喜べそして大いに喜べ、天における汝らの報いは大きいからである。というのも、彼らはこの仕方であらに先立つ預言者たちを迫害したからである」(5:1-12)。

はじめに

マタイ福音書五章から七章の山上の説教のまとめとしてわたしどもはここで八福を再び学ぶ。ここまでその心によって清いひと、柔和なひと、平和を造るひとが祝福されているということを手学できた。そしてその八福を生きた方はまさにイエスそのひとであることを確認したい。

一、経済的な貧富に拘わらず、この世界のいかなるものによっても満たされず神を求める者の幸い

第一福「その霊によって貧しい者」とはいかなる者か。経

済的な困窮者それも自発的に貧しい者なのか、それとも精神的に謙遜な者なのか、とりわけ神との関係において充足的なものではないがしかも神に縋りついているそのような意味での貧しき者を理解すべきなのか、或いは双方のいずれでもあるのか。ルカには端的に「貧しい者」(Lk.6:20)とあるが、そこでは経済的な困窮者をただちに指示しているように見える。このマタイではそれを包摂しつつも天の父なる神との関係においてその貧困を捉えるそのような限定が付与されている。ここではやはりイエスに即してまた打ちひしがれてついでくる群衆の文脈でこの箇所を理解しよう。

「霊によって貧しい」の対義語のひとつに「欲望によって貧しい」が考えられる。「箴言」に「欲望はひとに恥をもたらす。貧しい者は欺く者よりも幸い」(PrOb.19:22)、「初めに嗣業(ゆずり・遺産)をむさぼっても、後には祝福されない」(PrOb.20:21)、「貪欲な者は財産を得ようと焦る。やってくるのが欠乏だとは知らない」(PrOb.28:22)とある。「第一テモテ」に「金持ちになろうとする者は、誘惑、畏、無分別で有害なさまざまの欲望に陥る。その欲望がひとを滅亡と破滅に陥れ

る。金銭の欲はすべての悪の根だ。金銭を追い求めるうちに信仰から迷いで、様々のひどい苦しみに突き刺された者もいる」(Tim. 6:9-10)とある。従って、「欲望によって」貧しい者また欲望によって一時的に富んだ者、金銭への執着によって富んだり貧しかったりする者たちが祝福の対象であることは考えにくい。

かくして「その霊によって」貧しい者、つまり神との関係において貧しい者、富みであれ名声であれこの世のいかなるものによっても満たされず、神との正しい関係を求め飢え渴き、救いを求めざるをえない者が祝福されている。このことは少なくとも語りうる確かなことである。

「誰も二人の主人に兼ね仕えることはできない。というのも、一方を憎みそして他方を愛するか、或いは一方に忠実であり、他方を軽蔑するからだからである。汝らは神と富双方に仕えることはできない」(Mat. 6:24)。金持ちが天国に入ることが難しいのは神にではなく金銭に頼るからである。金持ちであっても神に頼り、信仰のもとに愛の道を歩む者は貪欲な者たちの金の使用とは異なる使用に向かうであろう。この世の富

は相対的なものに留まる。愛することは信、希望とともに心魂の最も基礎的な態勢、在り方を定めるものであり、イエスに従う者はもとより誰にも妥当するものとして普遍化されるであろうが、愛の具体的な形は個々の状況において異なることであろう。施しが求められる場合もあり、何か学寮のような施設を造ることが適切な場合もあるであろう。

ナザレのイエスは父なる神の意向をその都度聴くという仕方方で謙っており、天の父との豊かな、富んだ交わりのもとに福音を宣教した。その意味において彼は豊かであった。他方、彼は恒常的に経済的に自発的に貧しくあつた。さらに、或る特別な状況において一時的に神が御顔を隠したことによって、彼は「エリ、エリ」の叫び「わが神、わが神、なぜわたしを見捨てられたのですか」(Mat. 27:46)という呻きのなかで、神を見失いつつも神に訴えかけるといふ仕方での貧しい状況に陥つた。そのとき聖霊が呻きをもって、苦しむ彼に神の意向を執成し、励ましていたことであろう。そのように経済的に貧しい者も神と関わり続ける限りにおいて、即ち困窮のただなかでまたいかなる状況にあつてもその霊によって「貧

しい者」である限りにおいて祝福され、天国にいられたただく。山上まで救いを求めてついできた群衆に彼はその祝福を語っている。欲望によってではなく、その霊によって貧しい者は祝福されている。

第一の祝福は普遍化されるのであろうか。「その霊によって貧しい者たち」という三人称による呼びかけであり、命令ではなく神の喜みの対象であるから、一般的に妥当すると言えらる。とはいえ、これら八福すべてを満たさねば祝福されないというわけではなく、この点においてイエスに似た者になるにつれその祝福は大きいものとなるであろう。神との関係において貧しい者、悲しんでいる者、柔和な者、義に飢え渴いている者、憐れみ深い者、その心によって清らかな者、平和を造る者そして正義のために迫害される者となるにつれて、イエスに似た者となることであろう。

二、パトス（感情）は心魂の態勢の指標である。信の根源性に基づく生の秩序づけ。

第二福は「悲しんでいる者」の祝福である。感情の文法に

よれば、この感情が生起する文脈は愛しいものを失うというものであった。感情実質は他の何ものによっても満たされぬい喪失感である。彼らは後の日に慰められる。わたしたちが愛しいものを喪失し悲しんでいるとき、神に慰められることになるから祝福されている。何か代替物により気晴らしするなら、そこに自らを慰めさせる装置、偶像を持ち込むこととなり、神に慰められることはない。ここでも天の父との関係において悲しみを捉えることが求められる。パウロは「神に即した苦しみは救いにいたる後悔なき悔い改めを働く。しかし、世の苦しみは死をもたらず」と言う (Cor. 7:10)。

感情はパトス、passive（受動的）であり選択できずに、おのずと身体的な受動を介して心に湧き上がってくるものだった。パトスとは身体にその座をもつことから、例えば怒ると顔が赤くなり、恐れると青ざめるそのような身体的特徴を伴う。アリストテレスは「パトスはヘクシス（心魂の態勢）の徴（しるし）である」と言った。すなわち、どんな感情が湧き上がってくるかにより、そのひとがそれまで培った心魂の態勢、実力、構かまえがどのようなものであるかを示すという議論

を展開した。感情の背後には心魂の實力として認知的態勢と人格的態勢が控えていると考えた。

認知的とはものごとの真偽に関わる心魂の知性、知識に関するものである。人格的とは外界からの刺激に対する身体的な受動の善悪に関わるものである。人格的に有徳な者、卓越した者は「パトスに対して良い態勢にある」。正義な者は怒りに対して良い態勢にある、つまり正しいひとは怒らないのではなく、怒るべき時に怒るべき仕方であるべき程度の怒りが湧いてくるそのような調和のとれたひとはである。

怒りが正義と関わるパトスであるのに対し、恐れは勇氣と関わる。恐れは自らを破壊するものに出会うという文脈において生起する。その感情実質は身のすくむ思いという類の身体の萎縮感を伴うものである。正しいひとはその感情に打ち勝ち公平な選択をすることの出来る者である。有徳性のひとつの指標は「中庸」と呼ばれた。恐れに対する勇氣ある者、欲望や快樂に対する節制ある者も同様である。正義と関わる怒りが過剰なものである場合には、それは悪い心魂の態勢における身体的反応、噴出であり、パトスが心魂の態勢の指標

となる。知性の明晰なひとは「賢者 (sage)」と呼ばれ、人格の成熟したひとは「聖者 (saint)」と呼ばれる。真理と偽りすなわち事実に関わるものが知性であり、善と悪すなわち価値に関わるものが人格である。

また知性もパトスに対して影響を与える。例えば、ウイリスの振舞いを知れば、ウイリスに対して正しく恐れること、或いは、ウイリスを制御できるようになれば、恐れなくなること、そのようなことが起こる。イエスは「天国のことを学んだ律法学者は自分の蔵から新しいものと古いものを取り出す一家の主人に似ている」(Mat. 13:52)と言っている。古いものとは旧約のことであり、新しいものはその延長線上に打ち立てられた新約のことであるという理解がなされることがある。しかし、より一般的に、きちんと心魂という自分の倉庫を管理しており、知性においても人格においても一切を天国との関連において秩序正しく考慮することができ、そのうえで行為を形成することのできるひとは一家の主人に比せられるべきひとはである。そのようなひとは心魂の根底が信仰のもとにあり、他の一切がそこから秩序づけられて認知的、

人格的に卓越した者となる。

聖書はなにか人格に関わるものと捉えられがちであるが、認知的な卓越性は聖書においても重要な位置を占める。パウロは「わたしはわが主キリスト・イエスの認識の卓越の故に、あらゆるものを損失と考える、彼の故にわたしは一切を失ったが、それらをわたしは塵芥と看做す」(Phil. 3:8)と言う。人類は知性と人格を総合するものを求めてきた。

アリストテレスはそれを「実践知 (*praxis, practical wisdom*)」と呼び、イエスやパウロは「信 (*piets, faithfulness*)」と呼んだ。心魂の根底に信があるとき、知性が磨かれ認知的に有徳な者となり、身体からわきでるパトスに対し安定的な構えができ、人格的に有徳な者となる。

アリストテレスは「いかに生きるべきか (*hos bitioni*)」という問いのもとに歴史の最前線において個人々に与えられた与件のなかで最善の行為を選択する認知的卓越性を「実践知」と名付けた。アリストテレスが人格と知性の融合の成功した視点からとらえたのに対し、聖書は信という肯定的な力ある生をつくる心魂の根源的態勢に集中した。イエスもパウロも

信に基づき愛することができるとなるなら、それは人格的に完成されると主張した。パウロは信に基づき神との正しい関係(義・正義)に置かれた者はその「正義の果実」(Ph. 1:13)、即ち正しい信の証が愛であった。木は実によって知られる(Mat. 7:15)。信に基づき神との関係がたたくされたひと、即ちよき木は愛というよき実を結ぶ。

正しい信と対立する狂信は理性の逸脱であり、迷信はパトスの逸脱である。理性の吟味にかなわなような信仰、例えば 3+5=10 だから信じる即ち「不条理なるがゆえにわれ信ず」という類の信仰は狂気にひとしく、当然排除される。身体の反応であるパトスの逸脱である迷信は、例えば、恐怖の過剰が信仰を抱かせるべく追いやるそのような信仰は迷信であり、排除される。正しい信は心魂の一切を秩序づけるとともに、生の果実により送り返され、その信仰の正しさが吟味される。

常に心に留めるべきことは、山上の説教はナザレのイエスそのひとが今・ここにおいて純化された究極の律法を語りつつ、「まず神の国とご自身の義とを求めよ」(Mat. 6:33)と信仰

に招くことにより、その内面化された愛に収斂される律法成就の道を示したことである。イエスご自身は神の愛の先行性を自ら「神の子の信」(Gal. 2:20)のもとに生き抜きご自身がその道となったがゆえに、パウロは信に基づく義とその義の果実としての愛を秩序づけることができた。そして愛は「律法の充足」である(Rom. 13:10)。

まず、神との正しい関係が確立されることなしには、人間の一切の営みは秩序を得ることはないという明確なメッセージをナザレのイエスは発信した。しかも、彼はユダヤ人の伝統に留まりつつ、旧約の伝統的理解のもとにある律法を内側から破ることによって、新しい生命に満ち溢れる信仰に招く福音を展開した。

福音と律法を静的な関係において捉えてはならない。イエスはガリラヤの野辺を歩きながらリアルタイムに即ち彼の一挙手一投足のエルゴン(働き)において神の意志を実現しつつあったのである。もし彼が公生涯の終わりに十字架から下りてきたしまったなら、神のみ旨は実現されてはいないと看做され、福音の啓示の媒介者として用いられることはなかっ

たかもしれない、そのような緊張のなかで、肉の弱さを抱えたイエスご自身により一言一句、一挙手一投足が遂行されていたのである。そして八福の祝福は彼自身の生にこそ告げられるべき、そのような心魂の態勢におかれており、神に祝された方であった。われらはそこに同じ人間として山上の説教を成就しうる可能性と力能を見出す。そして人類の誰かにより山上の説教が語られた事実には、われらは人類に絶望することはない。ましてや彼はそれを信の従順により完遂した方である。

三、悲しみのパトスが憐みを生む

この第二福、悲しんでいる者が祝福されているとは、これまた尋常ならざる主張である。しかし、悲しんでいる者が祝福されると言われているからと言って、常に悲しむことが求められているわけではない。愛しい者や大切にしているものを失っているその状況にある人々に向けて語られている。愛しいものをもたないひとは悲しみを感じることもないであろう。裏切りなど心に傷をおったひとはパトスの発動が生じな

いように、一切から距離を置くことになる。パスカルは「愛から遠ざかれば、すべてから遠ざかる」と言う。「すべて」とは生きることでそのものから遠ざかることに他ならない。

イエスは終末、世の終わりが近づくと愛が冷え切ってしまったと言った。彼の終末における迫害の預言はこうであった。「そのとき彼らは汝らを困窮に追いやりそして殺すであろう。そして汝らはわが名の故にあらゆる民に憎まれるであろう。そしてそのとき多くのものたちが躓きそして相互に引き渡すであろう、また相互に憎しみあうであろう。そして多くの偽預言者たちが立てられ多くの者たちを惑わすことであろう。無法がはびこることの故に、多くの者たちの愛は冷えてしまうであろう。しかし、最後まで耐え忍ぶその者は救われるであろう。そして御国のこの福音はあらゆる民への証として、全世界に伝えられる。それから終わりが来るであろう」(Mat. 24:9-14)

愛する世界がこのようになるなら、実に悲しいことだ。イエスは深く悲しんだことが報告されている。捕縛前ゲッセマネという場所で、彼はこう言っている。「わたしが向こうへ

行って祈っているあいだ、ここに座っていないさい」。ペテロおよびゼバダイの子二人を伴われたが、そのとき、悲しみもだえ始められた。「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、わたしと共に目を覚ましていなさい」。少し進んで行って、うつ伏せになり祈って言われた。「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心みこころのままに」(Ma. 26:36-39)。イザヤ書五三章の苦難の僕はイエスの預言であるとされているが、ここでも人類の罪のために悲しみ苦しむ僕が預言されている。虚無主義(ニヒリズム)はこの世のあらゆることに何ら差異、違いがないと主張する。善は悪であり、知識は誤謬であり、愛は憎しみである。十人殺せば悪党であり、百万人殺せば英雄である。この世界には何ら確かなものはないという考えがニヒリズムである。そこでは悲しむことも喜ぶことにも何ら差異はなく、たとえばニーチェはすべての感情をも考慮せず、善悪の彼岸にいたろうとする。そのように愛が冷えていくなかで耐え忍んで、少しでも平和を造る者となりたいたいと思う、そのような思いのひとびとが登戸学寮をつくった。

第五福は「憐み深い者」である。これもひとつの身体的受動としてのパトスである。イエスは羊飼いのいない羊のようにうちひしがれて彼についてくる群衆を見て、「深く憐れんだ、そして多くのことを教え始めた」と報告されている(Mac. 6:34, Mat. 9:36)。第五福の「憐れむ」という動詞は「はらわた」という名詞の派生である。はらわたから憐みが溢れ出す。ひとは通常憐みの感情が湧くのは不当な仕方でありは相応しくない仕方で不幸に見舞われたひとや状況に対してである。近年のネット上のパッシングは自業自得だという仕方で同じ不幸に見舞われても憐みがわくことがない状況を示している。イエスは群衆に「汝らが天の父の子となる」(Mt. 23)と呼びかけるが、神に似せて創造された人類が相応しくない仕方で争い、妬み、憎しみ合うそのような状況にあることに深い憐みをもった。その憐みが彼をして福音の宣教に駆り立てている。彼は深い憐みをおぼえたあとに、天国について「多くのことを教え始めた」に報告されている。

四、柔和な者はイエスの低さに合わせられる

第三福は「柔和な者」であった。柔和な者はそのまま第七福の平和を造る者となる。「疲れている者たち、重荷を負う者たちはみなわたしのもとに来なさい。汝らを休ませてあげよう。わたしの軛くびきを担ぎあげ、そしてわたし「の足取り」から、わたしが柔和でありその心によって低いものであることを学びなさい。そうすれば汝らは汝らの魂に安息を見出すであろう。というのもわたしの軛は良きものでありそしてわたしの荷は軽いからである」(Mat. 11:28)。彼は彷徨さまようひとびとを招く、彼の良き軛そして軽き荷とは誰もが幼子の如くであればもちうる信のことであった。彼の軛に繋がれ彼と共に歩むとき、イエスの歩調から柔和と謙遜が伝わる。

イエスの軛に繋がれ歩調に合わせて歩むとき、栄光を捨てひととなった低さ、そしてそれに基づく弱小さへの憐みと柔和さが次第に伝わってくる。「彼は神の形姿にいましたが、神と等しくあることを堅持すべきものとは思はずにかえって僕の形姿をお取りになりご自身を空しくされた。人間たちの似様性のうちに生まれ、そして「生物的な」型においてひととして見出されたが、この方は死に至るまで、十字架の死に至る

まで従順となりご自身を低くせられた。それ故に神は彼を至高なるものに挙げられたそして彼に名前を、万物を超える名前を授けられた」(Phi. 2:6-8)。キリストと共に担う軛とは自らが神の子であるとの信仰であり、その荷とは彼から伝わる柔和と謙遜であるが、キリストの低さと共にあることによりこの世から解放された者に伝わる生の喜びと軽やかさが比較から自由にされた生に力を与える。

イエスにより誇りが取り除かれ「柔和の霊」を頂いた者は不公正や侮辱そして迫害に耐え、呪う者を祝福し「平和を造る者」となる(Gal. 6:1, Mat. 5:9)。「平和を造る者」は第七福であった。イエスは平和を造る君であった。その彼の軛に繋がれて歩むとき、その歩みは疲れを癒し、喜びを与える者となる。

彼の軛を共に背負う歩みは日常をも彼の憐みに委ねる。何を着、何を食べるか日常のことがらについて、「汝らの天の父はこれらすべてのことを汝らが必要としていることをご存知である」(Mat. 6:32)と言われる。この慰励の言葉の背後には天父への信が働いている。「汝らの天の父はご自身を求めめる者

に良いものをくださるであろう」(1:11)。各人にとって求めるべき良きものとは神ご自身であり、その最も良きものに他の一切の良きものが秩序づけられる。イエスは信仰に招く。「まず神の国と神の義を求めよ、そうすればこれらすべては汝らに加えて与えられるであろう。明日のことは思い煩うな、明日は自ら煩うであろう。その日の悪しきことはその日で十分である」(6:32-33)。さもなければ、明日への不安の中で自らの肉を神とする「肉の欲」に飲み込まれ、神の意志に背くことになる(Gal. 5:16)。神の意志に背くこと、それを「罪」と言う。「おおよそ信に基づかないものは罪である」(Rom. 15:23)。

五、その心によって清い者はその純一さにおいて平和を造る

第六福はこうであった。「祝福されている、その心によって清らかな者たち。彼らは神を見ることになるからである」(Mat. 5:8)。「その心によって」即ち心魂の根底から全身にいきわたる仕方です混じりけがなく、純一であり、統一されています

るということが心の清さである。それは心の一つの根底的な態勢、構えであり、そこから良きバトスや行為が湧き出てくれないし遂行される。「ともし火をともして、それを穴倉のなかや、升の下に置くものはいない。入ってくるひとに光が見えるように、燭台のうえに置く。汝の身体のともし火は目である。目が澄んでいれば、汝の全身が明るい、濁っていれば、身体も暗い」(Luk. 11:33-34)。

心の清い者、清くされた者は神を見る。ヨブは言う。「どうかわたしの言葉が書き留められるように・・。私は知っている、私を贖う方は生きておられ、ついにはその方は塵のうえに立たれるであろう。この皮膚が損なわれようと、この身をもつて私は神を仰ぎ見るであろう。この私が仰ぎ見る。ほかならぬこの目で見る。腹の底から焦がれ、はらわたは絶え入る」(Job. 19:23-27)。

「心(kardia)」とは聖霊が注がれる心魂の最も深い座をも含む思考や感情など心的働きの座である(Rom. 5:5)。「魂(psyche)」が基本的に生命にかかわる原理であるのに対し、「心」は意識などの働きの主体である。イエスは言われる。

「汝の宝のあるところ、そこに汝の心もある」(Mat. 6:21)。「汝らのおのおのがその心から兄弟を救えないなら、天の父も汝らに同様に救えないであろう」(Mat. 18:35)。またイエスは生命原理としての魂についてこう言われる。「身体を破壊しても魂を破壊できない者たちから恐れを抱かされるな。むしろ、魂と身体を地獄で破壊できる方を恐れよ」(Mat. 10:28-29)。

第七福の平和を造る者への祝福は第六福の心の清い者に続くが、それはこの祝福に相応しい。清くなくてどうして争いをやめさせ、平和を造ることができであろうか。平和の君がイザヤの預言通りに人類に与えられた。「主はもろもろの国のあいだの争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かつて剣をあげず、もはや戦うことを学ばない。ヤコブの家よ、主の光のなかを歩もう」(Isaiah. 2:4-5)。

イエスは暴れ馬のような方ではなく、イエスは驢馬の子にのってやってくる平和の君であった。預言者ゼカリヤはその平和の君を讃えた。ゼカリヤは預言する。「娘シオンよ、大いに踊れ・・。歓呼の声をあげよ。視よ、あなたの王が来る。彼

は神に従い、勝利を与えられた者、高ぶることなく、ろばに乗ってくる。雌驢馬の子であるろばに乗ってくる。わたしはエフライムから戦車をエルサレムから軍馬を絶（た）つ。戦いの弓は絶たれ、諸国の民に平和が告げられる。彼の支配は海から海へ大河から地の果てにまで及ぶ」(Zek.9:9-10)。

心の目が澄んでいて正確にしかも公平にものごとを認識するひとにこそ、平和を造ることができであろう。イエスがその心の清い方であった。心の清い者は良心の咎めなしに心魂が平安な者のことであつた。また心の清い者は自他の悲惨の知識に基づき悲惨な状況にある者への愛、憐みのもとにあり、相手の最善を造りだそうとする者である。

心の清い者は自らの利益を求めるところはないので、争う者たちのあいだを執り成すことができる。柔和で謙ったイエスは神とひとのあいだを執り成すひとであつた。彼は自ら争う者になることはなく、剣のもとに倒れ自ら死を選んだ。平和を造る者は執り成す者である。和解のための執り成そうとすることなしに、平和を造ることはできない。和解の執り成しは当事者を Win-Win の関係に導く。平和を造る者は護る者

である。護るとは争う者双方をも護る。敵をも愛し、敵のために祈る者たちだからである。平安な者はその良心が聖靈により護られた者である。

彼らは「神の子」と呼ばれることになる。キリストはその「長子」である。平和を造る者は当事者が二人しかいなくとも、即ち自らが争いの一方を担っている者となつたとしても、イエスの軛を負う者として、媒介者の役割を担う。責める者と責められる者のあいだに自ら立つ。執成す者或いは執成される者となる。それ以外に平和は地上にこないであろう。

おわりに…最も低いところにいますイエスのもとに憩う正義と迫害にかかわる第五福、第八福は正義に関わる人々への祝福であつた。この箇所を理解するひとつの視点は良心の鋭敏さであつた。正義に対する感受性の発動なしに、ひとつの大局に、世間に唯々諾々と従っているなら迫害されることはないであろう。「神が完全であるように、汝らも完全であれ」(5:1)と神に似せて造られた者としてひとつの本来的な姿が提示されたとき、現実と本来性のあいだのギャップ、落

差を知らされる。本来性は「内なる人間」(Rom. 7:22, 2Cor. 4:16)が開かれたとき、認識することのできるものである。その本来性との関連で良心が発動するようになる。良心とは共知であった。聖霊と共に知ることであった。心の清い者は心魂の底から神と和解しており、良心の咎め(神の不興)の発動から免れさせられており、平和を造る者となる。

イエスの軛に繋がれ歩んでいるとき、次第にイエスの歩調に合うものとなり、次第に造り変えられていくであろう。この世界に何ら確かなものがないと思ひ絶望する者でも、このような八つの心の働き、状況においてある者が祝福の対象であるなら、人類にその一番低い所にセーフティネットは明確に張り巡らされていることを知るにいたる。

イエスの弟子であろうとする者はイエスの担いやすい低い軛と一緒に繋がれ歩む。ひとは見捨てても彼は決して見捨てることがはない。誰であれ、ご自身の栄光を棄てられ、ひとりなり、貧しいもの、悲しむ者、争いを好まない者、正義から不当に見放され正義に飢え渴いている者、憐み深い者、平和

を造る者そして正義のために迫害される者たちとどこまでも共にいたまう方のところなら行くことができる。この世界で見失われているひとびとであればあるほど、イエスの軛にながれつまり神の子の信のもとに生きることによって、この人生を歩むことができる。

イエスはひとの肉の弱さに裏心からの憐みを示し、柔和であり謙遜であった。「彼は群衆が羊飼いのいない羊のように弱りはて、うちひしがれているのを見て、深く憐れんだ」(Mat. 9:36, cf. Mak. 1:41)。彼は彷徨うひとびとを招く、「疲れしている者たち、重荷を負う者たち、わたしのもとに来なさい。汝らを休ませてあげよう」(Mat. 11:28)。

二〇二一年年間活動報告

ユース」五一号に鈴木範久氏「柏会記録」ならびに
内村書簡の解説)

三月一三日 理事会

一月五日 市税課 六十周年事業による増築登記、登記完了

証確認

一月六日 開寮 川口陽久入寮

一月二三日 『方舟』六一号刊行(約1150冊送付)

二月六日 卒寮式 伊藤智也、金城もも、谷口舞、山岸礼奈

二月二二日 閉寮 三月三一日

二月二四日 オート水栓設置

二月二五日 文京区藤原書店から「柏会記録」(明治四二年第

一回から一二回)寄贈。

三月一三日 理事会

三月一五日 黒崎幸吉先生本山のご自宅解体に伴い黒崎道子

氏から野田一三先輩を介して、先生蔵書ならびに

内村鑑三先生書簡一二通、葉書九通寄贈。柏会

記録とともに小島理事長が西永頌今井館理事長と

五月一八日に協議のうえ今井館に寄贈。(今井館二

三月一三日 理事会

三月一六日 厨房会議(岩橋みさお氏送別会ならびに中嶋正

樹氏歓迎会)、消防署検査。

四月一日 開寮

四月一〇日 入寮式、新寮生 五十川大地、石井友菜、

大城あい、善方枝美華、中村真子、西巻未祐、松井

花音、横山瑠泉、米村那穂(六月)、溝口修平(九月)

四月二二日 鷺見八重子氏(学寮理事)の寄贈により食

堂テーブル一八脚(500×50)、椅子三五脚寄贈(株

愛知)。

四月二四日 評議員選考委員会(新評議員六人選考)、空

気清浄機 Air Dog 二台設置。

五月一〇日 「登戸学寮ニュース」一〇号刊行(約1170

通送付)

五月一七日 男子寮洗濯機排水工事(前田興業)

五月二二日 理事会 新理事(敬称略)橋内武、福嶋

美佐子、新監事 古角隆、新顧問 樺田敏明

五月二六日 枳形山山頂にて皆既月食観察会（十人参加）

六月五日 枳形山螢谷にてホタル観賞会（三十人参加）

六月一二日 定時評議員会、新評議員（敬称略） 井上和駿、

江川信吾、土屋希望、浪川優希、星住リベカ、

三浦佳南、宮崎聡子

六月三〇日 副島茂、浩、正人、志郎先輩から郷里佐賀牛

寄贈、晩餐会（中嶋シェフステーキ調理）。

七月三日 新型コロナ検査、三二人すべて陰性、随時検査。

七月五日 納戸から「入寮調書」欠落分発見。それにより

在寮経験者総数約七百三十人であったことが判明。

七月一八日 防災訓練

七月二二日～八月一七日、二四日～九月五日 東京オリンピック

ツク・パラリンピック（寮生有志裏方参加）

八月六日 庭木伐採（桜）および剪定（たかはし庭園）。

八月八日～九月二二日 閉寮

八月二二日 臨時理事会

十月四日 西側榎伐採

十月二二日 「学寮ニュース」十一号送付（約1100通）

十一月二日 消防点検

十一月二〇日 理事会・評議員懇談会、寮友会総会、第一回

黒崎幸吉賞授賞式・講演会、ホームカミングデー

十二月一九日 クリスマス会

十二月下旬 『方舟』六二号本号（約1100冊）入稿

十二月二六日 閉寮～一月六日

退寮 星野咲（六月）、三浦朔（八月）、横山瑠泉（九月）

常任委員会 一月一五日、二月一七日、三月三日、四月二〇

日、五月一二日、五月三一日、七月一四日、九月八日、十月

一五日、十一月一日、十二月一六日

事務・調理スタッフ 青野道、赤堀正己、池田田鶴子、岩橋

みさお（三月まで）、國見久美子（八月まで）、田中音楽、千

葉美佐子、友井早苗、中島正樹（四月から）

登戸学寮事務、調理スタッフ（送別・歓迎会 三月一六日）



二〇二一年日曜聖書講義一覽

一月一〇日 神の力能の顕われく奇跡物語序論

一月一七日 言葉の力能とその顕われとしての働きく奇跡物

語序論その二

一月二四日 復活をめぐるく奇跡物語序論（その三）

一月三一日 一度限りの復活く奇跡物語序論（その四）

二月七日 旧約の革袋から破りである福音の生命く一年を振り

返って

春休み枳形山連続聖書講義…宗教改革（二月一四日く三月二八日）

四月五日 聖書と宗教（1）人間の探求

四月一二日 聖書と宗教（2）不可視なものへの信による突

破

四月一八日 聖書と宗教（3）祈りによる神との交わり

四月二五日 イエスの譬え

五月二日 その心によって清い者は穢れと偽りを克服する

五月九日 終末預言と憐み

五月一六日 憐みと愛

五月二三日 かつて憐みを受けたサマリア人の憐み

五月三〇日 福音とロゴスとエルゴン

六月六日 憐み深く、柔和な心とかつてと今のコントラスト

六月一三日 憐みを引き起こすものゝコントラストの知識を

もたらす信仰

六月二〇日 何を為しても赦されるか(その一)と神の憐み

と正義

六月二七日 イエスとパウロと故立花隆(橋隆志)氏「方舟」

創刊号のイエス論を手掛かりに

七月三日 何を為しても赦されるか(その二)と神の憐みと

正義

七月一一日 信仰にマジックはあるか?と「喜び」が恩恵の

証である

七月一八日 イエスの「神の子の信」と憐みは党派心を乗り

越えさせる

七月二五日 キリストにある一つの体と党派心を乗り越える

夏休み

秋の連続講義…神は個々人の生死に関わりつつ福音によつ

て歴史を導く(九月二六と一二月一二日)

九月二六日 秋の連続講義…神は個々人の生死に関わりつつ

福音によつて歴史を導く(一)と聖書の死生観における死の

二重性

十月三日 秋の連続講義(2)…神義論と自然災害と懲罰とし

ての生物的死

十月一〇日 秋の連続講義(3)…永遠の生命の力能

十月一七日 秋の連続講義(4)…旧約人の「此岸性」

十月二四日 秋の連続講義(5)…ヨブに見られる旧約人の

眼差しの方向と此岸の苦悩から彼岸の正義へ

十月三二日 秋の連続講義(6)…「生命の木」からの追放下

における信仰そして背きに対する祝福と懲罰の蓄積

の具体的な記録

十一月七日 秋の連続講義(7)：旧約における個々人の屹立から共同体の形成へ

十一月四日 秋の連続講義(8)：旧約におけるキリストとその復活の預言

その復活の預言

十一月二日 秋の連続講義(9)：旧約における媒介者の不在

不在

十一月二日 秋の連続講義(10) 最終会(1の3)：聖書の死生観：旧約における待望の蓄積から新約の時の満ち足りへ

の死生観：旧約における待望の蓄積から新約の時の満ち足りへ

十一月五日 秋の連続講義(11) 最終回(2の3)：何故永遠の生命への追求は旧約人にはわずかにしか見られないのか

永遠の生命への追求は旧約人にはわずかにしか見られないのか

十一月二日 秋の連続講義(12) 最終回(3の3)：一回限りの復活信仰が生物的死を乗り越えさせる

一回限りの復活信仰が生物的死を乗り越えさせる

十一月一九日 クリスマス 闇夜に光が輝いた

「寮生日誌」より(朝拝だより)

十月五日

詩編 九十四 讚美歌 三百十二

神の裁きについて。復讐をしないこと。

十月十四日

詩編 百 讚美歌 二百六十三

喜びや感謝について。

十月十九日

詩編 百三 讚美歌 三百三十三

神を讚える意義について。

十月二十四日

詩編 百十 讚美歌 三百五十二

イエスや滅びに関する預言について。

十月二十九日

詩編 百十一 讚美歌 四

自身の名前の由来について。

十一月一日

詩編 百十二 讚美歌 四百四

幸福について。

十一月四日

詩編 百十三 讚美歌 三百十二

自然について。

十一月八日

詩編 百十六 讚美歌 四百九十一

自分の目指す生き方について。

十一月九日

詩編 百十七 讚美歌 五十三

カロリーについて。

十一月十一日

詩編 百十九 一〜二十四 讚美歌 四百六十三

多様性を受け入れることについて。

十一月十五日

詩編 百十九 四十九〜八十

自己肯定感について。

十一月十九日

詩編 百二十

価値観の違いとそれの理解の仕方について。

十一月二十二日

詩編 百二十一

教会にて、祈りと神様が見守ってくれていると感じた出

来事について。

十一月二十四日

詩編 百二十二

神様の祈りにについて。

朝拝 神が取り結ぶ縁について

結城 史音

今回は、今日読む聖書箇所についての簡単な解説と、それについて言いたいことを少し、話そうと思います。普段聖書を読まれる方にとってはくどい話になってしまうことをお許

してください。

この詩編一〇五編を読んで率直に感じるのは、ここに書かれている神は理解できない、という事です。それは二つの感情に分けられて、片方では、人の持つ限られた考え方、狭い視点では神の行いをとてもではないが判断できないという、尊敬と諦めの混じったもの。片方では、なぜ初子を打ったのか、という嫌悪感と拒絶です。少なくともこの神を、自分の父とは呼びたくない。

これは聖書の最初の方にある出エジプト記のエピソードです。神が、エジプトで奴隷として使われていたイスラエルの民たちに、モーセとアロンという兄弟のリーダーを立て、エジプトを脱出させる物語です。だから出エジプト記と言います。しかし当然自国の奴隷が逃げていくのを、エジプトの王であるファラオは認めません。絶対に逃がしてたまるものか、と何度も断るのですが、断るたびに神はエジプトの地に罰を与えます。それが今日読んだ箇所にもある、川の水が血に変わったたり、イナゴが発生したり、と言った災厄です。そして

それは九回繰り返され、十回目には、エジプトのすべての初子が殺されます。初子とは長男の事です。中には待ち望んでやっと生まれた、まだ幼い子供もいたことでしょう。

私は、クリスチャンホームに生まれ、おおむね中学校に入るまでは何の疑問も抱くことなくキリスト教を信じていました。小さいころキリスト教の知識を得る元は紙芝居などで、そこに描かれた神様はとても優しそうな髭の叔父さんだったからです。そしてその髭の叔父さんが時折誰かを懲らしめても、それは悪いことをした人が悪いのだと思っていました。それが、色々あった小学校六年間を抜けて、どうやら神様は俺の事を見ていないらしいと思うようになります。中学校に入り、日々を過ごす中で、神様などどこかに飛んで行って、いるかいはいかは関係なく、いても居なくてもいい、自分には関係ない存在になっていきます。それは、他のクリスチャンからは見えにくいくらい自然に、心の中で変わっていきました。

要するに、中学校の自分には何のとりえもなかったのです。勉強はオール3、下手したらそれ以下、運動もへたくそで特に球技がダメ。顔がいい訳でもないし、変な事をして笑われることはあっても、笑わせられることはほとんどない。ひたすら本ばかり読んでいて、人付き合いがへたくそ。やつとできた友達に、お前って友達少なそうだよな、と言われる始末でした。どうもそんな感じだったので、神様はいても俺には興味はないんだろうなと思っていたのが中学校一年目。だんだん空気の読み方と面白い話の話し方を覚え始めて、友達ができたのが三年目。とにかく人との出会いに恵まれたのが高校三年間、といった具合です。

その三年間で、神様は俺の想像もつかないくらい複雑で、はつきりした形を取らない人である事と、生まれてこのかたずっと俺の事を見続けてくれていたことを知りました。こんなにも多くの人と、こんなにも複雑な関係を築き、針の穴を通すような選択の連続で今の自分ができていることを、とても偶然だとは思えなかったからです。俺は間違いない、これ

以上の人生を送ることはできなかったと断言できます。それは、その認知をプレゼントしてくれた神は、最初に話した怖くて理解できない神よりもずっと身近で、ユーモアがあり、サプライズが大好きな人でした。そして何より、何も語らない神秘的な人でした。自分の生き方として取り入れられる神でした。自然の様に予測不能でありながら、強い意志を持っているように感じました。

結局長々と話しましたが、言いたいことは一つです。旧約聖書を読んでみて、怒りを持って人を滅ぼす神を見て、キリスト教に距離を感じないでほしいという事です。自分の人生を生きてみて、振り返ったときにすべてを整えてくれていたと気づく、そういうアプローチもあります。私は、自分の親しい友達にキリスト教の話をする必要があります。その中でもキリスト教に興味を持ってくれて、何度も話を聞いたうえで、やっぱりまだ信じようとは思わないと言う友達がいるのですが、その友達はとても正しいことを言いました。「俺はキリスト教を信じてないけど、事実として、イエスキリストっ

ていう人がいなければ、俺たちは会えなかったよな」と。神様は、本当に意外な、想像もつかない方法で人と人との縁を取り結びます。事実、キリスト教がなければ登戸学寮も生まれる事は無く、ここに人が集まることもありませんでした。その取り結びに意味を見出すのは、人に委ねられた作業だと思えます。

栴形山から首都北西を望む



寮友会から

■二〇二二年度 登戸学寮寮友会総会議事録

●日時 二〇二二年一月二〇日(土) 十時三十分～十二時三十分 リモート方式

●出席者(五十音順)：石川光、岸本尚毅、小島拓人、副島茂、副島浩、坂内宗男、古角修、古角隆

●議題

1) 会費納入要請に係る手違いについて

十月に会費振込用紙を会員約三百名に送付した件について、会員に誤解を生じ、学寮にも迷惑をかけるに至った。次年度からは、従前同様に年刊誌『方舟』送付時(通常十二月)に会長の挨拶文を同封し、近況報告を兼ねて納入依頼をするにとする。寮友会会員に限定して送付した理由は、近年、学寮の発行物と別に『寮友会ニュース』が発行されていた経緯上、それに合わせて会費納入依頼したことにある。寮友会報

はその後『登戸学寮ニュース』に一本化されたことから、従前通り『方舟』送付時とするものである。

2) 役員会の開催について

コロナ禍という異常事態の中で、役員会もズーム開催に至ったが、毎月開催し、主に卒業生名簿の件及び顧問制度に係る寮友会会則の改正が論じられた。寮での名簿発行はほぼめどがつき、また今回規則改正案が承認された。改正内容は、顧問二名体制、支部の設置、寮との連携についての記述などである。また以下の通り、新年度の役員を決定した。

会長：石川光、副会長：岸本尚毅、執行役：古角隆(会計)、

北村寛、副島浩、古角修、小西孝歳、

顧問：坂内宗男(新執行役決まるまで監査役兼務)、副島茂

*会長を中心に、女性を含む若手の執行役二名をなるべく早く決めて補充する。

3) 寮との連携について

黒崎幸吉記念表彰の件に表れた寮と寮友会との齟齬について理事長とも話し合ったが、「すでに制度がスタートしたから

今後は」の問題処理ではなく、事前における相互理解の重要性が大事であることを確認、今後に生かすことになり、会則にもその趣旨が規定された。

4) 会計報告(単位:円)

収入:五三七,六一二(会費四十二人八四,〇〇〇、協力費

二

九名一一四,〇〇〇、繰越金三三九,六一二)

支出:六九,五八六(通信費五四,一〇八ほか)、残高:四六八,〇二六である。以上につき監査岸本確認済。

5) その他(事後承諾事項として)

今後『方舟』誌発行のつど寮友会会則を掲載することについて役員会に諮る機会を逸したため、提案者坂内から別途、石川会長に相談し、問題ないとの了解を得た(この旨寮長に連絡済)。改正規則は追って寮長に連絡する。

■寮友会会則(二〇二二年一月二〇日改定)

傍線部は今回の実質的な改定箇所。

第一条(名称) この会を「登戸学寮・寮友会」(以下「本会」という)と称する。

第二条(目的) 本会は創立者黒崎幸吉先生の登戸学寮建寮の趣旨を尊重し、会員相互の親睦と在寮生との交流、支援等を行うとともに、登戸学寮が未永く存続し続けるために、寮と相互に密接に連携し、必要な諸事業を全面的に支援することを目的とする。

第三条(事業) 本会は目的達成のために以下の事業を行う。

- (1) 寮友会総会と交流会の年一回開催。
- (2) 登戸学寮誌「方舟」への投稿、編集、配布などへの協力。
- (3) 会員相互、および会員・寮生間の交流・親睦を深める活動。
- (4) 登戸学寮で実施される諸行事への積極的な参加と協力。
- (5) 寮生募集活動や募金活動など、登戸学寮の維持、発展のために必要な活動。

第四条(会員) 本会の会員は、男女や在寮期間を問わず原則として学寮生活経験者をもって構成する。但し、本人の意思により入会を希望しない場合や退会を望む場合は、この限り

ではない。

第五条（事務局）本会は下記住所にある登戸学寮内に事務所を置く。〒二二四―〇〇三三川崎市多摩区枳形六丁目六一―一公益財団法人登戸学寮

第六条（事業年度）本会の事業年度は毎年十一月一日に始まり翌年十月三十一日までの一年間とする。

第七条（会議体）本会は第四条の事業を円滑に推進するため次の会議体を持ち、全ての会議体においては議事録を作成し会員に開示する。

(1) 総会。

(2) 役員会。

第八条（総会）

(1) 開催時期は原則として毎年十一月の第四土曜日とする。

(2) 総会の議決事項は、前年度の活動報告、前年度の決算、新年度の役員選出、新年度の活動計画、新年度の予算、会則の改廃、および寮友会運営上の重要事項変更とする。

(3) 総会の議決は出席者の三分の二以上の賛同で決定する。

第九条（役員及び役員会）本会の運営を円滑且つ有効に運営するために次のように役員及び役員会を定める。

(1) 寮友会の役員は八名以内の幹事、二名以内の顧問と監査役二名で構成し、監査役は本会の財務や運営全般の健全性を監査する。

(2) 幹事の役職と定員は会長一名、副会長一名、執行役四名以内、会計二名を原則とし、総会で議決された年度活動計画に基づき執行責任を担う。

(3) 役員会は原則として年四回開催とするが、開催日時は別途決定する。

第十条（役員の選出）役員は次の方法により選出する。

(1) 総会で出席者の三分の二以上の賛成を得て、幹事と監査役を選出する。

(2) 幹事の役職は、総会後の役員会で互選により決定する。

第十一条（役員の役割と役務報酬）各役職の役割は以下に定めるが、全役員とも役務報酬はなしとする。

(1) 会長は、本会を代表し会務を総括する。また総会と役員会を招集する。

(2) 副会長は、会長を補佐し、会長に不都合が生じた時にはその職務を代行する。

(3) 執行役は、会長、副会長と共に本会の目的が達成されるように協力し、本会の円滑な運営ができるように尽力する。

(4) 会計は、本会の会計、財務を掌握しその責務を負う。

(5) 顧問は、本会の目的が達成されるよう会長、副会長を補佐し、助言や協力を行う。

第十二条（役員任期）

(1) 役員任期は、一期二年とし再任を妨げない。

(2) 役員に欠員が生じた場合は、第八条により補充することができる。この場合の補充役員任期は残任期間とする。

(3) 役員任期はその年の総会から翌年の総会までを一年として計算する。

第十三条（支部および委員会）

(1) 本会の役員会は、本会の目的に沿った地域支部および特定の議題を取り扱う委員会を設置することができる。

(2) 支部および委員会の設置期間は原則一年間とし、役員任期毎に役員会にて設置の有無、延長を決めるものとする。

(3) 支部および委員会の幹事、委員は役員会で任命する。

第十四条（会費）

(1) 本会の会費は年会費とし、五年間前納も可とする。

(2) 年会費は二千元とする。

第十五条（実費の支給） 役員が業務を執行するに必要とされる諸経費、および会議に出席のために要した交通費と宿泊費は、その都度実費を支給する。但し、会長が必要と認めた会員が出席した場合も同様とする。

第十六条（施行） この会則は一九九九年一月二十七日よりこれを実施する。二〇〇九年十一月二十八日より改定実施する。二〇一二年十一月二十四日より改定実施する。二〇一四年十一月二十二日より改定実施する。二〇二二年十一月二十日より改定実施する。

ご支援へのお礼とご報告

一般寄附、六十周年寄附、お支えまことにありがたく忝く存じます。また種々物品もお贈り頂きました。感謝をもってお名前を掲載させていただきます（敬称失礼します）。今回の期間は二〇二〇年十二月から二〇二一年一〇月末までです。

青木 幹夫
浅野 攝郎
當好 二
阿部 光成
有賀 実男
有賀 進
飯田 順朗
池辺 秀成
石川 嗣郎
石川 知生
石原 能行
石渡 正子
市場 正

市村 昭三
井出 紀子
井藤 聡
伊藤 康子
稲永 丈夫
井上 眞一・真理
入嶋 喜平
岩島 寛
岩田 堯
上田 明子
内坂 建
内田 栄子
内田 祥子

内野 隆三
越智 好
大内 信一
大川 四郎
大崎 桂介
大城 ヨシ子
太田 源左衛門
大谷 陽・翠
大山 綱夫
奥田 信夫
恩田 美和子
柿沼 蓉子
蔭山 和代

籠屋 公夫
笠原 千恵子
片倉 敬輔
加藤 健一・理恵
金井 守
金沢 信治
金子 幸子
神谷 光子
亀谷 勉
河辺 たづ
儀賀 裕理
菊池 美知子
岸本 尚毅

岸本 由美
北爪 文義
北村 寛
木下 智雄
木村 護郎
木村 直子
木村 秀夫
清永 丈太
金城 もも
櫛田 俊明
久保 靖彦
久保 田修
熊川 忠
倉石 重造
栗栖 泰郎
黒崎 光子
黒崎 稔
黒崎 留己子

小泉 智博
幸野 道雄
小河原 貞一
小島 拓人
小関 道子
小館 美彦
兒玉 實英
兒玉 伸彦
小西 孝蔵
木幡 藤子
小林 俊夫
小林 緑
齋藤 周平
齋藤 義彦
酒井 玲子
笹井 岩男
佐々木 栄一
笹生 義美

佐竹 明
佐竹 好光
佐藤 勝輝
佐藤 よし
佐野 光郎
佐野 好則
渋谷 美登里
島 創平
白井 徳満
白石 光一
白方 誠彌
白方 勇一
白崎 良二
新宮 眞
菅沼 勝子
杉田 敬一
鈴木 健司
鈴木 守

鈴木 喜晴
須藤 浩一郎
鷺見 誠一
鷺見 八重子
須山 英三
荘保 達雄
副島 茂
副島 志郎
副島 浩・博子
副島 正人
高岡 健二
高崎 亘代
高田 暁治郎
高田 秀樹
高橋 照男
高橋 由典
高松 均
高柳 博一

高山 久郎
瀧山 晃弘
武井 陽一
竹内 朝日郎
竹内 栄理
竹内 弘之
田仲 達雄
谷口 舞
丹野 武宣
月岡 信裕
月本 昭男
土岡 和樹
土屋 泰次
網野 真知子
東方 教子
徳光 猛
床宿 祐子
富井 直子

富永 尚
友寄 隆房
鳥居 祝子
直木 葉造
永井 和子
中村 真理子
南雲 清美
浪川 優希
西川 信義
西永 頌
西野 勝
西原 借子
西村 真
根本 泉・道子
埜口 滋
野崎 寧
野々瀬 協子
野々瀬 浩司

羽賀 道信
薄 水
橋内 武
橋本 隆夫
長谷川 浩司
花房 雅子
坂内 宗男
秀村 研二
平井 国雄
平田 和吉
廣田 隆俊
福岡 和子
福島 穆
福嶋 美佐子
福田 由美子
藤澤 茂登一
藤田 ナツ子
藤原 國士

古角 修
星野 咲
星野 光利
細貝 昭吾
本田 圭
増田 高子
松井 正人
松浦 宏允
松尾 睦
松沢 弘陽
丸山 信子
三浦 朔
三上 章
三関 祐二
三田 洋子
三宅 順子
三宅 美枝子
宮崎 修次

宮崎 裕明
三好 信夫
武藤 陽一
森 孝
森山 浩二
安田 裕
矢田部 千佳子
矢野 那奈子
山川 暁
山岸 章
山口 明美
山口 清三
山田 章博
山田 信昭
山本 和宏
山本 鐵子
山本 浩
横内 信子

横尾 宗敬
横山 瑠泉
吉澤 壽樹
吉原 賢二
吉村 薫
李 善利
若井 晋
我妻 耕一
鷺崎 安久
鷺田 伸明
匿名氏
匿名氏

聖書集會
あだたら聖書集會
大阪聖書研究会
国立聖書研究会
千葉聖書集會
天神聖書集會
徳島聖書キリスト集會
那覇聖書研究会
浜松聖書集會
阪神聖書研究会
福岡聖書研究会
無教会新宿集會
山形聖書集會
食料品
青野 勝
大城 ゆき

大城ヨシ子
金山 愛子
小松 睦子
坂本ミエ子
西卷 徹
副島 正人
高田 篤
千葉 眞
千葉 基
永松 英隆
秀村弦一郎
溝口 直子
三浦 一幸
山本 剛
山平 幸郎
米村 英二
ご持参多数(省略)

今井館ニュース 第49号

登戸学寮

「希望の神が、汝ら聖霊の力能のなかで希望に満ち溢れるべく、信じることににおけるあらゆる喜びと平安で満たしたまうように」(Rom. 15:13)。

枳形山にふりそそぐおだやかな陽光とフレッシュな風、当地は春の息吹につつまれています。卒業式のあと入寮式のまえ、桜のつぼみ膨らみ新しい学年を始める準備の日々です。学士号取得に伴う5人の卒業式では遠隔からの画面上のご参列も多くあり、涙あり笑いありの名残惜しい別れのときをもちました。個性に輝く五人組ですが、その温かな一例は杉原千畝記念短歌会、人道大賞の一君による「世の中のいのちの数だけ朝がある茹でた卵がまだ温かい」。前途の幸いを祈りつつ世に放ちました、信じていることの喜びのなかで希望に満ち溢れ、地の塩、世の光たれ、との驢（はなむけ）をそえて。

当学寮は19人の新寮生を加えての新米寮長夫婦との新たな船出の一年でした。創設以来の蓄積された先輩方、愛する方々の篤い祈りの羅針盤に導かれ、コロナ感染の暗礁乗り上げを回避し、喜ばしい新天地に向けてゆつくりと航海を続けています。昨夏に多くの方々のご厚志のもと耐震壁等60周年記念工事がおこなわれ安全、快適となりました。「学寮二ユース」8、9号、「方舟」61号を公に発信し、そこで寮生は若者らしい挑戦の姿を力一杯表現しています。

授業のオンライン化に伴い学生寮が見直されているなか、毎月の遠隔会議など新たな形での運営母体による寮生の健康を守り、実り豊かな共同生活のヴィジョン、事業計画、管理の最適解の模索は続きます。福音の旗を高く掲げつつ、寮生活が確かな人生の基盤となるよう祈りのなかで新たな春を迎えています。

今井館ニユース 第50号

登戸学寮

祝50号！末永く励まし希望の泉であれかし！学寮は新人9人を迎え4月6日にリモート参加のご家族らと入寮式を祝いました。抱負を述べあい皆で新たな旅立ちを分かち合いました。皆すぐに仲良くなりピンポン等に興じ、青春の輝きまっしぐらに其々元氣一杯夢に挑戦しています。盛況の黒崎資料室は、朝早く微動だにせず数時間も精密な図面を描き続ける建築学科のラガーマン、音楽理論の学びの後、階自室に戻り燃える緑の山を前に作曲に勤しむ京都ルート、カナダ育ちのアーティスト、年四度の試験に立ち向かう医学生等々熱気を帯びています。

5月末超満月の夜、月蝕を愛でるべく枳形山で小一時間夜風に包まれ仰瞻しました。雲に隠れかなわず、帰りは蛍谷を降って線路沿いのセブンでアイスしました。ひとりが雲の裂け目から赤銅色の月面に気づき、おぼろな輝きのなか、地球の影を十人皆確認できました。共に一事を行うとき、感動を分かち合う、そのような共同生活の喜びの一齣でした。

毎日オルガン前奏で始まる朝礼拝は「詩篇」ですが、当番は詩篇のメッセージを自らの現実にも照らして独創的に話します。聖書講義や読書会ではSNS等の際限なき比較ではなく、福音が持つ比超級の世界を、競争ではなく敵が友と友となる One Team, Win Win の世界を目指しています。地球の裏側の健康が当方の健康につながる運命共同体のこの惑星において、One Health, One Team の祈りの日々です。

「かくして、キリストにある何らかの援け、愛の慰め、霊の交わり、憐み、そして慈しみがあるのなら、汝らわが喜びを満たせ。それは汝らが同じ愛を持つことによって、魂を共にかよわせることによって、一つのことを思慮することによって、汝らが同じことを思慮するに至るためである」(ピリピ 2:1)。

今井館ニユース 第51号

登戸学寮

秋の輝かしい朝を榊形山は迎えています。確実に季節はめぐっております。この夏の感染爆発、緊張の日々でしたが、学寮は感染を免れております。寮生諸君はこの間リスクを避けて規律ある生活に心がけました。入学以来一度もキャンパスに足を踏み入れていない寮生もいますが、次第に対面授業が増え平常に戻りつつあります。

朝礼拜では飛沫防止板に囲まれ着座のまま讚美歌を数か月ぶりに歌いでした。詩篇100篇の喜びと賛美の詩の時、共に讚美歌453番の「よろこびにみつる、さかえの歌を」歌いつつ、当番の寮生は感謝して日々を過ごすことが将来の実りにつながると話しました。

この秋、壽退寮の大学院生の結婚式が名古屋でありました。寮生はオンライン参加しました。純白のウェディングドレスに、「わたしも着たいな」と一人が呟くと「わたしも」と応えつつ見惚れていました。この難しい時代に、新婚のお二人のように、人生の確かな基盤が築かれ、よい伴侶がえられます

ようにと祈らずにはいられません。

半世紀を超えた黒崎幸吉記念講演会の発展的な企画として「黒崎幸吉賞」がこの秋創設されます。学寮ゆかりの方々の地の塩、世の光として働いておられる方々に光をあて、賞の名を借りて老いも若きも一つとなるべく、それぞれの働きを紹介しあい導き支えあい、学寮が One Body in Christ(キリストにある一つの身体)となることをめざします。十一月二〇日ホームカミングデーにあわせ講演会がもたれます。「まさにわれらはひとつの身体に多くの肢体を持つが、肢体すべてが同じ働きを持つことはないように、そのようにわれら多くの者もキリストにあって一つの身体であり、一人に即して互いに肢体である」(Rom.12:4-5)。

貸借対照表

令和3年3月31日現在

公益財団法人登戸学寮

(単位:円)

科目	当年度	前年度	増減
I 資産の部			
流 動 資 産			
現 金	10,209,773	10,941,814	-732,041
未 収 金	3,957	0	3,957
商 品 金	34,164	48,072	-13,908
前 払 替 金	42,931	1,024,837	-981,906
立 替 金	95,900	148,060	-52,160
流 動 資 産 合 計	10,386,725	12,162,783	-1,776,058
固 定 資 産			
基 本 財 産			
土 地	592,500	592,500	0
建 物	138,016,491	119,045,294	18,971,197
定 期 預 金	6,300,001	6,300,001	0
基 本 財 産 合 計	144,908,992	125,937,795	18,971,197
特 定 資 産			
建 物 再 建 特 定 積 立 資 産	77,448,012	73,748,012	3,700,000
修 繕 等 特 定 資 産 積 立 資 産	3,915,806	28,846,926	-24,931,120
特 定 費 用 準 備 金	4,747,355	5,083,074	-335,719
特 定 資 産 合 計	86,111,173	107,678,012	-21,566,839
そ の 他 固 定 資 産			
そ の 他 固 定 資 産 合 計	3,739,130	3,705,971	33,159
固 定 資 産 合 計	234,759,295	237,321,778	-2,562,483
資 産 合 計	245,146,020	249,484,561	-4,338,541
II 負債の部			
流 動 負 債			
前 受 金	1,282,500	3,333,480	-2,050,980
未 払 金	1,198,080	1,322,531	-124,451
預 り 金	39,828	25,419	14,409
入 寮 時 預 り 金	780,000	540,000	240,000
流 動 負 債 合 計	3,300,408	5,221,430	-1,921,022
固 定 負 債			
固 定 負 債 合 計	0	0	0
負 債 合 計	3,300,408	5,221,430	-1,921,022
III 正味財産の部			
正 味 財 産			
1. 指 定 正 味 財 産	5,663,114	30,929,983	-25,266,869
2. 一 般 正 味 財 産	236,182,498	213,333,148	22,849,350
正 味 財 産 合 計	241,845,612	244,263,131	-2,417,519
負 債 及 び 正 味 財 産 合 計	245,146,020	249,484,561	-4,338,541

正味財産増減計算書

令和2年4月1日から令和3年3月31日まで

法人名:公益財団法人 登戸学寮

事業名:事業全体

R.02.4.1~R.03.3.31 H.31.4.1~R.02.3.31

科目	当年度決算	前年度決算	増減
I 一般正味財産の部			
經常収益			
基本財産運用益	498	0	498
特定資産運用益	5,889	14,217	-8,328
受取入寮費	2,400,000	1,200,000	1,200,000
受取寮費	22,723,797	17,163,863	5,559,934
受取寄付金	31,471,898	7,068,040	24,403,858
雑収益	60,971	124,417	-63,446
經常収益計	56,663,053	25,570,537	31,092,516
經常費用			
事業費	33,813,703	29,900,771	3,912,932
人件費	11,026,190	8,960,106	2,066,084
賄材料費	3,344,215	2,670,366	673,849
会議費・役員会雑費	79,793	293,319	-213,526
寮生福利厚生費・活動支援費	255,182	73,256	181,926
旅費交通費・車両費	266,286	294,216	-27,930
通信運搬費	564,082	1,131,297	-567,215
減価償却費	7,155,142	6,729,160	425,982
消耗品費・事務用品費	589,863	521,248	68,615
修繕費・什器備品費	1,245,646	1,145,314	100,332
方冊刊行費・印刷製本費	957,937	867,126	90,811
講演会諸費	75,591	389,164	-313,573
水道光熱費	2,955,687	2,506,065	449,622
広報新聞費	1,564,386	1,599,026	-34,640
支払報酬料	72,288	74,256	-1,968
災害保険料・防災費	1,049,623	571,858	477,765
租税公課	623,396	607,381	16,015
支払手数料・寄付金・その他	367,100	357,900	9,200
60周年記念事業費	1,285,540	715,713	569,827
	335,756	394,000	-58,244
經常費用計	33,813,703	29,900,771	3,912,932
当期經常増減額	22,849,350	-4,330,234	27,179,584
經常外収益計	0	0	0
經常外費用計	0	60,001	-60,001
当期經常外増減額	0	-60,001	60,001
当期一般正味財産増減額	22,849,350	-4,390,235	27,239,585
II 指定正味財産増減の部			0
当期指定正味財産増減額	-25,266,869	10,185,022	-35,451,891
III 正味財産期末残高	241,845,612	244,263,131	-2,417,519

収支計算書

令和2年4月1日から令和3年3月31日まで

法人名:公益財団法人 登戸学寮

事業名:事業全体

(単位:円)

科目	予算額a	決算額b	差異b-a	R3年予算額
I 事業活動収支の部				
事業活動収入				
基本財産運用収入	0	498	498	0
特定資産運用収入	0	5,926	5,926	0
入寮費収入	2,100,000	2,400,000	300,000	1,050,000
寮費収入	23,840,000	22,723,797	-1,116,203	25,050,000
寮費収入(室料)	14,100,000	14,523,398	423,398	15,140,000
寮費収入(食事代)	5,220,000	3,658,203	-1,561,797	5,580,000
共益費等寮生徴収金	4,520,000	4,498,746	-21,254	48,430,000
短期宿泊料収入	0	43,450	43,450	0
寄付金収入	2,500,000	6,096,444	3,459,444	3,000,000
寄付金収入(一般)	2,500,000	5,625,492	3,125,492	3,000,000
寄付金収入(団体)	0	132,500	132,500	
寄付金収入(特別)	0	201,452	201,452	
寄付金収入(60周年寄付)	0	137,000	137,000	
雑収入	66,000	60,971	-5,029	45,000
特定費用準備金取崩収入	500,000	335,756	-164,244	500,000
事業活動収入計	29,006,000	31,623,392	2,617,392	29,645,000
事業活動支出				
人件費	10,150,000	11,026,190	876,190	9,660,000
賄材料費	3,300,000	3,344,215	44,215	3,200,000
会議費・役員会雑費	350,000	79,793	-270,207	130,000
寮生指導・厚生費	130,000	255,182	125,182	130,000
旅費交通費・車両費	320,000	266,286	-53,714	320,000
通信運搬費	1,300,000	564,082	-735,918	600,000
消耗品費・事務用品費	550,000	589,863	39,863	550,000
修繕費・什器備品費	800,000	1,245,646	445,646	800,000
方舟刊行・印刷費	1,150,000	957,937	-192,063	1,250,000
講演会等諸雑費	500,000	75,591	-424,409	155,000
水道光熱費	2,500,000	2,955,687	455,687	2,745,000
広報費	1,200,000	1,564,386	364,386	1,200,000
図書新聞費	80,000	72,288	-7,712	80,000
支払報酬料	850,000	1,049,623	199,623	1,100,000
災害保険料・防災費	750,000	623,396	-126,604	750,000
租税公課	350,000	367,100	17,100	350,000
支払手数料・その他	830,000	1,285,540	455,540	1,030,000
寮生活動支援費(60周年事業費)	500,000	335,756	-164,244	550,000
事業活動支出計	25,610,000	26,658,561	1,048,561	24,600,000
事業活動収支差額	3,396,000	4,964,831	1,568,831	5,045,000
II 投資活動収支の部				
投資活動収入	25,000,000	25,176,698	176,698	0
投資活動支出	28,700,000	29,996,565	1,296,565	4,000,000
投資活動収支差額	-3,700,000	-4,819,867	-1,119,867	-4,000,000
当期収支差額	-304,000	144,964	448,964	1,045,000
前期繰越収支差額	6,941,353	6,941,353	0	0
次期繰越収支差額	6,637,353	7,086,317	448,964	1,045,000

編集後記

「方舟」六二号をお届けします。本号は新しい企画が
もりだくさんになりました。従来になく厚い「方舟」となり
ました。皆様の力作のご寄稿、ありがとうございます。新し
いことを知り、また多くを学ぶことができました。寮生も三
十三人全員が協力して、皆の作品を掲載できました。日々生
活を共にする仲間たちの新たな一面を知る想いです。ありが
とうございます。

二〇二二年十二月

方舟委員

青野 道

善方 枝美華

橋本 結衣

松井 花音

結城 史音

監修

千葉 恵

方舟 第62号

2021年12月発行

発行者 公益財団法人 登戸学寮
〒214-0032 川崎市多摩区柞形 6-6-1
TEL：044-933-0819

一般振替口座：00180-2-12378
公益財団法人 登戸学寮
寮友会振替口座：00160-5-550374
登戸学寮・寮友会

E-mail：noborito@gakuryo.or.jp

ホームページ URL：https://www.noboritodorm.net